

横光利一の〈長篇小説〉に関する研究

——一九三〇・四〇年代の〈日本〉をめぐるメディアとテキストの展開——

古矢 篤史

はじめに —— 大正期的ノヴェル〈短篇〉から昭和のロマン〈長篇〉へ ——

- 一節 本論の目的と検証の範囲
- 二節 本論の構成と各章の概要

第一部 一九三〇年代における新聞メディアの発展と〈長篇小説〉の成立

第一章 「純粹小説論」と一九三〇年代における〈長篇〉の成立

——新聞・婦人雑誌メディアの発展とマルクス主義退潮期の〈民衆〉思想——

- 一節 はじめに
- 二節 「純粹小説論」における〈長篇〉意識とその同時代
- 三節 一九三〇年代における新聞・婦人雑誌メディアの発展
- 四節 マルクス主義退潮期における「民衆」思想の形成
- 五節 おわりに

第二章 「家族会議」——新聞メディアの発展と〈長篇小説〉における〈民衆〉意識——

- 一節 はじめに
- 二節 「義理人情」という視座
- 三節 起源としての〈新聞小説〉
- 四節 交錯する読者意識と民族意識
- 五節 おわりに

第二部 戦間期の〈長篇小説〉と〈日本〉言説の展開

第一章 「上海」——言語都市〈上海〉とその〈日本〉をめぐる表象の歴史性——

- 一節 はじめに
- 二節 「ある長篇」から遠く離れて
- 三節 満州事変以後という枠組
- 四節 「世界史」の言説のなかで
- 五節 おわりに

第二章 「紋章」——事変下の〈日本精神〉言説と浪漫主義的自己遡及からの〈自由〉——

- 一節 はじめに
- 二節 「紋章」における〈日本精神〉言説
- 三節 事変下の〈日本精神〉言説
- 四節 浪漫主義的自己遡及からの〈自由〉

五節 おわりに

65

第三章 「欧洲紀行」——〈長篇〉化するテキストと〈日本〉のヒューマニズム的現前——

一節 はじめに

68

二節 〈長篇〉化される『欧洲紀行』

68

三節 「自意識」の言語空間

72

四節 〈日本〉のヒューマニズム的現前

76

五節 おわりに

80

第四章 「旅愁」——一九三七年における「日本的なもの」とその先験への問い——

一節 はじめに

82

二節 「日本的なもの」をめぐる一九三七年

82

三節 「文学的・日本主義」の諸相

85

四節 「旅愁」における「もう一つの眼」

87

五節 アポリアを浮遊する身体

91

六節 おわりに

94

第三部 戦中・戦後の〈長篇小説〉と〈日本〉言説の転回

97

第一章 「旅愁」——戦時下における「世界史」との交錯——

一節 はじめに

98

二節 後退する「日本回帰」

98

三節 日中戦争というメルクマール

103

四節 「世界史」という視座

106

五節 おわりに

111

第二章 「旅愁」——アジア・太平洋戦争下における「座標軸」の転換——

一節 はじめに

114

二節 「最初の日」から「十二月八日」まで

115

三節 「古神道」援用の論理

118

四節 主題としての「カソリック」

123

五節 おわりに

126

第三章 「夜の靴」——最後の〈長篇小説〉とその「真一文字」の〈日本〉言説——

一節 はじめに

128

二節 遡行する〈戦後〉

128

三節 最後の〈長篇小説〉

132

四節 〈私〉と「記憶の絵」の〈日本〉

135

五節 おわりに

139

おわりに

- 一節 本論の研究成果
- 二節 研究の展望

142 140 140

附録 新資料紹介 — 『定本横光利一全集』未収録作品 —

143

附録一 随筆 — 「フランスの絵」 —

- 一節 はじめに
- 二節 本文
- 三節 解題

145 144 144 144

附録二 対談・座談 — 『女性の幸福』を考へる「日本科学の母胎について(対談科学時評)」 —

147

- 一節 はじめに
- 二節 本文(一) 『女性の幸福』を考へる
- 三節 本文(二) 日本科学の母胎について(対談科学時評)
- 四節 解題

166 159 147 147

主要参考文献

171

初出一覧

178

凡例

一、作品からの本文の引用は、本論の性質上、新聞や雑誌に初めて掲載された初出本文を原則とし、原稿や書簡等のように著者自筆の資料については、『定本横光利一全集』等の翻刻に拠った。但し、(1)単行本化の際に加筆・修正された本文を検証する場合、(2)序文のように単行本が初出である場合、(3)初出が未詳である場合等、単行本の本文から適宜引用したところもある。

一、本文の引用にあたっては、旧漢字は現行の表記に改め、傍訓は省略した。但し、固有名詞に関しては原文のままとしたところもある。仮名遣いや送り仮名については原文のままとした。誤字・脱字や、今日の日本語から見て不自然な文章については、適宜「原文ママ」と付記の上、原文のままとした。また一部の記号については今日の一般的な用法（三点リーダーは「…」、ダッシュは「――」）に改めた。

一、引用した本文の出典については、新聞や雑誌に掲載された作品名は「」で表記し、単行本や新聞・雑誌の名称は『』で表記した。また、年次は西暦での表記を原則とし、月刊紙誌については年月まで、日刊紙誌は年月日までの表記とした。出典の著者等に対する敬称はすべて省略した。

一、本論内で、通例とは異なる固有の意味で使用している語彙についてはへ〜で表記して区別した。

一、参考文献は膨大な量にのぼるため、「主要参考文献」には本論文内で直接引用したものに限って掲載した。但し、【単行本】と【雑誌特集・図録】には、本論文と大きく関連する文献や、本論文を起草にあたって大きな示唆を受けた文献についても掲載した。

一、「主要参考文献」では、著者名の五十音順に記載した。その際、外国の人名についてはカタカナ表記を原則とした。また、文献のタイトルは、副題を示すダッシュ（――）は省略し、題目と副題のあいだに全角スペースを入れて記載した。なお、【雑誌掲載論文】が【単行本】または【雑誌特集・図録】に所収されている場合は記載を省略した。

はじめに

——大正期的〈短篇^{ノヴェル}〉から昭和の〈長篇^{ロマノ}〉へ——

一節 本論の目的と検証の範囲

本論文は、横光利一（一八九八—一九四七年）がその戦間期から戦中・戦後にかけて書き継いだ〈長篇小説〉群について、それらが連載された出版メディアの果たした機能に注目しながら、同時代のナシヨナリスティックな言説との関わりのなかで生成された〈日本〉をめぐる表象の分析を通じて、横光の一九三〇年代から四〇年代における文学的営為を再評価することを目的とするものである。

ここで言う〈長篇小説〉とは、長い作品を意味するものではない。一九二〇年代のジャーナリズムの拡大を象徴する円本や雑誌（総合雑誌や文芸雑誌）の発展の終息が叫ばれ始めた一九三〇年代、横光をはじめとする純文学系の作家たちはそれまで発表の舞台としてきた雑誌からの脱却を志向し始める。新聞や婦人雑誌といった大衆的な出版メディアが当時飛躍的な発展を遂げていたことを背景に、中・長期的な連載と最大多数の読者獲得の可能な新聞・婦人雑誌メディアへの進出が提唱されたのであった。そのとき彼らはその膨大な読者を想定して文学の大衆化という問題を提起し、新聞・婦人雑誌メディアを通じた〈民衆〉の存在を内面化していった。

この過程においては、読者を〈民衆〉という言葉のもとに規定していく作家たちの恣意性、主体性が確実に存在していたと考えられる。メディアを通じて見出されたものに過剰な意味づけが行われたのであり、その過剰な部分にこそやがて〈日本〉という枠組みを現前させる契機が介在していたのである。一見その流れは、戦後の否定的評価や従来の文学史が横光について説明してきた内容——日本回帰、伝統の発見、国粹主義への傾斜、等々——と同じように見えるかもしれない。しかし、彼らが構想していた創作の論理はそれほど単純ではなかった。彼らは同時代における日本主義Ⅱファシズム的趨勢に極めて批判的なかたちで〈日本〉を語っていた。これは矛盾ではない。この時期、内実の異なる〈日本〉の表象が鼎立していたのである。その一つとして想起しやすいのは、保田與重郎らが提唱した「日本浪漫派」であろう。しかし、保田らの〈浪漫^{ロマノ}〉が志向した「イロニー」としての美学的な〈日本〉に必ずしも賛同せず、大衆的メディアとの相互的關係のなかで見出された〈民衆〉への接合を主題化し、「私」（私小説）を社会化させていくことで〈日本〉という広がりを獲得しようとした、もうひとつのロマン主義的な系譜があった。横光に代表されるこの系譜を、保田らの〈浪漫〉とは区別するため、本論では〈長篇^{ロマノ}〉と呼んでその内実を探求することにした。

一九三〇年代における〈長篇^{ロマン}〉の登場は、別の言い方をすれば、大正期的な〈短篇^{ショート}〉の否定とそこからの転換を意味している。雑誌一号に掲載できる程度の分量の〈短篇〉を否定することは、新感覚派等において追求された「新しさ」が終わりを告げ、広津が新聞への進出を「陣地回復」と表現したように、明治期的な小説の在り方に立ち戻ろうとする回帰の志向を表出させたと言える。しかし、表面的には回帰の位相に見えるこの時期の自己遡及（Ⅱ〈日本〉）の様式はけっして単一ではなく、また横光のように同じ作家でありながら時代とともにその内実を大きく転換していった例もある。文学には文学の〈日本〉が存立していたのであり、それが実践された〈長篇小説〉のテクストを局面ごとに分析することによって、その表象がファシズムⅡ日本主義によって全体化されることに批判的であった彼らの、〈日本〉をめぐる攻防の諸相が明らかになるものと思われる。

一九三〇年代をこのように〈長篇^{ロマン}〉の時代として再解釈するとき、上述のような問題は同時代の作家に広く共有される問題であり、分析するべき作品は多岐にわたることが想定される。そこで本研究では、この〈長篇^{ロマン}〉の機運において中心的存在であったと考えられる横光利一とその主要作品に論究を限定することにした。横光の「純粹小説論」とその実践が〈長篇^{ロマン}〉の機運を決定づけたと言っても過言ではないためである。

二節 本論の構成と各章の概要

以下に、本論の構成と各章の概要を述べる。

●第一部 一九三〇年代における新聞メディアの発展と〈長篇小説〉の成立

第一部では、本論文の主題である〈長篇小説〉が一九三〇年代において成立した歴史的過程を検証する。ここでは、特に一九三〇年代における新聞メディアの飛躍的な発展が横光の「純粹小説論」を中心とした同時代の文学論を動かし、作家たちをして〈長篇小説〉の製作へと志向せしめた実態を明らかにすると同時に、そのメディアを通じて見出された文学の受容者Ⅱ読者を〈民衆〉として規定していった作家たち自身の主体性を問題とする。ここにこそ、「日本的なもの」という流行言説のなかで彼らが彼ら自身の〈日本〉を表象することになる契機を見出すことができるのである。

「第一章 「純粹小説論」と一九三〇年代における〈長篇〉の成立——新聞・婦人雑誌メディアの発展とマルクス主義退潮期の〈民衆〉思想——」では、まず横光利一の「純粹小説論」とその同時代における〈長篇小説〉への意識を確認し、次にその〈長篇小説〉への意識が当時の新聞・婦人雑誌メディアの飛躍的発展によるものであることを社会的に辿った上で、その読者が〈民衆〉としてイメージされ思想化されると同時に、その〈民衆〉思想がマルクス主義の後退した時代における日本主義Ⅱファシズム的動向とは対立する性格のものであったことを検証する。メディアを通じて見出された作家たちの〈長篇^{ロマン}〉

が同時代のナショナリズムを無条件に再生産するものではなく、むしろそれに抵抗するものとして成立した実態を照らし出し、一九三〇年代の文学作品を再評価するための基盤を提示する。

「第二章 「家族会議」——新聞メディアの発展と〈長篇小説〉における〈民衆〉意識——」では、前章で確認した新聞メディアとその〈長篇小説〉における〈民衆〉思想の形成について、「家族会議」という実際の作品から具体的にその実態を考究する。純文学の危機意識に端を発して「文芸復興」が議論されたこの時期、新聞に発表の場を求める作家たちによって〈長篇小説〉制作に関する議論が相次いだ。「純粹小説論」も「長篇制作に関するノートを書きつけたやうな結果になつた」とあるように長篇小説論なのであり、「家族会議」はその実践としての新聞小説に横光までもが進出したという点で話題とされていた。そして、新聞というメディアがもつ最大多数の読者に対する意識が作家たちのなかで規範化され、それを通じて「民衆」ないし「民族」という問題を設定しはじめるところに、この時期の文学における一つの傾向が見出されなければならない。「日本精神」および「本的なもの」という文学的問題の系譜に、この〈長篇小説〉論議に潜伏する読者意識が少なからず与していると仮定できるのである。横光の「長篇小説（新聞小説）」論における「民衆の高級な精神」と、「家族会議」および後続の「厨房日記」や「旅愁」で描かれる「義理人情」の接点に着目し、一九三五年前後の新聞小説が一九三〇年代の〈日本〉をめぐる問題機制の同一線上に位置づけられる過程を探求する。

● 第二部 戦間期の〈長篇小説〉と〈日本〉言説の展開

第二部では、第一部で問題提起した内容——横光の〈長篇〉^{ロマン}が、ファシズム＝日本主義に迎合するのではなくむしろこれに批判的であった一方で、保田らの「イロニー」としての〈浪漫〉とも性格を異にすることを、実際に〈長篇小説〉のテキストを精読することによって論証する。なお、横光の〈長篇小説〉は一九三七年の日中開戦を機に大きく変質していくため、本部ではそれに至る前の戦間期における主要な〈長篇小説〉を扱う。

「第一章 「上海」——言語都市〈上海〉とその〈日本〉をめぐる表象の歴史性——」では、その言語都市としての〈上海〉を通じた〈日本〉表象がそれぞれの歴史的局面とともに異なるコンテクストをもって生成されなおされた過程を明らかにする。本章は、第二部から第三部にかけての論考の見取り図を提示するとともに、その再生成が、『改造』や『文学クオタリイ』といった雑誌に掲載されるたびに、また改造社からの初版・再版のたびに行われたという、〈長篇小説〉を連載・再刊しうる「場」＝メディア環境を通じてこの現象であったことも確認する。

「第二章 「紋章」——事変下の〈日本精神〉言説と浪漫主義的自己超越からの〈自由〉——」では、同時代の「日本精神」という流行言説と「紋章」のテキストの相互的關係を究明する。「紋章」において〈日本精神〉がどのように言及されているかを改めて確認し

たうえて、「紋章」の同時代すなわち一九三四年前後において〈日本精神〉論が展開していくまでの歴史的過程を辿りつつ、そのなかで横光の〈日本〉言説がどのように位置づけられるかを検討する。この歴史的な検証のなかで明らかにするのは、事変下のナショナルな風潮のなかで〈日本〉をめぐる言説が文学者たちによって展開されていったことは自明なことのようによびわかれかねないが、その様相についてはけっして自明でない批評性を担保していた文学者たちの実態である。〈日本精神〉に関する同時代のイデオロギーを無条件に受け容れることなく、批評意識を持続し、相対化しようとした文学の一九三四年前後における一側面を、横光そして小林秀雄を通じて照らし出すことを目的とする。

「第三章 「欧洲紀行」——〈長篇〉化するテキストと〈日本〉のヒューマニズム的現前——」では、渡欧中の断片的な紀行文のテキストが一冊の本にまとめられる際に働いた〈長篇小説〉の力学を検証する。帰国後の単行本化に伴ってはじめて「欧洲紀行」内に〈日本〉の表象が顕現すること、またそうであるがゆえに同時代のヒューマニズム言説と交錯するかたちで現前していることを確認する。

「第四章 「旅愁」——一九三七年における「日本的なもの」とその先験への問い——」では、「旅愁」のうち『東京日日新聞』『大阪毎日新聞』両紙に掲載された新聞連載分を中心として、渡欧中の通信文や小説「厨房日記」も視野に入れながら、一九三七年の「日本的なもの」をめぐる議論との同時代性を再検討する。「日本」をめぐる言説群はとりわけ満州事変以降に突出して目立つようになるが、二・二六事件とその判決を経た一九三六年後半から一九三七年の盧溝橋事件に至るまでに「日本的なもの」という言辞において流行を呈した。それらは満州事変以降の文芸復興期から、戦時下の近代の超克のテーマへと、それぞれに通底する論理的連続性を内包しながらも、しかし一線を画すような一九三七年特有の現代性^{モダンテイ}を形成していたのであり、文学者たちはその特殊性Ⅱ「新しさ」に着眼した批評や創作を展開していた。ある者は三国協定のコンテキストにおいて危機意識を抱き、ある者はロマン主義的思潮のもとに新しく可視化された国土と民族への「愛」を語った。そして横光の「旅愁」からは、ファシズムと人民戦線の衝突に揺れる危機のヨーロッパをその地で体験した作家としての観点による、「日本的なもの」が一方では棄却され一方では美化される同時代の論式に対して両面的に批評しうる表象の痕跡を辿ることができるのである。ここでも、横光が〈長篇小説〉で表象していた〈日本〉が、単にファシズムⅡ日本主義と連帯するものではなく、また保田や萩原朔太郎の〈浪漫〉的傾向とも通底しないかたちでの現代性の表出であったことを明らかにする。

● 第三部 戦中・戦後の〈長篇小説〉と〈日本〉言説の転回

横光にとつて、一九三七年七月七日の「日支事変」（盧溝橋事件）は重大な転機となり、前部で検証したような〈長篇〉の在り方がもはや維持できなくなっていく。そこで第三部では、上述のような〈浪漫〉とは異なる〈長篇〉が、戦時下においてどのような〈日本〉

表象の転回を果たしたかを確認する。

「第一章 「旅愁」——戦時下における「世界史」との交錯——」では、日中開戦後に連載が再開された「旅愁」の「続篇」、および『第一篇』の単行本化に伴う改稿過程を検証し、突如として介入した「東洋」という視点の内実を探る。新聞連載時の「矢代の巻」に見られたはずの日本対西洋という構図が、日中戦争の影響のもとで東洋対西洋の構図に拡大されるプロセスを検証し、その主な要因と考えられる「世界史」の視座と「旅愁」との相関関係について考察する。

「第二章 「旅愁」——アジア・太平洋戦争下における「座標軸」の転換——」では、前章で確認したような〈東洋〉〈西洋〉という思想的枠組そのものが、アジア・太平洋戦争の開戦という局面において失効し、「古神道」と「カソリック」の対峙という主題へ転回していった過程を確認する。「旅愁」のテクストが第二次世界大戦の開戦やアジア・太平洋戦争の開戦に遭遇した過程を辿ったうえで、「古神道」がどのような文脈で援用されているかを分析し、それが援用されるに至った前提として考えられる「カソリック」という問題を前景化することにより、「旅愁」における「古神道」言説の脱中心化を図るものである。

「第三章 「夜の靴」——最後の〈長篇小説〉とその「真一文字」の〈日本〉言説——」では、本論の締めくくりとして「夜の靴」に至る以前に書き継がれた横光の〈日本〉をめぐる〈長篇小説〉の来歴を視野に入れながら、「夜の靴」に見られる〈日本〉表象の読み直しを図るものである。従来この作品が戦後の問題圏のなかで捉えられる傾向にあったのに対し、戦間期および戦時下との接続のなかから再評価することをその目標とする。

以上の通り、本論文は一九三〇・四〇年代の横光利一の文学とその同時代を通じて、戦間期から戦中・戦後の日本近代文学における、〈日本〉をめぐるメディアとテクストの展開の一面を明らかにするものである。

●附録 新資料紹介——『定本横光利一全集』未収録作品——

最後に、本研究のなかで発見した新資料の翻刻と解題を附録として載せる。いずれもこれまでの横光研究において報告のなかったもので、本研究が対象とする戦間・戦中期の資料として価値の高いものと思料し、ここに附録する次第である。

第一部 一九三〇年代における新聞メディアの発展と〈長篇小説〉の成立

第一章 「純粹小説論」と一九三〇年代における〈長篇〉の成立

——新聞・婦人雑誌メディアの発展とマルクス主義退潮期の〈民衆〉思想——

一節 はじめに

「文学を民衆的にするためにこのごろ多くの人々が論じてゐる」という時期に発表された横光利一の「純粹小説論」(『改造』、一九三五年四月)について、「純粹小説論もやはり小説を群衆のものとするといふ提唱であり、その努力の表現」であつたとし、その「民衆」「群衆」「大衆」とは何かと問われれば、「大衆とは僕らの一つの思想だ」と書き、「僕らは大衆を己の中にもたねばならない」と語る。——保田與重郎の「文芸の大衆化について」(『日本浪漫派』、一九三五年八月)がこのように「民衆」や「大衆」を「一つの思想」と位置づけた素描は、「純粹小説論」の同時代である一九三五年前後の文学的状况をよく捉えたものとして注目される。

この時期、昭和改元直後の一九二六年一二月に改造社の『現代日本文学全集』の刊行から始まつた所謂「円本ブーム」はすでに「終息」を迎え、それまで主な発表の場であつた雑誌(特に総合雑誌)の市場もまた縮小していくなか、「純文学」の作家たちは従来あまり対象としてこなかつた新聞や婦人雑誌の読者を意識するようになり、この中・長期的な連載が可能なメディアに〈長篇小説〉を掲載することを提起しはじめる。この新しい読者が〈民衆〉という名のもとに語られ、「文学を民衆にする」「文芸の大衆化」等の命題が議論されたまさにこの時、保田が言うように「一つの思想」としての〈民衆〉が作家たちの内面に浮かびあがつたのである。そして、その〈民衆〉という思想は一九三〇年代というマルクス主義退潮期において、日本主義Ⅱファシズムという同時代思潮と対抗しながら、〈浪漫〉とは異なるもう一つの〈長篇〉を形成していったと考えられる。作家たちが「非常時」の国家情勢のもとでこれに迎合したことは自明な事実と扱われかねないが、そうではなく、新聞や婦人雑誌という当時飛躍的な発展を上げていたメディアを通じて〈民衆〉思想が構築されたところに、この時期の文学におけるナショナリズムの本質があることが分かつてくるのである。

本稿では、(一) まず横光利一の「純粹小説論」とその同時代における〈長篇小説〉への意識を確認し、(二) 次にその〈長篇小説〉への意識が当時の新聞・婦人雑誌メディアの飛躍的發展によるものであることを社会的に辿つた上で、(三) その読者が〈民衆〉としてイメージされ思想化されるのと同時に、その〈民衆〉思想がマルクス主義の後退した時代における日本主義Ⅱファシズム的動向とは対立する性格のものであつたことを考証する。メディアを通じて見出された作家たちの〈長篇〉が同時代のナショナリズムを無

条件に再生産するものではなく、むしろそれに抵抗するものとして成立した実態を照らし出し、一九三〇年代の文学作品を再評価するための基盤を提示することが本研究の目標となる。

二節 「純粹小説論」における〈長篇〉意識とその同時代

「純粹小説論」を発表した一九三五年前後、横光は〈長篇小説〉を書くことの必要性を繰り返し表明しており、実際にその〈長篇小説〉を書き継ぐ営為はアジア・太平洋戦争を跨いで戦後死没するまで続いていった。「純粹小説論」にも列挙されている「上海」「寢園」「紋章」「時計」「花花」「盛装」「天使」は言うまでもなく、これ以降にも「雅歌」「家族会議」「旅愁」「春園」「実いまだ熟せず」「鶏園」「夜の靴」というように、これほどまでに〈長篇小説〉を意識的に書き続けた行為にはどのような歴史的背景があったのか。このことを確認するためには、「純粹小説論」の内容とその同時代の言説に改めて遡及する必要がある。

「長篇制作に関するノートを書きつけたやうな結果になった」と述べられている通り、「純粹小説論」は〈長篇小説〉に関する横光の考察が綴られたものであり、その多大な分量をもった作品の「舞台」をも俎上に載せたメディア的な問題提起であった。特徴的なのは、雑誌一号に掲載される程度の分量である「雑誌文学」（主として総合雑誌）すなわち「短篇小説」を否定する志向である。

しかし、文学作品を一層高度のものたらしめ、文芸復興の足場を造るためには、最早や純文学では無力であるから、これを純粹小説たらしめる努力をしなければならぬとなると、またさらに第二の難関が生じて来る。それは短篇小説では、純粹小説は書けぬといふことだ。

「純粹小説論」のなかでも、「小量の短篇では、よほどの大天才といへども、純粹小説を書くといふことは不可能」「百枚や二百枚の短篇ではどうするわけにもいかない」というように同様の主旨が繰り返し述べられている。横光はこの時期、「二百枚」を超える小説を書くことと同時に、それを発表することのできる新たな「純文学の舞台」を要請していたのである。

僕は「紋章」を書いた故為でもあらうと思ふが、二百枚以下のものは書けなくなつたやうだ、短い作を書くハリが無くなつて了つた。僕自身さういふ時機になつたのだが、二百枚といへばどの雑誌でも所載してくれる場所がない、といつて、人間を生かし動かしていかうとすれば七百枚から千枚は欲しい。

かういふことになれば、純文学の舞台といふものがなくなるのだ、これが純文学の癌である。

〔行路難〕、『文芸通信』、一九三五年二月)

横光は、「今の純文学の作品のやうな書き方をしてゐてはもう結局雑誌文学になつてしまふ」(「純粹小説」を語る)、『作品』、一九三五年六月)という発言もあるように、作品を「雑誌」に発表しつづけることの限界を「純文学の癌」と表現したのである。他にも、「小説と云ふものは三百枚位まで来ないと、自分が面白くなつて来ない」(「横光利一と林芙美子 一問一答」、『モダン日本』、一九三六年一月)と具体的な枚数の問題に言及したり、「長篇小説を書いてゐると書いてゐる中に何うなるかわからないと云ふ面白味がある(原文ママ)です。短篇はそんな面白味はありませんね」(「横光利一文学談」、『行動』、一九三六年一月)と「短篇小説」では実現しえない「面白味」を「長篇小説」に求めるなど、「雑誌」においてその出版形態上どうしても要求される紙面の制限に満足できず、その限界を超えようとする機運をしきりに表明していた。

雑誌という舞台を糧としてきた純文学の市場システムそのものを超克しようとする横光のこのような志向は、文学の場それ自体が変わらなければ文芸の復興はあり得ないとする「文芸復興」の典型的な位相であり、ひとり横光のみならず同時代の多くの作家たちに共通して見られる意識であった。この時期、『行動』の「長篇小説の研究」特集(一九三四年六月)や『新潮』の「長篇及び短篇小説について」特集(一九三四年九月)をはじめ、雑誌では〈長篇小説〉に関する論議が相次いでいる。以下に、「純粹小説論」の同時代における〈長篇小説〉への意志がよくわかる例をあげてみよう。

当時「青年」を書いていた林房雄は、「一家が支へられないだらうといふ、けちな常識から、通俗小説をひきうけ」たわけだが、その結果、「構想がどうしても長篇的になり」「短篇を書けといはれると、どうしても書けない」と言うようになり、「今としては、自分の中の長篇への意欲を、おもむくままに駆けらせてみたい」と述べていた(「長篇小説と作家」、『新潮』、一九三四年九月)。林もまた「読切りの短篇を註文される」ような「雑誌」からの脱却を求めており、「七百枚」「千枚」を実現できる発表の場を模索する方向性は「純粹小説論」と響き合っている。

広津和郎は、この問題を文学の現状の課題としてさらに具体的に論じており、横光の主張ともっとも近い位置にいた作家と言える。広津はこの時期、横光と同調するようにして〈長篇小説〉の積極的な擁護を繰り返している。

純文芸の長篇小説の問題は昨年(昭和九年)大分文壇の論議に上り、その発表機関についての要望が、諸家の口から潰れたが、今年あたりはその要望がもつと具体的
に実現される機運を促進する運動が起つてもいいと思ふ。

後述するが、広津はこの時期、このような「発表機関」に関する問題意識のもとに「新聞の連載小説欄を獲得する」という「陣地回復」を提案し、〈長篇小説〉をめぐって大森義太郎や久米正雄らとの論争にまで発展している。

川端康成もこうした趨勢に協調的で、「八十枚百枚に書ける材料ならば、三百枚五百枚の長篇に書ける。書いてゐるうちに発展もして来る。この膨らみ伸びて来る思ひを、押し縮め、打ち切ることは、作家の自殺である」とまで言い、「娯楽雑誌や新聞の長篇小説に、活地を求めて行くのは当然であらう」と横光や広津らの〈長篇小説〉意識の正当性を認めていた（『文芸時評』、『新潮』、一九三五年三月）。

このような機運は小説に限らない。小林秀雄は「長篇評論を要求しない様な批評精神は、たとへ進歩的といふ名に弁解を求めやうとも、貧弱な批評精神だと僕は考へる」として「長篇評論」を「僕等はやらねばならぬ」と主張し（「再び文芸時評に就いて」、『改造』、一九三五年三月）、実際に彼は「ドストエフスキイの生活」（『文学界』一九三五年一月〜一九三七年三月）で〈長篇評論〉を試行したのであった。

彼らが主張する〈長篇小説〉や〈長篇評論〉（以下〈長篇〉と表記する）とは長い作品、分量のある作品のことではない。「長く書かれてゐる故に、それが必ずしも長編小説^{（原文ママ）}であるとは、言ひ切れないだらう。長編小説には、長編小説としての規模があるはずだし、長編小説としての機構を備へてゐなければならぬと思ふ」（中村武羅夫「長篇小説について」、『行動』、一九三四年六月）、あるいは「いくら紙幅が多かろうとも短篇は短篇、枚数はそれほどでなくとも、長篇は長篇」（里見弴「跋」、『現代長篇小説全集 第三巻』、三笠書房、一九三七年二月）といった類の発言を拾っていくと、当時の作家たちも単に分量の話をしているわけではないことが分かってくる。「長篇」という規模への意欲は一九三〇年代より以前にも存在したのであるが、小林秀雄が「最近の長篇小説要望の声は、もう以前とはまるで異つた事情から発してゐる」（『現代小説の諸問題』、『中央公論』、一九三六年五月）というように、〈長篇〉という形式をめぐってこの時期に固有のイデオロギーが創出され、かつ作家たちのあいだで広範囲に共有されていたと考えられる。

彼らの〈長篇〉に対する要望は、「舞台」（横光）や「発表機関」（広津）という言葉が使われていたように、文学の媒体となるメディアの積極的利用を目的としたところに「もう以前とはまるで異つた事情」がある。このとき彼らが具体的に想定していたのは新聞や婦人雑誌という「民衆」ないし「大衆」的なメディアであつて、小林秀雄が「長篇小説といへば、その日その日の読者の興味を原稿紙四枚で捕へてゆく新聞小説をいふ」（『最近の長篇小説（一）単行本の冷遇』、『東京朝日新聞』一九三五年一月七日）と言っているように、この時期に「長篇小説」を書くことは「新聞小説」を書くことと同義であつた。そのことは、〈長篇〉を要請していた横光が併行して新聞小説を書くことを提唱して

いたことから明らかである。

日本の長篇小説の最大傑作の七割までは新聞小説である。漱石、藤村、花袋、秋声、紅葉、鏡花、潤一郎、寛、正雄、有三、國士、士郎、麟太郎、思ひ浮ぶままにも以上の人々の傑作はほとんど総ては新聞であった。(中略)

新聞小説といふものは、誰でも一度は書いてみるべきだと私は思ふ。

(「新聞雑感」、『文芸懇話会』、一九三六年一月)

次章でも検討するが、横光の「家族会議」は同時代の新聞というメディアと接合することによって可能となった〈長篇〉であった。このような横光の新聞小説の提唱とその実践といった営為に共鳴するようにして、かつては純文学の舞台であった新聞の連載小説欄を取り戻すべきだと主張した広津の「陣地回復」論に注目すると、〈長篇〉要請の内実が文学の媒体を「民衆」ないし「大衆」的なメディアに転換するということであるのが明白になる。広津はこの時期、彼の新聞小説「風雨強かるべし」(『報知新聞』、一九三三年八月一二日〜一九三四年三月一七日)をめぐって、この作品が「作中の人物は、結局、完全にステロタイプの」であり「通俗小説を脱することはできない」と批評した大森義太郎(「現代知識階級の困惑」、『改造』、一九三四年一月)と論争を起こしている。広津は大森に対し、「通俗小説であるといふ事は、作者も覚悟の上である」としつつ、「在来の通俗小説と違ったものを、読者に働きかけて行きたい」(「人物のステロタイプ化について——大森義太郎氏に一言——」、『文芸』、一九三四年二月)と、純文学がまずは「通俗小説」という領域に関与するところから始めることの重要性を示している。

彼らはなぜ、通俗小説という否定的レッテルを承知の上で、新聞小説の実践を重要視したのだろうか。次節では、その経緯を確認してみよう。

三節 一九三〇年代における新聞・婦人雑誌メディアの発展

横光の長篇製作に関するこの時期の言説を辿ると、「小説といふのは、読者と共同製作しなければ、良いものは出来ない」(「作者の言葉(盛装)」、『婦人公論』、一九三四年二月)、「作品は作者一人で巧妙に出来るものではなく、読者と共同の編輯をしてこそ良いものが出来る」(「作者の言葉(家族会議)」、『東京日日新聞』、一九三五年七月二八日)など、読者を強く意識するだけでなく連載という創作形式を利用した「共同」の「製作」「編輯」のような方法を志向していたことがわかる。このような「共同」の「製作」「編輯」が、新聞や婦人雑誌における「連載」という発表形式を前提としていることは言うまでもないだろう。十重田裕一²が指摘しているように、このような方法によって「文芸雑誌や総合雑誌の場合とは異なる、「純文学」の作家にとっては新たな不特定多数の読者との構

築をはかろうとしていた」のであり、「一九二〇年代のジャーナリズムの拡大によって急増した新たな不特定多数の読者」にどのように働きかけていくかが模索されていた過程をよく示している。そしてここで重要なのは、横光のこのような志向が一九三〇年代固有の特色——具体的には、中・長期的な連載が可能な新聞・婦人雑誌メディアが当時飛躍的に発展していたことが背景となっていることである。つまり、横光が内在的に抱えていた問題に起因するのではなく、出版メディアの大きな変化が先にあり、その変化に横光が呼応した結果として「連載」を前提とした「共同」の「製作」「編集」という方法が見出されたのだと考えられる。そこで本節では、この時期における新聞・婦人雑誌メディアの発展を辿ってみたい。

当然ながら、一九三〇年代になって初めて新聞や婦人雑誌の発展が文学のなかで問題となったわけではない。前田愛の「大正期通俗小説の展開」³でも検討されているように、大正末期にもいわゆる大衆文芸が目覚ましく発達し、女性読者を中心に「文学に親しむ読者の範囲はいはゆる隔世の感があるほど拡張され」（青野季吉『転換期の文学』、春秋社、一九二七年二月）ていた。出版ジャーナリズムが発達し、文学の市場が相応に拡大した時期においては、多かれ少なかれ文学の大衆化や社会化という問題が俎上にあがる。しかしながら、一九三〇年代における大衆メディアの発展の位相をそれ以前のものとは同一視することができないような「もう以前とはまるで異つた事情」がある。ここでは、この「事情」を以下の三点によって素描してみよう。

第一に、新聞・婦人雑誌のいずれも発行部数が大幅に躍進し、「純粋小説論」の一九三五年前後にピークを迎えていた点である。まず新聞であるが、『毎日新聞販売史 戦前・大阪編』の「発行部数一覧表」⁴（以下）によれば、『大阪毎日新聞』は一九三五年が、『東京日日新聞』は一九三七年が、それぞれ発行部数の山場となっている（以下、一九三〇年代のデータを掲げる）。

	大阪毎日新聞	東京日日新聞
・一九三〇年	一、五〇〇、六〇九	一、〇〇四、三八四
・一九三一年	一、五〇〇、八一五	九三二、〇七七
・一九三二年	一、五〇八、三七一	一、〇五一、八二八
・一九三三年	一、五八一、七一二	一、二七九、三〇〇
・一九三四年	一、六九〇、三六八	一、一〇六、〇八八
・一九三五年	一、七二八、〇五三	一、一五七、六八三
・一九三六年	一、二七五、八四六	一、一八八、〇五九
・一九三七年	一、四四一、九三七	一、四三二、一八五
・一九三八年	一、〇九九、五四一	一、一四五、八八〇
・一九三九年	一、一三六、一五七	一、一八五、七三〇

二大新聞と称せられた朝日新聞も、『朝日新聞販売百年史』の「朝日新聞創刊以来の部数の推移」⁵（以下）によれば、毎日新聞と同様に「純粹小説論」の前後に発行部数の山場がある。『東京朝日新聞』はその後も順次発行部数を伸ばしているが、百万部に到達したこの時期がやはり重要な時点であることが分かる。

大阪朝日新聞

東京朝日新聞

・一九三〇年	九七九、五三〇	七〇二、二四四
・一九三一年	九一四、三五五	五二一、二二八
・一九三二年	一、〇五四、〇二一	七七〇、三六九
・一九三三年	一、〇四一、一一五	八四四、八〇八
・一九三四年	一、一三八、四八二	八八五、〇〇七
・一九三五年	八九七、五九四	九一三、三四二
・一九三六年	八六一、三三四	一、〇一一、一九〇
・一九三七年	九四〇、五五五	一、〇四二、一八八
・一九三八年	九三八、八一二	九九〇、五三〇
・一九三九年	九七三、九九九	一、一一四、七五九

『大毎』『大朝』の両紙がこの一九三五年二月一日に九州での印刷を始めたことも、この時期の新聞メディアの発展を反映したものと見て注目できる。九州での編集発行で先手をとった『大朝』を例にすると、その配布地域は山口県と九州全域のほか、沖縄や朝鮮、満州、台湾にまで及んでいる。加えて両紙は、同年一月二十五日には名古屋での印刷にも進出している。発行部数だけでなく、販売網の拡大も、この時期における新聞メディアの発展の特色としてあげられるのである。とりわけ『大毎』は、この西部・中部での発行部数を合わせて一九三七年に二百万部を突破し、一月一日に「躍進『大毎』二百万部突破我が国新聞界空前の新記録」との社告を載せている。このようにこの時期は、両紙の社史においても「黄金時代」として記録されるほどの発展を見せたのであった。

婦人雑誌についても同様の現象が起きている。『出版年鑑』の「婦人雑誌八種売上部数」⁶（以下）によれば、一九三四年が山場となっていることが確認できる。

・一九三〇年	一四、五〇〇、〇〇〇
・一九三一年	一五、八五〇、〇〇〇
・一九三二年	一六、八〇〇、〇〇〇
・一九三三年	一九、二二〇、〇〇〇
・一九三四年	一九、七五〇、〇〇〇

・一九三五年	一九、三八〇、〇〇〇
・一九三六年	一九、四四九、〇〇〇
・一九三七年	一九、五一五、〇〇〇
・一九三八年	一八、八二九、〇〇〇
・一九三九年	二〇、七九九、三七〇

周知のように婦人雑誌はその「附録」による販売戦略が特徴的であるが、岡光男⁷も指摘しているように、その「附録」をめぐる各誌の「合戦」は一九三四年、『主婦之友』がその新年号で一五点もの「附録」を付けたことで「頂点」を迎える。主婦之友社の社史⁸においても「付録競争の最盛期」と記録されているように、それは風呂敷敷をお持ちくださいと書き添えるほどの量でありながら、二度の増刷にまで及ぶほどの好評であった。

新聞や婦人雑誌の発達がピークを迎えた「純粹小説論」の一九三五年前後は、一九二〇年代の円本ブームに代表されるジャーナリズムの成長が一段落し、最初の大きな成熟期に入ったのだと言いうことができるだろう。換言すれば、文学の大衆化が新たな段階へ進んだのであるが、より厳密に言えば、この時期に初めて本当の意味での大衆化が本格的に始まったと考えられる。永嶺重敏⁹の指摘によれば、円本は流行したとはいえ労働者や農民層まで容易に入手できたわけではなく、むしろその予約購読というマーケットに参加できたのは一部に限られていたのに対し、そのブームの終息後にこそゾッキ本の流通などによって読者層を開拓したという実態がある。要するに、一九三〇年代になってようやく読者という実態の伴った大衆化の段階に移行したと見るべきなのである。

このような新聞・婦人雑誌メディアの発展に作家たちが関心を持たなかったはずはなく、前節で確認した〈長篇〉の機運が同時期に発生していることと無関係ではない。再び横光を参照すると、「我が国では新聞は一番に読者が多い。しかも純文学に縁の遠い読者ばかりである」（前掲「新聞雑感」）という発言もあるように、従来純文学が相手にしてこなかった当時最大規模の読者を強く意識していたことは明らかである。

そしてここにおいて、第二の「もう以前とはまるで異つた事情」が現れてくる。それは、総合雑誌や文芸雑誌では純文学すなわち〈短篇〉を、新聞や婦人雑誌では通俗小説すなわち〈長篇〉を載せるといふような書き分けを是としなかったことである。「純粹小説論」の冒頭にある「もし文芸復興といふべきことがあるものなら、純文学にして通俗小説、このこと以外に、文芸復興は絶対に有り得ない」との著名な書き出しは、〈短篇〉と〈長篇〉を書き分ける様式への反発として解釈する必要がある。ここには、文学ひいては文学者の在り方に関するパラダイムの転換が窺える。

この転換を図式的によく表しているのが、当時の久米正雄の「純文学余技説」と広津和郎の「陣地回復」論との論争である。〈短篇〉と〈長篇〉の書き分けは、従来から文学者が生活するための一般的なスタイルであったわけ¹⁰、久米が「通俗小説を職業」としな

がらその「余技」として純文学を書く主張した「純文学余技説」（『二階堂放話——純文学余技説——』、『文芸春秋』、一九三五年四月）は、とくにこの時期にとって目新しい内容であったわけではない。にもかかわらず久米がこのように主張したのは、横光の「純文学にして通俗小説」や広津の「陣地回復」論に見られる純文学活動の職業化に反発したためであった。山本芳明¹¹は「純粹小説論」の主張について「総合雑誌や文芸雑誌に掲載する短編小説の原稿料とその単行本化によって得られる印税で生計を立てるのではなく、新聞や婦人雑誌などに長編小説を連載することで生計を立てるスタイルに転身することを意味する」ものであったとしているが、単に生計を立てるためであれば久米のように書き分けをすればよい。しかし、横光や広津はそれを拒んでいたのである。彼らにとって、久米の「純文学余技説」はむしろ純文学の保身以外のなものでもない。純文学が新聞へ進出することで「同じ通俗小説になつてしまつても、（中略）今の通俗小説界に新たな分野が開拓される余地がない事はない」と広津が反論したように（『春宵雑筆——久米正雄に答ふ』、『読売新聞』、一九三五年三月三〇日〜四月二日）、彼らの主意は大衆メディアを通じて純文学そのものが変わらなければならないという点にあったのである。ここにおいてはじめて、純文学は読者が合わせる（啓蒙する）ものではなく、読者に合わせるものとなり、本当の意味での大衆化が志向されたと言えるのではないだろうか。

平浩¹²は文芸復興を「作品、作家、文壇の急激な進歩によって生じたものではない」とし、「資本主義社会・消費社会の「商品価値がそのまゝ社会的価値をあらはす」という〈神話〉の中に、作品、作家、文壇の方が巻き込まれ、利用された現象」と位置づけているが、横光や広津の言動を追っていくとむしろジャーナリズムに積極的に利用されようとした過程に強い主体性が感じられてならない。彼らは上述のような書き分けを拒否し、純文学を当時飛躍的に発展していた新聞や婦人雑誌の膨大な読者に適うものへ意識的に転換しようとしたと思われる。

そのとき彼らは、その新たに意識された最大多数の読者をさまざまに意味付けしていた。第三の「もう以前とはまるで異つた事情」とは、彼らがその読者を「民衆」や「大衆」といった言葉で規定していった主体性である。彼らがこの時期に可視化した「民衆」や「大衆」は、保田與重郎の言うように「一つの思想」そのものであった。これを紐解くためには、プロレタリア文学の後退した一九三〇年代において〈民衆〉をめぐる思想がどのように形成されたかを確認する必要がある。

四節 マルクス主義退潮期における「民衆」思想の形成

「純粹小説論」の周辺では、文学の大衆化をめぐる夥しい数の言説が紙誌に溢れていたが、そこで使われていた「民衆」や「大衆」という言葉にはどのような歴史性があったのだろうか。それは、前田愛が「昭和初頭の読者意識」¹³で論じたような一九二〇年代にお

けるプロレタリア文学の大衆化論とも、予約購読者を開拓し獲得しようとした円本の民衆化論とも、系譜を異にするものである。また、中谷いづみ¹⁴は一九三〇年代後半を「周縁的・従属的立場にある人びとを可視化しようとする試みが同質性と一貫性を備えた共同体の再認と結び付き、戦時体制を支える構図を用意してしまつた時期」であるとし、「民衆」や「大衆」の可視化を試みる文化の場の言説や表象が、全体化の言説に結び付くことで戦時下の事態を支えてしまう過程を検証¹⁵しているが、本稿で問題としている「民衆」や「大衆」も同じように「周縁」と位置づけられる余地はあるにしても（例えば新聞の販売網拡大によって開拓された新地方の読者層など）、一九三〇年代の特色を捉えるにはいくつか別の観点がどうしても必要になってくる。そしてそこにおいては、「戦時下の事態を支えてしまう過程」とは必ずしも言い切れない側面が明らかになってくると考えられるのである。

まず、この時期に語られた「民衆」や「大衆」が、新聞や婦人雑誌といったメディアを通じて見出されたものであるという前提を見据えなければならぬ。これらの言葉は、前節で確認したような新聞・婦人雑誌メディアの発展に関する言説のなかで再発見されたのである。たとえば横光は、以下の文章に見られるように、新聞の読者を「民衆」として意識する（「大群」「群衆」「民衆」といった異なる語彙が使われていることには留意が必要だが、積極的に意味を区別しようとする説明は見られないため、以後これらをまとめて「民衆」と表記する）。

もつとも無縁の衆といふものは、人間としてどのやうな心理を常に持つてゐるものかと、一度は試験を試みなければ、人間の大部分の心底が分り難い。大群の心底に一度も手をさし入れて見ることなくして、高い純文学の完成に向ふことは先づ凡人には出来ぬと思ふ。（中略）

文学では何の理解もなく、然も生活には、多くの場合作者よりも遙かに理解のある群衆——これが新聞の読者である。（中略）

文学者ばかりに問題となることと、群衆のみに問題となることと、離れたところに新聞小説はない。この二つの一致点を見つけ出す批評精神が新聞小説だと思ふ。新聞小説の娯楽は、民衆の一番高級な精神か、もしくは一番下劣な情欲か、この二つにあるばかりだ。文学的にはどのようなに下劣な群衆でも、必ず文学者とは別箇の高級な精神を持つてゐるものである。これに触れずに文学は成り立つ筈がない。

広津の「陣地回復」論においても（「民衆」の可視化は特徴的である。「純文芸そのもの」のためにも、純文芸作家が一步民衆に近づく事がそれを更正させる道の一つなのである）（「売言葉・買言葉——大森義太郎氏に——」、「読売新聞」、一九三五年二月一日（三日））というように、明らかに横光と響き合う「民衆」意識を持っていた。

『新潮』が一九三六年二月に組んだ「純文学・大衆小説・新聞小説について」という座談会も、そのタイトルからして純文学と大衆文学という分けかた自体が新聞メディアを前提としていることを如実に示しているだろう。純文学と大衆文学とが分けて考えられたために新聞メディアへの進出が問われたのではなく、新聞メディアを通じて〈民衆〉が発見されたがゆえにこのような区別が認識されはじめたのである。この座談会のなかで、小林秀雄が〈民衆〉のために「自分を可愛が」ることを辞めるべきだと語っている事についても少し触れておきたい。

僕は、純文学者が新聞小説を書き出したことは、いいことだと思ふ。といふのは僕、ちよつと考へたですけれども、今、日本の作家で自分といふものを捨てて大衆のために書いてゐるのは、大衆作家とプロレタリア作家だと思ふ。今まで純文学の作家といふものは、自分を可愛がり過ぎてゐる、自分の達した心境なんていふものを見せたくて、そればかりつつ突いてゐる。これは、大衆にとつては迷惑な話で、実につまらない。批評家だつて、さういふものばかり読ませられてゐると、うるさくなる。余り心理小説（原文ママ）などばかり読んでゐると、結局、菊池寛の「貞操問答」が一番さつぱりして面白いといふことになる。さういふ点で新聞小説なんか、いろいろやつてゐると、自分の可愛がり方がだんだんなくなつて来ていいと思ふ。

言うまでもなくこれは、横光が「純粹小説論」で主に私小説を念頭に置いて「作者が、おのれひとり物事を考へてゐると思つて生活してゐる」と批判した趣旨と通底するものである。ここに「大衆」すなわち〈民衆〉という視点が介在していることに注意しよう。小林の「私小説論」(『経済往来』、一九三五年五月〜八月)でも論じられているような「私」や「自分」「おのれ」の社会化ということが問題とされるのも、新聞・婦人雑誌メディアを通じて見出された最大多数の読者が〈民衆〉として仮構されたことと密接に関わっているのである。

しかも、彼らの語った〈民衆〉は単に彼らの文学の読者を指していたばかりではなかった。〈民衆〉という言葉によつて彼らは自らの文学に関する思想を体現していったのである。一九三〇年代において〈民衆〉という表象を問題とするとき、日本主義Ⅱファシズムという同時代の思潮との関係性を問わずに済ますことはできない。これも、先述したように彼らが〈短篇〉と〈長篇〉との書き分けを受け入れなかつた理由の一つと考えたい。すなわち、少なくとも保田與重郎や横光利一、小林秀雄といった、同時代に対する批評意識の高かつた文学者らは、文学の大衆化によつてライフスタイルの転換を第一義的に目的化していたわけではなく、日本主義Ⅱファシズムによつて再編されつつあつた〈民衆〉に対して、文学における〈民衆〉を可視化する〈長篇〉を書くことによつて抗争しようと試みたと言えるのではないか。ここには、紛れもなく文学者の主体性が発露している。

保田がこの時期に声を上げた「浪漫」はこのような日本主義Ⅱファシズムとの抗争の過程であったわけだが（本論第二部の第二章および第四章で詳述する）、上述のような〈長篇〉は、イロニーとしてのみ見出される美学的な〈日本〉を志向する保田らとは系譜の異なるものであった。横光は「純粹小説論」のなかで、「私などは初めから浪漫主義の立場を守り、小説は可能の世界の創造でなければ、純粹小説とはなり得ないと思ふ方である」という一方で、保田らの〈浪漫〉に対しては批判的な立場を崩さずにいた。横光は、どのような点で自分の立脚する「浪漫主義」を、保田らの〈浪漫〉と区別していたのだろうか。

今、純粹小説を等閑にして文学としての能動主義も浪漫主義も、意味をなさぬと思ふ。その理由は、前にも述べた現代的特長であるところの、智識階級の自意識過剰の問題が横つてゐるからであるが、いつたい、浪漫主義と云ひ、能動主義を云ふ人々で、一番に解決困難な自意識の問題を取り扱つた人々を、かつて私は見たことがない。この難問に何らかの態度を決めずに、どのやうな浪漫主義や能動主義を主張しようとするのであらうか、疑問は誰にも残らざるを得ないのだ。（「純粹小説論」）

横光の〈浪漫〉批判は「自意識」という言葉に集約されている。この「自分を見る自分」という「新しい存在物としての人称」の問題には、「作者が、おのれひとり物事を考へてゐると思つて生活してゐる」とされる「古いリアリズム」（私小説）の限界を露呈させる意図とともに、「おのれ」（私）が「多くの人々がめいめい勝手に物事を考へてゐるといふ世間の事実」に出会わせる目的が根底にある。つまり、ここでは「自分」の社会化、大衆化が志向されているのである。横光が語る〈民衆〉が保田が言う「一つの思想」であることに変わりはないが、保田の〈浪漫〉においてそれは〈日本〉を美学的に見出すためのイロニーとして語られたのに対し、横光の〈長篇〉においては「通俗を通俗として恐れ」てきた純文学が「純文学にして通俗小説」として再編されるために、新聞・婦人雑誌メディアを通じてその最大多数の読者との関係を構築しようとするジャーナリズム的实践であった。

その〈民衆〉による構築は、「純粹小説論」の最後には「民族」という問題に辿り着く。〈民衆〉が見出された当初からすでに、文学が大衆化することは、文学が民族化することと同義とされていたのである。しかし注意すべきなのは、横光の言う「民族」とは政治的なものではないかたちで現前していたことである。

日本は外国に余り接触しなかつたから民族といふものに対する觀念がそれ程なかつたんですが、それが今政治的ではなくて何かの形でさういふ事が問題になる必要が出て来たんじゃないかと思ふんです。ドイツのやうな政治的な意味の民族主義ぢやないと思ふんです。

〔現代日本および日本人を語る〕、『改造』、一九三七年五月）

ここには、ファシズム＝日本主義への批評意識が留保されている。そして「政治的」ではない「何かの形」とは、本論で確認してきたように、新聞・婦人雑誌メディアを通じて見出された〈民衆〉を志向することを意味していると考えられるのである。つまり〈長篇〉とは、民族主義・日本主義を小説によって政治的な意味から引き離すエクリチュールの抗争であったのではないだろうか。

五節 おわりに

横光の中・後期の文学的来歴は、ともすれば日本主義や国粹主義への傾倒という安易な梗概を招きかねないが、本章で確認してきたように彼の〈日本〉言説の出版期における展開の内実は自明なものではなかった。ここでは、少なくとも、性格の異なる三つの〈日本〉をめぐるテキストの鼎立があったのである。ファシズムという同時代的な趨勢のなかで要請された日本主義の言説には、文学者たちは与してはいないどころか批判的でした。彼らにとって、文学には文学の〈日本〉があった。保田に代表される日本浪漫派が見出そうとしたのはイロニーとしての〈日本〉であり、彼らの〈浪漫〉がファシズムに反抗するためのイデオロギーの創出であったことは改めて説くまでもない。しかし、これだけでは一九三〇年代の（ひいては一九四〇年代まで続く）〈日本〉言説の実態を捉えることができない。マルクス主義の後退した時期において、それが議論していたものとは異なる〈民衆〉が新聞・婦人雑誌メディアを通じて見出され、これを「民族」として〈日本〉を現前したようなもうひとつのロマン主義——〈長篇^{ロマン}〉が確かに存在したはずである。少なくとも、『想像の共同体』でベネディクト・アンダーソンが論じたような出版資本主義とは相容れないようなメディアと文学との相互的關係を彼らは目指していたのである。

一九三〇年代を〈長篇〉の時代として捉えなおし、その中軸に横光の「純粹小説論」とその実践としての小説を再評価すること——本論で提示した問題提起は、横光のみならず昭和文学史を大きく読み替える観点となると思われる。

注

1 「長編小説」と表記される例も見られるが、この時期に固有のコンテクストに着目するため、本稿では「長篇小説」と表記して区別する。

2 十重田裕一「分裂した本文の軌跡——「純粹小説論」について」から「純粹小説論」へ、『文学』、二〇一〇年九月／一〇月

- 3 前田愛『近代読者の成立』、岩波現代文庫、二〇〇一年二月
- 4 川上富蔵編著『毎日新聞販売史 戦前・大阪編』、毎日新聞大阪開発株式会社、一九七九年六月
- 5 『朝日新聞販売百年史（大阪）』、朝日新聞大阪本社、一九七九年五月
- 6 『出版年鑑 昭和十五年版』、東京堂、一九四〇年八月。なお、この表中で一九三九年に発行部数が増えているのは戦時下に出版好況があったためである。本論の主旨とは時期的にも異なるため、この点については別の機会に論じる。
- 7 岡光男『婦人雑誌ジャーナリズム』、現代ジャーナリズム出版会、一九八一年二月
- 8 『主婦の友社の五十年』、主婦の友社、一九六七年二月
- 9 永嶺重敏『モダン都市と読書空間』、日本エディタースクール出版部、二〇〇一年三月
- 10 前田愛『近代読者の成立』（前掲）で、「総合雑誌や文芸雑誌には短編の心境小説を發表し、新聞や婦人雑誌には通俗長編を執筆する——これが文壇棲息者に一般的な生活方式」だったと言及されている。
- 11 山本芳明『カネと文学』新潮選書、二〇一三年三月
- 12 平浩一「企図される「文芸復興」——志賀直哉『萬曆赤絵』に見る「変態現象」——」、『国文学研究』、二〇〇五年六月
- 13 前田愛『近代読者の成立』（前掲）
- 14 中谷いずみ『その「民衆」とは誰なのか ジェンダー・階級・アイデンティティ』、青弓社、二〇一三年七月

第二章 「家族会議」

——新聞メディアの発展と〈長篇小説〉における〈民衆〉意識——

一節 はじめに

横光利一が「紋章」のなかで主人公雁金の行動を通じて「日本精神といふものの実物」を表象し、一九三七年に連載を開始する「旅愁」において「日本的なもの」を描出するという一つの経路を措定するとき、その間隙にある「純粹小説論」(『改造』、一九三五年四月)およびその実践とされる「家族会議」(『東京日日新聞』『大阪毎日新聞』、一九三五年八月九日〜二月三十一日)はどのような役割を果たしていたのか。

このような問いを立てたとき、見落とすことができないのは「家族会議」が新聞小説だったという点である。純文学の危機意識に端を発して「文芸復興」が議論されたこの時期、新聞に発表の場を求める作家たちによって「長篇小説」制作に関する議論が相次いだ。「純粹小説論」も「長篇制作に関するノートを書きつけたやうな結果になった」とあるように長篇小説論なのであり、「家族会議」はその実践としての新聞小説に横光までもが進出したという点で話題とされていた。そして、新聞というメディアがもつ最大多数の読者に対する意識が作家たちのなかで規範化され、それを通じて「民衆」ないし「民族」という問題を設定しはじめるところに、この時期の文学における一つの傾向が見出されなければならない。「日本精神」および「日本的なもの」という文学的問題の系譜に、この「長篇小説」論議に潜伏する読者意識が少なからず与しているとは仮定できるのである。

本稿では、横光の「長篇小説(新聞小説)」論における「民衆の高級な精神」と、「家族会議」および後続の「厨房日記」や「旅愁」で描かれる「義理人情」の接点に着目し、一九三五年前後の新聞小説が一九三〇年代の「日本」をめぐる問題規制の同一線上に位置づけられる過程を探求する。

二節 「義理人情」という視座

保昌正夫¹⁾は「純粹小説論」の「日本から日本人としての純粹小説」の提唱を受けて、「家族会議」を「俗化の大業」の一例として位置づけて「日本」の「現代」を浮き出させる「ねらい」を見出そうとしたが、このような問題提起は十分に議論されているとは言いがたい。「紋章」や「旅愁」ほどには「日本」の表象が前景化していないことも一因だろうが、しかし、「日本」をめぐる問題規制を見えにくくしているのは作品そのものの構造である。横光が「家族会議」のなかで執拗に企図する図式性——関東と関西、東京と大阪、

精神と物質といった二項対立をどう解釈するか、もはや「家族会議」論で定式化しているこの問いにおいて「日本」の命題は閑却されてしまう。

従来よりこの図式性がこの作品の評価軸となっており、肯定的な評価では保昌正夫が前述のとおり「東京と大阪」とで「日本」の「現代」を対立、対照的に代表させ、浮き出させるようなねらい」に着眼したのに対し、榎原修²は「保昌氏のいわゆる〈ねらい〉が、こういう二項対立でしか考えられていなかったとしたら、長編が一種の図式性を帯びるのは当然」と否定的に解釈した。松村良がこの図式性を「両義的な対応関係を無数に含んだ動態的構造」³と見做す展望を示してからは肯定的に再解釈しようとする動向もあり、掛野剛史⁴が改訂版を視野に入れて「〈関東／関西〉〈東京／大阪〉といったような、世間に流布する見やすい図式の蓄積を利用しながら書かれている」が、「実はその図式に亀裂を入れ、相対化する可能性を孕んだ〈近江〉という空間の存在」を指摘しているのもその延長にある。松村、掛野の論考は示唆に富むが、しかし、この図式性の本質が「紋章」から「旅愁」へと連なる「日本」の可視化にあるという観点が可能だとすれば、その評価軸を一度括弧に入れたうえで別の観点から問いなおす必要がある。

まず、この図式性を振り返ってみよう。次の春子と清子との会話にて、物語序盤から重住家と仁礼家の対立を通じて大阪と東京が図式的に配置される。

「でも、それはね、あたし、人の云ふほどぢやないと思ふの。それや、高之さん、泰子さんを好きなことは、好きだと思ふけど、泰子さんのお家と、高之さんのお家とは、どうしたつて、駄目なところがあるの。」(中略)

「それや、分るわ。ぢや、随分深刻なのね。大阪と東京との、戦争ぢやないの。」

この東京と大阪という図式性が提示されて以降は、高之と文七、高之と練太郎といった登場人物の相関図もこの二項対立に基づいて寸断される。たとえば、

二人の怨恨は、たゞ単に、泰子と株をめぐつての闘争ばかりでない。関東と関西の気質の相違もあつた。それに、格闘してゐるうちに、互の怨恨そのものについては、どちらも忘れてしまひ、不思議に日常時の青年を支配する、東大と京大との、意識の下で燃え合ふ闘争になつて来たことも、見逃せない。

というように高之と練太郎の喧騒が描出され、また文七についての高之の発言には、

「あの人は、物質の権化みたいな人で、物質の動く法則のままに、従ふ事を、天職だと考へてる人なんだ。それが、あの人の道徳だ。(中略)ところが、僕は、精神の法則に従ふ事を、道徳だと思つてゐる東京人です。(中略)僕は仁礼さんが、物質の運

動の法則に従って活動すればするほど、感心しなきや、ならないんだ。それでなければ、東京人の恥さらしだ。僕の苦痛は、ここさ。負けて勝つと云ふのは、昔は大阪人の云ふことだった、今は東京人のモットーなんだ。」

と語られていく。東京と大阪という図式性は関東と関西、東大と京大、精神と物質といった複数の図式性を相互に指標しあうことで、登場人物たちとその「家族」はこの図式性の網目へと収斂されることになる。結末の高之と泰子の「結婚」もこのような東京と大阪の対立の解消を意味するものではもちろんなく、文七が殺害されることで対立していた重住家と仁礼家の「父」⁵が不在となる一方で、高之と泰子、練太郎と清子がそれぞれ新たな対立をもつ別の「家族」を構成するにすぎない。

この明瞭すぎる図式性が表象されることで何が可視化されているのかを問うために、この物語のなかで特異な役割を演じる二つの「家族」に注目してみよう。一つは「名家」の名のもとに「伝統」を固持し「義理人情」を体現することになる池島家（忍および信助）、もう一つは「神経衰弱」で「精神に異常を来した」ことで文七殺害という狂気を実践する尾上家（春子および尾上）である。この両極へと帰着する二つの「家族」こそが、この作品の図式性を動的たらしめるひとつの原理を生成していると考えられる。

殊に忍については泰子と並んで高之との恋愛に少なからず関与している人物でありながら、忍を物語中盤以降の準主人公として重視した山本亮介の論考以外に綿密な分析を試みたものは提出されていない。しかし、この後の渡欧を挟んで発表される「厨房日記」および「旅愁」において「義理人情」が横光の志向する「日本主義」ないし「日本的なもの」の表現形式であることを視野に入れるならば、以下のように描出される池島家を「家族会議」論のなかでなおざりに済ますことはできない。

大阪人の中には、義理人情を重んじ、信義に篤く、質素儉約で、実業に勤勉な風が、まだ多分に残つてゐるが、信助のごときは、その中の一人であらう。（中略）

名家の没落の悲しみは、名家が一番良く感じるごとく、重住家のこの没落には、信助も、心から同情したものらしかった。

「先代さんとは、良うご一緒に、遊ばしてもらひました。」

と信助は云つて、次の権利書に眼を通した。高之は、危く、ほろりとしかかった。けれども、他人の手に、家屋敷が渡るほどなら、まだしも、忍の父に渡る方が、どれだけ先祖への、申し訳が立つか分らないと、悲しむ心を慰めるのであつた。

池島の家は中船場にある。先代は普請道楽として有名な人で、洋傘と羅紗で、一代に千万に近い財を造つた。しかし、信助は家産の守護だけに専念してゐる、温厚篤実な人である。（中略）すべてこの家は他家の商売が会社のやうに進展する間にあつ

て、もの静に、過去の伝統を守り、狂はしい過渡期の変転を、切り抜けようとしてゐるかのやうであつた。

重住家の高之は池島家との関係を通じて名家としての自己を表象し、「狂はしい過渡期の変転」を切り抜ける「伝統」を可視化する。このような名家（先祖）意識に基づく日本精神論的な問題規定は言うまでもなく、「紋章」において雁金が「名門の産」であり「祖先から貫き流れて来たその家系独特な紋章の背光のために」「彼の行為には、国家といふ觀念が大海のやうに押し迫り、「日本精神といふものの実物」を「先づ雁金の相貌と行為とを考へずしては容易に考へ得られることだとは思へない」と語っていた視座の内側にある。すなわち、満州事変以後の「日本精神」（「紋章」）から二・二六事件以後の「日本的なもの」（「旅愁」）へと言説が移送される過程を洞察するならば、「義理人情」を属性とする池島家の描写にこそ注目しなければならぬはずである。

破産した高之に六萬円を貸そうとし「自分をも一度、救ひ上げてくれるのは、忍の他には、ない」と思わせ、「泰子の家からは、二度も危害を蒙つたのに、忍の家からは、三度も高之は救はれるのだ」と実感させる忍の行為は、文字通りに高之を救つたばかりでなく泰子との結婚を決意させるにまで至らせている。こうして重住家は「忍の金で、再び仲買店をつゞけることにな」つて高之が「番頭の地位」となり、重住家は危機によつても解体することなく池島家の「義理人情」のもとに再編成され、「どちらもの、云ふに云はれぬ微妙な、奥ゆかしい礼儀が、自然と忍を、上に祭る結果」となるのである。重住家と仁礼家の図式から、高之と練太郎を中心とする図式へと再編成される行程には「義理人情」による布置が機能していたことが読みとれよう。

図式性の亀裂を用意するもう一つの要因である尾上家とりわけ春子の存在についても、春子による文七殺害という終盤の場面から考察すると、結局のところ上述の図式性の再編成に与していることが明瞭だろう。文七の存在は、高之・泰子にとっては「もし仁礼文七に、復讐することも出来ない間に、泰子に愛情を示したなら、もうお終ひではないか」と結婚の判断を妨げ、また練太郎・清子にとっては「仁礼が泰子の婿を、京極にしたいと思つてゐる」以上は実現に向かうことなく、対となる両者の新しい「家族」の構成を停滞させる要因となつていた。春子自身も、「あなたのお父さんのこと、考へないんですか。どんなにお父さん、口惜しい思ひをなすつて、お死になつたか、知れないぢやありませんか」と泰子との結婚に反対する描写からは、「父」の世代を志向する存在として表象されている。文七と春子の思惑通りに泰子と練太郎、高之と清子という組み合わせに終着することは、「父」の世代の単純な反復でしかない。春子による文七殺害の意味するところは、同じ「父」の世代を志向する存在同士による破綻であり、図式性の再生産を可能とさせる原理がここに浮かび上がってくるのである。

泰子との結婚を決める前の破産直後の高之はみずからを「一種の氣違ひ」と言い、「健

全な心を持つてゐる人は、家を捨てるもんどぢやないですよ。家を捨てたつていい者は、僕のやうな、こんな何とも分らぬ人間のすることですよ」とさえ泰子に話していた。この「家を捨てたつていい」という方向性を反転させる力として機能するのが、「義理人情」を体現する池島家・忍であり、「父」の世代を排除する尾上家・春子であったと解釈できるのである。物語の終盤、高之は熱で倒れた泰子を前にして次のように回顧する。

思へば、いろ／＼の道を通つて来たものと、高之は思った。

彼は、実際、あらゆる自分の知識を利用して、富からも、愛情からも、義理人情からも、逃げ廻つて来たのだつた。

「富」および「愛情」については、この作品の軸となつている株取引と男女の結婚を指標していることは問うまでもない。だが、それと併行して「義理人情」が語られているところにこそ、新聞連載とともに忍（池島家）の表象を前景化させていくこの作品の特徴が如実に顕われている。そして、この「義理人情」という精神による新たな「家族」の生成は、以下に見るように新たな「日本」の生成へと敷衍されていく歴史性を帯びていた。これを紐解くためには、当時の〈新聞小説〉が生成する経緯まで辿らなければならない。

三節 起源としての〈新聞小説〉

問題は、横光がどのようにして「義理人情」なる視座を導き出したかである。ここには、文芸復興以降に議論されていた「長篇小説（新聞小説）」に対する志向を発端とし、戦時下のナシヨナリズムへと漂着することになる昭和文学の宿命的な帰結が見出される。

その発端は「純粹小説論」の、以下に掲げる二つの異なるコンテクストが交錯する地点に見出される。

しかし、文学作品を一層高度のものたらしめ、文芸復興の足場を造るためには、最早や純文学では無力であるから、これを純粹小説たらしめる努力をしなければならぬとなると、またさらに第二の難関が生じて来る。それは短篇小説では、純粹小説は書けぬといふことだ。

日本人の思想運用の限界が、これで一般文人に判明してしまつた以上は、日本の真の意味の現実が初めて人々の面前に生じて来たのと同様であるのだから、いままであまりに考へられなかつた民族について考へる時期も、いよいよ来たのだと。（中略）日本文学の伝統とは、フランス文学であり、ロシア文学だ。もうこの上、日本から日本人としての純粹小説が現れなければ、むしろ作家は筆を折るに如くはあるまい。

ここには、「家族会議」の創作に関連する一九三五年前後の文学における問題規制が顕われている。第一に、「短篇小説では、純粋小説は書けぬ」という否定、裏を返せば「長篇小说」への意志はこのエッセーの中核であり、同時代の多くの作家たちが捕われていた問題であった。そして第二に、この「長篇小说」は狭義には「新聞小説」を指標しており、当時最大多数の読者を獲得していた新聞メディアへ純文学作家たちが進出するにあたり、その読者という「大衆」ないし「民衆」に対する意識を「民族」の問題へと敷衍しうる文学場の再編が起きていたことである。

まず、一九三五年前後の「長篇小说」と横光を照らし合わせてみよう。上述のように横光が「純粋小説論」のなかで「少量の短篇では、よほどの大天才といへども、純粋小説を書くといふことは不可能」「百枚や二百枚の短篇ではどうするわけにもいかない」と繰り返し、「唯ここでは、私は、自分の試みた作品、上海、寝園、紋章、時計、花花、盛装、天使、これらの長篇制作に関するノートを書きつけたやうな結果になった」というように「純粋小説論」自体が全体的に長篇小说論として展開しているのには、「短篇小説」「雑誌文学」と称された「純文学」の既定路線に限界が認識されていたことが背景にある。

僕は「紋章」を書いた故為でもあらうと思ふが、二百枚以下のものは書けなくなつたやうだ、短い作を書くハリが無くなつて了つた。僕自身さういふ時機になつたのだが、二百枚といへばどの雑誌でも所載してくれる場所がない、といつて、人間を生かし動かしていかうとすれば七百枚から千枚は欲しい。

かういふことになれば、純文学の舞台といふものがなくなるのだ、これが純文学の癌である。（『行路難』、『文芸通信』、一九三五年二月）

他にも、「長篇を書いてゐると書いてゐる中に何うなるかわからないと云ふ面白味があるです。短篇はそんな面白味はありませんね。はじめからわかつてしまつてゐる、だからもう短篇を書く興味はなくなつてしまひました」（『横光利一文学談』、『行動』、一九三五年九月）と述べたり、「今の純文学の作品のやうな書き方をしてゐてはもう結局雑誌文学になつてしまふ」（『純粋小説』を語る）、『作品』、一九三五年六月）と、横光は執拗に「長篇小说」を強調して「雑誌文学」からの脱却を提唱する。

こうした「長篇小说」への意志はひとり横光のみに限らない。『新潮』では一九三四年九月に「長篇及び短篇小説について」の小特集を組み、そのなかで林房雄は「近ごろ、作家の間に、長篇小说への意欲がたしかにうごいてゐる」と指摘し、「今としては、自分の中の長篇への意欲をおもむくままに駆けらせてみたい」と率直に述べている（『長篇小说と作家』。一九三五年になると広津和郎が「文芸雑感」（『改造』、一月）のなかで「長篇小说の問題」との一節を設け、「純文学の長篇小说の問題は昨年（昭和九年）大分文壇の

論議に上り、その発表機関についての要望」があつたが、「その要望がもつと具体的に実現されるやうな機運を促進する運動が起つてもいい」と述べている。川端康成も広津の論を受けて「文芸時評」(『新潮』、一九三五年三月)で「行動主義も浪漫主義も、いづれは当然の結果として、長篇小説といふ、また通俗といふ問題に出会はねばならぬ」と言い、「高級雑誌や文芸雑誌が殆んど短篇小説ばかり掲載してゐるのはどういふわけであるか、(中略)そこにも純文学の欠陥が横はつてゐるかもしれない」と、発表機関としての雑誌そのものに対して問いを投げかけていた。純文学の作家たちはこうした問題意識に呼応して「長篇小説」の制作を実践していくことになる。

彼らが口を揃えて言明する「長篇小説」という言葉には、広義には雑誌(とくに婦人雑誌)に長期にわたつて連載される小説も含まれていようが、この時期に「長篇小説」といえば具体的には「新聞小説」のことを指している。たとえば、小林秀雄も「長篇小説といへば、その日その日の読者の興味を原稿紙四枚で捕へてゆく新聞小説をいふ」として、「近頃純文学作家が、一せいに新聞で現代小説を書き出した」ことを問題とした(「最近の長篇小説(一)」、『東京朝日新聞』、一九三五年一月二七日)。すでに「風俗小説」と自ら称して「風雨強かるべし」(『報知新聞』一九三三年八月二日〜一九三四年三月一七日)で新聞連載を経験していた広津は、前掲「文芸雑感」で「純文芸的長編小説の発表機関として、新聞の連載小説欄を獲得する」という手段を提言し、「今から二十年前には、純文芸小説が立派に新聞に連載されてゐた」ことから「これは或意味では獲得ではなく、陣地回復」と表現している。この陣地回復論には、当時「純文学余技説」を表明して文学活動を「職業化」ないし「日常化」することを批判していた久米正雄の反論もあつたが(「二階堂放話——純文学余技説——」、『文芸春秋』、一九三五年四月)、広津は久米の「純文学余技説」が「誰でも考へてゐる文学神聖論」にすぎないことを看破し、純文学が新聞へ進出することで「同じ通俗小説になつてしまつても、(中略)今の通俗小説界に新たな分野が開拓される余地がない事はない」というように改めて新聞進出の必要性を説いた(「春宵雑筆——久米正雄に答ふ」、『読売新聞』一九三五年三月三〇日〜四月二日)。

平野謙⁷は「昭和十年前後の広津和郎と横光利一に、いわゆるマス・コミ対策において奇しくも共通のもの存在したことは事実である」と論じていたが、上述のような広津の陣地回復論(長篇小説新聞進出説)は、横光の「純粹小説論」を中心とする長篇小説論とに興味深い共通点を見せている。横光は「新聞の陣地奪還といふようなことは、第二第三のこと」と一歩距離を置きながらも、「日本の長篇小説の最大傑作の七割までは新聞小説である」との認識から「新聞小説といふものは、誰でも一度は書いてみるべきだ」と、「近ごろ新聞小説の議論が急激に起つて来た」ことについて新聞を文学形式として取り入れる好機と捉えている(「新聞雑感」、『文芸懇話会』、一九三六年一月)。発表当時に新聞小説「天使」(『京城日報』、一九三五年二月二八日〜七月六日)、『台湾日日新聞』、一九三五年三月一日〜七月七日)、『名古屋新聞』、一九三五年三月一日〜七月七日)を連載していたこ

とを考慮に入れても、横光が純文学の新聞進出というメディア戦略を少なからず企図していたであろうと推定でき、同時代の作家たちが新聞小説へと向かう趨勢の核となる言説として「純粹小説論」は機能していたという観方が必要であろう。

諸作家のあいだでこのように「長篇小説」が「新聞小説」へと直結しているのには留意が必要だろう。そもそも彼らが一斉に新聞進出を試みるようになったのは、実的には円本ブーム終息後に迎えた作家の深刻な経済苦に起因している。すなわち、円本が一九三一年にはすっかり下火となり文学の市場が縮小していったことにより、単行本も雑誌も売れずに生活の行き詰まった作家たちの打開策として、当時学芸欄の拡充によって読者数を飛躍的に伸ばしていた新聞に眼を付けたわけである⁹。問題としたいのは、こうしたメディアと作家の利害の一致を通じて形成された「新聞小説」という文学場において、従来には比を見ない数の読者を意識することでどのような規範が生まれたかということである。すなわちそれは、先に掲げた第二の問題——横光が「純粹小説論」で文学の「通俗」化の帰結として見出した「民族」の問題である。

四節 交錯する読者意識と民族意識

文芸復興が「市場」の拡大¹⁰というところにその内実が看取され、それが一九三五年前後にはとりわけ新聞小説の読者獲得によって実践されたのは、この一九三五年ごろをピークにして新聞読者が増大していたことを背景としている。横光は「我が国では新聞が一番に読者が多い」（前掲「新聞雑感」）と言及しているが、「家族会議」の掲載された毎日新聞を例にすれば、一九三五年には『大毎』が戦前最大の発行部数を記録し、『東日』も一九三七年を山にして読者数を飛躍的に伸ばしていた¹¹。二大新聞のもうひとつである朝日新聞でも一九三四年から一九三七年ごろまでを「黄金時代」と回顧し、「読者は増加の一路をたどり翌年は九州、名古屋への進出によって大朝区域のみで約十万を加え、十一年には総選挙、二・二六事件、伊エ紛争、ベルリン・オリンピック大会などでさらに躍進、十二年には西日本の人気をあつめた城取り競争、神風機の亜欧飛行、大朝紙二万号記念事業などのヒットについて事変突入と目まぐるしい送迎」¹²であった。

奇しくもこの両紙はその社長（本山彦一、村山龍一）を短期間に失い大きく体制を転じていく時期にあったが、殊に毎日新聞はその社史で「城戸事件」と記録されることになる城戸元亮その他記者五八名の辞職という騒ぎ¹³もあり、紙面の品質を取り戻すための施策を模索している直中でもあった。ここに東京と大阪で対立し「東西の手切れ」とも伝えられていた毎日新聞の建直しの一環である『東日』学芸部の再建と、読者獲得のために「市場」の拡大」を企図していた純文学作家たちが志向する「長篇小説」の問題規制が交差する文学場が生成していたのである。

紙面の低落に対して、先づ影響のあらはれるのは、それだけでなくさへ従来から朝日に比べては少かつたインテリと学生層に厭や気投げのおこることは明らかである。これをつなぎ止め、また開拓してゆく手段としては、城戸時代には在るか無いか分らなかった学芸部を再建する外はない。(中略)最近各紙のあひだにスター・システムの拡充されんとする傾向のおこつたことは見逃し難い。スター・システムとは社外の評論家小説家を、自社の周囲に直接又は間接に引きつけ、又は自社の新聞の力で社員のうちからスターをつくり上げてゆく遣り方である。

(S・A・C「学芸欄と新聞スターシステム」、『文芸春秋』、一九三四年五月)

『東日』学芸部が菊池寛を顧問としたことに典型的なように、「学芸部の活動を活発にして評論家、小説家等を、より多く紙面に動員する」ことで「スター」を作りあげていくシステムが構造化されてゆく。ことに横光は「家族会議」での朝刊小説進出に留まらず、「紋章」での文芸懇話会賞の受賞、非凡閣版『横光利一全集』の刊行、毎日新聞社特派員としての渡欧などを通じてその作家像の「スター」化が加速していた¹⁴。『東日』学芸部長の阿部真之助による提言、および学芸部員であった高原四郎によって実現した「家族会議」の連載¹⁵も、このようなメディア側の仕掛けに横光が応じた結果なのであった。

こうしたメディアによる横光の作品の「国民的文学」化、横光自身の国民的作家化に伴い、作家側からの読者への関心もまた制度化されていく状況が形成されていた。「家族会議」連載に先立つ「作者の言葉」(『東日』、一九三五年七月二八日)で、横光は「作品は作者一個人で巧妙に出来るものではなく、読者と共同の編輯をしてこそ良いものが出来る」というふう読者への意識を表明している。前掲「新聞雑感」にて「文学では何の理解もなく、然も生活には、多くの場合作者よりも遙かに理解のある群衆——これが新聞の読者である」というように想定している読者に対して、その「大群の心底」を明察し描出するところに横光の新聞小説における焦点があった。

文学者ばかりに問題となることと、群衆のみに問題となることと、離れたところに新聞小説はない。この二つの一致点を見つけ出す批評精神が新聞小説だと思ふ。新聞小説の娯楽は、民衆の一番高級な精神か、もしくは一番下劣な情欲か、この二つにあるばかりだ。文学的にはどのように下劣な群衆でも、必ず文学者とは別箇の高級な精神を持つてゐるものである。これに触れずに文学は成り立つ筈がない。

作品を作者という一個人に還元するべきでなく、読者という「民衆(群衆)」の「高級な精神」に文学の新しい形式を創造しようとする姿勢は、「純粹小説論」のなかで「今までの日本の純文学に現れた小説といふものは、作者が、おのれひとり物事を考へてゐると思つて生活してゐる小説」とし、「もしこのやうなときに、眼に見えた世間の人物も、そ

れぞれ自分同様に、勝手気儘に思ふだけは思つて生活してゐるものだと思つて来ると、突然、今までの純文学の行き方が、どんなに狭小なものであつたかといふことに気づいて来るのである」という純文学の様式に対する批判と明らかに通底している。

この点においても広津和郎は横光と共通の認識をもっていた。広津の「在来の通俗小説と違つたものを、読者に働きかけて行きたい」（「人物のステロタイプ化について——大森義太郎氏に一言——」、「『文芸』、一九三四年二月）という意思の根底には「純文学的な長篇の発表機関を、現在のジャーナリズムの間に持ち得るようにしたい」という希望があり、横光の唱えた「純文学にして通俗小説」という純粹小説論の主題と共鳴するようにして新聞読者の獲得が企図されていた。そして「今の通俗小説の中に飛込」むことで「今の日本の純文芸は、その冒険を冒してでも、その行きづまりを打開しなければならぬ」（「売言葉・買言葉——大森義太郎氏に——」、「『読売新聞』、一九三五年二月一日（三日）と強調するなかで、広津もまた「民衆」を可視化する言説の制度に組みこまれていたのである。

今の日本の文壇では、私の云ふ事は必要であるし、近頃は横光氏その他も云ひ出したが、純文芸そのものゝためにも、純文芸作家が一步民衆に近づく事がそれを更正させる道の一つなのである。

新聞を発表舞台とする「長篇小説」論はこのようにして「民衆に近づく」こと、「民衆の一番高級な精神」に「触れる」ことを目的化し、前節で確認したような「長篇小説」への意志は新聞読者を民衆と規定することで「民族」を仮構するイデオロギーとして現前していた。この問題が注目されなければならないのは、「読者」＝「民衆」という重ね合わせが、二・二六事件以降のファシズム化の趨勢との関連のなかで「日本的なもの」へと接合されていく素地となっているためである。小林秀雄が「今日の「日本問題」は、数年前の純文学の貧困の問題、純粹小説の問題から尾を引いてゐる」（「批評家の立場」、「『文学界』一九三七年五月）とし、「その起り方を考へると「日本的なるもの」といふ今日の問題は「大衆的なるもの」といふ問題と引離しては考へられぬ。純文学者達の「大衆的なるもの」に就いての様々な苦痛と離しては考へられぬ」（「『日本のもの』の問題」、「『月刊文章』一九三七年四月）と指摘したように、生活の安定のために収入を求めた作家たちが新聞への進出を志し、その大規模な読者層を「民衆」「大衆」と捉える視座こそが「日本」を可視させた要因と考えられるのである。メディアのなかでも殊に新聞が近代におけるナショナルリズム形成と不可分であることは詳述するまでもなからうが、『東日』学芸欄の拡充に典型的なように新聞そのものの商品的側面が肥大化してゆき、発行部数および読者数において「黄金時代」の到来した新聞の文学場は、それだけナショナルリズム形成についても強力に実践されていたことになる。同じ言語——すなわち日本語で書かれた媒体の大量消費は、その消費圏内における日本語の共同体を構成するからであり、その媒体の読者とは

日本語⇨国語の読者として仮構されるからである。事実、横光は『書方草紙』（白水社、一九三一年一月）でこの時期の来歴を「国語への服従時代」と概括する¹⁶と同時に、その「国語」を「義理人情」を表象する手段として措定している。

日本の国語といふものは、古来から纏綿として人情を描くために成長し、変り合つて来たものである。（中略）日本の国語といふものは確かに人情を書くに一番適してゐるのである。

（『鷗外の「雁」と潤一郎の「蓼喰ふ蟲」、『河北新報』、一九三三年六月九日）

横光のなかで「長篇小説」は、このように「国語」を肯定する（受け容れる）認識と、それによって読者という「民衆」の「高級な精神」ないし「人情」との関係性を構築しようとする意識が交錯する場でもあった。同一の言語が均質に消費される共同体を仮構してしまうところに「日本の国語」という問題が立ち現れるのも不思議なことではない。むしろ「国語」によって書かれたテキストが最大多数の読者によって受容されることは、その像のうちに国家としての「日本」を仮構する志向から無縁でいることのできない状況を招来したのである。そして新聞小説もまた、このマスメディアにおけるナショナルリズム形成に無関係であることができたはずはなく、むしろこの時期に新聞小説を高唱することは文学のナショナルな実践を容認していたとも言い得てしまう。「純粹小説論」はその意味で、民衆への視線を文学に規定し、「民族」を可視化するためのイデオロギー装置としての機能を果たしたという側面も否定できないのである。梶木剛¹⁷は「理念としての〈通俗〉というも、理念としての〈日本〉（民族）」というも、横光利一の内部では全く等価であつて、それはいつでも置き換え可能なものとして存在した」と指摘しているが、たしかに「純粹小説論」のなかで唱えられる「通俗を恐れぬ精神」とは「日本」を語ることを恐れて済ますことの不可能性を主張したものと読み替えることができよう。

「家族会議」における「義理人情」の精神は、このような「長篇小説（新聞小説）」論のなかで作家たちが「民衆（読者）」を意識する共通の文学場を通じて横光が見出した「民衆の一番高級な精神」と併行して表象されていたのである。この作品以降、「義理人情」を「世界に類例のない認識秩序の美しさ」と謳い（『厨房日記』）、「も早や国粹の域を脱したただならぬ精神の訓練の美しさ」（『旅愁』）などと語ることになる事由は、横光のみに限らない「文芸復興」という同時代における、読者・民衆を意識するメディア的な規範のもとに構成されたテキストの帰着であつたと考えられるのである。

五節 おわりに

「文芸復興」——作家たちの経済苦という状況も合わせ、私小説に代表される「純文学」

のリアリズムを相対化しようとする意志とともに、雑誌以外の発表の場を求めて論議の絶えなかったこの時期に、複数の作家が〈新聞小説〉を書いたという実践にはどのような意味があったのか。少なくともここには昭和文学史のメルクマールとなるような文学場それ自体の変容があり、そのジャーナリズムの規制をもって作家たちに見出された「読者」という偶像によって「民衆」という概念が構築される痕跡を辿ることができよう。

〈新聞小説〉によって「民衆」へと接近することを企図した昭和文学は、この後、二・二六事件を経て「日本的なもの」という問題規定に接続されてゆく。小林秀雄が「日本的なもの」といふ問題を引起した所以のものは、(中略)「純粹小説」とか、「純文学の貧困」とか「長篇小説と短篇小説」とかいう最近の一聯の文壇的問題の根底にあるものと緊密に結びついてゐる」(前掲「日本のもの」の問題)と述べたように、一九三〇年代における「日本」をめぐる言説において「長篇小説(新聞小説)」という現象は同時代の作家たちを「文芸復興」以後も縛りつづけることになる。横光の場合、「日本主義者」を描出した「旅愁」を書き出すまえに「家族会議」という新聞小説を経由したことは、その意味において決定的な意義をもつと思われるのである。

注

- 1 保昌正夫「家族会議」まで、『日本近代文学』一九六六年五月
- 2 樫原修「家族会議」(『日本近代小説Ⅱ』、東京大学出版会、一九八六年七月)
- 3 松村良「家族会議」論——動態的構造としてのテキスト——、『学習院大学人文科学論集』一九九二年九月
- 4 掛野剛史「家族会議」論——図式とその相対化の可能性(『横光利一と関西文化圏』、松籟社、二〇〇八年二月)
- 5 諸岡知徳「父」の危機という構造——「家族会議」の時代——(『横光利一研究』、二〇〇九年三月)に、「父」の表象に関する考察がある。
- 6 山本亮介『横光利一と小説の論理』、笠間書院、二〇〇八年二月
- 7 平野謙『昭和文学の可能性』、岩波書店、一九七二年四月
- 8 このあたりの動向については、掛野剛史「新聞小説の可能性——横光利一「天使」から「家族会議」へ」(『論樹』、二〇〇六年十二月)に整理されている。
- 9 山本芳明「それは「純粹小説論」から始まった」(『学習院大学文学部研究年報』、二〇〇九年三月)が参考になる。

10 山本芳明『文学者はつくられる』、ひつじ書房、二〇〇〇年十二月

11 『毎日新聞七十年』(毎日新聞社、一九五二年二月)の「毎日新聞発行部数表」など。

12 『朝日新聞七十年小史』、朝日新聞社、一九四九年一月

¹³ 『改造』『中央公論』『文芸春秋』等の各紙には「お家騒動」「内乱」といったゴシップとして取り上げられていた。

¹⁴ 十重田裕一「メディアに映し出される〈文学の神様〉の欧州紀行——一九三六年、横光利一の外遊とその報道をめぐって——」（『横光利一 欧州との出会い——『欧州紀行』から『旅愁』へ』、おうふう、二〇〇九年七月）が詳しい。

¹⁵ 『学芸記者 高原四郎遺稿集』（一九八八年四月、非売品）に、横光を朝刊に起用した経緯についての言及がある。

¹⁶ 十重田裕一は「横光利一にとって「国語」とは何か」（『昭和文学研究』二〇〇〇年九月）で、時局の進展とともに「形式主義論争で言語と民族の結びつきを強調していたことが、政治的・社会的な広がりを見せてしまう」ことになり、一九三一年以降は「国語への服従時代」という自己規定を裏付けるように、次第に浸透する国粹主義に即応しながら、横光は「国語」を礼讃し、その正当性を主張する姿勢を強化していく」と指摘している。

¹⁷ 梶木剛『横光利一の軌跡』、国文社、一九七九年八月

第二部 戦間期の
〈長篇小説〉と
〈日本〉言説の展開

第一章 「上海」

——言語都市〈上海〉とその〈日本〉をめぐる表象の歴史性——

一節 はじめに

「一度はこの事件の性質だけは知っておいて貰はねばならぬ」——なるほど横光利一の『上海』はこの自序の「熱情」どおり五・三〇事件を描いてはいるが、実際には必ずしもこの事件を語っているわけではない。テキストと読者とが関係しあう語りの空間はむしろ、『上海』の刊行されたそれぞれの局面において異なるかたちで生起している。何より横光自身が、同じ『上海』という作品であるにもかかわらず別の〈読み〉の可能性を要請していたのである。

五三十事件は大正十四年五月三十日に上海を中心として起った。中国では毎年此の日を民族の記念日としてメーデー以上の騒ぎをするが、昭和七年の日支事変の遠因もここから端を発してゐる部分が多い。

「序」〔『上海』改造社、一九三二年七月〕

今、日支の大戦争はなほ熄まぬが、この作の主題と現在の戦争との連関を考察されるならば、東洋の描きつつある運命のカーブについて何らかの屈折率を夢見られるであらうと思ふ。

「上海再刊の序」〔『上海』改造社、一九三九年一月〕

一九三二年には満州事変および上海事変を、そして一九三九年には盧溝橋事件以降の日中戦争を語らざるをえない歴史性がテキストを規定し、そこに描出された〈上海〉はその時代に応じた表象を読者に見出させるという観測が横光にはあった。むしろ、そのように同時代と接合されつつ読まれることを期待してすらいるのだろう。そしてそれを裏づけるようにして横光はこの一作品のみに終始するのではなく、その生涯にわたって〈上海〉という都市に固執しつづけることになる。したがって、〈上海〉をめぐるテキストを『上海』という単一の作品のみに帰する表象として扱うことはその解釈の可能性を狭小にしてしまう。逆説になるが、〈上海〉の表象を『上海』という作品から離反させ開放することによってこそ、横光が要請するような『上海』の〈読み〉が可能になるのである。

本稿では横光利一の文学作品における〈上海〉の表象を問うにあたり、盧溝橋事件直前から戦後まで書き継がれて未完に終わった『旅愁』、および三度目の上海訪問前後に書か

れた随筆を所収する『考へる葦』まで視野に入れることで、〈上海〉の表象の通時的な連続性を切断している断層を見据えながら、それぞれの時代の局面において〈上海〉がどのように生成しているかを捉えなおすことにしたい。

二節 「ある長篇」から遠く離れて

『改造』に掲載されたもののうち「海港章」（一九二九年一月）までを「ある長篇」と位置づけ、その後の「婦人——海港章——」（一九三一年一月）「春婦——海港章——」（同年一月）および初収『上海』は別の作品と見做すべきとする玉村周¹の見解は今日の『上海』論の前提となっている。一年以上に及ぶ中断期間と、そのなかで「機械」〔改造〕一九三〇年九月）に代表される表現思潮の刷新があったことを考慮すると、たしかにテキストは「ある長篇」とそれ以降とでは異質なものと判別しなければなるまい。

しかし、ここで仮定したいのは、より歴史学的な観点によって浮かび上がってくるエピソードの切断である。すなわち、一九三一年九月の満州事変を契機として文化テキストは「日本精神」の流行に見られるようにナショナルな表象へと編成されていくが、当然ながら『上海』もまたその趨勢とはけっして無関係ではないだろうという問いを立ててみたい。石田仁志²は、横光が『上海』執筆時に参照したであろう資料とのインターテキストュアリティにおける〈論理〉の分析のなかで、「日本陸戦隊」のような〈日本〉の表象が一九三二年の第一次上海事変をめぐる同時代のテキストと接合する可能性を指摘しているが、冒頭に掲げた序文で見たように、横光はそのようなテキストの歴史化に意識的であったとすら思われるのである。このテキストの歴史性を明るみに出すためには、玉村の指摘する「ある長篇」という規定とは別の区切りが必要となってくる。

ここでは主人公参木が〈上海〉を通じて「日本」をどのように仮構しているかを確認しながら、〈上海〉が満州事変の前後でどのように生成しているかを見比べてみよう。

どこの国でも同じやうに、此の支那の植民地へ集つてゐる者は、本国へ帰れば全く生活の方法がなくなつて了つてゐた。それ故ここでは、本国から生活を奪はれた各国人の集団が集合しつゝ、世界で類例のない独立国を造つてゐた。だが、それぞれの人は、各自の本国が支那の富源を吸ひ合ふための、吸盤となつて生活してゐる。此のためここでは、一人の肉体は、いかに無為無職のものとも、ただ漫然とゐることでは、その肉体が空間を占めてゐる以上、ロシア人を除いては愛国心の現れとなつて活動してゐると同様であつた。——参木はそれを思ふと笑ふのだ。事実、彼は日本にをれば、日本の食物をそれだけ減らすにちがひなかつた。だが、彼が支那にゐる以上、彼の肉体の占めてゐる空間は、絶えず日本の領土となつて流れてゐるのだ。

——俺の身体は領土なんだ。此の俺の身体もお杉の身体も。

「風呂と銀行」(一九二八年一月)のこの一節は参木のナショナルリズムに与する記述としてよく引用されるが、みずからの身体を「日本の領土」として仮構せざるをえない参木の感覚は、事変以前の「世界で類例のない独立国」においてこそ可能であった。「租界人」としての発想と考えておかなければならない。金井景子³が指摘するように「わずか一ヶ月の上海体験」であつても横光は旅行者でも観光客でもなく「租界人」として、上海に「生活」したのであり、「上海に生活する租界人の視座より、この都市空間を捉える」ということが試みられているとするならば、ここでは日本による軍事行動が事変によつて本格化する前夜の上海が措定されているはずであるからだ。つまり、日本の外側にいるにもかかわらず(日本)を強いられる参木の前に、身体を領有されてしまう空間として(上海)が立ち現れ、「自分は日本を愛せねばならぬ。が、それはいつたい、どうすれば良いのであらう。」(「足と正義」一九二九年三月)と問わざるをえない主体の発露は、この「各国人の集団が集合」する近代の国際都市に投げ出された日本人を通じて見出されるべき表象であつたのではないか。それは、一九三二年一月の第一次上海事変を経た(上海)とはけつして相容れない、列強および中国の関係図が大きく再編されはじめる以前の(租界)の時空間でこそ露呈しえた主体なのである。

参木のこの種の感覚は、満州事変以前のテクストに特徴的に現前している。「掃溜の疑問」(一九二九年六月)では、芳秋蘭から「あなたが日本の方だとは思へませんの。無論あたくしたちは、日本の工場と争はなければなりませんわ。でも、それがあなたとそんな、争ひになることだとは思へませんの」と言われ、秋蘭の争う対象である日本からは逸脱する「あなた」と定位された参木は、しかしそれゆえに「愛の中で漂ひ出した日本人に気がつき、「彼は、今は彼自身がどこにあるのか分らなくなり出し」てしまう。参木はこのように(上海)において日本の外側に置かれることで逆に(日本)を主体として措定してゆき、「僕はあなたが、僕を日本人ではないと仰言つて下さるお心持ちには感謝しますが、しかし、実は、僕はあなたへの仰言りたくなさうな日本人だと思つてゐます。しかし、僕が日本人だと云ふことは、あなたのお気に触る部分の日本人と一緒にではありません」と、日本からは離れることができても(日本)からは逃れられない「憂鬱」を語っている。次の「海港章」(一九二九年十二月)の引用は、まさに参木がそのように(日本)によつて主体の自由を奪われる様相を如実に映し出したものであらう。

彼は再び彼自身が日本人であることを意識した。しかし、もう彼は幾度自身が日本人であることを知らされたか。彼は母国を肉体として現してゐることのために受ける危険が、このやうにも手近に迫つてゐる此の現象に、突然牙を生やした獣の成長を人の中から感じ出した。と、彼は自分の身体が母の体内から流れ出る光景と同時に、彼の今歩きつつある光景を考へた。その二つの光景の間を流れた彼の時間は、それは日

本の肉体の時間にちがひないのだ。そして恐らくこれからも。しかし、彼は彼自身の心が肉体から放れて自由に彼に母国を忘れしめやうとする企てをどうすることが出来るであらう。だが、彼の身体は外界が彼を日本人だと強ひることに反対することは出来ない。心が闘ふのではなく皮膚が外界と闘はねばならぬのだ。すると、心が皮膚に従つて闘ひ出す。(中略)此の民族の運動の中で、参木は本能のままに自殺を決行しやうとしてゐる自分に気がついた。彼は彼をして自殺せしめる母国の動力を感じると同時に、彼が自殺するのか彼が自殺をせしめられるのかを考へた。しかし、何故に此のやうに彼の生活の行くさきざきが暗いのであらう。彼は彼の考へることが、自身が自身で考へてゐるのではなく、彼が母国のために考へさせられてゐる自身を感じる。

参木は、〈上海〉において「外界」との闘争から不可避的に〈日本〉を発見し、その〈日本〉から肉体(身体)が離れられない以上、思考や認識の次元においても〈母国〉から自由になれないという結論に至るのである。こうした言説について、海野弘⁴は「横光は、上海において日本人の外側に出てしまい、日本人に対しても違和感を感じたのではないだろうか。参木という、十年間日本に帰っていない男を主人公に選んだのもそのあらわれだろう」と、また田口律男⁵は「参木は、芳秋蘭のように民族的マイノリティとしての中国プロレタリアートを代表⁶代行することもできず、また、甲谷のように帝国資本主義のパワー・ポリテイクスに同一化することもできないまま、どこにも帰属できない〈孤児〉として、国際都市・上海を彷徨しているのである」と考察している。たしかに参木は「日本人の外側」に投げ出され、「どこにも帰属できない」状況下に置かれたものの、逆にどれほどのような「外界」との闘争を敢行しようとも〈日本〉から逃れられない主体性こそを明確に自覚してしまつたのではないか。〈上海〉は、参木を日本という国家から疎外する他者として現れているのではなく、逆に宿命としての〈日本〉を可視化するものとしてあることに気づかされたのではないか。河田和子⁷が「唯物論⁸物理的認識が、参木ひいては横光に、日本人としての〈肉体〉⁹民族を意識させ、日本人としての〈肉体〉¹⁰〈記号〉から抜け出たくても抜け出られないというジレンマを抱え込ませることになつたのではないか」と考察しているように、それは、「支那服」という衣服の記号によつて擬態しても蔽い隠せない、より根源的であり、より先験的なところで主体を規定する記号があることに対する直面⁷であつた。こうして参木は、日本からは疎外されながら〈日本〉を仮構する、いわば浪漫主義的な発想形式を可能にする経路を必然的に用意してしまつてもいた。そしてその経路を決定的に開示していくのが、満州事変以降に書き継がれた「上海」のテキストなのである。

横光が満州事変および上海事変に対してどのような認識にあったかを検討するための証跡は残念ながら乏しいと言わざるをえない。手掛かりとなるのはこの歴史的転換の後に発表された「春婦——海港章——」（一九三一年一月）および「午前」（一九三二年六月）、そして大幅な改稿が加えられた初収単行本『上海』と初収本文との異同ということになるが、これを考究するためには「上海」本文の先行研究においてたとえば祖父江昭二⁸が「一九三一（昭和六）年九月の「満州事変」勃発、翌三二年一月の「上海事変」勃発の衝撃が、ウル『上海』構想による「後篇」の執筆を断念させたと考えられる。しかしそれらの点はこのここでは判断を留保したい」と言及のみに留めていた「衝撃」の諸相にまで踏み込む必要があるだろう。

『書方草紙』の有名な序文「大正七年から昭和元年にいたる十年間の、主として国語との不逞極る血戦時代から、マルキシズムとの格闘時代を経て、国語への服従時代の今にいたるまで、およそ十五年間の紆余曲折した脱皮生活の断片的記録」のうち、前節までに検討した内容をひとまず「国語との不逞極る血戦時代」「マルキシズムとの格闘時代」というところに重ね合わせることができよう。もちろんここでは新感覚派や形式主義の表現を念頭に置いて「国語との血戦」という言葉を使っていると考えられるが、言語形式において「国」を問う姿勢が、母国の外側において自由を志向しながらも母国が規定されてしまう参木の「外界との闘争」と通底しているように思われるのである。そして、『書方草紙』が出版された一九三一年一月にはすでに「国語との不逞極る血戦時代」「マルキシズムとの格闘時代」は過去のこととなり、今現在は「国語への服従時代」に転じていることを説明している。満州事変直後の「今」をこのように切り取った横光の企図にしたがって、〈上海〉もまたその「今」の前後で同一の表象が連続しているとは捉えないことにしよう。

では、「国語との不逞極る血戦時代」「マルキシズムとの格闘時代」がどのようにして「国語への服従時代」へと変わるのか。この問いを立てたとき、「春婦——海港章——」の次の引用が従来とは異質の〈日本〉を表象していることに気をつけなくてはならない。

参木は船の中から橋の上を仰いでみた。すると、まだ支那人達は橋の欄干からうす黒い顔を並べて彼の方を眺めてゐた。彼はまたちつとしてそのまま彼らが橋の上から去るのを待つてゐなければならなかった。——ああ、しかし、船いっばいに詰つた此の肥料の匂ひ——此れは日本の故郷の匂ひだ。故郷では母親は今頃は緑青の吹いた眼鏡に糸を巻きつけて足袋の底でも縫つてゐだらう。恐らく彼女は俺が今このこの船の中へ落つこつてゐることなんか、夢にも知るまい。

「日本の故郷の匂ひ」を嗅ぐという知覚は、「母国のために考へさせられてゐる」状態

だった「海港章」のときは明らかに相容れない。(日本)を「故郷」として現前すると同時に唐突に想起された「母親」と重ね合わせることによって、母国が強制されることへの違和感が忘れられ、自分より以前に存在しそこから自分も生まれたという母のイメージのもとに(日本)は抵抗なく受け容れられる対象へと変化しているのである。(上海)はこうしてパトリオティズムの生産装置として再編されていた。

このような傾向と同調する改稿例は多く見られる。「掃溜の疑問」の前掲した引用では、芳秋蘭に対して「僕はあなたが、僕を日本人ではないと仰言つて下さるお心持ちには感謝しますが、しかし、実は、僕はあなたの仰言りたくなさうな日本人だと思つてゐます。しかし、僕が日本人だと云ふことは、あなたのお気に触る部分の日本人と一緒にではありません」と、日本人だが日本人ではないという両面を意識していたはずの参木が、単行本『上海』では「僕はあなたが、僕を日本人ではないと仰言つて下さるお心持ちには感謝しますが、しかし、実は、僕は日本人だと云ふことを、別に悲しむべきことだとは少しも思つちやありません」と、日本人ではない半面はなおざりにしたうえで、かつて強制されていた(日本)からむしろ積極的に規定されようとする。同じく秋蘭との応答のなかで、「僕はあなたが、日本人の工場をお選びになつたと云ふことには、少しも不幸を感じてゐないのです」という参木の発言が、『上海』では「僕はあなたたちが、日本人の工場をお選びになつたと云ふことには、不幸を感じてをります」とも摺り替えられている。いずれも「僕は日本を愛してゐます」と言いながら、その「愛」の内実は前者(「掃溜の疑問」)においては(上海)のなかで(日本)が強いられることへの自覚であつたのに対し、後者(『上海』)では自分がその成員の一人として仮構される共同体の意識であつたと考えられる。

玉村周もこの改稿例に注目し、横光が「午前」というお杉に関する章を「上海」にかけた論理について、「午前」で描かれるお杉の底知れない優しさは、母性のもつ優しさである。この母性の持つ意味は、「婦人」で甲谷が唐突に言う(愛国主義)、「春婦」で参木が(排泄物)の中で嗅ぐ(日本の故郷の匂ひ)の持つ意味と決して無縁ではないと思われる」と指摘しているように、逃れられない(日本)をむしろ受け容れようとする(日本)意識の変化に呼応するものとして「午前」(一九三二年六月)を解釈しておく必要がある。

お杉は自然に涙の流れて来るのを感じると、自分がこんなになつたのも、誰のためだと問いつめぬばかりに、さもふてぶてしさうに懐手をしたまま、ちつと小舟の中の老婆を眺め続けた。(中略)

すると、お杉は、泥溝の水面で、静かにきりきりといつまでも廻つてゐる一本の蘆屑を眺めながら、誰か親切な客でも選んで、一度日本へ帰つてみようかと思つた。

汚穢船のなかで「日本の故郷の匂ひ」を感じた参木と同じように、お杉もまた泥溝の水面のなかから「日本へ帰つてみよう」という意識を探り当てる。そしてこの二人が結ばれ

ていく物語構造のなかに、その後の横光における日本帰りの道筋が見え隠れしているのである。

危ういのは、こうした〈日本〉のパトリオティズムの現前の一方で「東洋」としての〈上海〉の側面を強調する傾向が浮かび上がっていることである。芳秋蘭に関する大幅な加筆は言うまでもなく、また山口やインド人アムリを通じてアジア主義についても『上海』のなかで重要な思想的位置づけを与えることで、より「東洋」という枠組みを意識した空間として〈上海〉を布置しなおしている。いずれ『旅愁』に繋がっていくことになるであろう西洋／東洋の構図を下書きするようにして、植民地としていた各列強の関係図よりはその租界における「東洋」の諸相へと視線を転じていく。横光が初収『上海』の序文において「自分の住む惨めな東洋を一度知つてみたい」と語った背景に、上述のような視座の変動が介在していることを見落としてはならない。

前田愛¹⁾は「この参木の遍歴をかりて横光が確認しようとしたのは、革命の火の手に包みこまれた国際都市という極限状況におかれた日本人の心のなかによりみがえってくる日本帰りの心情であるかもしれない」と考察していたが、満州事変以降においてこそ、このような心情が可能となったことに留意する必要があるだろう。ここでは、事変以前のテキストに語られていたような、「外界」との闘争において逃れられなかった〈日本〉をめぐるジレンマは稀薄化し、むしろその〈日本〉を宿命として受け容れる姿勢——すなわち「国語への服従」へと転じていく変化を辿ることができる。無論、これらの表象がその同時代に流行する「日本精神」「日本的なもの」といった言説と無縁であったはずはない。

書物展望社版『上海』（一九三五年三月）もまたこのような歴史性の延長線上に改稿が施されていく。事変下においてどんなに発表が「困難」であり、そのコンテキストに沿った改稿が作者にとつては「改竄」であったとしても、「東洋」という視座を拡張しながら〈日本〉を現前してしまうところには、コロナリズムを正当化しうるような陥穽を準備したとも言える。横光の〈上海〉はこのような危うさを保ちつつ、日中戦争ひいてはアジア・太平洋戦争のもとに書き継がれる『旅愁』の時代へと突入することになるのである。

四節 「世界史」の言説のなかで

一九三七年七月七日の盧溝橋事件は、前節で見たような満州事変のときの反応とは比較にならないほど横光の文学テキストに影響を与えている。同年四月に連載を開始したばかりの『旅愁』を即座に中断した事由もここにあることを戦後の回想のなかで記している。

昭和十二年の四月から東京大阪の毎日新聞に旅愁を連載した。七月七日、日支事変が始まった。その日、自分から申し出てこの作を中絶した。六十二回目である。後、二年たつて再び文芸春秋へ連載することになったがその連載中に、ヨーロッパ戦争が

起つて来た。そして、大東亜戦争に――

「後記」(『旅愁 第一篇』改造社、一九四六年一月)

横光はこの変動のなかで再び(上海)へと立ち返る。ここには、「日本主義者」であり「絶えず考へてゐるのは、日本のことばかり」の主人公矢代を描出してきた新聞連載時の「旅愁」に対し、「今や日本の国内のことのみ考へてゐるときではなくなつた」(「水中の光線 知識階級の意志の屈折(下)」、『東京日日新聞』一九三八年三月一七日)という自己批判とも読める判断を下し、それまでの「旅愁」における日本対西洋という枠組みに対しても、「知らぬヨーロッパのことよりも、身近のアジアの問題からはじめねば、考へるといふ能力は、無駄になる恐れの方が多し」(「水中の光線」)という発想のもとで東洋対西洋という図式へと転換させてゆく方向性が顕著に現れているのである。それは、さきの「日本精神」「日本的なもの」と合流するような表象とは一線を画す(日本)を規定する歴史性の発露であつた。

一九三六年の渡欧のさいに立ち寄つたこともあつてか、『歐洲紀行』にも「私は巴里へ来てから、一層上海の面白さが分つて来たやうな気がする」(「ドーバーを越えて」、『文芸春秋』一九三六年七月)という記載があつたように、半年に及ぶヨーロッパ体験は横光をして(上海)へと改めて逆行せしめる機会を与えていた。盧溝橋事件、第二次上海事変と続いていく「非常時」の趨勢のなかで横光が即座に中国への関心を示したのも、このような(上海)を再考しようとする意識があつたからである。

私がパリへ着いて後も、なほ頭の中に浮んで最も興味を感じ、忘れ難かつたのは上海であつたがこの街の中にはロンドンがあり銀座があり、パリがありベルリンがある。恐らくニューヨークもあることと思ふ。ここでは各人が租界といふ不思議な場所である各自の本国の首都と競ひ合ひをする。(中略)

私に上海を見て来いと云つた人は芥川龍之介氏である。氏は亡くなられた年、君は上海を見ておかねばいけないと云はれたのでその翌年上海に渡つてみた。着いて最初に感じたことは、ここでは総てが銀の上を流れてゐるといふことであつた。(中略) 次ぎには租界内の各国の組織と関係とだんだん興味につられて進むに従ひ、ここは世界で一番新しい形態の街なるのみならず、各民族のどのような認識も伝統も役には立たぬ所だと思ひ、各国がここから本国に持ち帰るものは誤謬を運んでゆくばかりだと思つた。また同様に支那人自身もこの街に関しては誤りを冒してゐるに相違ないと思つた。しかも、この理解困難な場所に注意することなくしては、東洋の政治は行ひ難く、世界の政治も商業も運用不可能な状態になる時が近い将来に必ずあるだらうと考へた。

「上海の思ひ出 静安寺の碑文」(『改造』一九三七年一〇月)

もう一度〈上海〉を捉えなおそうとする意志は回想のみにとどまらず、横光は「この理解困難な場所に注意する」べく、一九三八年一月に三度目となる中国旅行を敢行している。神谷忠孝¹がこの旅行について「横光利一の東洋主義が明確になったという意味で決定的なものだった」と指摘しているように、横光は「この東洋の工夫がわれわれに最も必要緊急な政治学となつて来たことは、支那をこの度廻つて来て私の痛切に感じたことであつた」（北京と巴里（覚書）、「改造」一九三九年二月）と述べているが、その「東洋の工夫」という発想が「上海を歩いてみれば、ここでは絶えず自分の精神に調節をほどこす政治が必要である。またその調節の方法や度合も二十世紀の調節の仕方に、ある程度の東洋の工夫をこらさねばならぬ」とあるように〈上海〉を通じてであることが重要なのである。

日中戦争のもとで横光が〈上海〉を通じて「東洋」を考察するところには、この戦時下に特有のある論理が指定されている。共同租界という都市形態のなかに「近代といふもの見本」を看取することで、西洋ではなくこの「東洋」の空間にこそ「世界に類例のない質の転換」と「新しい心理」を見出そうとする企図である。

共同租界の問題といふのは、世の中の問題の中で、一番判明されない、また同時にここには、未来の問題ばかりのある所だ。いたつて簡単なことだが、ここほど近代といふ性質の現れてゐる所は、世界には一つもない。また、各国が共同の都市国家を造つてゐる場所、といふ存在は、世界には租界以外には、一つもない。従つてここを考へることは、世界の縮図を考へることになる。

（「支那海」（三）、「東京日日新聞」一九三九年一月七日）

「世界の縮図」を西洋ではなく東洋の〈上海〉に重ね合わせ、ここに「近代といふ性質」「新しさ」「未来」を構想する思考はこの当時、けつして横光のみには限られない同時代の思想の枠組みを形成していた。言うまでもないだろうが、ヨーロッパ中心の「世界史」から東アジアを含めた脱中心的なそれへの転換を説く高山岩男に代表される、座談会「世界史的立場と日本」（『中央公論』一九四二年一月）でも有名な京都学派らによる「世界史の哲学」がその典型である。「世界史の転換」を掲げて戦争やコロニアリズムを「ヨーロッパの近代的原理に立脚する世界秩序への抗議」（高山岩男『世界史の哲学』岩波書店、一九四二年九月）として肯定する姿勢と、〈上海〉に対する注視のなかから「未来の問題」を見据えようとする横光との距離はさほど離れているわけではない。いずれも「東洋」という視座においてヨーロッパを脱中心化して新しい世界秩序を志向するという点では短絡的に通底してしまう。

これに三木清を加えるならば実質はいっそう明瞭になるだろう。「支那事変の影響のも

とに、「東洋思想」とか「東洋文化」とかといふ問題が新たに日程に上り始めたのも決して偶然ではない。かくて今や「日本的なもの」は「東洋的なもの」にまで拡大されようとしてゐる（『日本の現実』、『中央公論』一九三七年一月）と見抜いていた三木は、「支那事変の含む世界史の意味は「東洋」の形成である」（『現代日本に於ける世界史の意義』、『改造』一九三八年六月）と説いていた。このような「世界史の転換」の動向に準えるようにして、横光は上述の中国旅行を挟んで連載を再開した「旅愁」のなかで主人公を「日本主義者」（新聞連載時）から「東洋主義者」へと唐突に変貌させ、「上海の有名な支那銀行の頭首の息子」である中国人の高有明という登場人物を新たに追加して、日本と中国の対立のなかで「東洋独自の精神の結合に似た一線」を模索しながら書き継いでいくのである¹²。

とはいえ、横光にこのような同時代の「世界史」言説に対して批評意識をもっていなかったことはない。たとえば、三木が「歴史の理性」を重視していたのに対して「世界史の立場から日本の精神を見なければ、論理の誤謬になるといふ観念は、それは哲学であつて必ずしも文学ではない」（『スフィンクス——（覚書）——』、『改造』一九三八年七月）というような留保を忘れてはいなかった。その理性や論理を代替する「東洋」表象について、道義や伝統といった言辞でしか語る事ができなかったことがこの作家の限界と見ることもできるだろう。しかし、田口律男¹³が「こうしたナシヨナリズムの陥穽は、実は保田・小林らの文学／美学イデオロギーにも京都学派の世界史哲学イデオロギーにも共通して待ち受けていたものであつたが、彼らの言説は巧みにそれを隠蔽していたのに対し、横光の『旅愁』は、無惨なまでにそれを露呈してしまつたのである」と解釈したように、横光の「東洋」をめぐる表象は、それがみずから「理解不能」だと繰り返した（上海）を通じて不安定に現前しているからこそ、この作家の長篇小説は今なお異彩を放っている。言語都市（上海）は横光に対してつねに「理解不可能」な地平をさらけ出すとともに、絶えずその地平へと立ち返る宿命を負わせることでナシヨナリズムの固定化を拒み続けてしまふ。横光の死とともに未完におつた『旅愁』には、上述の中国人高有明ともう一人の主人公久慈が（上海）へ行くことが予告されていた。

戦争といふには厳しさが足りず、事変といふには底鳴り異様なうちに、今度は上海の周囲に火が飛んだ。久慈が印度洋廻りで東京へ帰つて来たのは、丁度かういふときであつた。彼は東京の知人たち誰にも到着を報せず飄然と戻つて来たのである。（中略）

「妙な方だわあの人。一度さやうならと仰言つて外へ出てから、また戻つていらして、今度上海へ行くことになりましたから、さう仰言つといて下さいって。」（中略）
矢代の手紙に対し折返して久慈からの返事が届いた。それにはまだ簡単に、自分の歓迎会をしてくれる塩野の厚意も断つてゐることや、帰つて来た目的は母へ安心を与

へる結婚のためだけで、それをすませばすぐパリへ戻る仕事の待つてゐることと、上海へ行くのもその仕事の一つで高有明も共同出資者の一人だといふことなど誌してあつた。

「旅愁」〔『文芸春秋』一九四五年一月〕

たしかに横光の描出した東洋主義は、「旅愁」の矢代が「日本主義」から「東洋主義」に変貌したように（日本）と（東洋）が置換可能な危険性を持ち、京都学派らの「世界史」や「大東亜」といった戦時下のイデオロギーと間違ひなく交錯していただろう。しかし、横光にとつて（上海）はそのようなイデオロギーによつて「理解」できるものではそもそもなかった。「上海について正確な判断を下すことは、恐らく何人も不可能」である「特別な場所」（「上海の事」、『ホームライフ』一九三七年一〇月）であり続けることで、（上海）は小説という虚構のなかで表象されたときにはすでにその意味づけが失効し、そのたびごとに新たな思考へとこの作家を駆り立てる言語都市として機能していたのである。

五節 おわりに

以上のように満州事変の前後、そして盧溝橋事件以後という区切りによつて大まかに三期に分けて（上海）の断層を素描してみると、従来の「上海」論が前田愛の「SHANGHAI 1925」という問題の圈内に偏っている傾向に疑問を抱く。もちろん、五・三〇事件を文学において描出したこと自体この作家の大きな評価軸であり、近年の館下徹志¹⁴や井上聰¹⁵による「歴史的事実」との関係の検証、諸氏の同時代資料や「出典」に関する調査¹⁶のような観点が、今後も進展されていくべき研究課題であることに疑いの余地はない。しかしながら、確認してきたように、横光は必ずしも一九二五年の五・三〇事件を語ろうとしていたのではなく、むしろ同時代の射程においてその「遠因」を問い、「連関」を探るところにこそテキストは成立しているとも考えられるのであり、「1925」という単一の時代のみ還元されることのない複数の位相を帯びた時空間として表象されている、その通時的なフラグメント性もまたこの作品の評価軸として検討すべきなのである。和田博文¹⁷は「一九二〇年代～三〇年代の日本で、言語都市としての上海は、都市の多層性をどのよう表現しうるかという課題と、向き合うなかで形成されていった」と指摘するが、横光の場合それは、一九二〇年代以降（上海）における列強の勢力関係が変わりはじめ、日本人の増加と本格的な占領を辿つていった過程のなかの時間的、歴史的な多様性に対しても眼を向けたところに成立していたということに着目する必要があるのではないか。そのためには、玉村周の「ある長篇」という観点もまたひとまず括弧に入れたうえで再考しなければならぬだろう。（日本）（国語）との「血戦」と「服従」の両極端を往来し、「世界史」の構想にも与することになったエクリチュールの実践の痕跡は、今なお検討の余地を多分

に残しているように思われる。さらなる評価の展望が期待できるとすれば、それぞれの断面に〈日本〉を浮かび上がらせている〈上海〉という都市テクストを、その同時代において捉えなおす歴史化の作業が求められることになるだろう。

横光は「私は昭和三年に「上海」を書いて以来、共同租界は、いつも考への舞ひ戻る、私の問題の故郷の一つである」（前掲「支那海（三）」）と述べていた。その言葉どおり、近代を問うために〈上海〉という都市を思考しつづけた群像は、一九〇〇—二〇〇〇年の日本文学史における重要なメルクマールとして記憶されなくてはならない。「上海」から始まり「旅愁」において未完に終わった〈上海〉をめぐる文学テクストには、小林秀雄の「故郷を失った文学」によっても語られることのなかった日本文学のもう一つの〈故郷〉が刻み込まれている。

注

- 1 玉村周「横光利一・『ある長篇』考——〈掃溜〉の中で——」、『日本近代文学』一九八五年五月
- 2 石田仁志「横光利一『上海』のインターテクスチュアリティ——表象の論理——」、『文学論藻』、二〇一二年二月
- 3 金井景子「租界人の文学——横光利一『上海』論——」、紅野敏郎編『新感覚派の文学世界』、名著刊行会、一九八二年一月
- 4 海野弘『モダン都市周遊——日本の20年代を訪ねて』、中央公論社、一九八五年六月
- 5 田口律男『都市テクスト論序説』、松籟社、二〇〇六年二月
- 6 河田和子「〈上海もの〉と五・三〇事件——横光利一の『上海』とその周縁——」、『横光利一研究』、二〇一〇年六月
- 7 横光の〈日本〉に対する問題意識はつねに、このような根源的、言い換えれば認識論的な命題として提示されているように思われる。本論第二部第四章でも検討する。
- 8 祖父江昭二「『上海』論——初出と初収本との比較を中心に——」、『近代文学における中国と日本』、汲古書院、一九八六年一〇月
- 9 玉村周「横光利一・『上海』——〈排泄物〉の中から——」、『蟹行』、一九八六年七月
- 10 前田愛『都市空間のなかの文学』、筑摩書房、一九八二年一二月
- 11 神谷忠孝『横光利一論』、双文社出版、一九七八年一〇月
- 12 本論第三部第一章で詳述。
- 13 田口律男「いかがわしい『旅愁』の〈日本〉」、『早稲田文学』、一九九九年一月
- 14 館下徹志「横光利一『上海』の五・三〇事件——歴史叙述の反証可能性」（『昭和文学研究』一九九八年九月）、同「横光利一『上海』における「在華紡」——擬制としての

受難／熱情の発動」(『横光利一研究』、二〇〇三年二月)

¹⁵ 井上聰『横光利一と中国——『上海』の構成と五・三〇事件——』、翰林書房、二〇〇六年一〇月など。

¹⁶ 河田和子「へ上海もの」と五・三〇事件」(前掲)、石田仁志・田口律男『『上海』の典拠——『法人紡績罷業事件と五卅事件及各地の動揺 第一輯』(『横光利一研究』、二〇一〇年六月)、掛野剛史「横光利一『上海』の典拠——雑誌『国際パンフレット通信』・長野朗『華僑』——」(『横光利一研究』、二〇一一年三月)など。

¹⁷ 和田博文・大橋毅彦・真銅正宏・竹松良明・和田桂子編『言語都市・上海 1840-1945』・藤原書店、一九九九年九月

第二章 「紋章」

——事変下の〈日本精神〉言説と浪漫主義的自己遡及からの〈自由〉——

一節 はじめに

一九二六年一〇月に上梓した『日本精神史研究』（岩波書店）の著者——和辻哲郎は、彼のその著書が一九三四年にもなると〈日本（の）精神史（の）研究〉ではなく、〈日本精神（の歴）史（的）研究〉と読み替えられてしまう言説空間に直面し、その当惑を率直に述べている。

『日本精神』といふ言葉は目下の流行語の一つである。しかしそれが何を意味してゐるかといふことは、あまり明白でないやうに思はれる。（中略）少くともこの問題についてこゝに何かを書かされる自分は、実のところ好くは解つてゐないのである。さういふ自分に対してこの問題が割り当てられたのは、多分自分が『日本精神史研究』の著者だからだらうと思はれるが、あの書は『日本の精神史』に関する部分的研究を集めたものであつて、『日本精神』の歴史的研究ではなかつたのである。

（和辻哲郎『日本精神』、岩波書店、一九三四年九月）

この種の読み替えに伴う当惑は、一九三四年という時期においては、珍しいものではなかつた。「特輯 日本精神」と銘打たれた『思想』一九三四年五月号に附録されている、清水幾太郎による「日本精神文献」を眺めてみると、もはや体系化しようのないほどの〈日本精神〉論が羅列されている。和辻の言うように、当時〈日本精神〉は「目下の流行語」であり、その言葉のもとに言説の再生産や読み替えが図られた時代であつたのである。

一九三四年前後をこのような〈日本精神〉言説とともに考察するとき、改めて注目されるのは、その主人公に「日本精神といふものの実物」を重ね合わせようとした横光利一（『紋章』、『改造』一九三四年一〜九月）¹である。「紋章」は、作中で〈日本精神〉という言葉が使用された横光の最初の小説であることもあつて、先行研究でもこの〈日本精神〉について考察を行っているものは少なくない。しかし、この言葉がどのような歴史的経緯によって成立していたかや、同時代の文学における捉えられ方まで俎上に乗せた議論までには発展していないのが現状である。

本稿では、（一）まず「紋章」において〈日本精神〉がどのように言及されているかを改めて確認したうえで、（二）「紋章」の同時代すなわち一九三四年前後において〈日本精神〉論が展開していくまでの歴史的過程を辿りつつ、（三）そのなかで横光の〈日本〉言

説がどのように位置づけられるかを検討することにした。この歴史的な検証のなかで明らかになるのは、事変下のナショナルな風潮のなかで〈日本〉をめぐる言説が文学者たちによって展開されていったことは自明なことのように扱われかねないが、その様相についてはけっして自明でない批評性を担保していた文学者たちの実態である。〈日本精神〉に関する同時代のイデオロギーを無条件に受け容れることなく、批評意識を継続し、相対化しようとした文学の一九三四年前後における一側面を、横光そして小林秀雄を通じて照らし出すことを目的とする。

二節 「紋章」における〈日本精神〉言説

本節ではまず、「紋章」において〈日本精神〉言説に呼応している表象を辿ることとする。作中において際立って〈日本精神〉言説との関与が確認されるのは、言うまでもなく「雁金八郎」という主人公である。この固有名には、作品を特徴づけている歴史性が如実に顕われている。

久内は立つて本棚から清元の本を出して、太めの棹の三味線を自分で取り出して来て無理に敦子に渡すと火鉢の前へ坐り直した。敦子は興味の乗らぬ顔つきで持たされた三味線の糸を締めながら、

「だつて、どうしたの？」とまだ訝しげに横眼で久内を眺めてゐた。

「どうもしないさ。一寸、雁をやらう。」

久内は両手を膝の上に正しく乗せて低く雁の中頃から唄ひ始めた。

「空ほの暗きしののめの、木の間がくれのほととぎす……」

敦子は光った棹を重さうに横に倒して抱へ、三味線の上へ落ちかかつて来る洗髪をときどき後ろへ跳ね上げては、爪先で物憂げに合せてゐた。そのうちにだんだん彼女は糸の調子を落していくと、

「もう、およしなさいよ。」と肩を擧めて云つた。

「もう少しやらう。」

「櫛のしづくか、しづくか露か、ぬれてうれしき朝の雨……」

(第六回、『改造』、一九三四年六月)

清元「雁金」があらさまに引用されているように、「雁金八郎」の名前が雁金の家紋を指標し、その紋章(コード)によって規定される存在として表象していることを、テクストは隠そうとすらしめない。「祖先から貫き流れて来たその家系独特な紋章の背光のために、行動も自然に独自の姿となつて来る」(第一回、『改造』、一九三四年一月)という雁金像は、「祖先」や「家系」といった同類の通時的な言辭によって繰り返し表象されてい

く。「彼の家は東京近郊の県下にあつては、その群第一の資産家であり、代代勤王をもつて知られてゐる名門」であり、雁金はその「名門の産」であるがゆえの規定を受けていく。たとえば、「自分の家は先祖代代からこの群きつての名家だのに、自分の家より下の所からだけは、どんなに貧乏したつて嫁を貰つてくれるな」という祖母に従つて、初子との婚姻を立ち消えにさせたというエピソード(前掲第一回)。また、「正義のために切腹したり、飢饉に倉米を解放して貧乏したりした先祖の行蹟の数数」を思い浮かべ、「先祖は人のために苦しんだのだ。今自分に迫つてゐる所員の心労をそのままに捨ておくべきときではなからう」と決意して多多羅に声明書を渡す場面(第五回、『改造』、一九三四年五月)。雁金の言動は、幾度となくこのような「先祖」の存在によって方向づけられる。そればかりでなく、「紋章」「祖先」「家系」という規範のもとに、雁金の造形には「国家といふ觀念」が伴い、「彼の頭に国家がそのやうに印象されてゐたといふことは、彼の行為の上では、およそ何事によらず、ただ自身が正しいと直覚したことのみを驕進するといふ勇猛果敢な表現をとつて少しも怪しまなかつたところに影響した」という(第一回)。実際、雁金は発明に際しても「日本にとつて」「国益上」の「利益」という基準を持っており、「家」の表象が「国家」をも内包していることも明らかである。「紋章」の主題のひとつである特許法自体も、山本亮介²が指摘するように「国家公益」という上位の根拠に意義づけられることで存在・機能している」ものであり、雁金の発明はその「国家公益」の増進を目的とする特許法によって形成・保証されている」といえる。

松村良³が指摘しているように、このような近代国民国家との連関をもつ雁金の造形は「まぎれもなく「近代日本」人」であり、「近代の智識人」とされる久内と雁金とのあいだに対立構造を読みとるのは根本的に不可能であろう。私が、松村と同じように雁金を「近代日本」人と考えたい理由は、もう一つある。雁金のこのような表象は、「紋章」の同時代において(日本精神)と呼ばれた種々のイデオロギーを前景化するものであり、一九三四年前後に固有のモダニティを孕んでいるからである。横光は、明確に同時代の(日本精神)言説への接続を試みている。

もし日本精神といふものの実物があるものなら、私の知つてゐるかぎりに於ては、先づ雁金の相貌と行為とを考へずしては容易に考へ得られることだとは思へない。他の人々の顔には、西欧から流れて来てゐる知識の副産物であるところの、疑ひの片影が、どこかに必ずつきまつてゐるのを私たちは感じる。この意味では、今ほどヨーロッパ精神が日本精神を軽蔑してゐる時代はないであらう。——雁金のその後の悪戦苦闘も、根元はことごとくこの世人の軽蔑から始つてゐるといつても良かった。

(前掲第一回)

雁金を「日本精神といふものの実物」と表現したこの一文は、従来の「紋章」研究のな

かでも何度となく引用されてきた。

初期の基礎研究においては、「日本精神」という言葉を主として「伝統」に関する志向が見られることを、横光の文学における転換点（後期の作品とりわけ「旅愁」へ接続される主題が見出されたポイント）と見做す見解が多く提示された。しかしながら、「日本精神」に関する記述の曖昧さ、必然性のなさ、性急さを指摘し、その「日本精神」という問題の内実まで究明する事は不可能とする論考が繰り返されて来たのが実態であろう。岩上順一⁴は、上記引用のような雁金の人物像が従来の作品に見られないものであり、「可能な限りそのような新しい人間性の特質を「日本精神」に於いて規定しようと試みはじめたのである」とする。そして「紋章」は、「西洋的知性に対置せられた意味での東洋的知性の追求」という主題がその後の作品系列（「旅愁」等）の基調となった点において「重大な転機」であったとする。しかしながら岩上は、雁金はむしろ「何等か伝統の系譜を思わせる家族的な紐帯の一切がたち切られてゐる」、「作家横光が力説する日本精神の伝統は、どこにも具体的な姿をとつてあらはれてゐない」と指摘し、「西洋的知性との対決」という主題を捨象したところでの雁金の人物像（発明に向かう行動と、それをめぐる社会環境との不調和から形成される「現実性」）をこそ評価しようとする。「日本精神」について「どこにも具体的な姿をとつてあらはれてゐない」と見做す岩上の解釈は、事実上、その後の「紋章」研究においても無条件に同意されてきた。たとえば、田口律男⁵は、「機械」において追求された主体の危機を超克しようとする「主体回復のモチーフ」の深化・拡充という点に「紋章」における「傾斜」を認め、従来の国粹主義や日本主義の傾斜を見ようとする論考とは一線を画す論考を提示している。しかしながら、この「主体回復のモチーフ」において横光の内面に芽生えた「根源的なものへの志向」が「伝統」というイメージを胚胎し、「主体回復の具体的イメージ」として雁金像を形象化したときに「日本精神」なる曖昧な観点」に収斂させてしまったとし、そこには「当時の横光のやむにやまれぬ性急さがあらわれている」と指摘する。「転機」にせよ「傾斜」にせよ、そこで必ず諸論者が悩まされる「日本精神」については、具体性のなさ、必然性のなさ、曖昧さ、性急さといった同類の言葉によって片付けられ、むしろそれによって「日本精神」を問題とすることを暗黙裡に避けて来たとすら思われる。

その曖昧さや必然性のなさを認めつつも、作品内において「日本精神」の実質をどうか解釈しようとしたのが鳥居邦朗⁶と芹澤光興⁷であろう。鳥居は、雁金が「日本精神の権化として設定されている」が「その日本精神の内実はというところほとんど明らかではない」もので、「雁金の形象から、横光の日本回帰を引き出すことは無理だと考えられる」としつつも、山下家の茶会の場面においては「ヨーロッパ的「近代の智識人」の自意識を克服するものとしての日本精神という問題」が出てくるとする。芹澤は、「名門の産」の誰もが「日本精神といふものの実物」となることの必然性など、どこにもない」としながらも、「雁金を（私）が（日本精神）の体現者というとき、それは雁金が自らの行為の意味を保

障する日本という共同体との強い一体感を保持し、共同体のために自己を邁進させる滅私奉公的な精神の所有者だったことを表している」とし、「紋章」における「日本精神」の言説は「彼の〈日本精神〉を、己れを空しくして集団に尽す、反《近代》的な観念とする」ことで、初めて作品内でのポジションを確保できる」とする。両氏の解釈の妥当性は、ここでは問題としない。確認しておきたいのは、いずれの論も、「紋章」のテキスト内のみにおいて「日本精神」の表象を読みとろうとしている点である。

本論の冒頭でも触れたように、「紋章」の同時代において「日本精神」という言葉を語ることは、けっして特殊なことではなかった。この時期に大量に生産された〈日本精神〉言説のメディア的氾濫のなかで「紋章」における雁金の造形が要請された、と見る観点のほうが必要になってくると考えられる。つまり、雁金の造形において「日本精神」という言葉が持ち出されたのは、横光特有のジャーナリスティックな応答であったのではなかったか。この同時代における〈日本精神〉言説にいつさい目を向けることなく、「紋章」で言及された「日本精神」ひいては雁金の形象を「紋章」のテキスト内のみにおいて解釈することで済まそうとしたところに、これまでの「紋章」研究の課題があると言わざるを得ない。一九三四年前後に〈日本精神〉論が流行した事実と言及している河田和子の論考も、雁金の「日本精神」が「当時の『日本精神』の議論ともニュアンスが異なっている」との指摘に留まっておき、その同時代における歴史的な実態の分析にまで踏み込んだ先行研究は提出されていないのが現状である。

問題は、横光が「日本精神」を表象しようとしたのではなく、同時代の〈日本精神〉論に対して応答しようとした点にある。言い換えれば、横光は雁金によって「日本精神」を体現しようとしたのではなく、雁金を通じて「日本精神」を批評しようとしたのである。このような問題設定において、雁金における「日本精神」の内実が明らかにされないのは何ら不思議なことではない。同時代において「流行」していた〈日本精神〉言説自体が錯綜を極め、いくら探求しようとも内実のないものでしかなかったのである。そういう意味では、「近代日本人」でありながら「日本精神」が抽出される雁金の造形は、当時の〈日本精神〉言説の矛盾をよく露呈していると言えるかもしれない。横光が「紋章」においてその矛盾にどのような批評を加えたのかを確認するためにも、まずは〈日本精神〉言説の実態を確認しておく必要があるだろう。

三節 事変下の〈日本精神〉言説

「日本精神」という語彙を遡ると、すでに大正期から、保守的な日本主義者たち——とくに小尾春敏の社会教育研究所の関係者のあいだで用いられている。文部省から囑託を受けてまとめられた、五十嵐祐宏・亀坂文衛・奥田直登による『日本精神論の調査』（文部省思想局、一九三五年一月）には、「日本精神」という語が刊行本のタイトルとなった

最初の例は大川周明の『日本精神研究第一、横井小楠の思想及信仰』という小冊子であったと記載されている。大川はこのシリーズを「第九」まで続刊しており、これらは後に『日本精神研究』（行地社出版部、一九二七年五月）として上梓された。大川は当時、上述の社会教育研究所の講師として青年教師らの教育にあたっており、同研究所に所属していた安岡正篤も『日本精神の研究』（玄黄社、一九二四年三月）を著している。大川は多様な西洋思想に惹かれてきた「精神多年の遍歴」を経て後、「予は再び吾が魂の故郷に復り、日本精神其者のうちに初めて予の求めて長く得ざりし荘嚴なるものあるを見た」と言い、「日本精神」を「故郷」として表出している。（日本）というイデオロギーを、それが失われたがゆえに再発見する、典型的なロマン主義的回帰の位相と言えるだろう。一方、安岡は「産業革命以来の物質文明」が現代における頹廃をもたらしたと捉え、「人間の機械化による人格の破綻」こそが現代人の最大の禍と見做し、「人格」の回復を目的として日本精神を論じている。また「亜細亜が空しく奴隷的状况に陥れられて居る」という国際情勢も視野に入れて、「亜細亜の同胞が起つて再び其の莊嚴なる人格の自由と光栄とを恢復すべき時は来た」と述べ、ヒューマニズム的命題と西洋資本主義の相剋とを恣意的に同一視し、「一国家の国民精神に関するはずの議論をアジアの問題にまで拡大する発想を露呈している（これも〈日本精神〉言説には典型的な発想である）。

前掲『日本精神論の調査』では、これらの著述を大正から昭和初期における「左翼思想及び運動」に対する「対抗」と位置づけているが、実際のところ、マルクス主義ほど当時の思想を牽引しうるような要素をもっていたわけではないだろう。にもかかわらず、これらが「左翼思想及び運動」に対する「対抗」と見做されたのは、学生思想問題調査の結果を受けてマルクス主義などの思想を抑制すべく一九三二年に文部省内に設置された国民精神文化研究所が念頭に置かれてのことと推測される。その研究所員にもなった紀平正美の『日本精神』（岩波書店、一九三〇年三月）等の著書は、たしかに鈴木貞美の指摘するように〈日本精神〉論の「流行」に与したとは思われるが、直接的な要因であったとは言いがたい。

事実のみに眼を向ければ、当該の〈日本精神〉論が急速に「流行」し始めるのは、一九三一年の満州事変の前後からだとはほぼ確定できる。言い換えれば、満州事変を端にして、当初は国民精神文化研究所のような国民国家の文化装置における教育イデオロギーであった〈日本精神〉が「発見」されたのである。その系譜が「昭和維新」と呼ばれたテロリズム的性格へと連なる契機となる一方で、ロンドン軍縮会議や満州事変・第一次上海事変などを経て日本が国際的に孤立しはじめる情勢において、日本の立場を説き、日本を正当化し、〈日本〉を可視化する言説が夥しく生産されていった。こうしたイデオロギーの動向をよく表しているのが新潮社の『日本精神講座』（全12巻、一九三三年一月〜一九三五年六月）で、その「日本精神に還れ!!」と題された巻頭言には次のようにある。

日本は国際聯盟脱退を機会として、欧米追隨の時代から完全に離れた。日本は今後、独自の道を正しく、勇敢に歩むべきだ。それは日本精神に還ることだ。

日本を知れ、祖国に還れ、これ現下最も痛切に響く声だ。日本の皇道意識の下に日本学を創建すべき時代は来た。かくして始めて真の日本を発見することが出来る。

最も古くして最も新しき日本、東西思想文化の一大貯水池たる日本、愛と平和と正義に莊嚴されつゝある日本、かゝる祖国を探求することは我等のみ有する幸福だ。

このように「還る」対象として〈日本精神〉を措定し、「発見」された「真の日本」「最も新しき日本」に遡行する自己言及的な「学」が次々に構築されたのである。

子安宣邦¹⁾は、昭和一〇年代に形成された「日本精神史、日本思想史という自己(日本)言及的な性格をもった学術的言説を、昭和ファシズム期に成立する歴史的言説と見るべき」であると指摘している。和辻哲郎や村岡典嗣らの思想史も、前述した大川らの国家論的な日本主義も、それぞれに逸脱するのではなく、この時期の〈日本精神〉をめぐる学術的な言説群は「自己(日本)言及的な性格」によつて通底するような同時代性を形成していた。しかしながら、ここで注意しなければならないのは、そのような〈日本〉を自分たちの〈故郷〉として表出するような自己言及的な言説は、この時期、むしろ批判的に論じられることのほうが多かった点である。

たとえば政治学者の矢部貞治は、同時代の〈日本精神〉論を「民族的浪漫主義」の傾向と呼び、そこに見られるロマン主義的性格、マルクス主義批判、復古的傾向などの「言挙げ」の構造を批判している。

一民族の中にも無限に異なる思惟と立場の存在したること及びすることを無視し、又苟も人類たる以上何れの民族にも共通する所の、発展と精神と問題の存在することを看過し、自己民族に関する限りの凡ゆる——特に過去の——事実と行動を、測るべからざる神的摂理の表現として美化せんとしつつ、而もその過去の現実の中から、凡ゆる優れたもののみをとつて自己民族の特性となし、凡ゆる劣れるものを凡て他民族に負はしめんとするの傾向である。

(「現代日本主義の考察」、『理想』、一九三四年一月)

矢部は国体論的な〈日本精神〉論を排し、「対外的に世界正義を言ふ如く、対内的には、社会正義が最高原理でなければならぬ」とする(＝国民の共同利益を優位とする)国民論的な〈日本精神〉論を日本主義唱導の現実目標とした。こうした「過去の現実」からの美化作用に対する留保は、けつして珍しいものではない。歴史学者の津田左右吉も、「遠い過去にのみ注目」して「日本精神は欧米文化、西洋文化の入らない前の日本に戻らねばならぬ」とする考え方を「錯覚」と断じ、

それを其のまゝ現実の問題にあてはめたり、又はそれを歴史的事実と見なしたり、或はまた強ひてそれを合理化しようとして恣意な解釈を加へたりするやうなことがあるならば、それは恐らく「日本精神」を正しく導いてゆく所以ではあるまい。

（『日本精神について』、『思想』一九三四年五月）

というように（日本精神）論における「恣意な解釈」を批判していた。同じ『思想』誌上でも須永克己が「日本的なるもの」といふ概念は全く歴史のものである」とし、「思想・政治・文化・学芸・経済・風俗等からあらゆる生活に涉つて現実の歴史に於いて実現したものから、我国の風土の自然的所産並びに国民の精神的所産として他の国のそれらと区別せられる特徴を抽出したものが日本的なるものの概念である」と指摘しているように（『音楽における日本的なるもの』、『日本精神』が「原理」として存在するわけではなく、結局のところ「他の国」との「区別」「比較」によってしか抽象できないもの——言い換えれば、西洋と対立するものとして仮構する（日本）自体が西洋を前提とするしかないパラドックスを、彼らは共通して自覚している。ヨーロッパ精神と日本精神とを対立的に捉える視点が無効であることなど、同時代のテクストにおいては充分すぎるほど認識されていた。この時期において新しい（日本）概念がつけられたことは確かではあるが、彼らはけつして無自覚に（日本）を論じていたわけではない。

この時期に保田與重郎と彼自身を表徴する雑誌『日本浪漫派』が文壇に登場するのも、むしろ、矢部貞治が指摘したような「民族的浪漫主義」に対して批判的な風潮のほうが強かったからだと考えられる。無論、保田が昭和維新に見られるような国粹的原理のほうに与するわけではない。子安宣邦¹⁾が指摘するように、保田は満州事変や五・一五事件を経たこの時期を「日本の国家が最も悪い状態にあつた」と見做しており、「肉体による詩的表現」という青年将校たちの軍事的叛乱」に対して、「（肉体によらざる詩的表現）」という日本浪漫派の文学運動」というかたちで政治的な対抗を企てたのであつた。それと同時に、保田は、前述のような（日本精神）論のロマン主義的性格に批判的な言説にも対抗するのである。

日本浪漫派といへば、忽ちロマンティズムを排斥する文学論が出現する。文芸学書記載するところのロマンティズムを適宜に抽出し、以てロマンティズムを叩きつける。凡そ浪漫派批判者の多く、僕らの日本浪漫派に一言もふれてゐない。（中略）日本浪漫派にふれるとみせて彼らの知るロマンティズムをやつゝけたものである。彼ら自身の知識を披露しあるひは何かの権威にかりて、彼ら自身の抽象妄想したロマンティクを罵倒するに大童である。（中略）そうしてかういふさもしい仕事こそ大方今日の批評職業らしい。（中略）凡そこの職業の微妙さを否定するものこそ、今日の

ロマンティストかもしれない。(『日本浪漫派のために』、『三田文学』、一九三五年二月)

「非常時」のなかでロマンティズムが形成され、それが否定されるところに、また「今日」のロマンティズムが現前する——保田のこの種のトートロジーは、この時期の〈日本精神〉言説の諸相を上手く説明してくれる。(『日本精神』言説が、事変下のファシズム的趨勢に伴って展開されたわけではなく、むしろそれを歴史的なものであると批判し、相対化しようとする論議のほうが多かった実態がある。そして、保田のようにその批判にも対峙したところで敢えて新しい浪漫主義を標榜する立場も可能であったのである。

概観に留まるものではあるが、〈日本精神〉言説がけつして一枚岩ではなく、批評性を担保していた諸相を十分確認できたであろう。横光は、雁金の造形において性急に「日本精神」という語彙を持ち出したのではない。「紋章」の同時代においては、このように〈日本精神〉言説が「非常時」の言説空間において歴史的に構築され、その規範のもとに諸々の論者が反応せずにはいなかったのである。問うべきなのは、「名門」や「祖先」といった紋(コード)によって自己言及的な性格を担わされ、「国家」をも志向する雁金の〈日本精神〉を通じて、「紋章」のテクストがどのように同時代の〈日本精神〉言説に応答しているのか、である。ここで、もう一度「紋章」へと戻らねばなるまい。

四節 浪漫主義的自己遡及からの〈自由〉

横光は、保田が展開したような浪漫主義のトートロジーに陥ることを注意深く避けている。「純粹小説論」(『改造』、一九三五年四月)における以下の言及は、明らかに「日本浪漫派」広告」等の主張を批判的に見ていた証左であろう。

「すべて美しきものを」と浪漫主義者は云ふ。しかし、現代のやうに、一人の人間が人としての眼と、個人としての眼と、その個人を見る眼と、三様の眼を持って出現し始め、さうしてなほ且つ作者としての眼さへ持った上に、しかもただ一途に頼んだ道徳や理智まで分解せられた今になつて、何が美しきものであらうか。

注目したいのは、このように浪漫主義を批判的に論じる際、「眼」||「人称」の問題を持ち出している点である。横光は「紋章」において、〈日本精神〉である雁金を見る「眼」を、上記の引用の通りに用意している。まず、雁金は「近代」の「個人」である。「歐洲の大戦が終ると間もなくわが国の物価は未曾有の奔騰を来たした」時期において、「一攫千金の夢」をめぐって「満満たる野望」を持ち「無我夢中」で発明の「成功」を求め、一度は「醬油醸造界に於ける一大革命児」と評されながらも、事業に失敗して「もう郷里にはゐたたまれずすぐ東京へ出て来た」その後、故郷には「帰りません。帰れば、借金でた

いへんですよ」という雁金は、郷里（クニ）のような中間共同体から疎外された「個人」そのものである。このように「近代」の「個人」でありながら、その一方で「正直」で「不正な感情」を抱かず「疑ふことを知らぬ」という雁金の「日本精神」は、作中において「気が違つてゐる」「狂人同様」などと語られる通り、ひとつの病理として表象されているように考えられる。「紋章」のテクストは、同時代の〈日本精神〉言説が「近代」において自己適的の性格を持つことが病理としてしか成立しないことを露呈しているのである。このような「個人としての眼」を持つ近代人の雁金を観察する仕掛けを、横光は「紋章」において二つ組み入れた。ひとつは「その個人を見る眼」としての久内であり、もうひとつは「作者としての眼」としての「私」（松山）である。

久内は、雁金に比べると行動を伴うことが少ないというよりは、たとえば「彼は自分の意志とは別個に動く感情といふものを、他の生物を見るやうに眺めながらぞろぞろ後から追つていつてみてみると云つても良い」（第六回、『改造』、一九三四年六月）といわれるように、「見る」ことに徹し、自分すらも「見る」対象としてしまう視点（『純粹小説論』で言えば、「自分を見る自分」といふ新しい存在物としての人称）に苛まれた人物として仮構されている。その行き着く先が物語終盤における敦子との別居であり、「俺は一度自分の自然なところを見て、心を整へてからでなくちや、俺の心といふものが自分に納得させるわけにはいかんぢやないか」（前掲第六回）と言うように、「自分を見る自分」を保つための姿勢を最後まで貫いているといえよう。横光は「純粹小説論」において、この「自分を見る自分」というような自己適及の円環を、「自意識といふ不安な精神」と呼んだ。野口武彦¹²はこの「自意識」を「一つの時代を風靡した知的レヴェルの流行語」と捉えていたが、実際、「自意識」という言葉は〈日本精神〉と同様にこの時期に「流行」したもう一つの〈精神〉言説であった。その「自意識過剰に悩んでいる青年」（第二回、『改造』一九三四年二月）である久内を通じて、「自分の惨めな心」「不分明な心理の深奥」（前掲第六回）を絶えず観察せずにはいられないような「智識の倒錯状態に落ち込」み（前掲第一回）、「内面に複雑な知識の錯綜をつづけて分裂している近代の青年」の〈精神〉的な疾患が告発されている。雁金における〈日本精神〉と同様に、久内における〈自意識といふ不安な精神〉もまた「近代」それ自体の病理でしかないことを呈しているのである。そして、この「近代」における二つの〈精神〉を交錯させているところにこそ、前節までに確認したような〈日本精神〉言説への応答を試みていた痕跡を辿ることができる。たとえば、久内が生命保険の月報係をしている際に、二万円分の保険金を受けとらない受取人が現れ、「まだ人間の頭の底に失はれずに残つてゐる大きな夢を覗いた思ひで、人を見る判断に自身の踏み場がぶよぶよと揺れるのを感じた」という「事件」。その時、「それにつけても思ひ出すのは、この保険金とそんなにも変らぬ雁金のことであつた」という。久内にとって、「雁金のやうな稀有の人物の行為といふものは、これを知識人の批評の対象としたなら、意見は区区に別れ、ほとんど收拾することは出来ないであらう」と感じるもの

であり、「自分を見る自分の眼」を揺るがす契機であり続けている。そして久内は、雁金の〈精神〉との関係によって「浪漫的」であることからの〈自由〉¹³を獲得し、自らの〈精神〉の蘇生を実感するに至るのである。

「あの人が僕にとつて有難いのは、僕の精神や想像力を誰よりも美しくしてくれるからなんだ。つまりあの人は、僕の意識や情熱といふやうなものを、さきも云つた物や思想を所有するといふやうな浪漫的な感傷主義から、全く自由にひき離してくれるのに大変便利な人だつたのだ。僕の愛情とか正義とかいふやうな高尚なものは、これから始るのだ。」

(中略)

「自由といふのは自分の感情と思想とを独立させて冷然と眺めることの出来る闊達自在な精神なんだ。雁金君なんかは僕にとつちやたしかに敵だが、敵なればこそその人の行動は、僕に誰よりも自由といふ精神を強く教へてくれたのだ」(第九回)

このような「眼」の揺動と、浪漫的な〈精神〉からの蘇生は、「純粹小説論」における次の問題意識と共鳴することだろう。

けれども、ここに作家の楽しみが新しく生れて来たのである。それはわれわれには、四人称の設定の自由が赦されてあるといふことだ。純粹小説論はこの四人称を設定して、新しく人物を動かし進める可能の世界を実現していくことだ。まだ何人も企てぬ自由の天地にリアリティを与へることだ。新しい浪漫主義は、ここから出発しなければ、創造は不可能である。しかも、ただ単に創造に関する事ばかりではない。どんなに着実非情な実証主義者といへども、法則愛玩の理由を、おのれの理知と道徳とのいづれからの愛玩とも決定を与へぬ限り、人としての眼も、個人としての自分の眼も、自分を見る自分の眼も、容赦なくふらつくのだ。私はこの眼のふらつかぬものを、まだそんなに見たことがない。いつたい、われわれの眼は、理知と道徳の前まで来ると、何ぜふらつくのであらう。純粹小説の内容は、このふらつく眼の、どこを眼ざしてふらつくか、何ぜ故にふらつくかを索ることだ。これが純粹小説の思想であり、さうして、最高の美しきものの創造である。

「近代の智識人」である久内は、雁金について考えるとき、絶えず道徳的な問いのまえに「ふらつく」状態にさらされる。とりわけ「紋章」第八回は、「父が雁金の新製品に対して異議申立て」をしたという「不正」に対する、久内の「苦痛」をめぐる章となつている。久内にとつて父の行為は「不正」「悪行」と捉えられ、「それを思ふ度にぎりぎりの中で父を攻め、心のう鳴りさへ感じて口惜しくなるのが常」であつた。一方、雁金に対し

ては「雁金といふ大きな夢より信頼出来る人物は他に見つけることが出来なかつた」（第九回）といい、彼の行為のなかに「正義の観念」を見出している。そして、その「正義」を省察するなかで「正義といふやうな立派なものは、それとは反対に、所有の観念を離れた全く自由な場所へ自分の精神を到達させる努力だ」と考え、〈精神〉を「浪漫的」に遡及させるのではなく「自由な天地」へと到達させることを唱えるのである。

このように「紋章」のテキストと「純粹小説論」の問題提起を重ねあわせると、雁金や久内の〈精神〉は「眼」そのものであり、認識をアプリアリに規定するような「思考の起る根元の先験」（「純粹小説論」）であることが分かってくる¹⁴。それらの〈精神〉がいか「近代」において矛盾を含み、病理としてしか成立しえないものであると、それがアプリアリであり「必然」である以上は、「浪漫的」に自己遡及して自ら（＝日本）を現前するよりも、それからの〈自由〉へと到達することが目的化されているのである。このよ
うな〈精神〉＝「眼」が「どこを眼ざしてふらつくか、何ぜ故にふらつくかを索る」ために、横光が用意した「作者としての眼」が語り手である「私」（松山）であり、すなわち「四人称」である。「私」（松山）の語りによって〈日本精神〉と〈自意識といふ不安な精神〉が相互に「ふらつく」ことの観察が可能となり、それらの〈精神〉が同一テキスト上において対話的であり続けることができるのである。「四人称」は、〈日本精神〉と〈自意識といふ不安な精神〉からの〈自由の天地〉に「リアリティを与へる」ための仕掛けとして、必要不可欠なものであったのだ。

このように「紋章」において試みられたのは、〈日本精神〉をそれ単独で表象して自己遡及してしまうことを回避し、〈自意識といふ不安な精神〉との対話を「四人称」によって実現することによってテキストを複眼的にし、同時代において「流行」していたそれら二つの〈精神〉からの〈自由〉に「リアリティを与へる」ことであった。こうして見ると、「紋章」は小林秀雄のエッセー「故郷を失った文学」（『文芸春秋』、一九三三年五月）に共鳴するものがあると思われる。小林は、〈故郷〉を創出して浪漫主義的自己遡及を図るよ
うな〈日本精神〉を価値のないものと断じ、むしろ〈故郷〉を喪失して「さつぱりした」文学の現状にこそ積極的な意義を見出している。

私達は生れた国の性格的なものを失ひ個性的なものを失ひ、もうこれ以上何を奪はれる心配があらう。一時代前には西洋的なもの東洋的なものとの争ひが、作家制作上重要な関心事となつてゐた、彼等がまだ失ひ損なつたものを持つてゐたと思へば、私達はいつそさつぱりしたものではないか。私達が故郷を失つた文学を抱いた、青春を失つた青年達である事に間違ひはないが、又私達はかういふ代償を払つて、今日やつと西洋文学の伝統的性格を歪曲する事なく理解しはじめたのだ。（中略）かういふ時に、徒に日本精神だとか東洋精神だとか言つてみても始まりはしない。何処を眺めてもそんなものは見付かりはしないであらう、又見付かる様なものならばはじめから探

す価値もないものだらう。

「紋章」においては〈日本精神〉はその他複数の〈精神〉||「眼」のなかの一つに後退し、むしろそれらの〈精神〉||「眼」の複眼的な交錯のなかから〈自由〉が志向され、「故郷を失った文学」においては〈日本精神〉を模索することが無意味であるような状況としての〈喪失〉が志向されている。横光と小林のこのような〈日本精神〉言説に対する応答は、同時代のなかでは類を見ない特異な実践であるとともに、〈日本精神〉のイデオロギ―に対する批評性を担保したものととして、一九三四年前後の文学的状况における重要な評価軸となるはずである。

五節 おわりに

確認してきたように、「紋章」において「日本精神」という語彙が持ち出されたのは、同時代に「流行」していた〈日本精神〉言説への応答であったという意味合いを考慮すれば、特殊なことではなく、「性急」でも「必然性のないもの」でもないことは明白である。また、横光が自らの何がしかの思想を託すものとして「日本精神」があったわけではなく、「自意識といふ不安な精神」も含めて、むしろ「紋章」自体が同時代における〈精神〉言説に対する批評であったという観点が必要になってくると思われる。このような観点がこれまで究明されていなかったからこそ、当時の〈日本精神〉言説をほとんど確認されないままに「紋章」の解釈が縷々として継続されてきたのである。

このように「紋章」を読み直した場合、「日本精神」という言葉をもって「転機」や「傾斜」を指摘するのはむしろ留保が必要ではないか。横光の〈自由〉や小林の〈喪失〉が志向されたのは、満州事変以降の「非常時」において「流行」した〈日本精神〉言説に安易に合流するのではなく、それを見る「人称」を複眼化することによって批評的な立場を保持しようとした結果ではなかっただろうか。少なくとも彼らは、〈日本〉が問われるその時代において〈日本〉を構築することを注意深く避けていた。そしてその姿勢は、〈日本精神〉が歴史的なものであると自覚しながらも〈日本精神〉言説を再生産したり、浪漫主義的性格を否定されたところに新たな浪漫主義を見出したりするような方向性とは一線を画している。そこには、事変下のナショナルな風潮において「転機」を迎えたというよりは、それを自明な流れとすることを受け入れなかった批評精神が存立し、持続していたのである。

- 1 本稿では、一九四〇年三月三日発行の『改造（臨時増刊）』から連載した「紋章」の続篇については、問題の性質が大きく異なるため、論考の対象としない。
- 2 山本亮介『横光利一と小説の論理』、笠間書院、二〇〇八年二月
- 3 松村良「横光利一『紋章』——「近代日本」と「ポスト近代」の「並立」——」、『学習院大学文学部研究年報』、一九九五年三月
- 4 岩上順一『横光利一』、三笠書房、一九四二年九月
- 5 田口律男「横光利一「紋章」論——「純粹小説論」を光源として——」、『山口国文』、一九八三年三月
- 6 鳥居邦朗「横光利一『紋章』——山下久内の自意識——」、『国語と国文学』、一九八六年三月
- 7 芹澤光興「〈敵〉からの〈教〉」——横光利一『紋章』私見、小田切進編『昭和文学論考 マチとムラと』、八木書店、一九九〇年四月
- 8 河田和子『戦時下の文学と〈日本的なもの〉——横光利一と保田與重郎——』花書院、二〇〇九年三月
- 9 当時の〈日本精神〉論の「流行」に関して、鈴木貞美はそのきっかけを紀平正美の『日本精神』と推定しつつ、井上哲次郎『日本精神の本質』（大倉広文堂、一九三四年七月）や和辻哲郎『続日本精神史研究』（岩波書店、一九三五年九月）、また雑誌『思想』の「日本精神」特集などの議論を概括し、そこに見られる中世美学の種々の位相について考察を行っている（鈴木貞美『『文芸春秋』とアジア太平洋戦争』、武田ランダムハウスジャパン、二〇一〇年一〇月）。
- 10 子安宣邦『方法としての江戸』、ぺりかん社、二〇〇〇年五月
- 11 子安宣邦『「近代の超克」とは何か』、青土社、二〇〇八年六月
- 12 野口武彦「押しつけられる自意識——横光利一『紋章』——」、『日本語学』、一九八六年四月
- 13 横光は「紋章について」（『改造』、一九三五年一月）において「われわれの理想は、自由を賛美することではなく、自由に判決を与へることだ」と述べているが、伴悦（『横光利一文学の生成——終わりなき揺動の行跡』、おうふう、一九九九年九月）と河田和子（前掲）は、この発言を手掛かりに「紋章」における「自由」を考察している。伴は「それは手放しの自由の賛美ではなく」、「無償の行為」が「いままでの因襲的道德的社会的などの拘束を超越する「自由」に交渉し得る謂い」として現れるが、「雁金の場合には権力機構の謀略のまえに、底知れぬ自己疎外への道をたどるばかり」の過程において「自由への判決が下されていた」とする。一方河田は、「自由の精神を資本主義的な所有の観念から引き離し、知的活動としてカント的な自由を実践することにあつ

た」と同時に、「意識の自由」は、もう一つ別の方向、自意識の分裂が統一された状態の「自然」に見出されていく可能性もあった」とし、そこに「(日本的なもの)」との結びつきを捉えている。

¹
4 「純粹小説論」における「眼」や認識の問題は、本論第二部第四章を参照。

第三章 「欧洲紀行」

——〈長篇〉化するテキストと〈日本〉のヒューマニズム的現前——

一節 はじめに

二・二六事件の直前にあたる一九三六年二月、横光利一は『東京日日新聞』『大阪毎日新聞』両紙の企画によるパリを中心におよそ半年に及ぶ欧州旅行へと出発する——と改めて解説する必要もないほどにこの「文学の神様」の渡欧はあまりにも有名なメルクマールとして昭和文学史のなかで記憶されている。横光の戦時下におけるナショナルな表象を考察するうえで、この渡欧に介入する経験の諸相に遡行せずにおくことが不可能だからである。井上謙も「日本へ回帰する横光の論理過程が内在している」と指摘しているように¹、一九三七年連載開始の「旅愁」のなかで「日本的なもの」を表象することを視座に入れたとき、この一九三六年の欧州旅行に伴う通信文や帰国後のエッセー、小説「厨房日記」をまとめた『欧洲紀行』（創元社、一九三七年四月）という作品集の意義は殊に大きい。

問題は渡欧という体験そのものではなくそれが記述され作品として生成する過程に焦点を当てる必要がある。本稿では「旅愁」における「日本的なもの」の表象へと至る通過点としての『欧洲紀行』をテキストの性質において捉えなおし、「純粹小説論」を中心とする文芸復興下の「長篇（長篇小説）」の文脈との関連性から考察することにした。そこには、既存のテキスト形式とジャンルを無意味化させるような命題を定立し、一九三〇年代における「日本」の小説を根拠づけている、文芸復興のある枠組みを見出すことができる。

二節 〈長篇〉化される『欧洲紀行』

「痴呆の書」「虚妄と侵略賛美の書」²とまで痛罵された「旅愁」ほどでないにしても、『欧洲紀行』に対する批評のうちにも揶揄や憐憫などの否定的な視線を向けられていたことは事実であろう。次の村松梢風の述懐³はその典型的な例としてしばしば引用される。

日本人が書いたヨーロッパの紀行文も沢山あるが、横光の『欧州紀行』ほど莫迦々々しい、気の毒なものを見たことがない。彼はパリからもヨーロッパからも何一ついゝ物を見出さなかつたが、それは要するにヨーロッパが日本でないといふことが原因であつた。併しいかなる国粋家でも頑固親父でも欧州の文物に触れゝば何か一つ位は感心するものだが、横光の思想と感覚はセメントの土管のやうに固くそして不感性であ

る。おまけに彼はセメント製の自己をギリシャの彫刻位に高く評価してゐるのだ。船中でつまらぬ人間が「ヨーロッパ人は頭が悪い」と言つた言葉を其儘覚えてゐて、ヨーロッパ人を軽蔑し、自己並びに日本の優越を妄信してゐるのだから、どうにも手の付けやうがなかつた。

梢風流の否定的な評価は現在においても『欧洲紀行』につきまとう。たとえば海野弘⁴は『モダン都市文学』⁵ 異国都市物語』のなかで『欧洲紀行』を抄録しているが、その解説には「横光は新感覚派といわれ、モダニズム文学の一人といわれているが、パリの旅行記はひどくつまらない。モダン都市の感覚など持っていたのだからかと思えるほどだ。観念的にしかパリを見ていず、街に少しも入りこんでいない。横光はヨーロッパを少しも理解せず日本にもどつていった」と切り捨てており、このアンソロジーに収録した意図を理解しかねるほど何の評価軸も提示していない。

こうした否定的な解釈を早いうちから根本的に問いなおしていたのが佐藤昭夫⁵であつた。佐藤は『欧洲紀行』のエクリチュールを「専ら心理上の関心に限定され」た「自意識による厳しい自己検閲のドラマ」とし、「渡欧体験の意義をストイックなまでに自己の心理の観察に限定して、実利実用はもとより知識的な摂取までほとんど埒外に退けた横光の紀行は、明治的な（洋行）だけでなく、大正的な（出会い）の概念をも一新した画期的なものであつたことは記憶されてよい」とその歴史的意義を評価する。井上謙もまた佐藤の論考を引き継ぎながら梢風の評価の妥当性を一つ一つ見直して、「横光の極度の祖国愛やヨーロッパ批判は、あくまで横光の気質から生じた主観的な見方にほからぬ。まして、日本への強い愛情が、船上の思いつきや時代に迎合した知恵であつたとは到底考えられない。ヨーロッパと日本との激しい違和感は、むしろ、もっと真剣な、そして苦渋に満ちた作家精神から発芽したものと見える」と指摘している。

その後、黒田大河⁷と位田将司⁸によつてそれぞれそのテキストの形式まで視野に入れた論考が行われている。黒田は横光の欧州体験が「作家として言語化した初出のレベル、帰国後の認識の深まりを言語化したレベル、最終的にそれらが一つの作品の中に織り込まれた単行本のレベル」という三つの層を経て対象化された「作品」として生起していることを指摘する。一方、位田は黒田の論述を参照しつつも、『欧洲紀行』が日記体であることに着目して「純粹小説論」で述べられていた「純文学」に位置づけられるとし、そのテキストにおける「代表||表象」の失敗」から「通俗」への移行の問題を看取する。

本稿もまた黒田、位田の論述に示唆を受けつつ起稿するものであるが、しかし両氏とは異なるパースペクティブにおいて論究するものである。どちらかといえば黒田の立場に近いであろうが、私は『欧洲紀行』という単行本が成立する「作品化」の経路を「長篇化」と読み替えてみたい。ここで述べる「長篇化」とは、個別に発表された短篇ないし中篇の作品群を一冊に纏めあげるといふ表面的な現象のことではなく、一九三五年前後から頻繁

に文壇において問題とされていた「長篇小説」における「長さ」の構造化を意味する⁹。この文芸復興期における同時代的な命題にこそ、「長篇制作に関するノート」とされる「純粹小説論」¹⁰「長篇小説論」から『歐洲紀行』への連繋の必然性を問うための土台が見出されるべきであり、佐藤・井上が指摘していた「自意識による厳しい自己検閲のドラマ」および「主観的な見方」に『歐洲紀行』が終始しなければならなかった論理が介在していると考えられるのである。

まず『歐洲紀行』を「純文学」とすることの妥当性を改めて検討しておきたい。「純粹小説論」において「純文学」は、「日記文学の延長の日本的記述リアリズム」による、「作者が、おのれひとり物事を考へてゐると思つて生活してゐる小説」であり、「自己周辺の日常経験のみを書き連ねる」ことで「素朴實在論的な考へから撰択した日常性の表現ばかりを、リアリズムとして来た」作品と定位されている。また、新聞や婦人雑誌に連載されるような「長篇小説」に対し、「純文学」はしばしば「雑誌小説」とも呼称されたように雑誌一号に掲載される程度の分量の「短篇小説」のことを指していた。たしかに『文芸春秋』『東京日日新聞』『改造』に掲載された個々の通信文のテキストは「日記隨筆の文体」すなわち日記形式のスタイルを装った、渡欧の最中にある横光の「自己周辺の日常経験のみを書き連ね」たような記述であり、帰国に発表された「半球日記」「厨房日記」もその標題からして「日記」のジャンルを志向している。少なくとも初出のレベルにおいては、横光の意図がどのようなようであったとしてもテキストが「純文学」として機能している側面は否定しがたい。

だが、『歐洲紀行』にはそれに反する「通俗小説」の志向、さらには「純粹小説」の特性は認められないのだろうか。横光が「純文学と通俗小説の相違」として「偶然性（一時性）」と「感傷性」とを二大要素としてあげたことはよく知られている。「偶然性」は「日常性（必然性）」の反意語とされており、先の「自己周辺の日常経験のみを書き連ねる」姿勢に対する背馳となっている。いまひとつの「感傷性」については「一般妥当と認められる理智の批判に絶え得られぬもの」と説明されているが、このような「理智」による整合を不可能とする非合理的な契機は館下徹志が指摘しているように『旅愁』の時代において〈現代〉的な命題であり¹¹、「純粹小説論」を上梓して以降の横光にとって如何にこの理智を再構築するかが自身の課題となっていた。次の引用は、渡欧の最中からしてすでに「理智」の失効という経験を目的として措定し、みずからの身体が「地上」から「洋上」へと移送される過程をそのコンテキストに紐付ける箇所である。

海上の不思議さは地上の不思議さと反対な錯覚に満ちてゐるものだ。海上の理智といふものは、地上の理智を応用して出来てゐる不安定なものにすぎない。後は茫茫たる雲のやうな真実ばかりだ。これに触れば死ぬ決心など容易なことだ。

洋上ばかりから押し襲つて来てゐる感覚は僅に持ち込んで来た荷物みたいな地上

の理智といふものを、ときどき批判するものだ。ここでは理智が感覚を批判するのぢやない。さかさまだ。こんな眼に毎日毎日出喰してをれば、少しは氣違いいじみてくる。

夫人をつれたり友達と来たりしては内地を引き摺つて来てゐるみたいで、私のこの感情はわかるまいと思ふ。

横光は「陸を放れてみなければ、陸上の批判は正当たるを得ない」「人々の世界観といふものは、陸上の世界観ばかりだ」と同様の論旨を繰り返し、「理智」を「洋上」から裁断することによつて「不安定なもの」へと置換する。「陸上の理智では統制のとれぬ海上の情熱」を仮構することでみずからを「感傷性」の場へと引き寄せると同時に、「陸のこ」と位置づけられるであろう「日常性」から離反した「偶然性」として自身を存立させていると見るべきではなからうか。こうした一連の「洋上」の経験を「自己周辺の日常経験のみを書き連ね」たものと解釈するには少なからず抵抗がある。つまり、個々の旅行記は「日記」の記述形式を選択しながらも「偶然性」と「感傷性」を表現することで「短篇」としての諸要素を破損させ、その「通俗」的な表徴によつて自らのテクストを「長篇」の規制へ紐付けることを強いる困難な実践——純粹小説を明察するための試みであつたのであり、帰国後の「今回の旅行によつて純粹小説論が間違ひないといふことを確信するに至つた」（『横光利一に歐洲を訊く』、『三田新聞』、一九三六年一〇月一六日）という結論を見出す事由はここにある。そしてこの「偶然性」と「感傷性」に基づく確信にこそ、文芸復興における「長さ」の希求が突き合わせられているのだ。

しかし、文学作品を一層高度のものたらしめ、文芸復興の足場を造るためには、最早や純文学では無力であるから、これを純粹小説たらしめる努力をしなければならぬとなると、またさらに第二の難関が生じて来る。それは短篇小説では、純粹小説は書けぬといふことだ。先づ一例を上げて、通俗小説の持つ何よりの武器たるところの、感動の根源をなす偶然と感傷とについて云ふなら、この偶然と感傷とに、純粹小説としての高度の必然性を与へるためにさへ、中島健蔵氏の云はれる表現と生活との「深淵」を渡らねばならぬ。しかも、その深淵は、ただに表現と生活との中間のみの深淵とは限らず、生活に於ける人間の深淵と、それを表現した場合に於ける深淵と、三重に複合して来るのであつてみれば、小量の短篇では、よほどの大天才といへども、純粹小説を書くといふことは不可能なことになつて来る。なほその上に、純粹小説としての思想の肉化を企てねば、高貴な現代文学が望めないとするなら、なほさら、百枚や二百枚の短篇ではどうするわけにもいかない。（『純粹小説論』）

ここで言及されているように、横光の純粹小説論における「偶然性（一時性）」と「必然性（日常性）」の対比および「感傷性」の提起は、中島健蔵の「感動の衰弱」（『新潮』、

一九三五年二月）で語られていた「一時性」と「日常性」の対比と、両者の間隙において経験されるといふ「全く個人的な、一時的な此の感動の状態」を下敷きとしている。

我々を思索に誘ひ、創作に誘ふものは、日常性と一時性との中に生滅する此の感動を、繰り返して得るものとして再現したいといふ欲望である。様々の技術、様々の理論が、結局根本を忘れて氾濫してゐるのではないか。どうしやうもない感動と、それを捉へようとする欲望とを欠いて、何が文学であらう。文学を云々する限り、理智も感覚も、結局、此のパトスの深淵の再現に服従すべきではないか。抽象的には全く意味を持ち得ない此の深淵こそは、あらゆる相反する世界観、あらゆる個人差をその俣に生かして止揚するものである。（「感動の衰弱」）

横光と中島に共通するパトス（感傷、感動）の再現への志向は、それを文芸の言語形式にまで遡及して問うという姿勢において通底する。中島が「生の感動と、創作による再現との間には距離がある。此処に新しい作品が依然として生れ、作家といふ種族が根絶やしにならない理由があり、更にあらゆる作家の希望と絶望との原因があるのだ」として言語がその指標の対象から乖離する記号の所作に価値を見出し、それを受けて横光もまた「生活に於ける人間の深淵と、それを表現した場合に於ける深淵」という視点を導入して「作者が、おのれひとり物事を考へてゐると思つて生活してゐる小説」という記述スタイルの失効を射影する。「偶然性」と「感傷性」は「短篇」に烙印される狭義のリアリズムを他者化するためのメディア的仕掛けとして機能し、「通俗小説」の契機を獲得するための手順を正当化する表象として紀行文のテキスト群に導入されていたのである。こうして、これら紀行文は「短篇」＝「純文学」たりうる特質をその内側から抛棄し、みずから「長篇」のテキストへと組み換はることを予告しつつ要請していたのだった。

三節 「自意識」の言語空間

続く問題は、『東京日日新聞』『文芸春秋』に個別に掲載された諸々の紀行文を『欧洲紀行』という一冊に纏める過程において、この「通俗」の志向がいかにして個々のテキストを関連づける「長篇化」の構造的実践を可能にしているかという点である。パリに到着するまでの洋上における経験の記述、パリ滞在中の生活の記録とそれに付随する心象スケッチ、ハンガリーやイタリアなど五カ国の旅行の記述、渡欧の本来の目的でもあつたベルリンオリンピックの観戦記、帰国後の感想と回顧の記述、そして小説「厨房日記」——これらの雑多なテキストが紙幅を共有することのできた形式的な必然性を問い、それらを統合している主題を析出すると同時に、その主題によって「長篇」へと組織された『欧洲紀行』が一九三〇年代特有のイデオロギーを産出する土台となりえた歴史性まで解明する必要

がある。

単行本化に際しての改稿がその最初の手掛かりとなる。黒田がすでに指摘しているように、『歐洲紀行』冒頭の「家人への手紙 一」において「夫人に向けて自己の心理の変化を説明しようという書簡での意図を、自分自身で自己の心理の変化を再確認しようとする」というように書き換えている¹、²というところに、この単行本全体を構造化している主題が明示的に掲げられている。

これから出す手紙は保存しておいて貰ひたい。番号でも書いておいてほしい。船中の心理の移動、及び自然を地図と引きくらべて見てみて貰ひたい。(千代子夫人宛書簡)^{1 2}

これから出す手紙は保存しておいてほしい。その時、思ったことを書きつけておくのは手紙に限る。僕が持つてゐると失つて了ふおそれがあるから番号でも書いて保存しておいてほしい。但し何も書かないことだらうと思ふが、船中の心理の移動、自然の変化と自分の気持ちを後で引きくらべてみたいと思ふから。『歐洲紀行』

この「引きくらべ」る行為の主体が千代夫人から著者自身に転換していることについて、黒田は『歐洲紀行』が自己の認識の対象化という動因を持つことを示している³と読む。これと呼応するものとして、初出には掲載されていなかった「七月廿日」の次の記述もまた『歐洲紀行』という一冊を特徴づけている。

私の通信は、巴里そのものを書くのが目的ではなく、私といふ一個の自然人が、この高級な都会の中へ抛り出され、形成されてゆく心理の推移を、偽りなく眺めるのが目的である。『歐洲紀行』

船中およびパリに身体を置くみずからの「心理の移動」「心理の推移」に対する観測が、『歐洲紀行』のなかで「目的」として前面に措定されていることがわかる。もともと初出にも「私は今は、自分の意識を明瞭に意識してゐる」(三月七日)という記述のように自己の意識に対する観測の姿勢が見られたが、それが『歐洲紀行』に至って全篇を貫く主題となつてテキストを整合化しているのである。この自己を観測する主題は、横光も触れているアンドレ・ジツドの「ソヴェト旅行記」(『中央公論』、一九三七年一月)における「私の考察の領域は、心理的な問題についてである。私がここでとりあげることも専ら、いや殆んどその問題に限られてゐる。また仮令、私が間接に社会問題にふれることがあるにしても、私の見地はいつも心理的な角度から出ないであらう」を横目に意識していると思われるが、また同時に、「純粹小説論」において問題提起していた「自意識」の表現として

帰趨しようとしている点に着目しなければならぬ。すなわち、この「自意識の表現」こそが狭義のリアリズムを他者化して「短篇」から逸脱するとともに『歐洲紀行』を成立させる「長篇」の磁場を形成する手段となっているのである。

この「自分を見る自分」といふ新しい存在物としての人称が生じてからは、すでに役に立たなくなつた古いリアリズムでは、一層役に立たなくなつて来たのは、云ふまでもないことだが、不便はそれのみにはあらずして、この人々の内面を支配してゐる強力な自意識の表現の場合に、幾らかでも真実に近づけてリアリティを与へようとするなら、作家はもはや、いかなる方法かで、自身の操作に適合した四人称の発明工夫をしない限り、表現の方法はないのである。もうこのやうになれば、どんな風に藻掻かうと、短篇では作家は死ぬばかりだ。純粹小説論の起つて来たのは、すべてがこの不安に源を發してゐると思ふ。(『純粹小説論』)

したがつて「自意識」という表現や「四人称」という方法は、「長篇」を志向する文芸復興の典型的なメディア意識のイデオロギーとして解釈するほうがよいだろう。「花散る巴里」(『文芸春秋』、一九三六年八月)のなかで「小説もこの通りだと思ふ。本格といふものは型から型を通り、自分を極度に殺し、押しつけ、突き抜け、大通俗に達したときを云ふので、この修業なくして本格はないと思ふ」と小説の「通俗性」に言及しているところからも、紀行文のエクリチュールが通俗性の問題系からけつして無縁でないことを知ることができる。そして、ここにこそ『歐洲紀行』が「自意識による厳しい自己検閲のドラマ」(前述の佐藤・井上)に徹していたことの必然性がある。言うまでもなくこの自己検閲は「おのれ一人ものごとを考えている」という「純文学」の姿勢とは一線を画し、むしろその「おのれ一人ものごとを考えている」というリアリズムの主体を脅かすものである。

最早や何といはうと、四人称の設定は必要である。物を書くものにとつて必要であり、書かぬものには不必要だといふ議論も成り立たぬ。道德の追究は、自身の内部のどこに四人称を置いたかといふところから、先づ始まらねばならぬ。四人称を自身の内部のどこかに位置づけねばならぬとするなら、この選定といふことに於て、すでに理智の開始がある。四人称の設定のない思索は、もはや今後用をなさぬ。(『作家の秘密』、『文芸』、一九三五年六月)

田口律男¹³は「(四人称)とは、ひとまず、自意識による無限の自己言及¹⁴自己喪失に歯止めをかけ、新しい行動原理としての(道德と理智)を認識次元において探索する機能と考えられる。と同時に、先に見たように、小説のスタイルにおいては、一人称、二人称、三人称では描きえぬ(『自分を見る自分』)(語られる自己と、自己を語るメタ自己との癒

合／分裂のドラマ）の対象化を、本来は有りうるはずのないもうひとつのメタ人称を用いて、形象化することを企図したのである」と分析する。「四人称」はこのように思索の主体そのものを解剖しようとする認識論的投機だったのであり、横光が強調する「長篇」（「短篇」の否定）の諸論理には文芸の表現形式の変革に留まらず認識の構造にまで遡及する問題提起が介在していた。

次に、『欧洲紀行』の一部でありながらその刊行と同じタイミングで『改造』に発表された「半球日記」（『改造』一九三七年四月）にも眼を向けておこう。「旅愁」（『東京日日新聞』『大阪毎日新聞』）および「春園」（『主婦之友』）の連載開始と同時にいうこともあり、この一篇はとくに「長篇」に与する命題が多分に含まれた作品となっている。主にオリンピック観戦と帰国の途における思索の記録がその主立った内容だが、前者については「日本選手の成績が悪いのでこれを文章に書く気がしない」と渡欧の目的自体をあっさりと抛棄し、やはり後者に相当する彼自身の「心理の推移」を注視することに専念する。ロシア経由の帰途をマラソン映画を運んでほしいという依頼だけで決めるように行為において自発的な選択をすることを避け、全体にわたって「外界から襲つて来る力」に身を任せることで国境やロシアの自然、そして満州里を眼前にして巡らせた思索が綴られていく。しかし、『文芸春秋』に掲載していたこれまでの「心理の推移」の記述に比べて、明らかに異質なのは「日本」というナショナルな言説を前景化している点である。渡欧に起因する横光の日本主義への傾倒に関連してしばしば引用される以下の文章は、すべて「半球日記」の記述のうちに見出された「日本的なもの」の発露であった。

私は自分の国の特長を愛しない人間の偉大さといふものを想像できない。（中略）

日本の一番非文化的なところは、知識階級の中に日本を嫌ふ人間の多いことだ。私は何より日本にとつて重要なものは自信だと思ふ。

私が日本人であるといふこと、これだけはどうしても疑へぬ。これだけが私にとつて唯一の真理であるといふことを信じることの難しさ。（中略）四面海をもつて包まれてゐる日本の欠陥の一つは、確かに祖国といふ言葉の不思議な戦慄を知らぬことだ。

私には日本を愛すること以外に今は何もないと見える。

愛することの喜ばしき。これこそ生活だ。私は日本のことを思ふと胸がどきどきしてならぬ。祖国といふ言葉の肉感を感じたことのない人人は定めし私のこの愛情をフアツシヨと云つて攻撃するであらう。しかしそれは必ず間違つてゐる。

日本人は日本を喜んで良いと思ふ。ただ喜びさへすれば救はれるといふ有難い條件

が、日本には眼を上げただけで満ちてゐるのだ。

もちろん歐洲滞在中の記述に「日本」を想起する言説がなかったわけではない。たとえばスイス旅行中には「早く日本に帰りたいと、郷愁そゞろに起」という懐かしい感覚に駆られ、「私にとつては日本ほど楽しいところはない」と感じている（『歐洲の旅 四 スイス行』、『東京日日新聞』、一九三六年八月一日）。しかし、この「日本」はテニスの「白いボールの音」から呼び起こされた「昔日の幸福」の感覚という、きわめて身体的に表象された横光固有の経験であり、ナショナルな「日本」の現前とは相容れない性格のものであることは明白であろう。「半球日記」における「日本」を前にして疑わなければならぬのは、それが帰国後のコンテキストに属した表象として生成しており、「旅愁」および「春園」といった「長篇小説」を準備する布置となつてゐることである。すなわち、この「日本」の現前もまた「長篇化」されたテキストの上に必然的に浮かび上がるイデオロギーとして解読する必要がある。

四節 〈日本〉のヒューマニズム的現前

もちろん横光の渡欧自体が「日本」という問題への対峙を必然としていたこともある。出発に際する『サンデー毎日』の取材（『欧米へ旅立つに際して世界的野心を語る横光氏』、一九三六年三月一日、『定本横光利一全集』未収録）のなかで、「あちらへ行つて、いちばんに期待されるものは、なんです」という質問に対し、「いままで書いた日本と違つた日本を見に行くことですか、外国から見た日本は、随分僕等がいま考へてゐる日本とは違つたものだと思いますね、上海に行つただけでも、随分、考へ方が、変りましたからね」と答えていた横光からは、通信文を書く行為のなかで「外国から見た日本」を現前しようとしていた意識を窺うことができる。しかし上述したように、「半球日記」には渡欧中のエクリチュールからは見出されるはずのなかつた「日本」が表現されており、「厨房日記」も含めて帰国後のコンテキストによる領略を析出しておかなくてはならない。

「純粹小説論」に基づいて「長篇」の企図に晒された種々のテキストは、一九三六年の二・二六事件から翌一九三七年を中心に文学者のあいだで議論された「日本的なもの」の言説と交錯し、「日本主義者」を主人公とする長篇小説「旅愁」を準備する布置として再編されていく。とくに『歐洲紀行』においては横光の渡欧中から帰国後にかけて文壇で問題とされていたヒューマニズムの観念とともに、「日本的なもの」のイデオロギーが描出されていく過程が「厨房日記」から浮かび上がってくる。

梶がヨーロッパへ旅立つ前からうっかり民族といふ言葉を用ひようものなら、ひどく知識階級のある種のものたちから矢を受けた。けれども、この明瞭な現実の根底で

あるところの種族を黙殺して、何の知性が種族の民族となるのであらうか。梶はかう思ふ。

「自分がこのやうに棲息してゐる種族の知性を論理の国際性より重んじるところは、自分が種族の国際性を愛するからだ」

全く今まで梶の一番混乱を起した抽象的な場所はここであつた。またこれは梶一個人の混乱の場所だけでなく、日本の知識階級全部の混乱の源をなしてゐる奇奇怪怪の場所でもあつた。一度び問題がここに触れやうものなら知識階級は総立ちになつて喧騒を極めるのだ。今やまた梶が帰つてみればヒューマニズムの議論が沸き立つてゐる最中であつたが、これも仔細に眺めてゐると、種族の知性と論理の国際性との分別し難い暗黒面から立ち昇つてゐる濛々とした煙であつた。（『厨房日記』）

岡邦雄が「今日の「ヒューマニズム」は従来「人道主義」とか、「人文主義」とか呼ばれたものから相当の距離のあるものである」（「限定への要求」、『文学界』、一九三六年九月）と述べていたように、当時の文壇ではヒューマニズムの「現代」性を問う議論が相次いでいた。たとえば一九三六年一〇月号にて一冊まるごとヒューマニズムの特集を組んだ『思想』の編輯後記で、「一九三〇年前後から世界各国において色んな形で「新」ヒューマニズムの提唱が行はわれて来たが、しかしヒューマニズムが広汎なそして深刻な形で問題になり出したのは比較的最近のことで、それにはそうなつた十分の理由のあることである。わが国でもその特殊な事情から今年になつてその論議が急に盛んになつてきた」という記述からもそのような状況が窺えるだろう。そのうち、同時代の議論の特徴をよく示していると思われる二人——三木清と森山啓に着目しながら横光の『欧洲紀行』を捉えなおしてみたい。なおここでは、この当時のヒューマニズムを「現代ヒューマニズム」と呼んで区別することにする¹⁴。

三木は「現代における日本文学の展開をヒューマニズムへの展開として考へたい」とした「ヒューマニズムへの展開」（『文芸』、一九三六年八月）の頃からヒューマニズムに頻繁に言及するようになり、人道主義や行動的ヒューマニズムと区別して「現代」性を問う思索を綴っている。そして「東洋的人間の批判」（『文学界』、一九三六年九月）では、「ヒューマニズムはファッシズム及びマルクス主義に対し「第三の思想」としての積極性を主張し得るかどうか。現代ヒューマニズムの限定の問題は必然的にここまで進められねばならぬであらう」という展望を示しており、その論の根底には「東洋的自然主義対ヒューマニズム」という構図が想定されていた。

例へば、何故にこの国に於て文学の思想性が特別に問題になるのであるか。また何故に私小説が、作品の社会性が、短篇か長篇かといふことが日本に於て特別に問題になるのであるか。また何故に日本にはこれまで叙事小説はあつても恋愛小説はなかつ

た(中村武羅夫氏)と云はれるのであるか。これらの問題のうちに我々は東洋的自然主義対ヒューマニズムの問題の自覚を認めることができる。(「東洋的人間の批判」)

別稿「ヒューマニズムの哲学的基礎」(『思想』、一九三六年一〇〜十一月)に沿って解釈すれば、「東洋的自然主義」において自己疎外された人間をその桎梏から解放し、再生するための「生」の志向としてヒューマニズムは要求されることになるだろう。この「東洋的自然主義」への「批判」はその根底においては横光の「古いリアリズム」への批評(「純粹小説論」)と差はなく、引用箇所でも言及されているように「長篇」の圏内にある枠組みなのである。また同時に、「ファシズムと共に次第に我々の間に甦つてきた東洋的封建的人間に対する批判のうちにヒューマニズムは現代的意義を見出すであらう」(「ヒューマニズムの現代的意義」、一九三六年一〇月二〜四日)と述べているように、三木の現代ヒューマニズム論はファシズム化の傾向に伴う民族主義と伝統主義に対する懸念を起因としていた。「伝統はただ創造においてのみ真に活かされ得る」という観点からすると、「長篇」という問題規定をその母胎としながら、「日本」というイデオロギーはファシズムとしてではなく、むしろそれに対置されるヒューマニズム的論理によって現前されるのである。

三木の鋭敏な洞察と比べると森山啓の現代ヒューマニズム論には注目すべき内容はあまりないが、この論議における典型的な傾向を分かりやすく表現している点で興味深い。「死に対する人間の一般的な抽象的な「孤独」の感情、絶望や苦悩や恐怖の感情、それを説き立てて何になるのだらう。そんなものは、或社会的行動と感情から必然に、死を物ともせざる「人間性」のまへには、不快で憐むべき繰り言となるのである」(「人間性の問題」、『文学界』、一九三六年五月)というように、「死」に関する無益な思想から「袂別」するという所作にヒューマニズムの「現代」性を位置づけようとする姿勢がそれに当たる(「死の思想との袂別」、『文学界』、一九三六年九月)。この時期の現代ヒューマニズムは西洋思想を虚無主義によって代表させることで「死」として対極に置き、その一方で「生命」「人命」等の語彙を強調することで「生」としての「日本」を可視化する構造をもっていた。森山の論考は「近親の者の死」を題材とした個人的な思索であるかのように見せながら、阿部知二が看破しているように「現代の人々にとつて共通のこと」として、「死」の他者化というヒューマニズム的实践を浮かび上がらせているのである。

『欧洲紀行』所収の帰国後のエッセー「人間の研究」は明らかにこの現代ヒューマニズム論議の圏内にある。次の引用は上述の三木や森山の言説を横に並べると「現代」的な問題として提起されていることが理解されるだろう。

ロシアが多くの人材の生命を、無雑作に奪ふ行為を聞くたびに、日本とはそこが違ふと思はざるを得なかつた。文化の最大の有難さは、何より人命を尊重することだと

私は思ふ。

今一番の文化の問題として、また人間の問題として重要なことは、何より人命を尊重しなければならぬといふことだ。この意識の強さが種族の知性であり、一切の文化の根底をなすものだと思ふ。その他の悪は、今の日本はしばらく許されねばならぬと
きだと思ふ。

これと併せて「半球日記」の「私のこの愛情をファツシヨと云つて攻撃するであらう。しかしそれは必ず間違つてゐる」および「共產主義、それは現在の私にとつては何事でもないのだ」という記述の帰結として「私には日本を愛する以外に今は何もない」と述べることで、「第三の思想」として立ち現れた現代ヒューマニズムが横光の内部において「生」としての「日本」を照らしだしたのである。

「厨房日記」の梶はこうしたコンテキストにおいて「も早や知性は日本には他国のやうには必要がない」とか「日本の左翼は日本独特であるところの秩序といふ自然に対する闘争となつて現れてしまつた」などとし、その対極において「日本特有の知性」を「義理人情といふ世界に類例のない認識秩序の美しさの中」に仮構することができる。それは、トリストラン・ツアラの超現実主義を眼前にして「日本ではシユールレアリズムが地震だけで結構ですから、繁盛しません」と他者化する一方で「義理人情」によって「日本」の「再生」を目論むこの物語全体の構造ともなっているだろう。

『歐洲紀行』はこうして——紀行文という選択による小説から遠く離れての実践であるとも言えるのであろうが、「短篇」のリアリズムからの離心を試みる文芸復興の諸規定を継ぎ接ぎのように含みこみながら生成し、それらが束ねられるメディア的所作によって「日本」を可視化するイデオロギーの生産装置として筐に収められることになる。それは、狭義のリアリズムとの距離を設定しながら「長篇」という形式を志向することで、その表象を「日本人としての純粹小説」という民族性へと揚棄する「純粹小説論」の予告を忠実に全うするものであったとともに、ファシズムにもマルクス主義にも与しない現代ヒューマニズム的観測から「日本的なもの」の言説を構成したところに、「旅愁」を初めとするその後の長篇小説の成立を可能とする論理を介在させていたのである。しかし『歐洲紀行』は、中村三春¹⁾が「メッセージの方向性において、日本主義・ナシヨナリズムの傾向は見せつつも、それを決定的な主張として打ち出すには至っていない、それとは異なる要素、あるいは、そこへと変化する以前の要素も、フラグメントの形で同居させている」と述べているように、「長篇」のナシヨナリズム空間に誘引されながらもそこに組み換えられる以前のテキスト形式を内包し、一冊に纏めあげられた個々のテキストはそれ自体において葛藤しつつ生起している。横光の渡欧という文学史的メルクマールが「長篇」の文学形式においてどのような批評性も持ちえていたのか、その問いは『歐洲紀行』が「純粹小説

論」に基づいて準備した「旅愁」までひとまず留保されなければなるまい。

五節 おわりに

文芸復興における「長篇」とは長い作品、分量のある作品のことではない。そこに示された「長さ」とは、既定の「古いリアリズム」を相対化しようとするテキストそのものの欲求であるとともに、読者との新しい関わり方を形成し「大衆（民衆）」を可視化する戦時下のナシヨナリズムの発現を用意するものであったと考えられる。そしてこの一九三〇年代から四〇年代にかけて、「純粹小説論」でも列挙していた「上海」「寢園」「紋章」「時計」「花花」「盛装」「天使」、そしてこれ以降に発表される「旅愁」「春園」「実いまだ熟せず」「鶏園」「夜の靴」といった長篇小説を、横光はどうしてここまで執拗に生産しなければならなかったのか。ここには、ひとり横光だけに限らない、同時代の作家たちが総じてその圏内に組み入れられていた「長篇」の問題規定があり、その内側において意味づけられたテキストは「日本」をめぐる種々のイデオロギーを現前する宿命を負っていた。その宿命を横光は「日本人としての純粹小説」の呼んだのかもしれない。

本稿で検討したように『歐洲紀行』もまたこの「長篇」の枠組みから逃れることはできない。事実として「半球日記」や「厨房日記」とともに纏められたエッセーは「日本」なるイデオロギーを、それが旅行中には現前することがなかったとしても、露呈させる「作品」となって再編成されている。しかし、山本亮介¹が「横光の長篇小説は、こうした絶対性への傾斜の危険性と、「純粹小説論」の持つ豊かな可能性との境界線上に生み出されていく」と述べているように、ナシヨナルな表象に対する留保を忘れずにいたとしても「長篇」に対する横光の応答には積極的な意味づけが求められてよいだろう。とりわけ「旅愁」の成立を控えた『歐洲紀行』のエクリチュールはそれ自体が「長篇」の力学に晒されながらも、その「長篇」化の過程を如実なまでに曝けだしていることで、それでもなお「長篇小説」を書くことの意義と可能性とを逆説的に開示してくれる。「旅愁」を読むための準備は整った。

注

1 井上謙『横光利一 評伝と研究』、おうふう、一九九四年一月

2 杉浦明平「横光利一論——「旅愁」をめぐる——」、『文学』、一九四七年十一月

3 村松梢風『近代作家伝 上巻』、創元社、一九五一年六月

4 海野弘「解題」、海野弘編『モダン都市文学』、異国都市物語』、一九九一年三月

5 佐藤昭夫「横光利一の歐洲体験」、『比較文化』、一九七〇年三月

- 6 井上謙『横光利一 評伝と研究』（前掲）
- 7 黒田大河「作品としての『欧洲紀行』」、『日本近代文学』、一九九三年五月
- 8 位田将司『『欧洲紀行』』という「純文学」、『国文学研究』、二〇〇六年三月
- 9 本論第一部を参照。
- 10 館下徹志「横光利一『旅愁』における現代性としての〈非合理〉——他者化という方法の互換性——」、『横光利一研究』、二〇一一年三月
- 11 黒田大河「作品としての『欧洲紀行』』（前掲）
- 12 書簡の引用は『定本横光利一全集 第十六巻』（一九八七年一二月、河出書房新社）に拠る。
- 13 田口律男「自意識の牢獄——あるいは、〈四人称〉の行方——」、『日本の文学 特別集』、有精堂出版、一九八九年二月
- 14 『文学界』の連評「ヒューマニズムの現代的意義」（一九三六年九月）や、青野季吉「現代ヒューマニズムの文学」（『新潮』、一九三六年一〇月）など、「現代」がキーワードとなっていることから。
- 15 中村三春「幻像のポストモダン——『旅愁』とメタテキストとしての『欧洲紀行』——」、井上謙、掛野剛史、井上明芳編『横光利一 欧洲との出会い——『欧洲紀行』から『旅愁』へ』、おうふう、二〇〇九年七月
- 16 山本亮介『横光利一と小説の論理』、笠間書院、二〇〇八年二月

第四章 「旅愁」

——一九三七年における「日本的なもの」とその先驗への問い——

一節 はじめに

一九三七年新年号の『改造』附録に載せられた「ファシズム辞典」を瞥見すると、その一項「日本主義」には「日本の国家主義、又は日本的ファシズムの意に用ふ」と定位されている。前年の二・二六事件からドイツ・イタリアを中心とするヨーロッパのファシズム的動向、スペインの内乱および中国での抗日などが知識人のあいだで広範に議論され、「日本主義」がこのようにファシズムの一表象として批判的に見られていた一九三七年に、矢代耕一郎という明示的な「日本主義者」を主人公とする「旅愁」の連載を開始した横光利一にはどのような歴史的企図が存立していたのか。

「日本」をめぐる言説群はとりわけ満州事変以降に突出して目立つようになるが、二・二六事件とその判決を経た一九三六年後半から一九三七年の盧溝橋事件に至るまでに「日本的なもの」という言辭において流行を呈した。それらは満州事変以降の文芸復興期から、戦時下の近代の超克のテーマへと、それぞれに通底する論理的連続性を内包しながらも、しかし一線を画すような一九三七年特有の現代性(モダニテイ)を形成していたのであり、文学者たちはその特殊性Ⅱ「新しさ」に着眼した批評や創作を展開していた。ある者は三国協定のコンテキストにおいて危機意識を抱き、ある者はロマン主義的思潮のもとに新しく可視化された国土と民族への「愛」を語った。そして横光の「旅愁」からは、ファシズムと人民戦線の衝突に揺れる危機のヨーロッパをその地で体験した作家としての観点による、「日本的なもの」が一方では棄却され一方では美化される同時代の論式に対して両面的に批評しうる表象の痕跡を辿ることができるのである。

本稿では、「旅愁」のうち『東京日日新聞』『大阪毎日新聞』両紙に掲載された新聞連載分を中心として、渡欧中の通信文や小説「厨房日記」(『改造』、一九三七年一月)も視野に入れながら、一九三七年の「日本的なもの」をめぐる議論との同時代性を再検討することにしたい。

二節 「日本的なもの」をめぐる一九三七年

「日本的なもの」は一九三七年になって脈絡もなく流行したのではもちろんない。河田和子¹が「これまで別の問題系とされていた(日本的なもの)の問題機制と戦時下の(近代の超克)論議を一続きのものとして捉え、〈文芸復興〉との関係についても考究する」

という観点に基づいて検証したように、「日本的なもの」が文芸復興期における民族性に関する議論からの延長であり、かつ戦時下の「旅愁」における古神道と「近代の超克」との同時代性へと接続されうるとする再解釈は今後も精査されていく必要がある。当時においても、小林秀雄などは「日本的なもの」の流行の直中で「今日の「日本問題」は、数年前の純文学の貧困の問題、純粹小説の問題から尾を引いてゐる」(批評家の立場、『改造』一九三七年五月)と文芸復興からの連続性を看破し、「論戦だけを眺めてゐれば、眼まぐるしい変り様だが、実際の作品には眼まぐるしい変り様などどこにも現れていやしない」(『現代の不安から「日本的なもの」の問題(3)』、『東京朝日新聞』、一九三七年四月一日)と述べていた。しかし、その小林秀雄ですら「日本的なもの」について度々論じなければならなかったように、一九三七年という時代は従来の「日本」をめぐる言説とは一線を画す特異な文学場を形成していたことも事実なのである。「日本的なもの」をめぐる諸作は一九三七年だけが突出した量を見せており、これを他の年のそれと同列に論じることには抵抗がある。

事実、当時において諸作家は「日本」をめぐる議論の断絶、すなわち「日本的なもの」が従来とコンテクストを異にすることを強調していた。戸坂潤が日本主義について「主に文学の世界で最近頓に著しくなつて来た」と言い、「この傾向は一九三七年度の文学思想界の支配的な表面現象となるだろう」(『日本主義の文学化——本年度思想界の動向【中】』、『報知新聞』、一九三七年一月一日)と予測したとおり、文学のなかでしきりに「日本的なもの」が語られはじめ、その現象は「新しきもの」として認識されていく。『旅愁』の連載開始と同じ一九三七年四月、『中央公論』の巻頭に掲載された大森義太郎の「日本への省察——『日本的』とは何ぞや——」では、上述のようなエピステーマーの変容を意識した書き出しとなっている。

日本といふことが、新しく、云ひ立てられてきたやうだ。

この数年来、日本！ 日本！といふ叫び声は我々のまはりに渦をまいてゐた。(中略) 一般の民衆は、存外深くはこの叫びに動かされることがなかった。(中略)

こんど新しく聞こえてきた日本の叫びは、少し違ふ。その声は全然別のところからおこつてゐる。

こうした「新しき」の強調は大森に限られたものではない。『文学界』に掲載された座談「文学雑談」(一九三七年四月)では、舟橋聖一が「従来いはれた日本主義といふものと今日いはれる日本主義とは性格がちがふんだよ」と、やはり従来の日本主義との「ちがひ」を問題としていたのが分かる。林房雄もこの時期の言説をあえて「新日本主義」と呼称して従来の日本主義との区別を明確にし、「これは新しきものであり、偉大なるものである」(『国内改革と文学』、『新潮』、一九三七年七月)と述べていた。彼らに共通してい

るのは「日本」を語る主体が作家たちに推移したことへの注目であり、「民族の問題が、いよいよ本式に文学者の間にまで重要な位置を占め出した」という中島健蔵の言葉に端的に現れているように、それが「自明な事柄」であったとしても「何等かの形で改めて問題になるとすればそれは新しい提出である」（『文学と民族性について』、『改造』、一九三七年三月）と映ったのである。そして、中島が続けて「横光利一氏の渡仏以後の情勢の動きと、氏の帰国後の小説とは、両々相俟つて此の問題を一応文学の中心点に投げ込んだ形である」と見做しているように、文学者たちが「日本」を語る中心となっていく趨勢——戸坂の術語を借りれば「文学的日本主義」ないし「日本主義の文学化」の傾向には、『欧州紀行』にまとめられる横光の渡欧中の紀行文および帰国後一作目となる小説「厨房日記」のエクリチュールがその中核として機能していた³。

「旅愁」がこの一九三七年における「日本的なもの」との関係性のなかで生成されているということは、よく知られているようで実はあまり検証されていない。それは、「日本的なもの」という現象が一九三七年、とりわけ盧溝橋事件に至るまでの期間に特有のモードであったという観点が忘れられているためにほかならない。加えて、「旅愁」のテキスト自体が日中戦争下の一九四〇年六月に刊行された『旅愁 第一篇』での改稿により、一九三七年の新聞連載時の「日本」をめぐる記述を少なからず喪失している、という事実もこの観点を見えにくくしている。新聞連載では主人公矢代耕一郎を中心にして「日本」を称揚するような記述が目立っているが、これらが前掲『旅愁 第一篇』では薄められるように意識されていたことが跡づけられるのである⁴。では、削除された例を含め「日本」をめぐる言説が一九三七年においてどのように機能していたのか。

たとえば有名なチロルの場面では、矢代が「俺はヨーロッパへ来て、初めて今日、日本人に立ち戻つた」と自覚し（57回、『東日』、一九三七年七月一六日）、パリに帰りたいがる千鶴子に対して「それより、僕は日本へ帰る支度を、そろそろしようかと思ってるんです」と言い、「どう考へてみても、僕は日本が良いと思ふな。お前が帰れば殺すぞと云はれたつて、ぢや、殺してくれと云つて、僕なら帰る。どうも僕は日本犬みたいなどころがある」と、このごろ思ふんですよ」と「日本」を思慕する（59回、『東日』、一九三七年七月二五）。『第一篇』で削除されたこのチロル旅行での矢代の言動に典型的に現れているように、「日本人から全く放れて一人になつた」うえで「言葉も全く通じない」という状況に置かれること、すなわち日本という国家からも、そしてその共同体の仮構を可能とさせる言語——国語からも分断された地点において、逆に「日本」を想起せざるをえない志向性を露呈させている。もちろんこれは、日本の喪失を通じた「日本」の可視化を企図するロマン主義的ない意識と無縁でない。林房雄の「日本への愛情」（『文学界』、一九三六年八月）にも典型的だが、「根なし草」という虚無の感覚からの「日本」の現前は「日本的なもの」において明確に共有されていた。「旅愁」に対する萩原朔太郎の同時代評「漂泊者の文学」（『文芸』、一九三七年七月）は、その傾向を抽出したうえで一九三七年の「日本」をめぐ

る議論へと還元させている。

たとへ現実の日本がなく、すべての日本的な物が虚妄であつても、尚且つ我等は、イデーとしての日本を所有せねばならないのだ。(中略)

小説「旅愁」の主人公は、船がマルセーユに着いた瞬間から、早く日本に帰ることばかり考へてゐる。(中略)しかしその「日本」は、一体地球のどこにあるのだ。(中略)横光氏が仏蘭西で考へた日本の姿は、おそらく索然たる物であつたらう。しかもそれは我等の心に、実在としてイデーする所の日本である。

しかし、こうしたロマン主義的な傾向への短絡的な結びつけは必ずしも「旅愁」の一九三七年におけるテクストの解釈を充足させるものではない。後述するが、朔太郎や保田與重郎らにおける「近代日本にたいする浪漫的反抗」⁵⁾とは近似した図式性を留保しているように見えながらも、「旅愁」の「日本的なもの」の内実にはむしろロマン主義に対する批評意識も含まれていると見受けられるのである。ここで、先に指摘した「日本的なもの」の一九三七年における現代性——「新しさ」の実態との照らし合わせが改めて不可欠となつてくる。

三節 「文学的日本文主義」の諸相

そもそも、彼らが口を揃えて強調する「新しさ」とは何か。文学者たちが「日本的なもの」を初めとして民族性に関連する諸問題を政治的に扱わなければならなくなったのはどうしてか。そのエピステーマーの変動は特にその前年、すなわち一九三六年における二・二六事件とその周辺の動向を背景とした思想の動揺に端を発している。

「日本」をめぐる言説は満州事変を契機として顕著となつていくが、二・二六事件はその思想的枠組みを根本的に屈折させる要因となった。向坂逸郎は「政治と文化の相剋」(『改造』、一九三七年四月)のなかで、二・二六事件と「日本的なもの」との連関性について以下のように分析している。

二・二六事件の後を受けて、『革新政治』が、馬場財政に、政治機構の問題に、全面的に姿を現はして来ると、ファシズムは、ずつと具体的の差迫つた吾々の問題となつて来た。(中略)すなわち、『日本的』の問題となつて来た。

すなわち、二・二六事件以降、その判決を含めた事後の政治的編成に日本のファシズム化の傾向を問題視する論調が相次ぎ、「日本」の語りがこのようにファシズムという世界的な動向と恣意的に同一視されたところに一つの特徴が見出されるのである。「日本の

ファツシヨ的傾向がさかんになつたから、日本の研究といふものが起つて来た」という杉山平助の発言（『日本精神及び文化とは何か』、『新潮』、一九三七年四月）などに見られるように、事後的に「日本的なもの」が生成したという価値転倒すら起きていた。三木清も「現にファツシズムとは関わりを持たぬ日本的なものとして唱道される思想のうちにおのずからファツシズムが忍び込んでゐるといふことが容易に生じ得る」とし、「今日の日本主義はファツシズムである」と断じている（『日本の性格とファツシズム』、『中央公論』、一九三六年八月）。もちろん論者によってそれぞれ異なる立場を有しながらも、「日本的なもの」をファシズムと同一視する恣意性は明らかに共有されていた。また、二・二六事件と同じ時期、メディアではドイツのロカルノ条約破棄やイタリアによるエチオピア侵攻などを初めとして、ファシズムに関する話題が知識人のあいだで議論されていた。一九三六年後半になると、スペインの内戦が主要なトピックとなつて人民戦線とファシズムの抗争に関する特集も種々に組まれた。ファシズムを核とするヨーロッパの危機への視座がメディアのなかで構成されてゆき、「日本的なもの」の表象はその文学場において再生産されていたのである。

林房雄が「日本主義論争」という言葉を使っていたように、作家たちはこの文学場に与せざるをえない状況下において「日本」を語りつつ、それがファシズムと同一視される制度そのものを問う議論を交していた。戸坂潤が前掲「日本主義の文学化——本年度思想界の動向【中】」において、「日本型ファツシズムの（原文ママ）個有なイデオロギーたる日本主義は、駸駸乎としてこの文学主義の土壌の上に繁茂し出した」と表明したことをきっかけに始まった応酬のなかで、小林秀雄は「『日本的なるもの』といふ文学的問題を「ファツシヨ的なるもの」といふ政治的問題で代置した上でなければ、彼等の批評的仕事は進行しない」（『文芸批評の行方』、『中央公論』、一九三七年八月）という事態、すなわち文学においてすら「日本的なもの」が政治的問題へとすり替えられる装置がメディアのなかに用意されていることを告発している。一九三七年の文学がこのような「日本的なもの」ファシズム」という政治的装置との直面に特徴づけられるとすれば、その根底にある思想的枠組みへと疑問を投げかけていた小林秀雄はもちろん、萩原朔太郎、保田與重郎、そして横光利一などに改めて評価軸が見出されるべきだろう。

たとえば萩原朔太郎は、大森義太郎が前掲「日本への省察——『日本的』とは何ぞや——」のなかで「日本的なもの」が「どんなふうにもその内容を規定できる」としてその内実の不在を批判的に論じたことに対し、「日本的なるものが確かに有る」という前提に立った以下のような反論を試みている（「彼等は何故に日本的なものを嫌ふか——大森義太郎氏の所論をよみて」、『いのち』、一九三七年六月）。

肝心の認識は、真に「日本的なるもの」の実体と、ファツシヨ的国粹主義者等が言ふ「日本主義的なるもの」とを、判然区別して考へることである。（中略）僕らの時

代の文学者とインテリゲンチヤとは、かかる「日本主義的なるもの」に対して常に不満と反感の鬨志をもつて対抗してゐる。

朔太郎の「日本的なるもの」と「日本主義的なるもの」という一見すると奇異にも思える区別は、すでに確認してきたような「日本的なもの」とファシズムとの同一視を背景として導入されていることが明瞭になるだろう。朔太郎はファシズムと同一視される「主義」（イズム）としての「日本」に対抗していたのである。

保田與重郎も周知のとおり当時の「日本的なもの」論議の中心にいた一人であり、日本浪漫派としての活動から「日本的なもの」の「発想者の一人」と見立てられていたなかで、ファシズムへの迎合を糾弾する論客のほうこそにその傾向を指摘しようとする（「日本のなもの」批評について——文芸三月号に現れた『日本的なもの』についての総括批評——、『文学界』、一九三七年四月）。

「日本的なるもの」の流行については、僕もその一半の責任もつやうな言説をきいてゐる。僕がファツシヨと世間から認められるならば、これも世間の声として甘受する。さういふことを云ふ人々を僕の側からこそ「ファツシヨ」と認めるからである。ともかくけふでは東も西もファツシヨださうである。さういふファツシヨとは強権によつてものを抹殺することである、そのとき日本史と日本文芸史を考へた僕は、さういふ種類のファツシヨでない。僕は抹殺されてゐた歴史の復活を始めるからである。

彼らに共通するのは、「日本的なもの」とファシズムとを執拗なまでに差別化し、両者を同一視する政治的な恣意性を注意深く回避しながら「日本的なもの」の論議へと関わつていこうとする姿勢である。彼らが評価されるべきなのは、上述のような文学と政治とが交錯するメディアの磁場を無条件に受け入れることなく、その文学場に対して批評的な意識を保ちえていた点にあると考えたい。そして、この時期において「日本主義者」の主人公を描出した「旅愁」の連載を開始した横光もまた、そのような批評意識に基づいていなかったはずはない。ただし横光の場合、その批評意識は彼らとは異なる独自の経路から見出される。

四節 「旅愁」における「もう一つの眼」

「旅愁」連載開始時の横光もまた、自身の語る「日本的なもの」がファシズムと同等に扱われることを事前に避けようとしていたことが確認できる。

私が日本人であるといふこと、これだけは私はどうしても疑へぬ。（中略）

祖国といふ言葉の肉感を感じたことのない人々は定めし私のこの愛情をフアツシヨと云つて攻撃するであらう。しかし、それは必ず間違つてゐる。

〔半球日記〕、『改造』、一九三七年四月)

しかしながら、そうかといつて横光が前述の小林、朔太郎、保田らと同一のコンテクストを必ずしも共有しているわけではないことに注意したい。横光は「日本的なもの」が「新しさ」を迎えるに至る契機となつた二月二十六日にはすでに渡欧の洋上にあり、その国内における影響も含めて二・二六事件の体験をもたないまま帰国後の「日本的なもの」の議論に組み込まれていく。結果として、当時の横光には二・二六事件に対する関心や知識がまるで稀薄であつたことが露呈している。たとえば、渡欧中の紀行文「巴里まで」〔文芸春秋〕、一九三六年五月)では、「東京に起つた暗殺の報」を聞いてもゴルフを続ける船客たちを傍観しながら「こんなものかと私は思う」という記録だけに終始している。帰国後の座談会「欧羅巴漫遊問答」〔文学界〕、一九三六年十一月)でも、林房雄が「二・二六事件の時などはどういふ感じを受けたかい」と尋ねたのに対して「さういふ詳しいことは分らない」と言い、「君が感じた程シヨツクは受けなかつたな」と率直に答えている。周囲の作家からもその関心の稀薄さは際立つて映っていたらしく、中島健蔵の一九三七年三月一日の日記には「意外なほど彼は事情を知らずにいる。(中略)やはり二・二六事件の影響がまるでわかつていないのだ」⁷という記録も残っているほどである。横光における「日本的なもの」の問題体系は、むしろフアシズムと人民戦線との対峙に揺れる危機のヨーロッパへと渡航した彼固有の体験を通じて見出されていくと見たほうがよい。

加えて指摘しておきたいのは、横光がこのように「日本を愛する」「日本人は日本を喜んで良い」と言いながら、一方でその「日本」と呼んでいるものが無規定であることを充分認識している点である。「日本精神とか、日本的なものとか云はれてゐるが、何が日本精神か、何が日本的な芸術なのか、それも今の所漠然としてゐて明確な姿とされて居らない」とし、「何が一体日本的なものであるか、日本人でさへよく解つていない」〔最近の感想〕、『中央新聞』、一九三六年一月一三日)という状況を認めたらうで「日本主義」を語っているのである。このことは、「日本的なもの」の論者たちの言説——「今日の文学が何より取りかえさなければならぬものは、万葉にあつた精神である」(中河与一『万葉の精神』、千倉書房、一九三七年七月)、「抹殺されていた歴史の復活を始める」(保田、前掲)、「日本の最近にして最高の発展状態たる明治時代の探求から始むべきである」(林房雄「日本主義論争の鍵」、『文芸』、一九三七年五月)というような志向に比べ、そもそも横光は回帰すべき具体的な事物を持っていないばかりか回帰それ自体を目的としていないことと関連がある。この「日本」の無規定であることの認識は館下徹志の指摘する「非合理」の発現でもあるし、またその認識は小林秀雄や三木清などと通底するものもあるが、しかし回帰の対象を明示せずに「日本主義」を前面に表象させようとするこの姿

勢が横光のなかで矛盾しないのはなぜだろうか。

「日本的なもの」という同時代の命題について横光が「旅愁」のなかで何を問題としたかったのかを改めて細見してみよう。まず主人公矢代が「日本」を想起し始めるのは、フランスへ向かう船の中でのことであった。「日本の国土といつてはこの船だけである」(5回、『東日』、一九三七年四月一八日)、「日本の空気の漂つてゐるのは今はただこの船内だけである」(13回、『東日』、一九三七年四月二九日)というふうな「日本」ないしはその一部として表象される船において、「日本人」であるという自覚や「頭の中」に仮構された「日本」が現前している。

「頭の呼吸の仕方が違ふんですね。僕なんかどちらかと云ふと、来るまではヨーロッパ式の呼吸だったんですが、しかし、心はやはり、日本人の呼吸だったといふことが、少しばかり分りかけて来ましたね。」

(14回、『東日』、一九三七年五月一日)

しかし、矢代はこのとき、どうして自分が、これほど日本のことを考へつづけるやうになつたのか、全くそれが不思議であつた。マルセーユが見え出したときから、絶えず考へてゐるのは、日本のことばかりと云つても良かった。それはまるで、ヨーロッパが近づくに従つて、反対に日本が頭の中へ、全力を上げて攻めよせて来たかのやうであつた。

(15回、『東日』、一九三七年五月四日)

ここで想起されているのは言うまでもなく実在する日本ではなく、逆に「ヨーロッパに近づく」ことによつて、つまり日本との隔たりを内面的に抱えることによつて立ち現れた「日本」である。こうして矢代は千鶴子と対面しているときですら「千鶴子を愛してゐるのではなかつた。日本がいとほしくてならぬだけなのだ」(16回、『東日』、一九三七年五月五日)と志向するほかなくなつていく。ところが、このように語られる「日本」の内実がどのようなものであるかについては、この「日本」の具象化を注意深く避けているとさえ感じさせるほどに記述が見られない。むしろ横光の洞察は一貫して「どうして自分が、これほど日本のことを考へつづけるやうになつたのか」、つまり「日本的なもの」の意味内容がどうであろうとも、そのシニフィエが不可避的に生成される過程に潜む諸体系のほうに向けられている。このことを如実に示すのが、久慈と議論を交わす矢代の次のような発言である。

「自分の中にあるものが民族ばかりであるなら、これに関する人間の認識は成り立つ筈がないぢやないか。認識そのものがつまり民族そのものだからだ。」

「そんな馬鹿なことがあるものか、認識と民族とはまた別だよ」

「しかし、君の誇つてゐるヨーロッパ的な考へだつて、それは日本人の考へるヨーロッパ的なものだよ。君がパリを熱愛することだつて久慈といふ日本人が愛してゐるのだ。誰もまだ人間で、ヨーロッパ人になつてみたり、同時にしたものなんか世界に誰一人もゐやしないよ。みなそれぞれ自分の中の民族が見てるだけさ。」

(27回、『東日』、一九三七年五月二三日)

ここで語られている「民族」というものは眼のようなもの、それを通してしか対象を見ることができない「認識そのもの」の諸体系として想起されている。「愛する」対象が日本であるかヨーロッパであるかが問題なのではなく、その「愛する」という認識自体にすでに内在する諸体系に着眼しているのであり、横光はその先験的な形式において「民族」すなわち「日本」を模索するのである。横光は水原秋桜子との「対談記」(『俳句研究』、一九三六年一二月)のなかで、「何か向うの習慣を批判する時でも、景色を見ても、自分が日本人だからかう見えるのか知らん、外国人だつたらかうは見てをらんのぢやないかといふ疑ひが、しよつちう起つて来るんですよ」と述べており、「船に乗つてゐるとそれを一番感じますね」と話していた。矢代が船のなかで見出した「日本」というものも、このような「自分が日本人だからかう見える」ようにさせている視座が問題とされている。横光の民族に関する言説は一貫して認識論的な命題として提示されており、記紀・万葉集などの古典や明治という歴史に遡行する言説に対してその遡行の構造自体を根本から問いかけるとともに、回帰の可能性ゆえに回帰を憧憬するロマン主義的構図をむしろ解剖してしまふ。たとえば「厨房日記」もまたこうした認識論的な命題を内包していることも見落とせない。

思想は民族から放れてあり得やうがない。論理の国際性の重要なことは梶として充分知つてゐるが、それ故に知性は国際的なものだとに限つてゐない。民族の心理を飛び放れた科学者たちの知性が、国際性を何ものより最上としてゐる現代の欠陥は、各民族の住する自然を同一視してゐる彼らの理想の薄弱なところにあるのだと梶は思つた。

各々の「民族」が立脚する「自然」が同一視できない固有のものであるなら、その「思想」や「心理」や「知性」は究極的に共有しうるものではなく、したがつて「国際性」は到達しえないものと帰結されよう。これを「自分がこのやうに棲息してゐる種族の知性を論理の国際性より重んじるところは、自分が種族の国際性を愛するからだ」と言うことで矛盾を来す結果となるが、「厨房日記」はこうした認識論的な民族観が引き起こす「日本の知識階級全部の混乱の源をなしてゐる奇々怪々の場所」というアポリアの表明であつた。

河上徹太郎が「厨房日記」について「氏にはさういふ風に眼前の対象と対座して之を見る眼の外に、もう一つ眼がある。それはさういふ眼を載せた己が肉体の動きを見る眼である」（「日本と西欧の知性について——横光利一外遊論——」、「文芸」、一九三七年二月）と分析しているように、その「自分の眼の二重性の原理」から日本的知性を明察しようとしたところに横光の試みが見出されなければならない。山本亮介¹⁾は「人間にア・プリオリに内在するとみなされる民族なるものは、「認識そのもの」と形式上同位に置かれることで、その対象化（内容への問い）が禁じられる」と指摘するが、その内容を問わないということ自体に横光の「日本的なもの」への応答の本質があったのではないか。すなわち、日本から離れた空間において逆に「日本」を志向するロマン主義的なイデーを表象することに目的があるのではなく、そのイデーを省察する「もう一つの眼」の露呈によって「日本的なもの」の主体性そのものを揺さぶるのである。この「眼」の認識論的命題には以下の「純粋小説論」の文章に見られるような浪漫主義の美化作用に対する批評意識が一貫して介在していた。

「すべて美しきものを」と浪漫主義は云ふ。しかし、現代のやうに、一人の人間が人としての眼と、個人としての眼と、その個人を見る眼と、三様の眼を持つて出現し始め、さうしてなほ且つ作者としての眼さへ持った上に、しかもただ一途に頼んだ道徳や理智までが再び分解せられた今になつて、何が美しきものであらうか。

横光が上述のようなアプリオリな形式自体を問題としなければならなかったのは、「純粋小説論」にてこのように「思考の起る根元の先験」という命題（眼）に焦点をあて、その点において能動主義および浪漫主義を批判的に見ていたことの延長にあったのである。

五節 アポリアを浮遊する身体

そして、私たちはこうした「先験」への問いにおいて一つの逆説に出会うことができる。船のなかで見出されたこの「日本」に起因して「厨房日記」と同様のアポリアを抱える「旅愁」では、「認識」と「民族」とのアプリオリな一致を確信する「日本的なもの」の根拠を揺るがし、そのイデーから自律しうるような表象がテキストから浮かび上がってくるのである。

ブロウニユの森において矢代、久慈、東野がそれぞれ俳句を詠む場面がそのひとつとしてあげられよう。この「日本の匂ひ」が漂うブロウニユの湖水では、「矢代はこれで印度洋とアラビアとを廻つて来て今パリでボートを漕いでゐるのだ」というように、渡航の過程とブロウニユの森の湖水で乗っているボートとが接続され、「日本が頭の中へ、全力を上げて攻めよせて来た」と同様に矢代に「はるかに遠い故郷を眺める窓のやうに感じ」

させる（40回、『東日』、一九三七年六月一五日）。もうひとつの船上とも言うべきこのトポスにおいて上述の三人による句作が行われる。

「ぢや一つ、僕も俳句を作らうかな。」と久慈は云つてオールを廻しながら、「えーと、ブラウニユの、瀧は無言を破りけり。どうです東野さん。」

「そんな句ないよ。」

と矢代は云ふと皆どつと笑つた。久慈はまた、

「それぢや、これやどうぢや。」

と、小首を一寸かしげてから、「ブラウニユのオール少しく鳥追へり。」

「ふむ。」

と、矢代はしばらく考へ黙つてゐたが、

「そんなら、これはどうかね——白鳥の巢は花に満つ春の森。」

「うまいね君は。いつ習つたんだ。」

と久慈は感心して、「ようし、ぢや、も一つやるぞ。」とまた考へ始めた。

（45回、『東日』、一九三七年六月二二日）

「万国共通の論理」を主張する久慈を含め、「一行」は句作のために「誰も空を仰いだり森を見たりして黙つてゐた」というこの場面。石田仁志¹¹が「句ひ」の身体表象について「失われた」日本を探そうとする「観念」は（中略）、身体によって周縁化されている」と指摘しているように、横光が前掲「対談記」で俳句によって「自分を何処かで統一してみたい」と述べていた志向がここでは日本主義やヨーロッパ主義を超越するかたちで顕然している。横光において俳句は「自然」に対して自己がどのように関係するかが焦点とされているが、それを詠む身体は〈水〉の上——船上にあり、日本でもヨーロッパでもないその中間に宙吊りにさせられる¹²。だからこそ俳句は渡欧中の洋上およびブラウニユの湖水といった〈水〉の上という空間でしか詠まれない。横光の志向する「統一」はいずれか一方の国土においては仮構されないものであり、また日本もヨーロッパも指標する空間として機能することで「どこでもない場所」（虚無）に佇むのでもない。ニヒリズムを克服するための「日本」の現前はけつしてそれ自身が目的化されることなく、アポリアを内包した空間にみずからを繋ぎ止めることによつて差異と他者性の契機を失わずにいることができる。

新聞連載終盤にあたるチロルの氷河の場面もまたブラウニユの湖水と同様の空間として表象されている。チロルの旅行ではすでに述べたように矢代が「俺はヨーロッパへ来て、初めて今日、日本人に立ち戻つた。」と自覚を得ることになるのだが、その旅行の直前には「黒人の女と白人の男がしきりに何事か睦まじさうに話し込んでゐるのを見ているうちに、」¹³「どうしても一致することの出来ない人種の見本を眼のあたり見てゐる思ひに突き

落され、その二人の間の明白な隙間に、絶望に似た空しい断層を感じて「涙を流すという体験があった。つまり民族同士がアプリアに分断される「断層」に絶望しながら矢代は「日本」を再び想起していたわけだが、この民族間の解決不能な不一致として見出された「断層」をチロルの氷河の「断層」と重ね合わせながら、旅行中に合流した千鶴子とともにこの「断層」を越えていくところにブロウニユの湖水での句作と同様の物語構造が浮かび上がってくる。

一つ二つの峰は矢代が先に立ち、靴の踵で氷を傷つけつつ、後から来る千鶴子の足場を造って渡った。

そのうちに、氷の峰と峰との間の断層が、底知れぬ深さを潜めて増して来た。一つになれば、どこまで落ち込むか分らぬ断層が、丁度、ガラスの断面のやうな、びいどろ色の口を開けて、降りて来る二人の足を待つてゐた。

(62回、『東日』、一九三七年八月三日)

言わば矢代にとってこの氷河の横断は、旅行前に絶望した民族同士が生む「断層」の上を浮遊しつつその先へと見据えようとする実践として意味づけられる。そしてこの氷河の「断層」を越えた地点において心が「古代を遡る柔らぎに満ち」という到達点を示した物語に、横光が「日本的なもの」をめぐって直面した認識論的なアポリアを乗り越えようとする意志が身体表象を通じて見出される。中村三春¹³はブロウニユの森の身体表象について「イデア的な固定化を行うディスクールに不断に介入してくる液状化した身体に属している」として日本主義のイデーから離反する契機を看取するが、「旅愁」における身体はこれまでに見てきたような洋上・湖水・氷河といった〈水〉の記号と戯れることを渴望し、アプリアな「断層」という虚無から浮遊するテクストとして呼び出されるのである。

このような「旅愁」の表象は一九三七年においてこそ文学的な可能性を標示する。横光が「日本的なもの」の言辞のもとにこのような虚構による実践を試みたことは、ファシズム的趨勢のなかで無条件に日本主義を棄却する同時代の思想的枠組みに対して倫理を問うのと同時に、日本主義を一元的に形象化する言説に対して認識論的なアポリアを突きつけることでその表象の再編成を要請する、応答としてのテクストだったのである。しかしながら、こうした新聞連載時における「日本的なもの」への問いかけは盧溝橋事件とともにその失効が宿命づけられていた。日中戦争下の動向を「認識上の革命」と位置づけた横光は、「今や日本の国内のことのみ考へてゐるときではなくなつた」(「水中の光線」知識階級の意志の屈折(下)、「東日」一九三八年三月一七日)という宣言とともに、「日本のもの」を「世界史」的な観点から布置しなす構想へと向かっていく。その後アジア・太平洋戦争までも経る過程で、田口律男¹⁴が「いかがわしい(日本)が現象している」と

論じたように「旅愁」における「日本」の表象は錯綜を極めていくことになる。だが、連載当初に構想されていた「日本」にこそその後の「いかがわしい（日本）」を解読する手掛かりがあり、ここに「旅愁」を一九三七年の時空間に引き戻すことの意義が掬い上げられなければならない¹⁵。

六節 おわりに

かつて廣松渉¹⁶は「日本への回帰といわれるものの多くが、実は回帰でもなんでもなくて、近代主義からの単なる横すべりのように思えなくもない」と述べ、「日本的なるものとは何か」を問うのではなくその問い自体を問いなおすことの有効性を問題としていたが、横光こそ「日本的なもの」の同時代においてそれをもつとも自覚していた一人だったのではないか。横光の言う「日本」とは、二・二六事件以降のファシズム化にもなつて見出された日本とは対置されるものとして書き出された。それは、同時代に見られるような万葉や記紀（古典）、明治（歴史）などといった対象としての日本を持たず、そうした種々のシニフィエを生産する認識の形式的体系（認識そのもの）としての「日本」であることによつて、同時代のロマン主義的思潮に対してもその形式自体を反問させるような命題を突きつけていたのである。そこで問われている「先験」自体が歴史的だという指摘は容易だろうが、そのように問わざるをえないアポリアこそが「日本的なもの」の現代性（モダニテイ）に対する一つの回答であつたことに重要な意義がある。そしてその共有し得ない認識＝民族の一致が互いに生み出す「断層」を描出しながら、危機のヨーロッパを舞台として「日本」を仮構する一人の日本人の造形からそのアポリアの彼方を見据えようとする——「日本的なもの」をめぐる一九三七年に内省を齎しうるこのような虚構の実践こそが、横光が「旅愁」において試みた日中戦争前夜の日本に対する「血戦」¹⁷だったのでないだろうか。

注

1 河田和子『戦時下の文学と（日本的なもの）——横光利一と保田與重郎——』、花書院、二〇〇九年三月

2 河田和子が前掲著書の巻末に当時の「日本的なもの」の文献を列挙されているので参照されたい。

3 宮本百合子も「文学における日本的なもの」の主観的な横溢の流行は、フランスから帰朝してその第一作『厨房日記』を発表した横光氏の作品が拍車となつて作用した」と見ていた（『今日文学の展望』、『発達史日本講座第一〇巻 現代研究』三笠書房、一九三七

年一二月)。

4 この改稿過程の詳細、および日中戦争下の文脈においてどのような意義をもつかについては、本論第三部第一章で検討している。

5 桶谷秀昭は朔太郎と保田について、「ふたまはりも年齢のちがふ、生れた風土もちがふ二人の文学者が共有した意識は、近代日本にたいする浪漫的反抗である」と指摘する(『浪漫的反抗——萩原朔太郎『日本への回帰』、『解釈と鑑賞』、二〇〇二年八月)。

6 二・二六事件とスペイン内戦との同時代性に着目した論に、小田桐弘子『横光利一——比較文化的研究——』(南窓社、二〇〇〇年四月)がある。

7 中島健蔵「人間横光利一」、『文芸 横光利一読本』一九五五年五月

8 館下徹志「横光利一『旅愁』における現代性(モダニテイ)としての〈非合理〉——他者化という方法の互換性——」、『横光利一研究』、二〇一一年三月

9 松本道介も日本浪漫派と横光との差異を析出し、「回帰がいかに困難に見えようとも、むしろその困難故に激しい憧憬につつまれて、帰るべき「日本」なる観念は「日本浪漫派」の人たちの心情の中に確かに存在し」、「横光の場合のやうに、回帰すべき日本を探しあぐねて、「落ちつく土もない、漂ふ人の旅の愁ひの増すばかり」と云ふ言葉のとび出すやうな感傷的な気分は、「日本浪漫派」の人たちには無縁だったらう」と述べている(『日本回帰の内実——横光と三島の場合——』、『新潮』、一九七三年一二月)。

10 山本亮介『横光利一と小説の論理』、笠間書院、二〇〇八年二月

11 石田仁志『『旅愁』の身体表象——パリの中の「匂ひ」、『解釈と鑑賞』、二〇一〇年六月

12 日置俊次は「西洋的(と思われる)思想や芸術に幻惑される日本の知識人を開放してくれる可能性、あるいは、西洋と日本と、どちらが優れているかというような単純な二項対立をくぐりぬけていく可能性を秘めた世界として、俳句に期待するものがあつたのではないか」と考察する(『横光利一試論——「旅愁」における俳句——』、

『東京医科歯科大学教養学部研究紀要』、二〇〇一年三月)。

13 中村三春『修辞的モダニズム』、ひつじ書房、二〇〇六年五月

14 田口律男「いかがわしい『旅愁』の〈日本〉」、『早稲田文学』、一九九九年一月

15 福田和也は「虚無である日本に、「伊勢の大鳥居」や「言霊」、「幣帛」そして「古神道」といった内容を注ぎ込んだ」と評していたが(『日本の家郷』、新潮社、一九九三年二月)、本稿での考察から古神道もまた形式論的な問いであること、すなわち認識論的な命題として再検討しなければならないだろう。

16 廣松渉「そのさまざまな試みについて」、『全集現代文学の発見 第11巻 日本的なるものをめぐって』、学芸書林、一九六八年一二月

17 『書方草紙』(白水社、一九三六年一月)の「序」で、横光は、「国語との不逞極る

血戦時代」から「国語への服従時代」へ、という言葉で自身の文学活動を説明している。本稿で考察した「日本的なもの」に対する認識論的な発想も、このような「国語」に対する意識に見られるようなナショナルな意味での「日本」を言語形式において問う姿勢の延長にあると考えられる。

第三部 戦中・戦後の〈長篇小説〉と〈日本〉言説の転回

第一章 「旅愁」

——戦時下における「世界史」との交錯——

一節 はじめに

日中戦争の開戦によって中断¹していた横光利一の「旅愁」の連載が『文芸春秋』で再開されてからすぐに、ヨーロッパ主義者として描かれる久慈は主人公である矢代のことを「東洋的」「東洋主義」と形容することになるのだが、いつから矢代は東洋主義者として表象されるようになったのか、という問題から出発してみたい。というのも、新聞連載時のテキスト（一九三七年四月三日〜八月六日²。本稿ではこれを「矢代の巻」と呼ぶ³）を注意して読むと、矢代は「日本主義」ではあっても「東洋主義」ではなかったのであり、「東洋」という視点が介入していることが容易に確認できるのである。

『文芸春秋』で再開されたテキスト（一九三九年五月〜一九四〇年四月。本稿ではこれを「続篇」と呼ぶ⁴）にはこのような「東洋」への視点が全体にわたって影を落としており、それは日中戦争下において知識人の間で論究された「世界史」という歴史意識に呼応したものであると考えられる。先行研究の指摘では保昌正夫⁵が横光の「東洋」に関する叙述について、「上海」に言及しながら「ヨーロッパと東洋」といった主題はなにも「旅愁」にはじまったものではない」と述べているが、注意しなければならないのは、「旅愁」が新聞連載時は「東洋」をあまり問題としていなかったにもかかわらず、『文芸春秋』に再開されたときには日中戦争時の思想の枠組みのなかで「東洋」が前景化されている、ということである。つまり、「上海」からの思想の延長と短絡的に捉えるべきではなく、日本主義が東洋主義へと拡大されることになったその時点における恣意性と歴史性とを検証しなければならない。

本稿では、新聞連載時の「矢代の巻」に見られたはずの日本対西洋という構図が、日中戦争の影響のもとで東洋対西洋の構図に拡大されるプロセスを検証し、その主な要因と考えられる「世界史」の視座と「旅愁」との相関関係について考察してみたい。

二節 後退する「日本帰」

私がこのように日中戦争による影響を重視しているのは、第一に、一九三七年の「矢代の巻」のテキストと一九四〇年刊行の『旅愁 第一篇』のテキストとの間に、看過できないほどの重要な意義をもった改稿が夥しく確認できるからである。「旅愁」の改稿過程というどうしても戦後のGHQ/SCAPによる検閲の入ったテキストとの異同ばかり

が注目されがちなが、終戦以前にも「旅愁」は単行本化などのさいに改稿されていることにも注意する必要がある。また第二に、冒頭で示したとおり「矢代の巻」と「続篇」との決定的な違いとして、「東洋」という想像的地理に対する視座の有無があげられるからである。このような「東洋」の表面化は盧溝橋事件をきっかけにした思想の変化によるものであり、このエピソードの歴史的な変動を正確に捉えないかぎり「旅愁」の解釈を過つことになる。ここでは、日中戦争前の一九三七年の言説空間から、開戦後の一九三九年の言説空間へと、「旅愁」および横光自身がどのような経緯を辿ったのかを検討してみたい。

まず、「矢代の巻」のテキストが一九四〇年版『第一篇』に収録されるさい、「日本」についての一部の記述が削除されている点に注目しなければならない。「旅愁」はしばしば一九三〇年代における「日本への回帰」と呼ばれる風潮と関係づけられるが、この「日本」を称揚する記述が省かれている事例を検討してみると、この『第一篇』はもはや日本回帰を語ることでできない文学場となつていると考えられるのである。

たとえば連載35回（『東京日日新聞』、一九三七年六月九日）では、「これは日本は、いつの間にか、間違ひの正しさといふ、たいへんな論理を發明し出したもんだ」「何をして間違ひにならぬといふ国は、おそらく世界に日本だけだらう。これが日本の知性といふものだ」と考えて「もう日本は大丈夫だ。絶対にヨーロッパが恐くはない」と確信するまでに至るが、これらの矢代の思考のプロセスは単行本では削除されている。また、この確信のもとにヨーロッパに対して卑屈になるなど千鶴子に説得する場面でも、久慈について「あんな盲目滅法な人物が日本にゐたればこそ、日本はこれほどになつた」と述べるところや、「日本といふ国は、自分をあまり低く見て来て良くなつた国ですから、今度は一度、高く見て、良くならなくちや」と主張するところまで削除されている。

連載41回（『東京日日新聞』、一九三七年六月一七日）では、千鶴子が古本屋で日本の版面に目を止めるという話をしたのに対して久慈が「千鶴子さんまで日本主義者になつたのかね。矢代の影響、甚大なるものがあるぞ」と述べる場面があるが、これも削除の対象となつている。この改変は「続篇」の後半で矢代が千鶴子のカソリックを問題視し、自分の思想とは相容れないことを自覚しはじめる展開と呼応したものかもしれない。しかし、「日本の本物なものは、見たくない」という久慈に対するアンチテーゼとして措定されるべき「日本の版画」「日本主義者」が、ここで削られていることで日本主義的傾向は後退させられていると考えるとよいだろう。

連載57回（『東京日日新聞』、一九三七年七月一六日）では、「言葉の分らぬこの一人旅行」のなかで表明される矢代の「俺はヨーロッパへ来て、初めて今日、日本人に立ち戻つた」という自覚が、一九四〇年版『第一篇』では「こんな所へ来ないなんて、馬鹿だな君は、なんて馬鹿だ」というように単なる久慈に向けた独り言に変わっている。「日本人」という自覚がこのように消去されなければならない理由を検討する必要がある。

連載59回(『東京日日新聞』、一九三七年七月二五日)では、パリへ帰りたがる千鶴子に對して「僕は日本へ帰る支度を、そろそろしようかと思ってるんです」と言う矢代の台詞が、一九四〇年版『第一篇』になると「凄いなア」というたった一言で済まされてしまう。直後に続く「どう考へてみても、僕は日本が良いと思ふな。お前が帰れば殺すぞと云はれたつて、ぢや、殺してくれと云つて、僕なら帰る。どうも僕は日本犬みたいなどころがあると、このごろ思ふんですよ」と日本への回帰を述懐する文章も削除されている。

この時期の横光を日本主義に傾倒したと単純に把握しているだけでは、どうしてもこのような改稿例の説明がつかないだろう。少なくとも、この改稿過程をなおざりにして「旅愁」全体を日本回帰の産物とみなしてきた先行研究は修正されねばならないはずである。

これらの改稿例は、横光が日中戦争下のパラダイム・チェンジにともない、日本主義にあたる記述を後退させることで日本回帰のイデオロギーを解体・再構成し、新聞連載時とは大きく質の異なるロジックを持ちこもうとしていることの証左と見てよい。つまり横光は、少なくとも「続篇」の執筆時期にはすでに、日本主義ないし日本回帰とは異なる方向性を志向していたと仮定できる。

では、横光はどのように日本回帰にかかわる記述を後退させることで、いったいどのような方向に「旅愁」を修正したかったのだろうか。この問いは、日中戦争下において作家がどのような言動を展開したのかを明らかにする重要な問題設定となる。この問いを解明する手掛かりとして、上述のように「日本」を称揚する言説が後退させられている一方で、今度は「東洋」という視座が介入している点が注目されるのである。

「矢代の巻」にも「東洋」という想像の共同体を仮構する萌芽が見られることは否定できない。とはいえ、新聞連載時に「東洋」の語句が使用されたのは、連載47回(『東京日日新聞』、一九三七年六月二五日)で描かれたアメリカ人を批判する場面のみであった。ここでは、東野と久慈と四人の「印度支那の安南人」たちの坐っていたカフェで、入ってきたアメリカ人が「ここにゐる東洋人を、皆追ひ出してくれ」と言ったのに対し、ボーイが「安南人を指差して、これは東洋人だが、われわれの同胞だ。君ら出て行つてくれツと、アメリカ人に大見栄切った」というエピソードが語られている。アメリカを如実に批判すると同時に東洋人という同胞意識が美化されている場面であるが、ここでは「安南人はおとなしく黙つてゐ」たのに対し「日本人は皆殺気立」つたというように、もの言わぬ他者としての安南人を「東洋」という枠組みへと包括する主体として日本人が表象されている。興味深いのはこの場面についてはまったく改稿されていない点であり、このような記述のなかに「続篇」および一九四〇年版『第一篇』で「東洋」という視点が介入しうる余地が含まれていた。本来、主人公矢代の「日本の婦人と結婚をしてみたい」と思うほどに「血液の純潔を願う」という日本主義にとつて、このような東洋人との同胞意識は必ずしもその「血」の純潔性の志向とは相容れないはずである。だからこそ、「矢代の巻」が『第一篇』へと改稿される過程で「東洋」を前景化するさいに、「日本」をめぐる記述を後退

させる必要があったと考えられる。そしてそれと同時に、この改稿過程において「東洋」と「西洋」の価値観を対峙させる言辭がところどころに挿しはさまれることになる。

キリストの彫像を眼にした矢代が「日本人が分るのどうのと云つたとところで、それは全くわれわれ東洋とは違った文化だとそろそろ観念もし始めて来るのだった」と感じたり、久慈に対しても「またとない東洋と西洋とのこの大きな違ひを知る機会に、ただひと飛びにそこを飛び越してうろつく暇もないとは、久慈も勿体ない罪を犯したものだ」と不満を抱いたり、またサンジェルマンの寺の壁画について「日本のお寺の壁画は、まア、地獄極楽の絵が多いですが、こちらのお寺の壁画は、ヨーロッパ人が野蛮人を征服して、十字架を捧げてゐる絵ばかりですね。(中略)あのころは、誰も東洋人にあんな絵を見られようとは思はなかつたんだな」と話したりするように、「日本(人)」という主体が「東洋(人)」に短絡的に置き換えられる。チロルの山で羊を待っている場面においても、「日本は世界の果てだな」と認識すると同時に、「あの果ての小さな所で音無しくじつと座らせられて、西を向いてよと云はれながら、いつまでも西を向いてゐるのだ。もし一寸でも東は東と考へようものなら、理想といふ小姑から鞭で突き廻されてゐるんだからなア」というように、「西(洋)」との対峙を語る言辭のなかで「日本」と「東(洋)」が並列可能な言説空間へと組みかえられているのである。これら四例はすべて初出にはなく一九四〇年版『第一篇』で新たに書きこまれた文章であり、共通してヨーロッパの世界の認識Ⅱ文節作用に抵抗して「東洋対西洋」の構図を展開している。そしてこれは、必ずしも「矢代の巻」では主張されてはいなかったはずのモチーフなのである。

日本から東洋へ拡大されるというこの過程については、先行研究では神谷忠孝⁷が早い時期から指摘していた。神谷は、「旅愁」が中断していた期間に横光が中国を訪れたことについて、「この三度目の中国旅行は、横光利一の東洋主義が明確になったという意味で決定的なものだった」と述べ、連載が再開されると「日本とヨーロッパとの問題に集中していた議論が、『旅愁』のこの部分で東洋という規模に発展して」いると分析している⁸。

続いて、このプロセスを「続篇」でも検討してみよう。「続篇」執筆時に組みこまれた「東洋」という視点に特徴的なのは、日本と東洋との分割線があまり意識されず、ときには恣意的に解消されて、「矢代の巻」の改稿過程と同様に日本がいつの間にか東洋に拡大されてしまう点である。その結果、矢代の日本主義は東洋主義へと書き換えることが可能になっている。「続篇」第二回『文芸春秋』、一九三九年六月)の冒頭で早くも矢代は東洋主義と位置づけられている。たとえば「矢代までが、日を経るまま漸次東洋的になりつつある」「いつか久慈は矢代の東洋主義に自分の科学主義でうち向つたとき」などであるように、日本主義者とヨーロッパ主義者との対立であったはずの矢代と久慈との関係は、唐突に東洋主義者とヨーロッパ主義者の議論に変化している。以後、矢代と久慈との議論はこのような東洋対西洋の構図のなかで繰りかえされることになる。

「こんなに東洋人が軽蔑されてゐて、こんなに植民地を植えつけられて、なほその上に彼らの知性を理想としてこれを守ることが唯一のヒューマニズムの道なら、それなら、東洋のヒューマニズムはどこへ行つたのだ。」(中略)

「ヒューマニズムに東洋と西洋の別があるか。それがなければこそわれわれはその理想を信仰するんだ。」

「われわれは、知識階級だといふ虚栄心で、東洋と西洋とのある区別さへ無いと思ふ習練を永久に繰り返すのか。」

「その習練が分析力の結果なら、それは世界を守る道といふものだ。誰も動かすことの出来ぬ道といふものは、たつた一つ厳然としてあるのだ。それを探すが分析力だ。いつたい分析力に西洋も東洋もあるものか。同じ共通のもので負けてれば、負けてる方が弱いのだ。それだけは仕様があるまい。」

矢代と久慈のこのような議論は、一見すると意見の一致しない対立のように見えるかもしれない。また、主人公矢代のみを思想を横光のそれと同一視するわけにもいかない。しかしながら、「東洋」の前景化にもなつて主義思想が変化したのは矢代ばかりでなく、久慈もまた「矢代の巻」とは異なる方向性を指標していることに注意しなければならぬ。久慈も「僕たち東洋人」というふうに分自身を「東洋人」として主体化しているし、そもそも久慈は矢代に対して差異を示そうとしているのではなく同一化を目指しているようにしか読めないのである。

それは、「続篇」の第一回目の久慈の手紙ですでに「何らかの方法で君と僕との意見の対立に統一を与へたい」と宣言しているように、矢代と共通の方向性へ向かおうとしていることが早いうちから示されている。そして決定的なのは次の場面である。

久慈はこのやうなみいらが団結した模倣力でそれぞれ本国の東洋に渦巻き起す風波の結果を考へると、抗日意識の高まりが戦争を惹き起してゆくことなど当然だと思つた。これは行くところまで行かなければ恐らくやむまい。ここに日支の共通した精神の連結作用が、どちらも西洋の模倣といふ一点に頼る以外方法はないものであらうか。何か東洋独自の精神の結合に似た一線はないのであらうか。――

久慈は支那人のある大部屋の方を眺めながら、いつの間にかまた矢代の日ごろの考への中に入り込んでゐる自分を発見して、いや、おれのはまた矢代とは別だ。共同の一線を発見することだと強いて心中思はうとするのだつた。

「矢代の日ごろの考への中に入り込んでゐる」という記述もあるように、ここでは久慈は矢代の東洋主義とほとんど整合してしまつてゐる。すなわち、矢代において「東洋」が強調される一方で、久慈において「世界」が主張されるという構図には、「東洋」とい

う合流地点が想定されていたのである。その結果、「矢代の巻」では対立していた二人の志向はしだいに併行しはじめ、作品自体も「東洋」における「共同の一線」というような単一の方向性へと収斂していくのである。

三節 日中戦争というメルクマール

さて、このように「東洋」が前景化される背景を探究するために、「旅愁」が中断していた一九三七年八月から一九三九年五月までの横光の言動を整理する必要がある。まず、盧溝橋事件が最大の転換点であることは言うまでもない。戦後刊行の『第一篇』の「後記」でこの事件の当日に「自分から申し出てこの作を中絶した」というのは戦後の回想ではあるが、しかし当時にしても、たとえば「力の場」(『東京日日新聞』、一九三八年一月一日～一二日)のなかで「私はこの度の戦ひ以来発行された支那に関する雑誌、新聞の記事を、読まぬ日は一日もない」というほどに、中国への関心を再燃させているのを確認できる。そればかりか横光は日中戦争下の動揺を「認識上の革命」と位置づけ、そのような歴史的転換の自覚のもとに「矢代の巻」との間に決定的な一線を画そうとしている。

去年の八月から今日まで、恐らく誰も、自分の知らぬことばかりが、かつてない大海嘯となつて、外界で進行して来たことを感じたであらうと思ふ。(中略) それはむしろ、認識上の革命ともいふべきもので、この革命を感じぬ者は、恐らく今後何の問題も提出することは不可能になつて来たといつても良いほどである。

超現実の世界を幸福にすることと、現実の世界を考へる知性は、今や日本の国内のことのみ考へてゐるときではなくなつた。(中略) われわれは誰でも人類のことを考へてゐる以上、知らぬヨーロッパのことよりも、身近のアジアの問題からはじめねば、考へるといふ能力は、無駄になる恐れの方が多い。日本の知識階級が、アジアを軽蔑してゐる間は、抗日の続くこともまた瞭かだ。

これは「水中の光線」(『東京日日新聞』、一九三八年三月一六～一七日)の一節であるが、ここには「矢代の巻」から「続篇」に至るプロセスのなかで横光のナシヨナリズムがどのように変質したかが端的に示されている。横光は「認識上の革命」を指摘することで、「認識そのものがつまり民族そのもの」という観点をめぐって議論していた「矢代の巻」の認識論を、「革命」という言葉によって否定して再検討しようという強い姿勢を打ち出しているのである。そして同時に、「今や日本の国内のことのみ考へてゐるときではなくなつた」と述べているのは、「絶えず考へてゐるのは、日本のことばかり」の主人公を表象してきた「矢代の巻」への自己批判として読むことができよう。横光はこのように立ち位置の転換をはつきりと表明しているのである。

こうした日中戦争への問題意識に基づいて、この時期の横光は小説よりも評論のほうに専念しており、これらが『考へる葦』（創元社、一九三九年四月）の「感想」と「七日雑筆」の節にまとめられている。主に中国についての思考を巡らせているこれらの言説に特徴的なのは、明らかに横光の歴史意識に変化が見られる点である。

すでに横光がいわゆる新感覚派時代の総決算としてまとめあげた『上海』で中国を描いているのは周知のとおりであるが、そこでとりわけ横光が注目していた「租界」をふたたび引き合いに出しながら、伝統や習慣が否定されるトポスとして中国を表象している。

今から十年も前の上海のことであるから街もいくらか変った。昨年渡欧するとき一日ここを見たが、黄浦江を埠頭へ入る兩岸の風貌は、十年前とは違つて大都会の仏があつた。恐らく私の見た都会の中では、ロンドンと匹敵する大都会は上海を描いてないと思う。私がパリへ着いて後も、なほ頭の中に浮んで最も興味を感じ、忘れ難かつたのは上海であつたがこの街にはロンドンがあり、銀座がありパリがありベルリンがある。おそらくニューヨークもあると思ふ。ここでは各国人が租界といふ不思議な場所で各自の本国の首都と競ひ合いをする。（中略）ここは支那でもヨーロッパでもない。（中略）それぞれの民族が伝統と習慣とを放れ、共通の本能を並立させ、理知を経済のみに役立ててその日その日の金と銀との差の上で生活する。（中略）

しかし、支那の知識階級はも早や全く以上のやうなものではなくなつた。伝統をぶち碎くことが彼らの実践になつて来た。それには戦争が必要欠く可らざる武器になつて来たのである。

この「静安寺の碑文——上海の思ひ出」（『改造』、一九三七年一〇月）のなかで示された中国観には、「矢代の巻」に特有の民族意識とは対照的な点がいくつか認められる。第一に、イギリス・フランス・ドイツ・アメリカ・そして日本が混在する「世界」の縮図として上海を表象している点である。ヨーロッパとの二項対立によつて短絡的に仮構されていた「日本」という想像の共同体が、日中戦争によつて想像すること自体が困難になつた状況をいち早く自覚し、脱中心化された世界に「日本」を布置しなおさねばならない認識論的な危機を、横光は上海というトポスに遡行することで再考しようとしている。

第二に、そのような現状を危機として捉えたうえで「戦争」を論じている点である。「矢代の巻」においては政治あるいは政治的な事柄に言及しようという姿勢がまったく見られず、日中の衝突についてはもちろん、二・二六事件についてもフランス人民戦線についても描かれることはなかった。いわば「矢代の巻」は非政治化された政治性に彩られていたわけである。ところが「続篇」になるとこれらが堰を切つたように描かれるようになるのも、エクリチュールが日中戦争下において政治を語ることの避けられない局面に至つたこととの明証と見てよい。

そしてこの第一・第二の観点からの帰結として、日本と中国を含めた「東洋」の歴史および「西洋」の歴史に対する関心を深め、「世界史」的な視座によって批評を試みようとする姿勢に行きつくことになる。横光の関心が中国を軸とした東洋Ⅱアジアにとどまっておらず、たとえば、「私はこの一夏西洋史を読み返し、ギリシヤから二十世紀に至るまでほぼ眼を通して見たが、支那の歴史の進展とヨーロッパの歴史とは、西と東の相違ほど異つてゐることに気がついた」（「静安寺の碑文——上海の思ひ出」）とあるように、日中戦争を端にして一九三七年の「この一夏」に西洋史を顧みることもしている。重要なのは、横光が「矢代の巻」までの日本対西洋という枠組みを棄却し、中国を媒介にして東洋対西洋という枠組みへと拡大していること、そしてその拡大の根底に「支那の歴史」や「ヨーロッパの歴史」というような歴史意識を据えているという点である。つまり、横光の言う「認識論上の革命」には歴史意識の変質ということが措定されている、あるいは、歴史意識の変質ゆえに日中戦争を「認識論上の革命」と位置づけることが可能になっているのである。ここで私たちは、こうした歴史意識そのものの歴史性——つまり、このような歴史意識がどのように成立したかというプロセスをこそ探査しなければならない。

主人公の矢代が一九四〇年版『第一篇』において唐突に「歴史学者」としての側面を強調されるのも、こうした歴史意識の成立と間違ひなく呼応しているとみてよい。まず「矢代の巻」では「久慈が社会学の勉強に来たのに反し、矢代は歴史の実習に来たのだが」という設定が、「第一篇」では「久慈は社会学の勉強という名目のかたはら美術の研究が主であり、矢代は歴史の実習かたがた近代文化の様相の視察に来たのだが」というふうに変つており、いわば「歴史の実習」が近代そのものを問いかけるほどの大義を担わされるように書き換えられている。おまけに一九四〇年版『第一篇』では、あのチロルへの旅行についても、「自分の仕事の歴史の著述を一つするためにも」「自分の仕事の歴史の著述を進める上にも」¹⁰というように、同じような文章を二度も加筆してまで「歴史の著述」を旅の目的として措定しているのである。同様に「続篇」でも「君は歴史といふ人間の苦しみを知らぬのだ」「過去を知ることが現在を知ることにはがひないなら、およそ自分は現在さへ知らぬのだ」「流転が歴史の原型の相なら、この下が刻々過去になりつつあるその具体だ。過去を見ずにどうして未来が見られるか」「人間の過去、現在、未来。——もう沢山だと思つても他人は揺り動かしてゆくだらう」「フランスの国の歴史と、自分の国の歴史の相違を合せ考へてみるのだつた」など、矢代と久慈の双方の視点からそれぞれ歴史あるいは歴史観について思考を巡らせる言説が散見される。

同時に、さきに述べたように「矢代の巻」では言及すらされなかった政治の事象もまた、「戦争」という危機意識のもとで記述されはじめる。二・二六事件についても「日本が大変らしい。二・二六を見て来た人と昨夜会ひましたが、日本も急廻転をやつてゐますね」という会話がなされたり、日本と中国との衝突についても「だんだん險悪になるばかりらしいんだ。とにかく、遠からず始ることだけは確かだらうな」という兆しが日中戦争後の

視点から描かれたり、同様に日中戦争をあたかも正当化するような「日本は世界の平和を願ふために涙を流して戦ふといふやうなことが、必ず近い将来にあるにちがひない」という発言まで書かれているのである。

このような日本・支那・ヨーロッパの危機を語るなかで、横光が「世界」を見据えている点が注目される。「世界」の縮図を想定しながら「戦争」を批評しようとする姿勢の根底には、上述のような歴史意識の変質があったと考えられるのである。そのとき次に問題となるのは、こうした歴史意識の同時代的な歴史性——すなわち、日中戦争下の歴史意識の変化がひとり横光のみに限られたことでないことを検証し、そのうえで改めて「旅愁」を読みなおさなければならぬことである。

四節 「世界史」という視座

これまで述べてきたように横光が矢代を東洋主義へと変貌させねばならなかった背景には、日中戦争をきっかけにして知識人のあいだで論及された「世界史」の問題があると考えられる。

「続篇」執筆時期からはすこし後になるのだが、戦時中に「世界史」という言葉をテーマとして議論された著名な座談会がある。言うまでもなく、高坂正顕・鈴木成高・高山岩男・西谷啓治のいわゆる京都学派四天王と呼ばれる四人による、一九四二年一月に『中央公論』紙上に発表された「世界史的立場と日本」という座談会である。歴史哲学が「具体的には世界史の哲学でなければならぬ」という段階にあり、「結局日本はどうなるか、今できつつある新しい世界に対して、日本はどういふ意味を持たせられてゐるか、どういふ意味を表現しなければならないか、即ち世界歴史の上における日本の使命はなにか」という問題について、「日本人が日本人の頭で考へなければならぬ」という高坂の提言からはじまるこの座談会は、日本を含んだ東洋とヨーロッパとの間にある「歴史意識の相違」を強調している点に特徴がある。

とくに注目したいのは、日本を含めたヨーロッパ外世界が台頭する過程において、ヨーロッパが「危機」と捉えているのとは対照的に「新秩序」という枠組みを認識し、従来の歴史観に取って代わる「新しい歴史主義」を要求していることである。高坂正顕が「現在の世界は多くの中心を考へなくてはいけない」というような脱中心化された世界の状況が、むしろ新しい秩序になっていく（言いかえれば、ポストモダニズム的实践がかえって規範化していく）プロセスがここには如実に現われているのである。こうした「世界史」という多様性の秩序が出現することによって、戦争を支えるようなロジックは可能になっていく。

高坂 ゴビノーは文化の興亡を、それを負つてゐる民族の血の純粋性で説明しようと

し、不純な血が入つて来ると民族の生命力は駄目になるといふ説明をしてゐるのだが、血の純粹性を主体的に考へ、むしろモラリツシユ・エネルギーで置き代へれば全く無価値とも言へないと思ふ。

高山 モラリツシユ・エネルギーの主体は僕は国民だと思ふ。民族といふのは十九世紀の文化史的概念だが、今日は、過去の歴史はたとひどうあらうと「民族」といふものでは世界史的な力がない。本来の意味で「国民」といふものが一切を解決する鍵になつてゐる。モラリツシユ・エネルギーは個人倫理でもなければ人格倫理でもなく、また血の純潔といふやうなものでもない。文化的で政治的な「国民」といふものに集中してゐるのが、今日のモラリツシユ・エネルギーの中心ではないかと思ふ。

座談会の「種族・民族・国民」の章で高坂正顕が「民族の血の純粹性」を切り口にして「モラリツシユ・エネルギー」について語り、それに対し高山岩男が「民族」ではなく「国民」こそが世界史の主体だと述べている個所であるが、ここには「血」をベースにした「民族」から「モラリツシユ・エネルギー」を根拠として肯定的に解釈された「国民」へ、というロジックの転換が確認されるのである。このあとも「血」を考察した議論が続いてゐる。

高坂 血が入り混つてゐる場合、例へば、スペインとか、ハンガリーなどは相当に混つてゐる。それを見ると血の入り混つてゐる所は文化の入り混つたところだ。しかもそれぞれの文化の中心で入り混つてゐるのではなく、文化が中心から拡がつて行つた、その周辺で入り混つてゐる。してみるとかうも言へないかね。血の混淆が文化を弱めたのでなく、初めから文化圏の末梢的部分で同時に血の混淆が起つてゐるのだから、そこで見られる文化も当然末梢的であり、純粹でない。同様に民族的年齢の若さといふやうなことも、単に血からだけでは考へられないで、却つてその文化の創造性から考へられるべきだとも思はれる。さつき言つたやうにモラリツシユ・エネルギーと解すれば別だが、僕はどうもゴビノーの様に血の純粹性だけから行くのは困ると思ふ。

高山 この問題は僕も考へたことがあるが、何とも決定できないと思ふね、血といふものがたゞ血だけで優秀とか劣等とか、力があるとかないとかいふことにはならないやうに思はれる。血といふものは、如何に指導して行くかといふこと、つまり血以外の原理によつて血が生きもすれば死にもするのでなからうか。

ここには、横光が「矢代の巻」のなかで「血液の純潔を願ふ」というように強調している類の姿勢はもはや見られず、それとは反対に「混血」や「血の混淆」などといった状況

のほうが積極的に肯定されている。民族と民族（血と血）は単一では存在しえないというこのような発想は、日中戦争や太平洋戦争などの国家や民族間での衝突から生まれているのであって、多文化主義と呼ぶほどポジティブな志向は見出されないのである。あるいは、多様性こそが新たなナショナリズムの原動力となっていてと見たほうがよいだろう。「血」を「指導」とするというのは、衝突している相手の民族を指導することによって簡単に置換されうるし、実際この座談会のなかで「モラリツシュ・エネルギー」という名目のもとに戦争はあっさり肯定されている。というのも、高山岩男は「いつでも世界史を動かして行くものは道義的な生命力だ」と述べたうえで、「戦争のなかに道義的なエネルギーがある」と断じているのである。「世界史」を語る言説にはこのように、戦争を肯定するロジックが多分に含まれていた。このような「世界史」の論理を掲げれば、「血といふものは、如何に指導して行くか」という前述の言葉は「支那事変を生かすも殺すも我々今後の働き如何にある」（高山岩男）というように、日中戦争を正当化する言辞に言い換えることが容易に可能なのだった。平たく言ってしまうなら、「世界史」は東亜新秩序や大東亜共栄圏ヴィジョンなどといった発想を支える論理として典型的なものだったわけである。

この座談会はアジア太平洋戦争が開戦する直前にあたる一九四一年の一月二六日に行われたものであるが¹¹、開戦後にも「世界史」は戦争を肯定するロジックとして機能しつつあった。たとえば高山岩男は『世界史の哲学』（岩波書店、一九四二年九月）のなかで、アジア・太平洋戦争を受けて「世界史の転換」をむしろ強調してさえている。

満州事変、国際連盟脱退、支那事変と、この世界史的意義を有する一連の事件を貫く我が国の意志は、ヨーロッパの近代的原理に立脚する世界秩序への抗議に外ならなかった。昨年十二月八日、対米英宣戦と共に疾風迅雷の如く開始せられた大東亜戦によつて、旧き近代の世界秩序を打破し、新たな世界秩序を建設しようとする精神は、愈々本格的な姿を現し、これは今日の世界史の趨勢にもはや動かすべからざる決定的方向を与へるに至つた。世界史の転換がいはれるのは、今日の世界大戦がもつこの性格を捉えていはれるのでなければならぬ。

こうして高山は、「世界史」そのものの根本的理念を哲学的に検討することを「世界史の哲学」と呼んで、従来のヨーロッパ中心の「普遍的世界史」と区別して、東アジアを含めた「特殊的世界史」という概念を提唱している。このように高山が開戦後も「世界史」の視座を留保していることは、後述するように横光の「旅愁」が変質するのと対照をなしている興味深い。

さて、京都学派に代表される「世界史」のヴィジョンの転換は、とくに日中戦争がはじまった時期から知識人の間ですでに論究されていた¹²。そして、横光の「旅愁」も間違いなくこの「世界史」の言説に位置づけられているのである。ここでは、横光と関係の深か

つた三木清を参照しながらこの問題を考察することにした¹³。

三木清は日中戦争が起きる前後の比較的早い時期から「世界史の見方」の必要性を説いていた。また「日本」が「東洋」に拡大されるプロセスについても、「支那事変の影響のもとに、「東洋思想」とか「東洋文化」とかといふ問題が新たに日程に上り始めたのも決して偶然ではない。かくて今や「日本的なもの」は「東洋的なもの」にまで拡大されやうとしてゐる」（『日本の現実』、『中央公論』、一九三七年一月）というように、日中戦争によってエピステーメーが変動したことを正確に分析し、かつ「東洋の統一」に対して批判的な態度を示している。もともと三木はそれ以前の日本主義にも批判的な立場をとっており、歴史を發展過程と世界史的連関という二つの観点から考察するべきという史観を一貫して主張していた。「現代日本に於ける世界史の意義」『改造』、一九三八年六月）では、日中が衝突するに至った事態について「歴史の理性」を探ることで「世界史の意味」を付与しなければならぬと説いている。

現在起つてゐる出来事のうちに我々は歴史の理性を発見し、これに従つて出来事を指導してゆくやうにしなければならない。かやうな理性的意味は直接には発見することができず、その出来事が無意味に見えるといふことも可能である。しかし、そのやうな場合には尚更らそれに対して歴史の理性の立場から新たに意味を賦与することに努力する必要がある。テオドル・レツシングの言葉を転用すれば、歴史とは「無意味なものに意味を与へること」である。新たに意味賦与がなされることによって不可逆的な時間も可逆的になされる。支那事変に対して世界史の意味を賦与すること、それが流されつつある血に対する我々の義務であり、またそれが今日我々自身の生きてゆく道である。

この「無意味なものに意味を与へること」——さきの座談会の言葉で言い換えれば、危機としてではなく新しい秩序として捉える、というような発想を可能し日中戦争の進展を正当化させていたのは「世界史」の視座にほかならなかつた。

「現代日本に於ける世界史の意義」を読むと、日中戦争を発端にして「日本回帰」の志向が後退するとともに「東洋」という観念がいかに浮かびあがつたのかがよくわかる。三木は「支那事変を契機として従来の日本精神論に新たな転回が必要である」と強調し、「日本と支那とが結び附くためには東洋といふものが考へられるであらう。日本精神の問題は東洋精神の問題を離れて考へられない」と述べている。ここでは「日本精神」の純潔性が否定されて「東洋精神」へと拡大されていることを確認しておこう。三木の論考もやはり、血に基づく「日本」の民族主義から、いかに「東洋」という共同体へと変えていくかが問われているのである。

かくして、まさにそこから、支那事変の含む世界史的意味は「東洋」の形成である
と見ることができらう。日支提携といひ日支親善といふのは、これまで世界史
的な意味においては実現されてゐなかつた東洋の統一がこの事変を契機として実現
されてゆくといふ意味でなければならぬ。

このような日中戦争を肯定的に解釈してしまう思考の背景には、二つの歴史意識が潜ん
でいる。ひとつは「日本文化の特殊性に対して支那人がこれを尊重することを求めるのは
正当である、けれども同時に我々は支那文化の特殊性に対してこれを尊重しなければなら
ぬ」という中国に対する歴史意識であり、もうひとつは「東洋の形成といふ世界史的意味
は、日本の世界史の舞台への登場が西洋の近代文化との接触によつて可能になつたやうに、
西洋との関係を無視しては考へられない」という西洋に対する歴史意識である。中国の歴
史と西洋の歴史への関心が「世界史」的布置を実現させる装置として機能しており、日中
戦争によつて生じたこれらの歴史意識こそが歴史的であつたことを明示しているのであ
る。三木は「東洋の統一」が日本の一方的な支配を意味しない、帝国主義的ではないこと
を繰り返して説いているが、こうした多様性の言辞を弄することこそが新しい秩序を肯定
するロジックとなつてゐることは、さきに述べたとおりである。三木が「理性」を重視し
てゐるのに対し京都学派四天王が「道義」を重視してゐるといふ差異は認められるのだが、
結局のところ、「今日、真に行動的な民族は世界史の新しい統一の意識をもつて現はれて
来なければならぬ」と述べる三木と、「世界史の主体は、そんな意味で国家的民族だと思
ふ」と主張する京都学派四天王には通底する部分がある。

横光はこのような三木の論考に対し、「スフィンクス」(『改造』、一九三八年七月)のな
かで次のように反応してゐる。

三木清氏は「現代日本に於ける世界史の意義」といふ改造の文章の中で、「理論上
の誤謬はまた究極に於て実践上の成功を齎らし得るものではない」といふ言葉で、世
界の歴史に於ては結局は論理が勝つものだと言ふ意味を述べてゐる。これは正しくま
たこの評論は堂々として明快であつたが、この言葉一つのために、どんなに多くのも
のが困り果て疲れ果てたかといふことも、作家は一度は考へねばならない。

道理と論理は自ら違ふ。道理は論理をもときには間違ひとせず、東洋生活の判断力
である。(中略)人々は国家の中にあるときにはときとして国家を忘れるが、国家の
危機に際しては、これを滅ぼすものと善戦すべきことを教へて来た伝統の心理を感じ
る。この場合世界史の立場から日本の精神を見なければ、論理の誤謬になるといふ観
念はそれは哲学であつて必ずしも文学ではない。(中略)文学には文学独自の哲学が
ある

このように哲学と文学との違いを示したうえで「東洋生活の判断力」としての「道理」を強調しているが、しかしながら、三木と京都学派にそれほどの差異がないのと同様に、横光もまた「世界史」の論理に依存してしまっていることに変わりはないのである。ここでは、三木の文章についての解釈が適切かどうかや、「論理」か「道理」かのいずれを強調しているかが問題なのではない。横光が「東洋」への視座に基づいて歴史への関心を高めて「世界史」の言説に反応し、「日本人は「自分のこと」を考へる場合にも、「自分のみ」については絶対に考へるものではない」というように、日本のみを思考する純潔性を否定する姿勢へといつのまにか変化していることが注目されるのである。

しかしながら横光と京都学派との決定的な違いは、アジア・太平洋戦争をきっかけに「世界史」の視座をどのように修正したか、という点である。たとえば、さきにも述べたように高山岩男はむしろ開戦を受けて「世界史の哲学」を改めて強調しており、世界史にヨーロッパ外世界を表出させようとする意図から、「歴史性即時間性」という従来の歴史哲学の観念を批判して「同時に空間性（地域性・地理性）を必須契機とする」ことが必要だと述べている。これに対し、開戦とほぼ同時に連載がはじまった横光の「旅愁第三篇」を読むと、明らかにこれまでのヨーロッパを舞台として西洋人や中国人などを登場させていた小説の空間的な拡張りは後退し、逆に「時間への旅」の様相を呈して歴史へと逆行しただすのである。

五節 おわりに

本稿では、「旅愁」の改稿過程における問いから出発して、日中戦争下の横光の言動における「世界史」の視座との関係性について検証した。この視座に基づいて「旅愁」のエクリチュールが屈折し、「矢代の巻」には登場しなかったはずの中国人の高有明やピエールというフランスの若い書記官が『第一篇』で加筆され、オペラのシーンを中心に日本・中国・ヨーロッパという三つのトポスが錯綜した「世界」の縮図として「続篇」の舞台が整えられているのは明らかであろう。

しかし、横光の「世界史」的視座は前述のようにアジア・太平洋戦争の開戦によって継続しにくいものとなり、「旅愁」の物語もまた日本・東洋・西洋という空間的な拡張りを維持できなくなっていく。その代わりにテーマとなっていくのが、「続篇」の結末あたりで唐突に問題となった千鶴子のカソリックと、それに対峙するために横光が援用しはじめる古神道の相関関係である。しかし、この新たなテーマが見出される背景には、「続篇」における「世界史」との遭遇があったことを改めて強調しておきたい。

¹ 「旅愁」は初めに『東京日日新聞』『大阪毎日新聞』の両紙に連載されたが、盧溝橋事件をきっかけに中断したことを横光自身が戦後に懐古している。『旅愁第一篇』（改造社、一九四六年一月）の「後記」に「昭和十二年の四月から東京大阪の毎日新聞に旅愁を連載した。七月七日、日支事変が始まった。その日、自分から申し出てこの作を中絶した。六十二回目である」とある。

² 『東京日日新聞』に第一回が掲載されたのは四月一四日であるが、『大阪毎日新聞』には一日早い一三日に掲載されているので、ここでは四月一三日からとした。

³ 『東京日日新聞』連載の最終回に「矢代の巻終」と付記されていることから。

⁴ 『文芸春秋』での連載一二回の終わりに「作者附記——本誌に連載した旅愁は昭和十二年五月六月の二ヶ月間、大阪毎日、東京日日の両紙夕刊に連載したものの続篇である」と付記されていることから。

⁵ 保昌正夫『横光利一』（明治書院、一九六六年五月）

⁶ 「旅愁」の日本回帰ないし日本主義についての先行研究は、小田桐弘子「日本回帰——横光利一の場合」（『横光利一比較文化的研究』、南窓社、二〇〇〇年四月）、渡辺一民「日本への回帰（上・中・下）——横光利一『旅愁』をめぐって——」（『文学』、一九九四年四・七・一〇月）、木村友彦「横光利一研究「日本回帰」という問題——『旅愁』をめぐって——」（『白門国文』、一九九六年三月）、西田玄『旅愁』における日本的なるもの——横光利一の俳句観——」（『俳句文学館紀要』、一九八八年八月）、菅沢知子「横光利一『旅愁』の周辺——その〈日本主義〉——」（『大学院年報（立正大学）』、一九九七年三月）などがある。しかし、これらはいずれも日中戦争以前と以後のテキストの異同をふまえてはおらず、その決定的なエピソードの変動を認識していないところに見落しがあると思われる。

一方、松本道介は「日本回帰の内実——横光と三島の場合——」（『新潮』、一九七三年一月）横光の日本回帰への傾斜は「昭和十一年の欧州旅行によつて強められ、さらに日中戦争から日米戦争への時期に向つて深刻の度を加へ、それが一種の神がかりに近づくことさへあつた」と、その内実における変化があることを示唆しているが、具体的にどのような変質があつたのかまでは分析していない。これに対して木村友彦の別稿「観念からの脱却——横光利一『旅愁』試論——」（『中央大学国文』、二〇〇一年三月）では、『旅愁』における〈日本回帰〉の質の変遷」に着目しており、「矢代は観念的な〈日本〉像を盾に、観念の中でヨーロッパとの対抗戦を行うのであるが、ヨーロッパ滞在中に顕著であつたこの傾向は、日本に帰国後、変質をきたすという点で、同時代文学・思潮との関わりの中で見逃すことができない問題を孕んでいる」と指摘をしている。しか

し、帰国後の矢代を問題とする以前に、日中戦争下において書かれた『続篇』における日本回帰の質の変動をまず検討する必要があるだろう。

このように先行研究の問題点は、「旅愁」の新聞連載を中断させた盧溝橋事件というメルクマールがあまり意識されず、日中戦争の前と後での日本回帰の変質に対する考察が充分でないことに尽きる。

⁷ 神谷忠孝『横光利一論』（双文社出版、一九七八年一〇月）

⁸ しかしながら、神谷忠孝の論考のなかで「矢代の巻」では、日本主義者矢代とヨーロッパ主義者久慈が、議論においても、千鶴子との関係においても拮抗しており、そのモチーフは、「またとない、東洋と西洋とのこの大きな違ひを知る機会」というところにあった」とあるが、この解釈は適切でない。というのも、この上記のように「またとない、東洋と西洋とのこの大きな違ひを知る機会」という記述は新聞連載時には書かれておらず、『文芸春秋』に「続篇」が連載されるのに伴って加筆された、日中戦争勃発後の思想の枠組みに基づく意味づけだと考えられるからである。また、この箇所は「最初の日」と題して一九三九年九月の『改造』に掲載されたものであり、欧州大戦の開戦を念頭におきながら加筆したとも考えられる。「矢代の巻」とはまったく異なる分節によって日本・東洋・西洋の想像的地理が構成されていることに注意しなければならない。

⁹ 森かをる『『旅愁』における《支那》・人民戦線——昭和十三年の横光利一——』（『名古屋大学国語国文学』、一九九六年一二月）でも、『支那』をめぐって久慈と矢代は対立しているのではなく、「東洋」という点で一致しているのである」と指摘されている。

¹⁰ この二つの文は初出にはない。

¹¹ この座談会が掲載された『中央公論』に、「十一月二十六日夜／於京都円山左阿弥」と付記されている。

¹² 高山岩男も『世界史の哲学』のなかで、「世界史の哲学」について発表することにしたきっかけが「支那事変」にあったことを述べている。

¹³ 横光と三木との関係については、森かをるの前掲論文および伴悦「横光利一と三木清——一九三〇年代から四〇年代にかけて——」（『横光利一研究』、二〇〇三年二月）でも検証されているので参照されたい。

第三章 「旅愁」

——アジア・太平洋戦争下における「座標軸」の転換——

一節 はじめに

横光利一の「旅愁」は、日中戦争の本格化（盧溝橋事件）からアジア・太平洋戦争を経て、その戦後まで連載が継続した稀有な文学作品であり、その表象は歴史上の大きな局面ごとに目覚ましい転換を繰り返していった。本論の第二部第四章では、盧溝橋事件前の「旅愁」について、また前章では事件勃発後からアジア・太平洋戦争の開戦前までの「旅愁」を検討してきたわけだが、前章で確認したように対米開戦後はそれまでの日本・東洋・西洋という空間的な拡がりが無効になっていく。本章では、一九四二年一月に連載が開始された「第三篇」以降を検証し、「旅愁」がアジア・太平洋戦争下でどのような転換を果たしたのかを考えたい。

この問題設定は、次の成瀬政男との対談における横光の発言を出発点としている。

横光 しかし、科学のほうは、疑問を持つてゐてもやつてるものの位置が動かないからいいですね。僕らのはうは、こつちの位置も動くんです。向ふも動くかはりに、こつちも動くんです。

成瀬 支那事変が起るとか、大東亜戦争が起るとかなると、自分の心持ちも刺戟を受けて動いてゆくんですね。

横光 動くですね。自分の座標軸といふんですか、それが動いてるんです。いろいろなことで動いてゆくほうが、ほんたうか、動かさないほうがほんたうか、その点が非常にむづかしいです。動き出すと苦しいです。しかし、動いていった以上は動くやうな真実が必ずあるので、忠実に動くままに随つていってみよう、といふやうな気もある。その方が正しいんだから。——それで僕は襖をやったんです。

（「日本科学の母胎について（対談科学時評）」、『科学朝日』、一九四三年三月）

自分の座標軸が動く、と横光が感じているのは、成瀬が言っているような「心持ち」という単純な内容ではないだろう。「大東亜戦争」に直面した「旅愁」が大きな転換を果たしたと考えるとき、即座に想起されるのはやはり「古神道」という問題であろう。実際、従来の研究においても「古神道」は戦時下の「旅愁」を考えるうえで中心的なテーマとして扱われてきた。しかし、「古神道」をこの作品の主題と見做すことは妥当なのかどうか——本章はその前提に立ち戻り、戦後の文脈において「古神道」を中心化してきた従来の

研究に疑問を投げかけるものである。

本章では、(一)「旅愁」のテクストが第二次世界大戦の開戦やアジア・太平洋戦争の開戦に遭遇した過程を辿ったうえで、(二)「古神道」がどのような文脈で援用されているかを分析し、(三)それが援用されるに至った前提として考えられる「カンソリック」という問題を前景化することにより、「旅愁」における「古神道」言説の脱中心化を図ることにする。

二節 「最初の日」から「十二月八日」まで

ドイツによるポーランド侵攻を発端とした第二次世界大戦の開戦に伴い、『改造』は一九三九年九月に「欧洲大戦臨時増刊号」を刊行して一冊まるごとこの大戦の特集を組んだ。横光利一の短篇「最初の日」(『改造』、一九三九年九月二八日)は、このなかの小特集「回想の欧洲」の一項として掲載されたものである。

「回想の欧洲」の他の執筆者——市川左団次「欧洲の想ひ出」と川島理一郎「二十五年前の巴里」と比べると、「最初の日」は少し特異な位置にあることが一見してわかるだろう。そもそも掲載箇所が文芸欄ではなく(この号の文芸欄は「戦争小説」の翻訳で占められている)、また「編輯後記」でも「横光利一、市川左団次、川島理一郎諸氏のヨーロッパ随想」とあることから、少なくとも編集側からは随想を要求していたであろうと想像される。しかし、ひとり横光だけは小説の形式を選んでいること、しかも盧溝橋事件による中断を挟んで『文芸春秋』誌上に連載を再開し、なお連載中であった「旅愁」の一篇として描出していることが注目される。

冒頭に「一人の人間、それも日本人が初めてパリへ現れた一週間のまごまごした気持を次のやうに書いた」とあるように、「旅愁」の主人公矢代がパリへ到着して間もなくの場面である。パリ到着時の回想については、一九三七年の『東京日日新聞』『大阪毎日新聞』における連載(第20回)でも描かれてはいるが、「最初の日」はこの箇所に対する大幅な加筆修正に相当する。そして、この改稿過程にこそ日中戦争下における一九三九年特有の意味付けがなされていることを見落としてはならず、かつ「欧洲大戦」への視座が組み込まれていることに留意する必要がある。端的に言えば「東洋」および「西洋」双方のシニフィエに変容が起きているのであり、ここではその歴史性に焦点を当てて考察してみたい。到着の夜から日が明けて、矢代ははじめて「全く聞いたことも見たこともない古古とした数百年も前の仏閣」のようなパリの様相を眼にする。「からからに乾いたこの薄黒い石の街」を前にして、矢代のなかで日本は「新しい野菜と水ばかりの日本」というように仮構される。そして、パリに対する憧憬を隠さないヨーロッパ主義の久慈に対して、「東京とパリのこの断層が眼に見えぬのか。この断層を伝つて一度でも降りてみる。向ふの岸へいつ出られるか一度でも考へたか。」と憤りを抱く。この「断層」を自覚することによって、

パリ・ヨーロッパ・西洋に身体を置く矢代のなかに、東京・日本・東洋が新しく観念化されていく。「旅愁」には、この意識された「断層」が再生産されることで、分節化された「東京とパリ」が「日本とヨーロッパ」へ、そして「東洋と西洋」へと拡大されながら、それぞれの意味内容が歴史化されていく過程を見ることができるのである。

「足場の一つもないこの大断層にどうして人々が橋をかけるか」を問う間もなく「いつの間にかそこを飛び越して先づパリに自分がゐる」状況のもとで、矢代は「何の飛びつく足場もなく喘ぎ悩みつつふらふらしてゐる」ことしかできずにいる。それが、オートイユの競馬場を訪れた日を境にして変わっていく。「人がみな造つた」という人工の街で、「乾燥した無人の高い山岳地帯」であるパリにいて、この競馬場で馬の走る姿から「生き物の美しさ」に触れた矢代は「それまで麻痺してゐたやうな矢代の感覚を擦り落してくれた」ように感じる。これを契機に「パリの静な動かぬ美しさが、少しづつ頭に沁み入つて来て、」今までぐらぐらと煮え返つてゐたやうな頭の中の動きが、街の形に応じて「静ま」るようになる。矢代の内部でこのような変化が生じたのはなぜだろうか。競馬場にて矢代を魅了した美しさとは、「日本でも見馴れた洋種の馬とここの馬の共通した栗毛の光つた美しさ」であり、矢代は「日本」と「ここ」にそれぞれ対等の美を見出すことで、「高きに登つてゐる」わけでも「下からパリを見上げる」わけでもない視座から、「日本」を可視化する装置を内面化させることができたためではないだろうか。ゆえに「彼の信じることの出来るものは、先づ今は自分の中の日本人よりないと思つたからである」という述懐へと至るのであり、「断層」の再生産がその一方に身を置きながらも一方を想像することを可能にしているのである。

一見、こうした矢代の発想は一九三七年の新聞連載時にも共通して見られるもののように思われる。たとえば、「自分の中には民族以外に、何もないからだ」（第27回）というよな発言と呼応するものかもしれない。しかし、「東京」と「日本」が併列に記述されることはあつたとしても、それを「東洋」まで拡大させてしまうという企図は新聞連載時にはなかつたはずである。一九三七年における矢代の日本主義を示す記述が『旅愁 第一篇』（改造社、一九四〇年六月）へ改稿される過程で少なからず削除されており、一九三九年になると矢代が唐突に東洋主義者へと書き換えられることについては、すでに本博士論文の第三部・第一章で検証した。「日本人が初めてパリへ現れた一週間のまごついた気持」を描くとしながら、それを「またとない東洋と西洋とのこの違いを知る機会」と拡大させてしまう強引さは、「最初の日」に限らず日中戦争下の「旅愁」全般に見られる傾向であつた。「断層」によつて可視化されるものが一方では日中戦争下の「東洋」であり、一方では第二次世界大戦下の「西洋」であるという枠組みの再構成を見落とさないでおく必要があるだろう。

前章で確認した「続篇」と併せて、この時期の横光はこのように「東洋」と「西洋」という言葉のシニフィエの揺らぎをめぐる言説の再編成を試みていかねばならなかつた。

「続篇」（第二篇まで）の後、横光は「旅愁」第三篇の書き出しにかかりたくこ二三日机に対つてゐるが、筆は容易に定まりさうにもない（「日記から」、「八雲」一九四二年八月）と苦悩しながら「第三篇」を一九四二年一月より連載開始するが、その執筆中、アジア・太平洋戦争の開戦というかつてない大きな局面を迎えることになる。

十二月八日

戦はつひに始まった。そして大勝した。先祖を神だと信じた民族が勝つたのだ。自分には不思議以上のものを感じた。出るものが出たのだ。それはもつとも自然なことだ。自分がパリにゐるとき、毎夜念じて伊勢の大廟を拝したことが、つひに顕れてしまったのである。夜になつて約束の大宮へ銃後文芸講演に出かけて行く。帰途、自分はこの日の記念のため、欲しかった宋の梅瓶を買った。（「日記から」前掲）

ここには横光が「第三篇」の執筆を開始してから間もなく、開戦を迎えた一九四〇年代の思想史の枠組みへと包みこまれる転換点が刻印されているのであり、その意味でこの日記は「第三篇」以降の「旅愁」の出発点となつていふ言つてよいだろう。事実、「第三篇」が連載第一回の直後に四か月もの中断を挟んでゐるのを観れば、横光利一が開戦をきっかけにして「旅愁」執筆の軌道を修正してゐるとも推測できる。さらにここで記念に買ったという梅瓶と、敗戦後に最初で最後の「旅愁」の続編となつた短編「梅瓶」とが偶然の一致だとは考えられない。「日記から」のこの記述は、「第三篇」から「梅瓶」に至るまでの過程をよく指標しているものであり、その決定的な転換点が存在することを注意深く確認していく必要がある。「第二篇」までは日中戦争下のコンテキストで読まなければならぬのに対し、「第三篇」以降（四か月の中断以降）はアジア・太平洋戦争下のコンテキストで読まねばならない、とする成田龍一¹の指摘はこうした背景をよく捉えたものである。

このような問題設定のもとに「第三篇」以降を読み進めようとするとき、検討を避けることができないのは、後期の横光の文学に必ずつきまとう「古神道」に関する言説である。つまり、日中戦争下における「東洋」「西洋」というイデオロギーの思索が、横光のなかで「古神道」に辿りついた論理を分析しなければならぬ。この「旅愁」における「古神道」の検証²については、一九九七年に森かをる³と河田和子⁴がそれぞれ綿密な分析を提示したことで大きな進展があつた。いずれも筧克彦・川面凡児・小泉八雲などに見られる古神道の言説と横光との影響関係が詳細に整理されたものであるが⁵、本稿では二氏の論考に示唆を受けつつ、前述した「東洋」「西洋」のシニファイエの揺らぎという観点とともに考察してみたい。「旅愁」の主人公矢代は、新聞連載時の「日本主義者」から日中戦争下のコンテキストの下で「東洋主義」に拡大されながら、アジア・太平洋戦争下では「古神道」論者として三たび変貌を重ねたことになるが、「旅愁」において「古神道」はなぜ

援用されるに至ったのだろうか。これまでの研究は、横光が「古神道」を援用した背景ばかりが問題とされてきた傾向があるが、後述するように、「旅愁」において「古神道」が語られるのはほんの一部にすぎない。「古神道」に関する記述をより相対的に見るために、まず次節で、「古神道」がどのように引き出されているかを確認してみよう。

三節 「古神道」援用の論理

そもそも「古神道」とは何か。笈克彦の『皇国之根底 萬邦之精華 古神道大義』（清水書店、一九二二年一〇月）では、冒頭の「緒言」のなかで「古神道」は次のように定義されている。

さて本題に古神道と致しましたのは、ただ便宜の爲めで、日本国の成立当初より存在し、之と共に發達すべく、又現に發達しつつある「かみのみち」をいひ表はさんと欲したのである。詳しくいへば、神代の諸神が事実によりて示され、天照大神により確定せられ、神武天皇を透して此世に実現せられたる、生活規範の普遍的理想にして、神と人と及び人と人との相互の合一並に其形式を其内容となし、普遍的信仰、並に普遍的実行と離れざるものをいふのである。

辞書的にいえば外来の宗教などによる影響を受ける以前の日本独自の神道ということになるわけだが、「旅愁」における「古神道」については、笈克彦や川面凡児や小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）の影響が論じられてきた。横光自身がこの三者にそれぞれ言及していることが、その影響関係の典拠となっている。

① 吉川英治・横光利一「日本の精神」（『文芸』、一九四二年一〇月）

横光 川面といふ人は、なんですからね、「みそぎ」といふものを近代になつてした最初の先祖みたいなんですよ。もう亡くなつてゐるけれど、なか／＼豪い。帰つてから僕は早速その人の日本最古の古神道といふのを読みましたが、思想は立派なものです。外国のいろいろな思想家のうちではベルグソンが一番近づいて来てますね。最古神道の思想に……。

② 「日記から」（前掲）

笈克彦博士の「国家の研究」を読む。この書物は非常に優れた著作だ。日本の特種性をただ単なる特種性とは見ず、各国の多様な国家といふ普遍性の中から日本の要素を抜き出し、それを特種性にまで高めてゐるところが、優れた文化論といふべきだ。「国権は太郎次郎の力以外のものではない」といふ国権の定義の単一性が先づ自分を

打った。

「各自が自己の本心に服従すること。自己が自己の誠心を以て己を制御し支配する」とが、即ち国権に服従する所以であり、また国権が各個人を支配する所以である。

——国権は太郎次郎以外のものではない。天皇の総攬を通じて、太郎次郎の帰一せる一心が国権である。」

これは日本の特種性の説明としては簡にして要を得てゐるが、ここに見逃し得ない一層徹底した文化論の要素となるべきことが掲げてある。

「皇国の国法は随神道、即ち、古神道の顕現に外ならぬ。各人は即ち八百萬の神の顕現であり、国法は神道の現れである」

日本人を神として取扱ふ我が国の国法のこれが原理である。この爽やかな、愛情に満ちた意識を根柢としてゐる文化について、怪しむに足るだけの何が自分らの知の中にあるだらうか。

③ 「神々に祈る——櫃原神社に参拝して」(『東京日日新聞』一九四二年二月三〇日)

小泉八雲の、「神国日本の道徳は世界最高のものである。今幾十年かすれば、日本の道徳は世界の国法を美しくするであらう。」と云つて死んだ。あのギリシヤ人の預言さへ泛ぶ。以来四十年、もし八雲が生きてゐたら、現在のわが国の姿を見て、あまりにも早く彼の預言的的来たことに、言なく私同様、ここにかうして立ち、畝傍の山を拝したにちがひない。

これらの著作に横光が影響を受けていることに異論はないが、これらの「古神道」言説のうち横光がどういう部分に注目したか、ということを問題にしてみたい。後述するように、古神道と異国の宗教(とくにキリスト教)との関係について述べた箇所には横光は関心を示したのではないか、と考えられるのである。

さて、このように三者を時系列で並べてみると、みそぎに参加したことから横光は「古神道」へ傾倒するきっかけを得ていることが判明する。みそぎに参加した横光は早稲田の同級生だった出石誠彦と二〇数年ぶりに逢うことになるが、この出石が川面凡児の弟子であったことから、横光は川面凡児の『日本最古の神道』という著作を読んでいる。この当時に今泉定助が会長となって「川面凡児先生十周年記念会」が設立されており、この出石誠彦がその全集編纂主務委員となつて一九三九年八月から一九四二年二月までに全一〇巻の『川面凡児全集』を刊行している。出石との関係や刊行の時期から推測して、横光はこの全集のうち『大日本最古の神道——禊と神化——』を初収している『川面凡児全集 第六卷』(川面凡児先生十周年記念会、一九四〇年八月)に目を通してゐる可能性が高い。

さきの吉川英治との対談で横光が「三種の神器」についても触れているが、川面の一九二四年一二月の著作『三種の神器』が初収されているのも第六卷である。横光はみそぎと出

石誠彦を通して川面凡児と「古神道」への経路を見出したと考えてよいだろう。川面凡児の「禊流」と呼ばれる神道霊学とその実践は、大政翼賛会によって全国的な規模に拡大しており、横光が一九四一年八月に参加した修練会もそのひとつであったと考えられる。続いて、横光がこの川面凡児のどの部分に反応しているかを確認してみよう。さきの吉川英治との対談「日本の精神」において横光は、主に二つの観点から川面凡児の「古神道」を援用しているのがわかる。第一に、キリスト教に代表されるようなものはや日本から排斥しえない「外国から入つて来たもの」をいかに根拠づけるかということであり、第二に、「物の秩序とそれから心の秩序が分裂」という近代科学の二元論に対するアンチテーゼを唱えるためである。何よりもまず横光は「古神道」の非排他性に着目しており、そのなかでもとくにキリスト教の受容をその例として引用していることが注目される。

横光 「みそぎ」といふことを非常に暗いもののやうに今までの人に思はせた点があるやうですが、「みそぎ」の精神といふのは、朗々たる、春風駘蕩たる精神ですね。萬葉集の精神ですからね。外国から入つて来たものを生かすといふ精神があるのですよ。

横光 ほう、それに今度はキリスト教が入つて来てみますからね。それだからキリスト教も日本へ入ると生かされるのですよ。これを死なせと民衆は思つちやゐない。他の国へ入つたよりも日本へ入つたほうが生かされるのですよ。今の知識階級は、キリスト教を信じなくてもキリスト教みたいなものですからね。それだつて、僕はやはり最古の古神道が僕らに流れてゐるから生かされるのだと思ふ。それがなかつたら、仏教も、キリスト教も、科学も全部駄目になつてしまふと思ふね。

横光が「古神道」を語ろうとするその前提には、キリスト教を受容したことが既成事実となつた「今」に対する批評意識があつたのであり、必ずしもその反対（「古神道」がア prioriに存在することによつてキリスト教が成立可能になる、という議論）ではないということには注意しなければならない。このことは、「旅愁」で「古神道」が語られるのが「第三篇」の終盤であり、千鶴子が「カソリック」であるという問題が前景化するのそれよりずっと前の「第二篇」であつたことから明らかである。

次に、「古神道」のこのような非排他性を理論づけるために、ヨーロッパの科学的思考に見られるような二元論を否定しなければならなくなる。

横光 自我といふものを古神道は重んじてゐて、しかも精神と肉体とを放してはゐない。肉体これ即ち精神と解してします。

横光 あのと、この頃よく言はれる、物の秩序とかそれから心の秩序が分裂して来て、それで近代が困つてゐるといふ、つまりあれなんかでも、古神道といふのはね、そんなのやはり分けてない。つまり精神とは肉体だといふ解釈ですな。

このように横光は①非排他性と②一元論の観点から古神道に興味をもっている。後者の二元論の否定については、川面凡児『大日本最古の神道——禊と神化——』の「有我」および精神と物質の「不二一体」の思想とほぼ一致していることが確認できた。しかし、前者の非排他性に相当するものについては、川面の前掲書では特に目立つ記述はない。キリスト教と「古神道」とを関係づけるような発想を、横光はどこで獲得したのかが次の問題となるだろう。ここで、やはり寛克彦を横光が「古神道」の最大の典拠としていることが否定できなくなる。ただし、さきにも述べたように横光があくまでキリスト教との関係から「古神道」を援用していることに注意しなければならないので、ここではキリスト教がどのように扱われているかという観点で寛克彦を読みなおし、先行研究とは別のアプローチによって「旅愁」に照らし合わせることにしたい。

寛克彦の『皇国之根底 萬邦之精華 古神道大義』には全三章のうちの一章を「古神道と外教との関係」についての論に費やしている。まず、その「総論」において、

古神道は主理的宗教ではないが、理は一切之を排斥しない。世界の公平なる正理は之を網羅し、之に反せざることを主義として居るから、是等の領域につき、自ら煩瑣なる独断などを設けて、其動かすべからざること等を主張しない。

古神道は尚世界教の方面を有する。古神道と他の宗教との関係を明らかにするには、之に関して必要なる古神道の性質を反省して見ねばならぬ。其性質さへ分かれば、外教に対する関係もまた自ら解決できる。古神道は国民的宗教たるに止まらず、尚世界的宗教たるの性質をも具へて居るものである。

と述べている。寛はそれまでの章でも同様に「古神道」の非排他性・普遍性を繰り返しているが、外教との関係もまたその延長で論じているのである。

その後、寛は「日本国内に於ける古神道と他の宗教との関係」と「世界に於ける古神道と他の宗教との関係」の両方のケースを検証しているのだが、注目されるのは、前者において第一に「古神道の寛容性」が説かれている点である。

古神道は如何なる宗教をも寛容して拒まず、ただ其精神により是等を同化し、是等を統括することを本旨とする教である。古神道は本来が公平なる普遍的信仰である、人類の表現者として日本民族が信ずべき教、行ふべき道であるから、何にても正しい

ものなら、ちやんと入り場所が在る、広く諸教を容るる度量を有し得る素質がある。又古神道と離れられぬ第一事実も、私がなく確実健全であるから、公平なる信仰なら何がはいつて来ても、為めに潰さるるかなどと震え慄へる必要がない。夫故古来外来の教を喜んで迎へ、其真髓を己れに同化せしめ、其末葉を利用することに勉めて居る。

続けて寛克彦は、この「寛容性」に基づいて「古神道」が国教となるべきことを説いている。なぜなら、「国教たる宗教が、寛容的、包括的、共存的、協和的の性質を有するものである程、之を国境に高めた所で、他の宗教を信奉する自由を奪ふことなどはない」と定めとされる。これに対し、「基督教の如きは、排他性を有する宗教として著しい標本であるから、之を国教にすることは信教の自由を犠牲にすることなしには出来ない」と見做している。このようにキリスト教に対して「専制的」「排他的」「独占的」などというレッテルを押しつけ、そのアンチテーゼとしての「寛容的」という価値を「古神道」あるいは日本そのものに付与するというモチーフは、横光の「旅愁」にも確実に共有されている。

横光が言及している寛克彦の『国家之研究』においても、「寛容主義」および非排他性・普遍性などが繰り返しかえし述べられている。『国家之研究』は一九一三年一月に刊行されたものだが、その後寛博士著作物刊行会によって多少の訂正を加えたうえで一九三一年一月に再版されている。横光がどちらの版を参照したかまでは特定できないが、「日記から」で引用されている文章は一九三一年版でいえば一〇〇―一頁、および一三頁と一致する。

『国家之研究』では第五章に「古神道弁」と題して「古神道」について詳述している章が設けられている。その冒頭が「第三篇」以降の「旅愁」の物語内容と密接して注目される。

古神道に対して、基督教信者は如何なる態度を採るべきか、此の問題は少くとも、日本人として基督教を信奉し、日本人に対して基督教を伝道するに当り、或は日本国内に於て基督教を拡張するに当り、必ず先づ研究して置かねばならぬことである。(中略)基督教を他人の教だとか、別世界の道だなどとは思ひはせぬ、益益之を完成することを古神道信者たる私共の自由と信じ、責任と感じ私共の希望として居る。

というように、寛克彦はキリスト教を念頭に入れて「古神道」論を展開している。注意すべきなのは、キリスト教を容認するさいに「日本人として」「日本人に対して」「日本国内に於て」という前提が仮構されている点であり、「古神道」が普遍的原理として他の宗教にも通底することを証明するために、あえて他教を信奉する日本人の存在が要求されていることである。

日本人として仏教なり基督教なりを信ずるのは、即ち古神道者として外教の調書を我に採納し統括する所以であり、外教を以て古神道者の表現とし其の延長とする所以であるから、斯かる真面目なる日本人は愈々澤山無ければならぬ（後略）。

ここに「古神道」の「寛容主義」の実態が露呈していると言つてもよいだろうし、「旅愁」が矢代の「古神道」と千鶴子のカソリックの相克の物語へと構造化されるモチベーションをここに読みとるのも誤りではあるまい。寛はこの章の結論において、

又、遠慮なく申せば、基督教が若し古神道と融合する暁には、西洋在来の歴史的事
情より偶然附加し来りたる不純の形式並びに彼の思潮に伴うて存する偶然なる迷信
を一掃し、誠に真に「イエスキリスト」の証得せられし信仰の精髓を自由に発揚した
る更に雄大精緻なる日本基督教を創設せしめ、西洋諸国世界全般に逆輸出せらるべき
ことは必定である。古神道が国教たり世界教たり萬邦の精華であるといふことは、決
して他の宗教が卓越したる世界教たる所以を排斥したり、妨害するものではない、各
教共にお互の教格を尊重し、其の不純を救済し、相容れ相容れられて世界に角逐す
ることが古神道の大趣旨である。是が即ち宗教の真の帰一の意味である。

とまとめているが、このような「古神道」とキリスト教の「融合」がテーマとなつてい
るところを、横光利一は敏感に反応して物語に取りこんだと言えられるのである。

四節 主題としての「カソリック」

「それは、君はカソリックだからでせう。そこが僕と違ふんだなア。」と「カソリック」
のことを問題化しはじめたのが、「第二篇」の終盤であつたという点はもう少し着目して
よいだろう。「古神道」を語るのよりもはるかに先に、横光は「旅愁」で「カソリック」
をめぐる問題を小説のテーマとして設定していたのである。

横光が「続篇」になると「歴史」への視点を強めていくことはすでに前章等で指摘した
が、「第三篇」になるとさらに「歴史」への叙述に対して意識的になっている。というよ
りも、あたかも別の作品であると言えらるほど叙述の性格が変わってしまった。

矢代が歴史に興味を感じ始めたのは、つまりはこの父母の家系の相異がもたらした
が、平民の父が妻の実家の士族の遺風を尊びつつ、秘かに自分の平民をも誇るところ
は、他にまた特別の理由のあるのが後に分つた。

母の実家の瀧川家の先祖は、士族とはいへ徳川系の譜代大名の士族ではなく、その
以前の最上義光の家臣であつた。最上家が上杉謙信に滅ぼされて家臣の瀧川家も野に

隠れてゐるとき、徳川時代となつた。そして、土地を鎮める手段として瀧川家は新しい城主に召し抱への身となつて再び立つた關係上、それ以来この地には徳川譜代の土族と、最上時代の旧土族との土に対する伝統の古さを誇りあふ意識が、いまだに他のどの土地よりも濃厚に顕れてゐるのが現状だつた。(中略)

日本でもつとも保守主義と謳はれてゐるこの地の人心の底を、かうして流れ続けてゐた意識の中に瀧川家があつたといふことは、矢代家にとつては一つの幸福な事であつた。何ぜかといふと、矢代の家も最上義光と同時代に、彼の九州の先祖の城はカソリックの大友宗麟によつて、日本で最初に用ひられた国崩しと呼ばれた大砲のために滅ぼされたのである。

家系を語るこのような歴史叙述は、新聞連載時はもちろんその「続篇」にも、その後にとめられた『第一篇』『第二篇』にも見られない特徴である。そして、こうした矢代の歴史叙述には千鶴子の「カソリック」問題との關係が必ず根底あると判断してよい。「第三篇」ではキリスト教の歴史が頻繁に書かれており、その關係でキリスト教の問題が集約されている戦国時代へも焦点をあてている。

今の矢代にとつて、日本の歴史の中でもつとも興味を感じる部分は、自然とこの彼の先祖の滅んだ戦国時代であり、またその時代を代表する信長、光秀、秀吉の三人物の好奇心の動きであつた。そして、これら三人物がそれぞれ一番興味を感じもし、また悩まされたのは、揃ひも揃つてカソリックといふ西洋を形造つた異元素だつたといふことが。——それもカソリックに興奮した三傑の原因は、それが運んで来た大砲といふ暴力の親の火薬が元であつてみれば、その火薬を生んだ親たる自然科学に対するとき、矢代も、今もなほ信長や秀吉のやうにそれに驚異を感じてゐる自分だと思つた。しかもその科学と千年もつれ争ひ、はては結婚さへしてしまつたかのやうに見えるカソリックといふ精神の原動力をなす異国の神の——千鶴子や細川ガラシヤの信じたエホバとその子キリストの精神に関しても、彼は知らぬままには素通りして過ぎることが出来ないのであつた。そればかりではない、人人のよく用ひる世界史といふものの内容も、所詮はカソリックと自然科学の歴史と見ても良いと矢代には思はれる。

最後の「世界史」を「カソリック」と自然科学の歴史と同一視するような発想は、まさに「第三篇」とそれ以前のテクストとを分断するものである。矢代はこのように歴史研究の対象として「カソリック」を選定していき、その「一番彼の不案内な宗教と科学の歴史」を調べるために上越の山へでかけることまでする。矢代にとつて宗教と科学は切り離せないものとして認識されており、宗教と科学のそれぞれの歴史を別個に見るのではなく、「この二つの歴史の争ひもつれたその接点の歴史」について探究しようとするのである。

自分の先祖の問題とも関連する「カソリック」をいかに超克するかに悩まされる矢代は、しだいに「千鶴子の信じてゐるカソリックも許容し得られる雅びやかな気持ち」を求めますが、最初にそのような寛容の力を矢代に与えていたのは「伊勢の大鳥居」であった。これが「第三篇」の終盤になってからようやく「古神道」の話へと繋がっていくのであり、しかも「カソリック」史との関係のなかでのみ援用されていることは繰り返さず指摘しておきたい。こうして「古神道」は「カソリック」を許容する思想的根拠として矢代に引用されはじめる。

「まあ、一切のものの対立といふことを認めない、日本人本来の希ひだと僕は思ふんです。ですから、たとへば、キリスト教や仏教のやうに、他の宗教を排斥するといふ風な偏見は少しもないのですよ。千鶴子さんなんかの中にもこの古神道は、無論流れてゐるものです。(中略)

「ぢや、古神道つて、カソリックも赦して下さるものなのね。」

寛克彦の古神道論で確認したように、「古神道」は「カソリック」を許容するというよりは、その寛容性を裏づけるために「カソリック」の存在を要求する。つまり「古神道」にとつて外教の存在は必要不可欠なのであり、千鶴子の「あたしにも古神道はあるんだと思つて安心しましたわ」というような発言もまた「古神道」のイデオロギーに組みこまれてしまうことになるのである。

また、小泉八雲(ラフカディオ・ハーン)を引用するときもやはり「カソリック」との関係においてである。

「ヘルンといふこの外国人は、ギリシヤやローマの一番健康なころの精神が、地球上のどこに残つてゐるか自分探し廻つたといふのです。そして、どこからももう片鱗も夢みることさへ出来なくなつて、絶望の挙句ふらりと日本へやつて来たところが、思ひがけなく、ここがそれだと思つたといふのです。そして、日本の神道に流れてゐる道徳こそ世界最高の道徳で、今にこの道徳のために世界の国々は美しくなるだらうと云つて、死んでゐるのですよ。ところが、このヘルンが日本で見た道徳といふのは、みそぎを中心にしたものなんです。ギリシヤもローマも、一番精神の健やかな時代には、日本のみそぎと同じものを、やはりやつてゐたと書いてあるんですよ——」(中略)

「ところが面白いのは、ヘルンは外国人のくせに、クリシタンといふカソリックが日本に入つて来たことを非常に怨めしく思つてゐるのですね。あんな極悪非道なものが、日本人に祖先崇拜をやめよと命令して進んで来たから、忽ち大虐殺にあつた。あの虐殺は当然のこと、日本は立派だつたと誉めてさへゐるのです。」

ラフカディオ・ハーンの引用のされかたを見ると「カソリック」を排斥するような観点として見做されているので、やはり横光が「古神道」を援用するときには筧克彦の方面を参考に行っていると判断すべきであろう。ただ、「旅愁」における「古神道」はそれが先行研究で問題になってきた重要度に比べると不思議だが、テキストのなかで語られるのはわずかな分量でしかない。

その一方、「カソリック」については「第三篇」以降ずっと継続して語られている。「第四篇」では矢代は「カソリックの宗麟に滅ぼされた矢代家の特殊な歴史」を千鶴子に知らせるかどうかで葛藤し、ついに「これだけは隠すべきことではない」と判断して手紙のなかで打ち明ける。とはいうものの、すでに「第三篇」で矢代は千鶴子に、自分の家の持っていた城が宗麟によって滅ぼされたことを告げている場面があるので、「第四篇」ではじめて千鶴子がそのことを知るように書かれているのは横光の誤認である可能性もある。しかし、その誤認が生じるほどに横光は「カソリック」の問題を矢代に悩ませつづけているのであって、言い換えればそれは「古神道」によっては「カソリック」を超克しえないことを意味してさえいると言えよう。

以上のように確認してみると、「旅愁」における「古神道」は「カソリック」という主題に対する傍流と解釈したほうがよさそうである。つまり横光は「カソリック」の歴史を語るコンテキストのなかに古神道を引用したのであって、その逆ではない。あくまで「カソリック」という問題圏のほうが「古神道」より上位のレベルに位置するのである。

五節 おわりに

「古神道」は確かに「いかがわしい」。ものであり、その言説を分析することによって「旅愁」の本質を探ることの意義を否定したのではない。しかし、それを同時代の「世界史」の議論や「近代の超克」へと結びつける以前に、「旅愁」のテキスト内における連関が十分に検証されなければならないだろう。「古神道」は、必要以上にその問題ばかりがクローズアップされることでその内実が見えにくくなっている。

そこで本章では、「古神道」が「旅愁」において千鶴子が「カソリック」であるという問題と切り離せないことを手掛かりに、横光が「古神道」に関する典拠とした文献の援用の論理を見直した上で、「古神道」言説の脱中心化を試みた。その過程においてこそ、横光がアジア・太平洋戦争を前に大きく転換した、東洋・西洋という思想の枠組を超克する（日本）の志向が見え隠れしてならないのである。

- 1 成田龍一「戦時の自画像——『旅愁』をめぐる——」、『横光利一研究』、二〇〇一年三月
- 2 「旅愁」における古神道を本格的に論評した最初のものとしては、菅野昭正『横光利一』（福武書店、一九九一年一月）が、寛克彦やラフカディオ・ハーンとの比較にうえで検討している。
- 3 森かをる「横光利一と神道思想——『旅愁』の古神道について——」、『日本文学』、一九九七年九月
- 4 河田和子「戦時下の横光利一と『みそぎの精神』——近代科学の超克としての古神道（上）——」、『近代文学論集』、一九九七年一月
- 5 この他の論考としては、濱川勝彦『論攷 横光利一』（和泉書院、二〇〇一年三月）がやはり寛克彦との関係性を論究している。
- 6 『川面凡児全集 第六卷』（川面凡児先生十周年記念会、一九四〇年八月）では、目次では「日本最古の神道」と表示されているが、本編では「大日本最古の神道——禊と神化——」となっている。
- 7 菅田正昭『複眼の神道家たち』（八幡書店、一九八七年六月）等を参照。
- 8 田口律男「いかがわしい『旅愁』の〈日本〉」、『早稲田文学』、一九九九年一月

第三章 「夜の靴」

——最後の〈長篇小説〉とその「真一文字」の〈日本〉言説——

一節 はじめに

横光利一の「夜の靴」（鎌倉文庫、一九四七年一月）に対する従来の論考がそうであったように、本稿もまた、終戦後まもなく発表されたこの作品を〈戦後〉や〈敗戦〉という言葉のもとに究明する宿命を負っている。「夜の靴」は、「戦後文学の最高の作品の一つ」（佐藤一英¹）であり、「ほとんど唯一の敗戦文学」（神谷忠孝²）であり、「敗戦日記」の体裁の作品」（梶木剛³）であったように、〈戦後〉や〈敗戦〉という歴史的文脈のなかに布置された本文として扱われてきた。また、この作品をもって、「敗戦の悲しみを全心にまともうけとめた作家」（保昌正夫⁴）という横光像も提示される。確かに、内容の類似する作品「古戦場」（『文芸春秋』、一九四六年五月）や「夜の靴ノート」と呼ばれる素稿を含め、この「夜の靴」は敗戦直後の文学者とそのテクストの位相を知ることのできる貴重な資料であり、〈戦後文学〉における横光利一の存在をも問い直さずにはいない重要な評価軸であることは、いくら強調してもしすぎることはないであろう。

一方で「夜の靴」は、従来よりあまりにも〈戦後〉や〈敗戦〉によって語られてきたことで、テクストが本来内在しているはずの時間が〈敗戦〉という一つの時間軸（〈敗戦〉後の「いま・現在」）に収縮されてしまっているのも事実である。「夜の靴」には、しかしながら、これを〈戦後文学〉と規定するのには抵抗を感じさせるようなテクストの断片が見受けられる。そこでは、〈敗戦〉という現実の時間とは別個の時間が形成され、横光がこれまでに書き継いだ〈長篇小説〉に共通するような〈日本〉言説が見出される。そしてこの点にこそ、この作品が単なる日記でも随筆でもなく、小説であることの本質があると考えられるのである。

本稿では、「夜の靴」に至る以前に書き継がれた横光の〈日本〉をめぐる長篇小説の来歴を視野に入れながら、「夜の靴」に見られる〈日本〉表象の読み直しを図るものである。従来この作品が戦後の問題圏のなかで捉えられる傾向にあったのに対し、戦間期および戦時下との接続のなから再評価することをその目標とする。

二節 遡行する〈戦後〉

日記形式で綴られたそれぞれの節の見出しには具体的な日付は明示されていないが、「夜の靴」は「八月」一五日から「十二月」八日まで、すなわち、アジア・太平洋戦争の終戦

から開戦へと遡行するような構造をもつ。その著名な書き出しは、野中潤⁵が「技巧的」と指摘しているように、敗戦を迎えた〈日本〉それ自体を表象していると言えるだろう。

八月——日

駆けて来る足駄の音が庭石に躓いて一度よろけた。すると、柿の木の下へ踴れた義弟が真つ赤な顔で、「休戦休戦。」といふ。借り物らしい足駄でまたそこで躓いた。躓きながら、「ポツダム宣言全部承認。」といふ。

「ほんとかな。」

「ほんと。今ラヂオがさう云つた。」

私はどうと倒れたやうに片手を畳につき、庭の斜面を見てゐた。なだれ下つた夏菊の懸崖が焰の色で燃えてゐる。その背後の山が無言のどよめきを上げ、今にも崩れかかつて来さうな西日の底で幾つもの火の丸が狂めき返つてゐる。

「とにかく、こんなときは山へでも行きませうよ。」

「いや、今日はもう……」

義弟の足駄の音が去つていつてから、私は柱に背を凭せかけ膝を組んで庭を見つづけた。負けた——いや、見なければ分らない。しかし、何処を見るのだ。この村はむかしの古戦場の跡でそれだけだ。野山に氾濫した西日の総勢が、右往左往によぢれあひ流れの末を知らぬやうだ。

「躓く」「倒れたやうに」「崩れかかつて来さう」「西日」といった敗北を連想させる一連の言葉と、「菊」「火の丸」という〈日本〉を象徴する言葉を併行させることで、「終戦の日」を疎開先の農村における家の「庭」という空間で巧みに表象している。「右往左往によぢれあひ流れの末を知らぬやう」という「西日の総勢」とは詰まるところ、敗戦に直面して行末を見据えることができずに混乱する〈日本〉ないし〈日本人〉を指しているのだろう。

従来の研究には、「夜の靴」において、このような〈敗戦〉という出来事を作家がどのように捉え、どのように「再出発」や「再生」を果そうとしたかを論点とする傾向がある。言い換えれば、「夜の靴」は「戦後文学」、あるいはこれをさらに細分化させた「敗戦文学」という範疇において論じられてきた。たとえば神谷忠孝は、「敗戦の衝撃をまともに着けながら、その痛みを芸術への信頼によって克服しようとする」こと、またその芸術観について「敗戦を機に近代的な芸術家意識、啓蒙的な立場を反省し、近代以前の職人的な意識にまで回帰していった」⁶という変化を指摘し、〈敗戦〉からの「再出発」の内実を論じている。玉村周⁷も、「敗戦の憂き目から、横光がいかなる方法で立ち上がるうとしていたか、またいかなる作家的出発を試みようとしていたか」について、「どのような時代であつても価値の変わらないものがあることを信じて、新たな出発を試みようとする」⁸が、「それを模索することが横光の敗戦後の課題であつた」としている。伴悦⁹も、〈敗戦〉下にお

いて「自由やデモクラシーがいわれ、また文学者の戦争責任が問われるなか、横光は全身でこれらを受けとめ、虚脱感に鞭打ちながら、いままでの自己を拭い去ろうとして、思い直し真率直截にいまの自分を語ること」が「夜の靴」であったとする。これらに共通するのは、〈敗戦〉を契機とした「変化」を読みとろうとする観点と言えるだろう。このような〈敗戦〉を通じて「夜の靴」を語ることで、しかしながら、テキストは不本意な制約を受けているとも考えられる。

〈敗戦〉を契機とした「変化」があるという措定は、戦時下の自己との差異を前提とすることになる。これをもっと明瞭に言おうとするならば、伴悦の指摘する「いままでの自己を拭い去ろう」という志向や、菅野昭正の「横光利一は敗戦前の《過去》の自分を「獄に入れる」べきものと認定し、自分自身の「知性改造」をひそかに志していたのではないか」という提起のように、「いままでの自己」や「《過去》の自分」を清算して「いま」「《現在》」において自らを再発見するモチーフに行き着くだろう。言うまでもなく各論者は横光が戦時下の言動を否定したところで再起を図ろうとしていると述べたのではなく、むしろそれとの連続性に留保しようとしながら論じているところに、この作品を扱う諸論が必ず直面するアポリアがあるように感じられる。〈敗戦〉からの「再出発」という変化Ⅱ差異において「夜の靴」を語ることは、「いま」「《現在》」という現実の時間を特権化しながら、「夜の靴」の〈戦後文学〉としての性格を正当化してきた。この種のアポリアは、〈敗戦〉を契機とした「変化」に一定の留保を置こうとする西尾信明¹⁰⁾の、「言葉の正確な意味において戦後文学ではなく〈敗戦〉文学なのだといえる」としながらも、「横光利一と戦争および〈敗戦〉という問題を考えようとした時、それらは連続するものとして、さらにいえば横光の世界観は基本的には変化しなかったものとしてとらえることが必要」とし、〈敗戦〉を「戦前からの思考の延長線上で克服しようとしていた」とする論考にも共通して待ち受けていると思われる。「変化」があるかないかという問い自体が、〈敗戦〉という区切りⅡ分節を自明のものとしてしまうからである。また、「個別の戦争体験から生まれた様々なる〈敗戦〉は、共同体験に収斂させることの出来ない「不通線」をそこに孕んでいる」とし、それにもかかわらず継続していく「戦後」を見つめる試み」として「夜の靴」を読む黒田大河¹¹⁾の論考は、「再出発」というモチーフにはあまり与せず〈敗戦〉の表象を読み解いており、これまでの「夜の靴」論とは〈戦後〉の捉え方において一線を画すように考えられるが、やはり〈敗戦〉という「いま・現在」を焦点化する論理自体を問うというものではないだろう。もちろん、このように指摘することで「夜の靴」の〈戦後文学〉としての可能性を否定したのではない。草稿（「夜の靴ノート」）や「古戦場」といった先行する作品の記述行為を経て後、初出にあたる「夏臘日記」では冒頭の引用のように〈敗戦〉という事実から書き出ししているように、何より横光自身が〈敗戦〉や〈戦後〉を強く意識している。書き出しに限らず、〈戦後〉という「いま・現在」から戦争を語る記載は少なからず散見される。

私はこの世界を上げての戦争はもう戦争ではないと思った。批評精神が高度の空中で、淡淡と死闘を演じてゐるだけだ。地上の公衆と心の繋がりは断たれてゐる。それにも拘らず、観衆は連絡もなく不意にころころ死んでいく今日明日。たしかに死ぬことだけは戦争だが、しかし、戦争の中核をなすものは、何といつても敵愾心だ。いつたい、今度の長い戦争中で、敵と呼ぶべきものに対して敵愾心を抱いてゐたものは誰があつただらうか。事、この度の戦争に関する限り、この中核を見ずして、他のいかなることにペンを用いようとも無駄である。

わざわざ好意的でない見方をせずとも、このような戦争に対して中立的な記述を行つてゐることは、戦後の「文学における戦争責任の追求」（小田切秀雄）に代表されるような戦前・戦中に活躍した作家らへの過剰な糾弾を意識せざるを得なかつた結果という一面もあつたと思われる。「この中核を見ずして、他のいかなることにペンを用いようとも無駄である」という指摘は、そういう意味では、『新日本文学』や『近代文学』といった戦後に新しく出発した批評に対する警鐘と読むこともできるだろう。「夜の靴」は確かに、〈戦後〉との関係性を主張している。しかしながら、このような〈戦後〉に関わる文章を拾ひ集めて横光が〈敗戦〉をどう捉えたかを整理したところで、それは「夜の靴」の論究として成立するものだろうか。むしろ、仁平政人¹⁾が「微笑」に関する論考のなかで「再出発」にせよ「鎮魂」にせよ、〈敗戦〉をそれ以前（戦時）からの一種の切断の契機として捉える視点が、しばしば暗黙裡に議論の前提として持ち込まれてきたように見える」が、「このような戦中期との切断を語る横光の言説自体が、戦中期の思考・論理からの明瞭な連続性を孕んでいるということも看過されるべきではない」と指摘したように、〈戦後〉や〈敗戦〉という枠組みをひとまず括弧に入れて捉え直すことを「夜の靴」のテキストは要求してはいないか。

このような問いを立てるのは、「夜の靴」のテキスト自体が、上述のような「いま・現在」という小説の時間を拒否していると思われてならないからである。最初に述べたように、「夜の靴」はアジア・太平洋戦争の終戦から開戦へと遡るような形式となっている。「十二月——」ではなく「十二月八日」という固有性をもった日付とともに作品は閉じられている。同じことが、「旅愁」の最終章となつた「梅瓶」（『人間』一九四六年四月）についても指摘できる。「梅瓶」という標題そのものが、横光の「日記から」（『八雲』、一九四二年八月）に書かれている、「十二月八日」に「宋の梅瓶を買つた」という記載に接続されるからである。

十二月八日

戦はつひに始まつた。そして大勝した。先祖を神だと信じた民族が勝つたのだ。自

分は不思議以上のものを感じた。出るものが出たのだ。それはもつとも自然なことだ。夜になって約束の大宮へ銃後文芸講演に出かけて行く。帰途、自分はこの日の記念のため、欲しかった宋の梅瓶を買った。

「夜の靴」にしても「旅愁」にしても明示的に「十二月八日」を指標することで、テキストは〈戦後〉や〈敗戦〉という「いま・現在」に停まってははいない。ここには、明らかに小説の時間の捻れがある。不本意な制約を受けていると述べたが、「夜の靴」のテクストの本質は、上述の〈戦後〉との関係性を主張するような種々の文章よりも、こうした「いま・現在」という時間の特権性を無効化するように機能するエクリチュールにこそ存在すると考えたいのである。

三節 最後の〈長篇小説〉

このような〈敗戦〉と同じように自明視された前提が、「夜の靴」にはもう一つある。初出である四作品のうち「夏臘日記」「木蠟日記」「雨過日記」はそれぞれ標題になるほどに「日記」であることを示しており、横光による『夜の靴』の「あとがき」にも明確に「日記である」と記されている。それにもかかわらず、「夜の靴」は一貫して「小説」として扱われて来た。本文がいわゆる日記体の形式を取っていることは扱措くとしても、果してこの作品を無条件に「小説」と分類してよいかという疑問が残るのである。『定本横光利一全集 第十一巻』（河出書房新社、一九八七年五月）にしても、『横光利一事典』（おうふう、二〇〇二年一〇月）にしても、いずれも「夜の靴」を「小説」に分類しながら、その根拠についての記載は見られない。井上謙¹³の評伝においても「内容的には、随筆的なスタイルをもった「比叡」「榛名」「厨房日記」などの系列に入る」としており、その内容（シニフィエ）の共通性から「随筆」ではなく「随筆的なスタイル」の「小説」群に含ませている。一方で、初出誌に再び目を戻すと、「夏臘日記」「木蠟日記」はいずれも「創作」欄。「小説」欄ではなかったが、「秋の日」は「小説特輯」の一篇として、「雨過日記」は「創作」として収録されている。その初出からして「夜の靴」のジャンル形成は不規則に進行したのであり、『欧洲紀行』（創元社、一九三七年四月）のように随筆と扱われる可能性も否定できないはずであった。しかし、そのようなジャンルに対する問いは忘却されたところである。あるいは不問に付したまま、「夜の靴」に対する解釈は生成されてきた。ようやく、「夜の靴」の言説空間が「虚構化」されていることを指摘する井上明芳¹⁴の近年の研究により、この作品の「小説」としての可能性を説く評価軸が提示されはじめたのが現状であると思われる。

ここでは、「夜の靴」を従来とは別の角度から照射することで、改めて「小説」として再評価することを試みたい。契機となるのは、前掲「あとがき」にある以下の文章である。

前から私は、一日人が生きれば何らかの意味で、一つ、その日でなければ出来がたい短篇が有るべきものと思つてゐた。その結果は自然にこの夜の靴のごとき、百ばかりの短篇集となつたが、しかし、短篇集とはいへ、日日の進行であるからは、これを貫く糸は天候と季節の変化である。変るものが貫いていくといふ自然の法は、ここでも私は身をもつて感じ、やうやく私なりの窮乏を切りぬけ得られた。と同時に、私の感管の長篇ともなり変つた。(中略)

全篇を夜の靴として長篇としたことは、短篇の集合を一つに揃へてみた軸座の色調が、稲を作る村に枝葉をひろげた大元の家の歎きを主軸として、少しは展けたかと思はれた結果である。

「八月——日」という「一日」ごとに綴られた断片が「その日でなければ出来がたい短篇」であるとするなら、なるほどそれを寄せ集めれば表面的には「百ばかりの短篇集」となつただろう。しかしそれは、「変るものが貫いていく」という時間を内在化して「私の感管の長篇」に変わったとされる。ここでの「長篇」とは、単に「短篇」を集めて相応の分量となつたものを意味するわけではない。「日日の進行」「天候と季節の変化」を生きる身体による、「変るものが貫いていく自然の法」を耐え得るようなテクストの生成こそ、「長篇」と読み替えるべき固有の時間軸を帯びはじめるのである。それと言うのも、「夜の靴」が「長篇」と規定されるとき、横光のそれまでの営為——すなわち「純粹小説論」「改造」、一九三五年四月）に立脚する一連の〈長篇小説〉の系譜に位置づけられ、もはや戦中・戦後という時代区分では裁断できないようなテクスト同士の時間を形成するからである。

すでに本論第一部にて論じたように、横光はとりわけ「文芸復興」と呼称された時期を中心に、同時代のメディアの動向に呼应しながら〈長篇小説〉を書くことの必要性を説き、その実践として新聞や婦人雑誌を舞台として連載小説を書き継いでいった。「純粹小説論」でも列挙していた「上海」「寢園」「紋章」「時計」「花花」「盛装」「天使」、そしてそれ以降に発表された「家族会議」「旅愁」「春園」「実いまだ熟せず」「鴉園」「夜の靴」といった〈長篇小説〉の系譜は、それぞれ単体としてよりは相互に意味作用しあうテクストの集合と捉えられる。詳述は拙論(前掲)に譲ることにして省略するが、横光が「純粹小説論」のなかで「短篇小説では純粹小説は書けぬ」「少量の短篇では、よほどの大天才といへども、純粹小説を書くといふことは不可能」「百枚や二百枚の短篇ではどうするわけにもいかない」と繰り返しながら志向した「純粹小説」Ⅱ〈長篇小説〉は、同時に、「いままであまりに考へられなかつた民族について考へる時期も、いよいよ来たのだ」と自覚するよいうな〈民族〉の規範、さらには「日本から日本人としての純粹小説が現れなければ、むしろ作家は筆を折るに如くはあるまい」という〈日本〉という規範を背負うことにもなつた。横光の〈長篇小説〉を特徴づけるのは、そのような〈日本〉をめぐる表象の蓄積である。

本論第二部で検証した内容を改めて振り返ってみよう。

たとえば、五・三〇事件下の上海を舞台に一〇年も日本へ帰っていない主人公の造形から〈日本〉を模索した「上海」。連載当初の主人公公参木には「外界」との闘争のなかで自身が日本人であることを強いられるジレンマが特徴的に顕われていたのに対し、後半になるにつれ、「日本の故郷の匂い」を感じる場面に典型的なように、むしろそのような宿命としての〈日本〉を受け容れる姿勢へと転じていく。満州事変（一九三一年九月）および第一次上海事変（一九三二年一月）を挟んで転回していく日本の動向と併行しながら、しかし別個の時間軸において、テキストにおける〈日本〉は「変るものが貫いていく」と言うべき様相を呈する。

あるいは、祖先から貫き流れて来たその家系独特な紋章の背光を負う、主人公雁金の相貌や行為から〈日本精神〉の実物なるものを見出した「紋章」。雁金の造形は、当時〈日本精神〉という言葉が流行していた最中、それに応答するようなかたちで表象されたものと考えられる。しかしながら横光は、横行する国体的論的な〈日本精神〉論にも、またそれを批判する言説にも、さらにはその先に登場した保田與重郎に代表される「日本浪漫派」の主張にも合流せず、「四人称」という固有の語りによって〈日本精神〉を問い質した。

そして、二・二六事件および日中戦争勃発の時代に渡欧と帰国を経験した〈日本主義者〉を主人公とする「旅愁」。「マルセーユが見え出したときから、絶えず考へてゐるのは、日本のことばかり」であり、「血液の純潔を願ふ」とまで修辞される「日本主義者」矢代の表象は、明らかに一九三七年頃に流行した〈日本的なもの〉に与する性格を持っていた。一方、盧溝橋事件に伴う日中戦争の本格化に伴って中断した「旅愁」は、その再開後の戦時下においては京都学派に代表される「世界史の哲学」や著名な座談会「近代の超克」のイデオロギーと交錯しつつ、「東洋主義」と書き換えることが可能な〈日本主義〉や、近代それ自体を問うべくして辿り着いた「古神道」への傾斜を見せるなど、「変るものが貫いていく」時代にあつて〈日本〉の表象は錯綜を極めた。だが、表象それ自体は「上海」から「旅愁」まで、途切れることなく継続したのであつた。

横光は〈長篇小説〉を書くことを通じて、そして書き継ぐことを通じて、〈民族〉や〈日本〉という規範に捕われながら、しかしその〈日本〉を表象しつづけるテキストの集合体を構築したと言えるのではないだろうか。〈長篇小説〉群はそれら自体が一つの〈小説〉であるかのように、一貫して〈日本〉を表象しつづけた過程そのものであり、「夜の靴」は（横光自身の死をもって、結果的に）その終点として長い長い物語のシークエンスを閉じたのである。そうした〈日本〉の表象を重ねる過程のなかで、その最大のメルクマールとなったのが「戦はつひに始まった」と日記に記さざるをえなかった「十二月八日」であることは疑いようがない。「夜の靴」も「旅愁」もこの日に遡行する構造を見せているのは、単に終戦から開戦を回顧したり記憶したりといった記述行為のためではなく、テキストにおいては〈長篇小説〉として編成される上で必要不可欠な仕掛けであつたと思わ

れる。このようなテキストの所作を捉えるとき、「夜の靴」を〈戦後〉という言葉で括ることに、どれほどの意味があるだろうか。この作品の持つ時間的な拡がり捉えるには、〈戦後〉という言葉ではあまりにも狭すぎるのである。

それでは、「夜の靴」における〈日本〉表象とはどのようなものであったかを、以上のような観点から改めて確認することにしよう。

四節 〈私〉と「記憶の絵」の〈日本〉

前節で確認したような〈長篇小説〉の系譜における〈日本〉表象の継続を、あたかも集約したような一文が「夜の靴」にはある。

現在のわが国の文学者は、自分の心のどの部分で外界と繋がつてゐるのであらうかといふこと。自分らは日本人なりといふ定義と、自分らは東洋人なりといふ定義と、自分らは世界人なりといふ定義と、自分らは敗戦国なりといふ定義と、これらの四種の定義が出されてゐる。そして、その中の一つを選定してそれぞれ幾何学をしなければならぬといふ場合が起れば、文学者の心はどの定義を選ぶかといふ問題だ。

「上海」から「旅愁」そして「夜の靴」まで、〈日本〉の表象が「変るものが貫いていく」ことになったテキストの来歴を、この一文は語っている。すなわち、〈日本精神〉や〈日本的なもの〉という同時代の言説と関わりながら〈日本〉を問い、戦時下においてそれが東洋主義と置き換えることが可能な危うさを留めつつ、「世界史」のように西洋中心の既存価値を脱中心化させた世界を構想する発想に接近することもあった後、ようやく敗戦という時間のなかで〈日本〉が改めて問われるという一連の流れにおいて初めて表象たりうることを、テキストは要請しているのである。繰り返しになるが、「夜の靴」のテキストは四つ目の定義（「自分らは敗戦国なりといふ定義」）のみに限定できない固有の時間軸を有していると考えられる。

このような固有の時間軸に着目するとき、「夜の靴ノート」から「古戦場」を経て「夜の靴」へ至る成立過程においてきわめて特徴的である、語り手の〈私〉の前景化という問題が改めて重要になってくる。「夜の靴ノート」も「古戦場」も本家と別家の老翁を軸としつつ、米をめぐる農村の人々の動向を描くことが全体を占めており、語り手（〈私〉）への言及はほとんど見られない。これが「夜の靴」になると、語り手〈私〉に関する情報が、時には「横光利一」という固有名を伴いつつ、大幅に書き加えられている。ここに、「古戦場」がその初出誌の末尾に「第一章完」とあったように〈長篇小説〉としての構想がありながらも継続せずに頓挫し、「夏臘日記」として最初から書き直されなければならなかった理由があるように思われてならない。すなわち、「夜の靴ノート」が〈長篇小説〉た

りうるためには、〈私〉という装置がどうしても必要だったのである。

〈私〉が要請される理由は、言うまでもなく、これまでに述べてきた固有の時間軸の形成のためである。「横光利一」という固有名をもった語り手〈私〉の「十年」前、歐洲から帰国したときに見出された〈日本〉とのあいだに一連の時間が生み出されている。

外国から帰つて来たとき、下関から上陸して、ずっと本州を汽車で縦断し、東京から上越線で新潟県を通過して、山形県の庄内平野へ這入つて来たが、初めて私は、あそこが一番日本らしい風景だと思つたことがある。見渡して一望、稲ばかり植つたところは、ここ以外にどこにもなかつたからだつた。その他の土地の田畑には、稲田は広くつづいても中に種類雑多なものが眼についたが、穂波を揃へた稲ばかりといふところはここだけだつた。この平野の、羽前水澤駅といふ札の立つた最初の寒駅に汽車が停車したとき、私は涙が流れんばかりに稲の穂波の美しさに感激して深呼吸をしたのを覚えてゐる。ところが、私は今そこにあるのだ。あときは何の縁もないところのこととして、よもやここに自分が身を沈めようとは思はなかつたのに、まつたく十年の後に行くところのなくなつた私は、偶然こんなところへ吹きよせられようとは、これが私にとつての戦争の結果だつた。そして、私は初めてここで新米を手を受けてみて、米はどこに澤山あらうともこれに代るものは、世界広しといへどもどこにもないのだと思つた。

より正確には、語り手〈私〉を介して固有の時間軸を形成したからこそ、この疎開先である山形県鶴岡市の上郷を「一番日本らしい風景」という〈日本〉の表象として虚構化したのだと考えられる。「私は、日本でもつとも誇りとなるものの一つは農民だと思つてゐるが、もしこれが悪くなればもう日本は駄目だといつても良い」というような農民に〈日本〉を重ねる記述も、「人間研究」という名目で「農村研究」ないし「農民研究」をする語り手〈私〉の観察Ⅱ視点があつてこそ可能であろう。また、たとえば鎌倉文庫から刊行されるさいに、初出にはなかつた「日本人らしい笑ひ」などという加筆の例もある。「夜の靴ノート」から「古戦場」への〈長篇小説〉化が頓挫した一方で、「夜の靴」は「夜の靴ノート」から初出四編、そして鎌倉文庫初収へと至るにしたがつて〈私〉の占める位置が大きくなるとともに、〈日本〉の表象もまた拡がっているのが確認される。

「夜の靴ノート」や「古戦場」にはなかつたはずの、外国での体験の記憶が語られる記述も、上述のような語り手〈私〉による時間の形成に拠るものである。

「僕はここから海までの草原の傾斜を牧場にすれば、いい牧場になると思ふが、と話したことがあるんだ。さうしたら、菅井の和尚さん、専門家がいつか来たときも、ここは牧場としては理想的だといつたさうだ。」

自慢の形になつたが、その実、チロルの草原でこのやうな所に鈴を首につけた牛がひとり歩いてゐたのを思ひ出し、牧場の専門家も同様な所を見て来たのであらうと私は思つたりした。

「そのネクタイはあたしも好きですわ。」

「これか。」

これはハンガリヤで一人の踊子、イレエネといったが、その娘からいま妻が洩したのと同じやうな口ぶりで、誉められたことのあるネクタイだつた。あのダニューブの夜は愉しく私はイレエネから、手を取られて習つたハンガリヤの踊りの足踏みをつま先に感じ、攻め襲つて来るやうな雪の若い群れを見渡しながら、用意はこちらも出来てゐる自信で私は穏やかになつた。

また、村人の会話の発音が「フランス語に似て聞える」という語り手（私）の知覚も、あるいはヴァレリーに関する言及についても、このような記憶の再生と同質のものと言えるだろう。「私は外国から帰つた直後のこと、何とかしてぢかに一度土地といふものへの愛情を感じて見たくなり、少し自分で持つてみたいと思つたことがあつた」という（私）が、このような欧洲体験を主とした回想とともに「一番日本らしい風景」としての上郷を語ることで、テキストは（日本）の表象として現前するのである。

このように（敗戦）という「いま・現在」という時間とは異なる時間軸を開放することこそが、「夜の靴」のテキストにおいて繰り返し実践されているのではないだろうか。しばしば引用される「私は東洋を信じる。日本を信じる。人みな美し」という（日本）をめぐる記述も、一見すると唐突に見えながら、その時間軸において初めて意味を帯び、解釈を要求するのである。従来のように（戦後）や（敗戦）からの「再出発」や「再生」を説くことは、必要以上に「夜の靴」のテキストを現実、あるいは歴史に接着することにもなる。「夜の靴」はむしろ、記憶との接合を頻繁に要求し、〈長篇小説〉としての時間のなかで（日本）の表象として現前することを期待しつづけているように思われる。そのような意味において、「夜の靴」論のなかであまり引用されることのない次の一節が、この作品の本質を顕わしているように見えてならない。

私は戦争中のある日、銀座のある洋食店で夕食を摂らうとして、料理の出るまで一人ぼんやり壁を見てゐたひとときの事をふと思ひ出した。壁にはミレーの晩鐘の版画がかかつてゐた。私は日ごろからこのバルビゾン派の画類には一度も感動を覚えたことがなかつたにも拘らず、野末の向ふに見える寺院の尖塔を背景に、黙禱をささげている若い夫婦の農婦姿の慎しやかな美しさに、突然われを忘れた感動を覚えたことがあつた。私は自分の生活して来た記憶の絵の中から、これと似たことがどこにあつた

かと考へてみたが、暫くは、容易に私には泛ばなかった。しかし、何ぜまたこれほどの簡単な幸福と清浄さが私にも人にも得られないのだらうか。何の特殊な難しさでもないものをと私はそのとき考へ込んだ。(中略) いま、一寸首を縮めて私を見た妻の眼差は、実は、さういふ幸福に似たものではなかつたらうか。

語り手〈私〉の「自分の生活して来た記憶の絵」と結びつこうとするとところに、「簡単な幸福」を享受する可能性が潜んでいる。言い換えれば、〈敗戦〉という「いま・現在」ではなく、〈長篇小説〉という固有の時間においてこそ、「簡単な幸福」が模索されているのである。そこが「夜の靴」が小説たりうる所以となるのではないだらうか。「夜の靴」のテキストは、歴史のなかの實在の時間を文学的統一のうちに組みこみ、上郷という虚構化された場所とともに構築される小説独自の時空間において、横光が戦間期から戦時下にかけて書き継いでいった〈長篇小説〉を近代小説の独自のジャンルとして規定しているのである。

「夜の靴」の〈私〉は当初、「私は東京から一冊の本も、一枚の原稿用紙も持つて来てゐない。職業上の必需品を携帯しなかつたのは、どれほど職業から隔離され得られるものか験しても見たかつた」という意識をもち、「この村の人で、私の職業を誰一人知つてゐるものがないのが気楽である」というように、「文学」という「職業」から離反する志向さえ示していた。しかしながら、上述のように小説として——〈長篇小説〉として生成される記述の進行とともに、〈私〉は「文学」という「職業(労働)」に回帰しようとする。

私たちペンを持つものの労働は遊ぶ形の労働だが、人はいまだにこれを労働と思はない。まことに遊ぶ形の労働なくして抽象はどこから起り得られるだらう。また、その抽象なくして、どこに近代の自由は育つ技術を得ることが出来るだらうか。私は感歎すべき農家の労働にとどき自分の労働を対立させて考へてみる必要があるが、いや、自分の労働は彼らに負けてはゐないと思ふこともたまにはある。

こうして〈私〉は、「私はまだ文学に勝つてはゐないのだ。先づ第一にこれに打ち勝つことが肝要かと思ふ」という思惟に至る。「夜の靴」が、随筆ではなく、小説として「文学」へ回帰するとき、横光が「純粹小説」と呼称した〈長篇小説〉の文学的営為へと接続されるのである。「夜の靴」のテキストは、それ単体で独立してはいない。それはちょうど、「ここを一度通つて来ると、昨日の自分は今今日の自分ではなくなつてゐて、その日はその日なりに人は文学をして来るのだ」という「真一文字の道」のように、それまで書き継いだ〈長篇小説〉において「変るものが貫いていく」という、テキストの継続的な動態そのものなのであった。

このように「夜の靴」が何よりも第一に〈敗戦〉や〈戦後〉の文脈において検証されてきたのは、この作品が冒頭で述べたように文学者がどのように敗戦を受け止めたかを知ることができる資料であるという以前に、横光利一という作家の救済という目的が強かった側面も否定できないだろう。何よりも先に、文学者の戦争責任を初めとする戦後の糾弾から再評価をするためにも、その戦後の「再出発」の本質を示すことは適切な処置であったと思われる。ともかくこのような先行研究の努力を経て、今日ようやく、「夜の靴」が多角的に論じられる素地が形成されたのである。

本稿では「夜の靴」のテキストの在り方を検証し、この作品が先行する〈長篇小説〉に位置づけるべきものという観点を提示した上で、その〈日本〉表象がもつ意義を検討した。作者横光は、その死とともに、〈戦後〉に停まったのかもしれない。しかし「夜の靴」のテキストは、横光自身が生活してきた「記憶の絵」とともに生成し、彼の書き継いだ〈長篇小説〉が作り上げる無二の時間のなかで、今もなお読者の前で「簡単な幸福」を模索しつづけている。

注

- 1 佐藤一英「『夜の靴』について——横光利一論ノート——」、『国文学』、一九六六年八月
- 2 神谷忠孝『横光利一論』、一九七八年一〇月
- 3 梶木剛『横光利一の軌跡』、国文社、一九七九年八月
- 4 保昌正夫『横光利一抄』、笠間書院、一九八〇年三月
- 5 野中潤『横光利一と敗戦後文学』、笠間書院、二〇〇五年三月
- 6 神谷忠孝『横光利一論』（前掲）
- 7 玉村周『横光利一——瞞された者——』、明治書院、二〇〇六年六月
- 8 伴悦『横光利一文学の生成』、おうふう、一九九九年九月
- 9 菅野昭正『横光利一』、福武書店、一九九一年一月
- 10 西尾信明「〈敗戦〉と知識人——『夜の靴』をめぐる覚書——」、『横光利一研究』、二〇〇七年三月
- 11 黒田大河『夜の靴』——〈敗戦〉という不通線——、『解釈と鑑賞』、二〇〇〇年六月
- 12 仁平政人「横断する〈希望〉——横光利一「微笑」における〈戦中／戦後〉——」、『横光利一研究』、二〇〇七年三月
- 13 井上謙『横光利一評伝と研究』、おうふう、一九九四年一月
- 14 井上明芳『文学表象論・序説』、翰林書房、二〇一三年二月

おわりに

一節 本論の研究成果

第一部から第三部までに検証した内容について、日本近代文学に対する研究成果を示し、本論の締め括りとする。

第一部では、本論文の主題である〈長篇小説〉が一九三〇年代において成立した歴史的過程を検証した。横光の「純粹小説論」をはじめとする同時代の〈長篇小説〉の要請が、当時飛躍的に発展していた新聞と婦人雑誌という二大大衆メディアと文学との相互的關係において構築された経緯と、そのメディアを通じて文学者たちが〈民衆〉という思想を内面化していった過程を明らかにしたのが第一章である。この見出された〈民衆〉は、しかしながら、「非常時」の国家情勢のもとで強まる日本主義⇨ファシズム的な動向に安易に迎合するものではなく、また保田與重郎に代表される〈浪曼〉とは一線を画すかたちで形成されていった、もうひとつの〈長篇〉によって可視化されようとした対象であったことと、そしてそれが日本主義⇨ファシズムという同化作用に抵抗するものであったことを論証した。これは、従来にはない横光の文学へのアプローチであるだけでなく、昭和初期を〈長篇小説〉の時代と読み替える文学史の実践になったはずである。第二章では、この大衆メディアと文学との相互的關係を具体的に確認するため、その検討に格好の題材である小説「家族会議」を分析した。ここでは、〈長篇小説〉における〈民衆〉という思想が、「義理人情」という表象によって顕現していることを明らかにした。一方で、この時期の横光の「国語」に対する肯定的姿勢（「国語への服従時代」）が「義理人情」という主題と交錯することによって、同一言語を均質的に消費する大衆メディアにおいて「日本的なもの」という問題規定に接続されていく契機が見出された。小林秀雄が繰り返し述べていたように、〈長篇小説〉と〈民衆〉という問題は、文学のなかで、「日本的なもの」という問題と切り離せない関係にあることが判明した。これにより、戦間期および戦時下にかけて展開された〈日本〉をめぐるテキスト群が、〈長篇小説〉によって解読されなければならない必然性を示すことができただろう。

そこで第二部では、まず戦間期における横光の主要な〈長篇小説〉における〈日本〉の表象を、そのテキストの歴史的同時代性に留意しながら分析した。第一章では「上海」を扱い、その言語都市としての〈上海〉を通じた〈日本〉表象がそれぞれの歴史的局面とともに異なるコンテキストをもって生成されなされた過程を明らかにした。さらにその再生成が、『改造』や『文学クオタリイ』といった雑誌に掲載されるたびに、また改造社からの初版・再版のたびに行われたという、〈長篇小説〉を連載・再刊しうる「場」⇨メデ

イア環境を通じてこそその現象であったことも重要である。第二章では「紋章」を扱い、「日本精神」という言葉に見られるような〈日本〉表象が、同時代において流行していた言説と不可分の関係にあり、それらに対する応答という意味合いで語られていることを検証した。ここでは、その同時代の「日本精神」論によって構築されていた浪漫主義的な自己遡及（日本主義）を批判的に見るのはもちろん、保田與重郎の主張した「日本浪漫派」にも距離を取った〈自由〉が志向されているのを確認した。第一部で述べたような、〈浪漫〉とは異なる文脈をもった〈長篇〉が存在したことを歴史的にも裏付けたのが本章であった。第三章では単行本『歐洲紀行』を扱い、渡欧中の断片的な紀行文のテキストが一冊の本にまとめられる際に働いた〈長篇小説〉の力学を探った。ここでは、単行本化によってテキストが再編されたのに伴い、帰国後のコンテクストにおいて初めて〈日本〉が顕現すること、またそうであるがゆえに同時代のヒューマニズム言説と交錯するかたちで現前していることを明らかにした。第四章では「旅愁」の新聞連載分を扱い、その「日本主義者」とされる主人を中心とした〈日本〉の表象について、一九三七年前後に盛んに議論されていた「日本的なもの」との同時代性を考証した。ここでも、横光が〈長篇小説〉で表象していた〈日本〉が、単にファシズム＝日本主義と連帯するものではなく、また保田や萩原朔太郎の〈浪漫〉的傾向とも通底しないかたちでの現代性の表出であったことを明らかにした。

第三部では、前部で検証したような〈浪漫〉とは異なる〈長篇〉が、戦時下においてどのような転回を果たしたかを確認した。横光にとつて、一九三七年七月七日の「日支事変」（盧溝橋事件）は重大な転機となり、上述のような〈長篇〉の在り方がもはや維持できなくなっていた。第一章では、日中開戦後に連載が再開された「旅愁」の「続篇」、および『第一篇』の単行本化に伴う改稿過程を検証し、開戦前の一九三七年当時の〈日本〉表象が〈東洋〉という視座のもとに拡大されていたことを明らかにした。ここでは、戦争行為や「大東亜」なる理論に積極的意義を持たせようとした「世界史」の哲学の影もあり、「旅愁」における横光の思想的な「格闘」の諸相が窺えた。しかしながら「旅愁」には、さらに重大な転換点、アジア・太平洋戦争の開戦という局面が待ち受けていた。第二章では、前章で確認したような〈東洋〉〈西洋〉という思想的枠組そのものが失効し、「古神道」と「カソリック」の対峙という主題へ転回していった過程を確認した。戦時下の「旅愁」に関する研究は「古神道」というイデオロギー性の際立った言葉に注目しすぎた観があるが、ここではもう一つの主題としたの「カソリック」と相関させることで、「古神道」に関わる「旅愁」の表象の相対化を試みた。それは、京都学派が提唱したような「世界史」の枠組からいかに転回するかの苦悩そのものであったはずである。第三章では、戦後の〈長篇小説〉である「夜の靴」を扱い、本論で論じてきた〈長篇小説〉の系譜を振り返りながら本論の出口とした。ここでは、〈敗戦〉というコンテクストによって〈戦後〉という時間を特権化するのではなく、本論の第二部から第三部までに確認したような戦間・戦中期

の時間との連関のなかで「夜の靴」を見るという観点の重要性を提示した。これにより、従来〈敗戦〉という出来事を文学上の転回と見られてきたが、むしろ「夜の靴」が意識的に遡行しようとしたアジア・太平洋戦争開戦における転回と連関があることが判明した。以上の通り、本論文は一九三〇・四〇年代の〈日本〉をめぐるメディアとテキストの展開の一面を明らかにしたものである。

二節 研究の展望

最後に、本研究において当初より構想にありながら取り上げることを見送った課題、および本研究を推進していくなかで浮かび上がってきた課題を述べて、今後の研究の展望を示すことにしたい。

第一に、横光の〈長篇小説〉は多く書かれたが、本論文で研究の対象としたものは、文学史でも触れられる主要な作品に終始した。しかし、本研究の観点をうければ、これまでの横光研究においても論じられる機会に乏しい作品に光を当てることができる。博士後期課程の限られた研究期間内では、本論の第一部・第一章の冒頭で触れたすべての横光の〈長篇小説〉に触れることができなかったが、最終的にはそのすべてを個々に論じることを目標とするものである。

第二に、第一部で婦人雑誌メディアの発展に関する論証やこれに連載された作品の個別の分析まで本論文内で詳述する構想であったが、調査を進めるなかで、婦人雑誌メディアに関する内容だけで博士論文となりうるほどの膨大な資料に遭遇し、本論文の構成からは外さざるをえなかった。上述した横光の残りの〈長篇小説〉について触れることに伴い、婦人雑誌メディアに関する考察も加えていく予定である。

第三に、〈長篇小説〉というテーマはひとり横光のみに限られる観点ではなく、一九三〇・四〇年代に特有の文学的問題である。横光の作品は、その〈長篇小説〉に関する問題圏の中軸であることに違いはないが、横光の作品のみによって代表できるわけではない。本論文における研究業績を基盤として、横光以外の他の作家へと論点を拡大していくことができる見込みである。

第四に、本論文でいうと第三部にあたる、戦時中の文献に関する調査がいかに困難であるか、また、いまだ明らかになっていない新資料が多く存在することが判明してきた。本論においても新資料を提示したが、今後も資料面の蓄積していくこと自体が重要な課題である。また、横光との直接的な関係はないが戦時下の重要なトピックス（たとえば「近代の超克」等）についても今後の研究において補完していく予定である。

附錄
新資料紹介——『定本横光利一全集』未収録作品——

附録一 隨筆

——「フランスの絵」——

一節 はじめに

現在行っている横光利一に関する書誌の再検討調査のなかで、『定本横光利一全集』に収録されていない隨筆作品が見つかったため報告しておきたい。

「国民社」発行の美術雑誌『国民美術』に掲載された「フランスの絵」という短篇の隨筆で、横光の美術との交流について、また「旅愁」における表象との関連性について示唆に富む作品である（なお、同名の雑誌が一九四一年に「国民美術社」から刊行されており、横光と岡本太郎との「芸術対談会」が掲載されているが、これとは別の雑誌である）。この『国民美術』の編集者・発行人は高原始、創刊号（第一巻第一号、一九三七年四月五日発行）の「創刊の言葉」には、「現在の美術界は一種の飽和状態にあるともいへるのだ。それは非常に危険な段階まで来てゐる」とし、「積極的に美術界の悪質なる部分にメスを入れ、腐肉を除去し、よき肉芽を発生、生育せしめる事によつて、美術界に眞の平和を齎さんことを念願するものである」という刊行意図が示されている。このたび紹介する横光の「フランスの絵」は、この創刊号に掲載されたものである。編輯後記には、「横光利一氏の「フランスの絵」は、本誌にして始めて掲載し得るところ、氏の鋭き理解を味つて頂きたい」とある。この雑誌の編集方針と思われるが、作家による美術評論が毎号のように載せられている。「フランスの絵」もその一つであるが、創刊号に掲載されているところに当時の横光の地位や影響力が窺えるだろう。以下に全文を掲げる。

二節 本文

一頃、文学に於ても人間の内面を追求することが新しい仕事であつたが、現在ではも早それが果して新しいことであるかどうかを考へる危険さに当面させられてゐる。仏蘭西の絵画に危機といふものが考へられるとすれば、それはそのやうな問題である。

今迄感覚をとほして来た物象を、絵具の力でそのまゝ一つの型に再現した自然主義的な行き方が疑はれだしてから、新しさとは何であるかを理論づけようとする理論そのものを絵にしようとして苦心してゐる。意識を写さうとする超現実主義の運動をはじめ、数々の運動がみなさうであるが、在来の絵画といふものゝ本質を離れ、領域を離れて、しかもこれを絵であると言ひ得られるその証明に各派各人が争つて来た結果は、極端な一派を生じた。例へばモンドリアン画伯の純粹絵画と称するものゝときは、たゞ画面に縦横（十）

の線を引いただけにすぎないかのやうなものであるが、これが果して純粹に絵画の本質的なものであり、真に新しいものであるかどうかを誰も断定しえないところに過渡期的な困難がある。

これに対立して、セザンヌに帰れといふことを称へる別の一派がある。自然の個々の表情をセザンヌ的に描きわけるのが一番絵画の本質を謬らない行き方だと彼等は言ふのであるがしかし、それにも亦困難は免れえない。なぜかといへば、仏蘭西に於ては、も早描かうとする外界は、既に誰かがあらゆる方法で写した何処かなのである。長い美術の歴史と、偉れた多くの画家とによつて仏蘭西は描かるべき自然の美の総べてを描き尽くされて終つてゐるからだ。したがつて、仏蘭西近代の絵の不自由さは、このやうな美の喪失といふ理由から、勢ひ新しい一派は、その手段として支那をねらはなければならない状態に來つたやうだ。

絵画のみならず、すべてリアリズムといふものは、昔から人間の頭脳の進化と共にたえず移動して行くものであるとすれば、絵に於てもリアリズムといふものがわれわれの生活とともに移り變つて來てゐる筈のものである。それ故、新しい絵にしても、さて何処からどこまでが新しいリアリズムであるかといふことになる、なかなか問題は複雑になつてくる。

尤も、新しい絵画のごとく、意識の中に新しい対象を探る絵画理論が、現在倒逆状態にもみえるとしても、真実倒逆状態であるか否かといふことは明答不可能な問題である。この習慣も重つて行くとき、はじめ倒逆状態に見えたものまで後には正統になり得られ、今まで正統と信じたものがかへつてリアリズムを離れたものになる結果も考へられるであらう。要するにわれわれ過渡期に生きてゐる者には今は分らぬといふことのほうが真実で、いつもまことのリアリティに采配をふるのは時間である。

文学に就ても音楽に就ても同様である。音楽に於て、協和音が不協和音に主調を侵害されて來たところに近代音楽の新しさがあり、文学に於いてもブルースト、ジョイスの内面描写にみる新しさがあつたが、絵に於ても主調色に無色である黒色を使ふ新しさが仏蘭西に行はれて以來、リアリズムの鑑賞に様々な錯乱が生じた。この錯乱の深化を救助するには、全く斬新な絵具の發明以外にその方法がないのではないかとさへ、疑ひを起させるほどである。

しかし、日本の洋画には現在のところ、以上のやうな心配は全く不要だと私は思ふ。日本などまだまだ豊富に描かるべきものが残されてゐる。

三節 解題

この随筆が注目されるのは、「旅愁」の連載開始と同じ一九三七年四月に發表されているという点である。この時期、横光の美術界との交流について注意を要するだろう。中島

国彦の論文「最後の絵」の意味するもの——横光利一『旅愁』における絵画をめぐって——」（『比較文学年誌』、一九八六年三月）で検討されているが、一九三七年三月には東京府美術館で開催された「佐伯祐三遺作展覧会」の目録に「最後の絵」という小文を寄せられている。「旅愁」においても、マルセーユに着いたばかりの矢代にセザンヌの絵が想起されたり、矢代と千鶴子が藤田嗣治について語ったりするなど、美術との接点は所々に散見される。「第二篇」以降も、モネー館（『文芸春秋』、一九三九年一〇月）やセザンヌの展覧会（『文芸春秋』、一九四〇年二月）などが「自然」「科学」といった作中のテーマと係わりながら描かれている。美術との交流という観点からの検討が今後とも重要になると思われるが、この「フランスの絵」に見られる横光のリアリズムに対する考え方や絵画観はその手掛かりとなると期待したい。

附録二 対談・座談

——『女性の幸福』を考へる——「日本科学の母胎について（対談科学時評）」——

一節 はじめに

河出書房新社『定本横光利一全集』に収録されておらず、また管見の限りその後も報告されていない座談および対談がそれぞれ見つかったので紹介したい¹⁾。分類はいずれも、『定本横光利一全集』に従って〈対談・座談〉とする。

一点目は、『婦人公論』第二十五年七月（一九四〇年七月）掲載の、横光利一・林房雄・窪川稲子による座談『女性の幸福』を考へる²⁾である。『婦人公論』は「盛装」「鶏園」も連載された雑誌であり、これまでに調査されていないはずはないのだが、どういわけかこの座談ばかりは漏れていたらしい。少なくとも横光利一の書誌研究では見落とされたままである。

二点目は、『科学朝日』第三卷第三号（一九四三年三月）掲載の、横光利一・成瀬政男の対談「日本科学の母胎について（対談科学時評）」である。『科学朝日』はこれまでの横光の書誌で報告のなかった雑誌で、散逸してしまっているため全号の通読は未だ果せていないが、他にも寄稿していないか確認を急いでいる。

これら二篇について、本文の翻刻とその解題・編集ノートを付し、後者には今後の研究の展望を示した簡単な解説を載せておく。なお、解題・編集ノートの体裁は可能な限り『定本横光利一全集』に倣った。

二節 本文（一）『女性の幸福』を考へる

『女性の幸福』を考へる

横光利一 林房雄 窪川稲子

記者 窪川さん、今日は女の幸福について、いろいろお話を伺ひたいので、自然、あなたが中心になつて戴かなければなりません。

窪川 そりや大変ね。

林 私に云はせれば、家庭に帰れ、家庭に帰れですね。幸福の探究は実に根本的ですね。昔はどつちかといへば、個人的の場所に女は幸福を求める傾向が強かったが、現代は、女の働き場所が、もつと社会的に押出されて来たのは事実だ。昔のことを調べて見ると、どんな偉い人でも、その人の奥さんとか恋人とかを、はつきり書いてある伝記は殆どな

いんですね。たゞ何々氏を娶つたと書いてあつて、その女が何をしたかは書いてない。さうでありながら、皆夫の仕事に対し助力をしてゐる。夫が亡命したり、或は非常に貧乏した時とかには、例へば山内一豊の妻のやうな、澤山の立派な女性が見られます。男ばかり働いてゐた時代は、妻の幸福は、或は自己犠牲、或は夫に協力して、案外個人的ではなくて、同時に社会的のものをも含んだ幸福が潜んでゐたやうな気がするのです。今は女が非常にいろ／＼の場面に働いてゐるために、女性の今まで鍛へられない部門——さういふ仕事にこれから鍛へられるか知れないけれど、今の状態では、却つて、女は幸福よりも不幸の方により多くぶつかつてはゐないかと思ふね。

窪川 男の幸福といふことが云はれると同じ意味で、女の幸福が云はれてゐるかどうかが、少しそこに違ふものがあると思ふのですがね。それが林さんの云はれる通り、女が夫の仕事に援助をしながら、社会的に働いて来てゐるのに、伝記なんかに取上げられてゐないのですが、その時分には女の幸福といふことが取上げられてゐなかつたと思ひますが、今女の幸福といふことが云はれてゐるのは、何か段階見たいなものがあるでせうね。女の生活の中に、きつという／＼なものがあるだらうと思ふけれど。

林 さう／＼、日本でも女性の解放時代があつて、最も極端な議論としては、男女の戦ひといふものは宿命的なものとさへ主張する理論なんか現れて来た。さういふ理論とは拘りなしに、女といふものの働き場所がずつと拡がつて、否でも応でも、女は社会の半分の要素である、どうしても確定的の存在であるといふことになつた。その時期が、もう可なり長く続いてゐるために、女の幸福は十九世紀流の婦人解放の中にあるのぢやなく、家庭生活の中にあるのだといふ理論さへヨーロッパにも現れてをる。日本では婦人の実際の解放熱があるにも拘らず、いつも一方の保守派といはれる陣営から、それが妨げられた。女の幸福が、果して十九世紀流の自己解放にあるか、もつと考へなければならぬのぢやないかといふ反省が、女の幸福といふ問題を生んで来てゐるんぢやないですか。

窪川 男を敵とした女性の解放といふ考へは今はないんですね。
林 だから自己批判でせうが、といつて昔に還れとは云へないし、また還る筈はないが。今のは、新しい幸福——ほんたうの女の幸福だね。封建時代を再現しようと思つてゐるのではない。だが、封建時代の男女の関係も、一つの打ち壊すべき悪としてのみ扱ふべきでなく、あの時代の女の幸福も、新しい女の幸福を探究するために、考へて見る必要がある。もつと具体的に立入つて、今の職業婦人は何を求めてゐるかを考へませう。

横光 幸福といふ事は、なか／＼むづかしいけれど、云ふとなれば一言にして云へると思ふのですね。努力するといふこと以外にないと思ふんだ。道徳を守れといふでせう。それは幸福を得るためですよ。結局、一番幸福になるには、道徳を守るよりほかないね。道徳を破つちや、幸福は絶対でない。想像だけれど、嫌ひな夫婦生活をしてをつつても、努力すれば嫌ひぢやなくなる。不幸になるのは、努力せんからだと思ふんだね。

林 幸福は現世にないとお釈迦様は極言してゐるし、キリストも天国といふことを云ひ、

人間ども我慢しろ、己を犠牲にしると云つてゐるし、詩人は、幸福は窓を過ぎる辻風のやうなものだと云つてゐる。これを引止めようとするのは努力だ。折角、好きな人と結婚して、あゝいゝなあと思つてゐる間に、夫が浮気をしたり、妻の体に欠陥があつたり、変に好みが合はなかつたりして、フラ／＼と壊れてしまつたりしてね。

横光 日本の男は、或意味では幸福だと思ふね。日本の女は、外国の女より貞操観念が強い。貞操観念の強い女を細君に持つ、これほど有難い事はない。日本の女の貞操、これだけは宝だと思つて守つて欲しい。さうすれば、男は実に幸福になるでせう。ほんたうのことを云へば、フランス人なんか僕は幸福はないと思ふ。実際、日本の女がフランスの女のやうになられては、敵はないと思ひますからね。さうなると男はニヒリズムになつちまふんですよ。

窪川 日本の女からは、その反対のことが云へますね。

横光 それは云へますけれども、また、さうぢやない。そこはうまくなつてを、そんなことは女の努力で、男はどうでもなると思ふんですね。やはり独りの幸福といふのはないですからね。

林 男女関係の破綻は殆どあらゆる場合、男が悪いといつていゝですね。男が切掛をつくらないと女は自棄にならない。ところが時々男は浮気をするものである。理論とか何とかで動かせない宿命があるから困る。

横光 何か一緒に食べてゐて、これはうまいなあと一人が云ふ、こちらはうまくないと思つてゐても、ぼつとそれがうつつて、うまく感じる。うまいなあといふ言葉一つが、幸福の原因になる。やはりうつらなけりや駄目ですね。幸福は形には現れないんだ。幸福は自分の思ひがけない時に、ひよつと来ると思ふですね。幸福が来たつて、皆知らんだ。

林 さうして直ぐ去るからね。幸福になるためには、幸福を求めないことだと、よく云はれるから……、實際苦の世の中だよ。

窪川 さうなると捕へどころのないものを論じてゐるんですね。

横光 捕へ所のないものと思ふのです。

窪川 実際、不幸だつてなからうし、幸福だつてなからうと思ひますね。

林 幸福の道が開けたと思ふと、病氣とか、恋愛とか、いろ／＼なものにぶつ突かつて、ガラ／＼と混乱して来る。さういふ時に、一種の神聖なるものが起つて来ると、一つの例は宗教に入る、聖何々尼といふ境地、或は戦争になるとナイチンゲール、従軍看護婦、極端な場合はジャン・ダークとか、日本武尊の弟橘媛とか、戦争といふ一つの神聖なるものによつて、行動の分野を、ぐつと高めて来ると、女が女でなくなり、男が男でなくなる。宗教とか、戦争とか、社会運動とかが現れて来た場合には、一種日常でできない幸福といふものを、女或は男が掴むことがありますよ。これは日常の幸福としては論ぜられない。

横光 君は獄中で、かすかな幸福を感じたことはないかね。

林 それは非常に卑近な所からだがね、ライスカレーとか、いきのいゝ鰯とかを眺めてゐる時。食つた後はさうでもないがね。それから、読みたいと思つた本が入つて来た時、外部から友人がよろしくと云つてくれたとか、或は、何かの雑誌で、昔の自分の作を非常に讃めてあつたとか聞いた時。非常に寒い冬の間に、ぽかっと暖い日が三日も続いて、さういふ時に、あまり汚れてゐない風呂に入つた時の、一時間か二時間の状態は、幸福だね。その他は、全部苦痛だ。その代り、そんな歓びを、外に出てガヤ／＼やつてゐる時は感じないね。だから片岡鉄兵さんが『君もう一度入りたいね』と云つたが、そんな幸福な特別な瞬間があるんだ。

窪川 今までの自分のいろ／＼の過去を考へて、不幸だつたとは思はないが、幸福だつたとも思はないのですね。ただちよつと今でも思ふのは、まだ子供がない時分、私が丁度仕事をしはじめの頃、夫が運動をしてゐる時分に、はたきなんかをかけてゐる私が、歌を唄つてゐるのに気がついた。私、滅多に歌を唄つたことなどないのですよ。ひよいと唄つてゐるのに気がついて、あゝ今私は幸福かしらと思つたことが、いまだに頭に残つてゐるのですよ。

横光 僕などは朝ふつと目が覚めて太陽が映つて、一枚の硝子戸に青空が見えると、それが非常に幸福な一時間ですね。結局、一生といつたつて二十四時間よりないのです。一生は五十年なんて嘘ですよ。それは二十四時間ですよ。だから二十四時間を、何とか幸福に暮すやうに努力すれば、私は幸福になれると思ふ。だから晴れた朝の一時間の幸福を守るために一生懸命です。その間に訪問者が現れて困るですよ。

林 横光さんは今幸福な状態にあり、また、あらゆる場合に、幸福が可能であるか知れないけれど、さういふ日々の中から、自ら幸福を発見できるやうな、精神的の力のある人は別として、心境的にも、生活的にも壊れる場合があるんだよ。ひどく貧乏になつたり、病氣になつたり、自ら醸し出した、正当でない恋愛とか、つい巻き込まれた熱情とか、さういふものに、非常に幸福を打ち壊されることがある。

横光 しかし人間は如何なる者でも、必ず幸福を求めてゐると思ふんだ。そんならね君、一生といふものは、二十四時間よりほかにないんだから、それを悟つて、二十四時間を有効に使ふより幸福はないと思ふね。次の日は次の日で、次の日はあるかないか分らないけれど、二十四時間努力して、覚めるだけのエネルギーを体に与へたら、次の日はまた目が覚めるに違ひない。さうしたらまた、目が覚めた瞬間に、努力すればいゝんだ。

林 幸福は努力に違ひない。が、その努力によつて、幸福が生み出されるかどうかが問題だね。

横光 そりや君、そこは自分の感覚次第だ。

林 うん、それはさうだ。

横光 僕も貧乏だが、不幸とは思はなかつたね。いろ／＼それは、未来のことを想像すれ

ば、不幸だなあと思ふけれど、未来のことはあまり想像しないで、貧乏を不幸とは思はなかつたね。

窪川 確かに、貧乏なんか不幸ぢやないですね。

林 貧乏を長くしてゐる不幸の例は多いね。子供でも、死なうと思ふからね。それは金持の子供なんか、ひどく叱られ、死なうと思ふか知れないが、自発的に貧乏人の子供は死なうと思ふ、いつもその気持に蝕まれてゐる。尤も、その中から立ち直るだらうがね。

横光 僕は酷く貧乏して銭湯に入りたいと思つてもその金がないことがあつたよ。それでもさう特に僕は不幸だと思はなかつたね。なあに、古雑誌一冊売れば五銭にはなる。その頃僕は、御飯が一膳だつたんですよ。十銭出せば井に山もりくれる。その時御飯が銀みたいに見えましてよ。

窪川 私は子供の時に働いてゐて、やはり死なうと思つた時があつたけれど、毎日々々否応なしに引摺り出されて働かなければ食へないことがあつたのですけれど、先に希望が何も見つかからない、自分達の貧乏の生活をどう抜けて行くかといふ希望が何もなかつた時にやはり不幸に感じました。

林 少年時代に立志小説に興奮しても、自分が幾ら勉強しても、果してどうなるかと思ふ時がある。さういふ時に子供は死にたくなる。さういふ不幸な人達が澤山あると思ふ。横光 しかし不幸とか幸福といふのは、外から見たつて分らんね。

窪川 外から見ても分らないし、後から考へて果してそれが不幸だつたか？

林 全然違ふね。

窪川 非常に捕へどころがないけれども、今女の幸福が云はれるのは、今の女の生活の状態に問題があるからだらうと思ひますね。皆今は働いてゐるけれども、やはり人間だから結婚しなければならぬ。働いてゐる自分達の生活の間に、順調に結婚生活ができるやうな気がしない。そこに何か非常に、幸福に対する疑問があるんぢやないでせうか。

林 それは分るね。女の幸福は、男女関係、恋愛関係、或は結婚生活といふことになるだらうと思ふ。はつきり論ずれば、外に職場を求めて、女にあらざる女、或は聖なる女、或は純粹なる女性職業婦人といふものになり得さへすれば問題はないが、どうしても男との間の幸福といふことになるのでね。

記者 さうでせうか。例へば一つの例を引くと、キューリー夫人が、生きてゐたとして、ラヂウムの研究に没頭してゐた時に一番幸福を感じたか、或は良人との結婚生活の日常の中に幸福を感じたか……おそらくそのどちらの中にも同じ幸福を感じたと思ひますか……

林 キューリー夫人などは、女性の憧れを、あゝいふ方面へ持つて行つたのは事実ですが、あゝいふのは特殊な女で、恋愛結婚もしたければやる。或場合には破つてもいゝし、或場合にはせんでもいゝ。さうして男のやるやうな、社会的価値を追求して行く。さういふことの中に、女が果して最後まで、しかも総体として幸福を求め得るかどうかといふ

ことに、僕は非常に疑問を持ちはじめた。

窪川 男の結婚生活の場合に、その幸福が問題にならないでせう。それは日本の男性が幸福であつたといふので、問題にならないと思ふのですけれど、職業婦人だつて人間——女だつて人間だし、結婚生活をしなければならんし、したいといふことは当り前のことでせう。男の人が仕事をしてをつて、男の幸福は家庭だけといふことは、誰も云はない。仕事をして家庭を治めて行けば、非常に幸福ですが、女はそれが二つに分けて論ぜられてゐる状態ですね。それが今の女の場合は、可なり自分達も仕事をして行きたいといふ欲望も出て来てゐるのですよ。そこに何か問題があると思ふのです。

林 立派な婦人が男に劣らない立派な仕事をする場合に、男の対家庭観念、恋愛観念、貞操観念を備へなければやつて行けない訳だ。女の人がやつて行けるかどうか知らんけれども、少くともさうでせうね。独立人として女の新しい性道德などが、果して成立し得るかどうか。女外交官、女科学者、女弁護士ができ、随つて、或場合には夫と別れなければならんし、或場合には結婚生活を従属的のものにしなければならん。それが善いか悪いかは別として、女がさういふ生活形式に堪へ得るか。或はさういふ道德を主張し得るものかどうか。

窪川 女が職業婦人として、社会人として立つて行けば、貞操などの問題が壊れなければならないといふことにはならないんぢやないかしら。

林 大体に於て、さうならなくちやならん筈だがね。

窪川 男の人にそんなことがあるのは、社会の組織の中に、例へば売笑婦などがあるからで、女に対してそんなものは勿論ないし、さういふことには、ならないと思ふのですけれど。

林 女の独立生活をもつと向上させ、女として希望を持つ訳ですね。

窪川 自分の生活を持つことは非常にいゝんぢやないでせうか。そのことと、夫への内助を理想的に深めて、一日々々の生活をやつて行きたい気持とが一緒にあるのですね。その両方が、現在の状態の中にうまく行かないやうな気がして、いろ／＼煩悶があるのぢやないかしら。

横光 夫婦生活を若ししたとすれば、それはどつちも犠牲的精神を出し合つたことですから、どつちも、犠牲にならなけりや、幸福はないと思ふんですね。犠牲になつて、第三の違つたものが出来て行くのですからね。どちらも得しようと思ふと、僕は不幸になつて行くと思ふ。

窪川 どつちも得しようといふのは？

横光 さういふ事を予想すればいかんと思ふ。不幸といふことは予想といふ事だから、どつちも得しようと思ふと不幸になる。夫婦生活といふものは、誰も彼も人類としてやつて来たんです。ドイツが勝たうが、イギリスが勝たうが、人間の夫婦生活だけは続くんですよ。

林 それは非常に精神のある言葉で、その精神を壊される状態に置かれる男女が非常に多い。自分はそのつもりでゐたとしても、自分の中に持つてゐるいろ／＼の悪い性質によつて壊されますよ。横光さんの言葉は、道徳として、どこまでも立派な清いものとして受容られるけれども、全体から見ればあまりに例外が多い。

横光 兎に角、誰も彼も幸福を得たいと思ふ事には変りはない、求めてをれば、幸福がなぐちやならんでせう。そんなら幸福とは何かと考へた場合、端的に云へば、私は努力以外にないと思ふね。

林 幸福といふものは努力して求めないことだと哲学者が云つてゐるが、幸福論をどんなに云つても、幸福はないので、努力によつても求められない。極端に云へば、努力の中に僅かにある訳だね。

窪川 そこまで行くと、悟りになつてしまふんですね。

記者 女の青春時代——結婚するまでの年月といふものを如何に生活し、その中に幸福を見出すか、どうすれば充実した生活ができるかといふことを。

窪川 充実した生活といふことの内容は、自分が感じることぢやないでせうかね。

横光 それは努力したといふことでせう。

林 自分の努力が正しく酬いられた場合、精神的、物質的両方を含めて。女の人は物質のことはあまり考へないけれども、しかし贈物とか、綺麗な着物が好きだといふことは動かせないから、自分の清さ正しさが、何かの形で——男から酬いられたらもつといふが——酬いられた時が、一番幸福でせう。

窪川 私などいろ／＼なことを経て来た訳ですけど、その中で自分が割合に僻まなかつたことを俸せに思ふのですが、外側から人の一生を見てみると、僻んで行く人は不幸ですな。

横光 片岡鉄兵が、窪川稲子といふのは偉い女だ。あの女の作の中で、少女が山中で貞操を失ふところが書いてあるが、後で少しも不平を云はしてない、他の女の作家ではとてもできないと褒めてゐましたが、それですね。しかし女は、自分が美貌であるとかないとかいふ意識が、非常に幸福に関係するでせうね。

林 男の好みは千差万別といふことは、美貌の問題に対する女の不幸を、可なり和らげね。

記者 実際的にはさうだらうと思ふのですが、さういふ従属的の立場、容貌の問題にしても、男に鑑賞されたり、男に好かれたり嫌はれたりする状態、男との関係の中にだけ幸福を求めようとする女の感情といふのは、だんだん無くしようとする努力が現れてゐるんぢやないかと思ふ、またさうなつて行くと思ふのですがね。

窪川 しかし女の生活は、男から受ける生活の中に可なり自分の幸不幸が左右される。それだから女の幸不幸が論ぜられると思ひますね。

林 男女をさう独立さしてどうするんだ。女科学者を作り、終ひには軍人まで作つてどう

なるんだい。

窪川 それはできてもし、と思ふんだけど。

林 男女関係の外に幸福を求める——それは幸福といはずに仕事と云つて下さい。それは全然仕事であつて、男の仕事の中に、さういふ意味の幸福があるかといふと、これはないのです。いろ／＼な事業をやつてをる人でも、幸福は家庭に求めてをる。それが求め得られなくて、自殺する男がある。それは仕事だよ。

横光 支那は異性の区別がないといふんですよ。女の仕事がない。縫物も洗濯もしないで、男と同じことをして、男の読む物を読んでゐる。女の読物はない、婦人公論など支那では成り立たないね。

窪川 さつきの仕事の中に幸福を見出す女が出て来てもし、といふ意見と、結局幸福といふものは、男女が一緒になつて纏めるといふ話。今の女に、あなた方は仕事の中に幸福を見出さずにおいでなさいと云つたら、非常に可哀さうだと思ふ。今の女は、皆働いてゐるんです。社会もそれを要求してゐるし、今まで女性解放を叫ばれても、中途半端だつたのが、今日は女の人がやつと外の生活ができて来たやうなもので、そのことと、男女が共に結ばれて作つて行く幸福とが、何かチグハグなところに、一番問題があるので、それがこんな場合でも、二つバラ／＼に論じられるのぢやないでせうか。

林 そんな幸福といふのはどうしても続かない。仕事から生み出した形は、これはもう滅びない、それに対する欲びは、男女に限らず全部感じるもので、それが人生に於て尊いものですが、人間として、女として、男として求める幸福は続かない。共白髪まで添ひ遂げて、その間に一度も幸福の揺ぎのなかつた夫婦があつたら、これはお伽噺です。お伽噺だから貴いんです。さういふ意味の幸福を求めるのなら、お互いの自省と努力のみと云へる。そんな幸福は半年間か、長くて四五年のもですよ。

窪川 お伽噺のやうな幸福が果して幸福であるかどうかは疑ひがありますが、人生が激しいとすれば、やはり生活を激しくするのが幸福と女が思へばいゝので、それを女がさう思へない。そこにをさなさがありますね。

林 その激しさに身を委して御覧なさい。直ぐ疲れて、幸福はなくなつてしまふ。

窪川 その中を生き抜いて行く力を、女の人達は皆持つて行かねばならんでせう。

記者 先刻の林さんの駁論見たいなものになるが、結婚して幸福を感じる瞬間、直ぐ幸福は消えることがあるが、さうではならないと努力して、その波を押し切つて、次の瞬間の幸福に到達する。不幸になつてはならないと、幸福の崩れようとする度々に努力をして、次の瞬間々と峯を伝つて、生涯を送つて行く人もありませう。

林 伊藤博文の夫人なんかがそれです。伊藤さんが足軽の子供時代に結婚して、博文は直ぐ長州に亡命してしまふ。その間、京都に女を作つたり下関に女を作つたりしたが、やつてゐる仕事は国家の仕事です。その間に嫉妬もやいたでせうが、明治維新が成つて、博文が帰つて来ると、ちやんとその夫人を迎へ、伯爵になれば、伯爵夫人殿とパリから

手紙を出してゐるし、公爵になれば、はじめてお前が公爵夫人になつて嬉しいといふ手紙が来る。しかし自ら称するやうに、到る所男女関係がある。ほんたうの子供ができないので養子をして、立派に公爵夫人として終りを完うして、誰ひとり悪口を云ふ人はない。あの人はいつも、不幸の中から、幸福を作つた人でせう。しかしさういふことは、道徳家なら説けるが、僕は説けないね。

窪川 さういふこともあるでせうね。そこを乗切つて行く力が、女にあるかないか。

林 さつきの封建的の女の中にも、決して軽蔑のできないものがあるといふのはそこです。一生放埒に生きる男があり、しかも大人物でなくてもいゝが、或程度の価値を持つてゐる。その男の、周期的に襲つて来るいろ／＼な不道徳性を、側から見つて、巧みに黙認し、巧みに引止めて、ドン／＼と男の幸福を自分の幸福として進んで行く。妻の時にはさういふ意味で幸福であり、母の時には子に対して、祖母の時には孫に対して幸福である。これこそ女だと、新しい日本の道徳が認めてくれたら、文句はない。しかし僕は男だから、男の口からは一般の女には云へない、女房には云へるけれどね。僕の日本の女性観は、立派さ、強さ、或意味のはかなさ、きよらかさを懂れてをる。僕は非常に母を讚美するけれども、母がそんな女性であつたためだが、皆あゝなれとは云へないからね。

横光 母といふものは、自分の夫がどうしようと、貞潔な母といふことを守れば、子供が必ず尊敬して愛する。さういふ幸福がある。何か幸福が女の人にもあるだらうと思ふ。分らんだけの話で、必ずある。なけりや人間は死にますよ。

林 兎に角、横光さんは一年間洋行しても、女に手を触れなかつた、日本的男性の典型です。普通の男性は、動物的になるので困る。横光さんなどは、日本歴史に載せ得る。(笑声) いや揶揄かしてるんぢやないよ。

窪川 男性が動物的といふのは、そんなことが許されるからです。女の場合と違ふところがあります。

林 フランスなんかは、一週間夫が妻を無視すれば、何をしてもいゝ。『北緯六十度の恋』を見ると、ノルウェーでは私的關係を許さないが、約婚すれば何をしてもいゝ。その代りお互に飽きたら直ぐ離婚して、他とまた約婚すればいゝ訳だ。

横光 ポーランドがさうだ。そんな国は滅びて行く。その代り、処女の間は実に堅いんですよ。

窪川 習慣ですね。日本の生活だつて、習慣から来てゐるのですね。

林 そいつを僕は道徳まで高めて、窮極的の美点として確立してもいゝと思ふ。

窪川 だから女が夫に貞操を要求することも、感情からいつて当り前ですね。

林 当然ですよ。

窪川 日本の習慣が男に対して寛大であることから起る女の不幸が、随分ありますね。

林 横光さんのやうなのは別として、男といふものは、日本人に限らず、誠実ではあるが

しかもだらしのないものを持つてをるんぢやなからうか。

窪川 そこは反対です。菊池さんもさう仰しやるのですが、男にはさういふ本能があると
いふのですが、本能論には反対ですよ。

横光 婦人が貞操観念が強ければ男はいつだつて死ぬるんです。日本人が死ぬのが怖くな
いのは一つは女が貞操観念が強いからだ。

林 ヨーロッパでは海軍の少将大将になると、遠洋航海には艦長は勿論だが、全部細君を
連れて行ける。戦争だけは婦人を大事にするから別にするけれども。日本にはそんな必
要がないですよ。今日果して日本の婦人の道徳を、それでくひ止め得るかどうかは、真
面目な意味での問題だと思ふのですよ。これはむづかしい問題だ。

窪川 封建時代の女性にも偉い人があつたと云へるが、もつと多勢の問題として、皆が高ま
つて行かなければならないといふ観点から女の幸福もいろ／＼考へられると思ふけれ
ど、女はもつと人生を活潑に考へ、自分の生きる途を考へれば、小さい家庭の中に今ま
でのやうにしてゐては、道が開けないとはいへませう。

林 世の中に出ることが、家庭を生かすことだと云つて下さい。

窪川 さう云つてゐるんですがね。

林 世の中に出るといふあなたの考へ方には賛成ですね。さうなつたら国はどうなるか分
らない。女は男と同じ資格、同じ道徳を持ち、しかも立派な仕事をして、男は落ちつか
ない。結局男は自身がなくなつてしまふ。

窪川 そんなことはない。非常に目の前からだけの結論ぢやないかしら。

林 幸福な人達だなあ。女の幸福はそこにある。(笑声)

横光 夫婦関係の性欲問題は、極力これは節制しなければ幸福はないと思ふ。節制せんか
ら不幸になる。

林 その通りだよ。さうすれば問題は起らないね。

記者 節制を社会的の條理で云へば犠牲ですが、昔の女の人は、殆ど全部が、自分を犠牲
にして、夫、子、家族を中心とした以外に出なかつたのですね。

林 夫の社会的活動によつて己を生かしたのです。さうすると今度は男を離れて独立した
時、或はキューリー夫人を生み、或はアマゾン見たいに女の軍隊を作る。さういふ風に
女が独立して行つたら困る。

記者 独立といふ意味はをかしいですね。今ある女の人たちは、広い意味の社会的のもの
の中に犠牲を求め、その中から自分の幸福感を撰取してゐると思ふのです。自分とか家
族とかを離れた大きい世界の中に、十分満足感、幸福感を得て活動してをる婦人が非常
に多い。あなたの云はれる意味のキューリー夫人でなくて、社会人として、家庭人とし
ての両方の幸福感を味つてゐる。

林 それは確かに数へるほどあるでせう。数へるほどね。(笑声)

記者 知つてゐる範囲では数へるほどしかないが、知らない範囲では無数に。(笑声)

林 さういふ女が一般化して、百パーセントまで行つたとしますね。さうすると男のちよつとした過ちで、直ぐ別れますね。

記者 それは分らないと思ふ。

林 その中の七十パーセントは別れ得るんですね。

窪川 別れ得る生活の根拠を持たない時と違つて、それを持つてゐるが故に、却つてもつと違つた解決がつくと思ひますね。

林 僕は今晚は、さういふ責任を全部引受けたと思ふ。(笑声)そこまで女がなると、国が減びるとまでは行かないが、破綻だ。

窪川 何も女が不貞操になる訳ではなく、よき母とならねばならないし、それと同時に独立して、自分の働きのうちに歓びを見出して行くといふのですから。

林 そんな事を云ひますと、女が総て独立して、最後に女中がなくなつたらどうします。

窪川 社会生活の機構が變つて来ますよ。

林 託児所が出来てね。

窪川 今のまゝでは家庭にいろ／＼な矛盾もあるし、摩擦してゐるうちに、機構が變つて来るといふぢやないかしら。キューリー夫人の仕事そのものが、人間の仕事のうちでも最も高い仕事だから、非常に理想的話だけれど、あゝいふ可能性が、女のうちにあると思ひますが。

林 それは思はれますね。

窪川 可能性があるといふことは、女自身が努力してもらふといふことですね。

記者 横光さんの仰しやる我慢すること、それは犠牲的精神だと思ふのですが、それが林さんの仰有る様なものではないんですか。

林 僕はどうしても、さういふ意味で信用ができない。母性といふものだけを信用しますね。母性≡女性だと思ひますね。

窪川 キューリー夫人の可能性が、女性のうちにあることを認める以上、矛盾するぢやないでせうか。

林 明らかにそれはさうですね。そのために他のものを犠牲にせねばなりませんね。

横光 人間が一週間に一時間の幸福もないかしら。

林 ありますね。

横光 それならいゝんですよ。一週間に一時間の幸福があれば、それでいゝとしなければね。

窪川 さういふ広い心を女自身が持たないですよ。今の女は、たゞ亭主だけを取つ捕へて、一時間の幸福が目に入らない。だから不幸ですよ。自分の亭主だけ捕へてゐるだけでなく、自分の仕事を持つ、自分の生活を持つことが、可なりさういふ広い気持を持つやうにするぢやないかと思ふ。そこで、幸福を広く大きく考へるやうになるぢやないかと思ひます。

横光 細君の方は、自分の夫の一番いゝところを知らんですよ。夫は亦、細君のいゝところを知らない。どつちも分らんもんだから大抵の者は諦めてしまふんですよ。どつちも誤解し合つてゐるんですよ。その誤解の中から、子供だけは生れて来てをる。さういふ人生であるといふ気がするね。自分の夫、自分の細君のいゝところを捜し当てれば幸福ですよ。捜し当てないから不幸になる。努力すればそれが分つて来ると思ふのですよ。だから努力が足りんのだ。夫婦生活をしてしまつた以上は、やはりどつちも二人の幸福を導き合ふことがいゝんですからね。悪いことぢやないですよ。

林 細君は亭主の善悪両方を誇張してくれますよ。(笑声)それで結局、亭主を一番知つてゐるのは細君ですよ。

横光 しかしどつちも誤解し合つてゐるですね。ほんたうに正しく解釈し合ふことは、実にむづかしいことですからね。

林 人間は動物であるといふことを、何故皆が思つてくれないかな。動物であるから動物になれといふのではない。

記者 その動物性を抑へて生涯を終らさうといふ努力が、男でも女でも理想でせうから。**林** しかし抑へるだけであつて、決して引止めはできない、一種の無常の観念を持たねばいかん。

記者 それは抑へ得ないにしても、抑へた者が幸福か、抑へなかつたものが幸福か？

林 勿論抑へたものが幸福だが、抑へたからそれで偉いといつて、亭主に喰つて掛つたり女房に喰つて掛つたりされては困る。

横光 外形的の幸福としては、亭主は細君を連れて船に乗ることですね。外形的幸福を時々しないといかんですよ。陸にばかり細君を放り上げて置くのは、亭主の怠慢ですよ。(笑声)

林 非常に面白いね。しかしよく女房を連れて歩くので、あいつ仲がいゝと云はれる人があるが、あの円満な島木健作とか横光利一などは、女房を連れて歩いたのを見たことがないね。面白いもんだね。キューリー夫人とそこに関係がありますか。

窪川 それは非常に微妙な関係があります。デモクラシーが必ずしも理想的の結果を生まないことは認めますが、このこととは少し違ふなあ。

林 進歩といふ観念の中に、非常にあらがある。いつも人間は進んでをるといふ不思議な独断がある。これは絶対に嘘だ。

窪川 貞操といふのは肉体的のものと、精神的のものとあるが、どつちが強いかといふならば、人間は動物だから肉体的のものが強いといふのは反対ですな。

林 それは云へるね。が、日本の男性は、横光さんも云つたが、絶対に女の肉体的過誤を許さない。

窪川 それはそれでいゝでせう。女もさういふ要求があるのですからね。

林 生活とか何とかいふものは、肉体と全部調和しないと、幸福は続かないと思ふね。

窪川 その中に精神力を問題にしなければ嘘だと思ふけれど。

林 それは、冷静な立場から云へばさうだが、いよ／＼さういふ人間の生活にぶつ突かつて御覧なさい、死ぬるか生きるかといふことになる。新聞などで澤山ありますよ。

窪川 それは人間の正常な状態ではないですよ。

林 ところが医学では異常は正常の一部分だといふので困る。

窪川 さういふことは生活感情から来るぢやないですか。

林 まあ少し生活をして御覧なさい。

窪川 まるで私が生活してゐない見たいだわね。(笑声)

三節 本文(二) 日本科学の母胎に就て(対談科学時評)

日本科学の母胎に就て(対談科学時評)

横光利一 成瀬政男

一人前の科学者

成瀬 船でご一緒になつて以来ですね。

横光 いつお帰りになりました。

成瀬 私は昭和十三年の九月に帰りました。船では虚子先生を囲んで発句の会が盛んでしたが、あれからもズツと発句のほうをおやりになつていらつしやるやうですね。

横光 ズツと続けてゐます。

成瀬 私は船の中だけなんです。向ふへいつたら見て貰ふ人がありませんから、自信がなくてダメなんです。

横光 科学者で俳句をよくやる人は多いですね。

成瀬 ちよつと面倒くさい数式を取扱つたり、複雑な考へをしたあとなんか、パツと気もちを転換して、あるがままに花を眺めるとか、それを句にするとか、そんな境地が非常に懐かしいんです。でも、発句は先生がなけりやダメですね。科学の研究でも、ちよつと芽生えが出たら、それをわきから見てやりますと伸びてゆくんです。それを二三回やりますと、あとはつき放しても一人前の科学者になつてゆきますね。だから、科学者を育てるといふふうなことも、あの句を作るのと全く同じだと思ひますね。

横光 その科学者が一人前になるといふところをお訊きしたいですね。僕らにも参考になる。或る所まで指導して、或る所から突き放すといふところをです。

成瀬 例へばですね。私は歯車をやつてをりますが、歯車の研究にしても、水泳に譬へて見れば、初めは手を支へてやつて、そら、泳げるぢやないか、あの島までゆかう、さういつて一緒に泳ぐんですね。そら、上れ、どうだ、上れたぢやないか泳げたぢやないか、

かういふ態度で指導するんです。

横光 なるほど。

成瀬 一つの実験をさせるにしても、この実験、次の実験、その次の実験、それは指導する人から見ると一つの流れに沿うた実験なんです。それを纏めると命令すると、纏めて来られないんですね。それで私が見ながら口移しのやうにして論文を書上げるんですね。さうしますと驚きかつ喜びます。つまり一と二と三の間に必然の関係があるのに、初めて研究に来た人は判らないんです。それをズツと一貫した思想をもつて、だからかういふ結論になったんだと教へてやりますと、そこに自信を得るんです。さうなつたら、その次はちよつとむつかしい問題をやるんです。或る時にはやさしい問題をやる。さうしますとやれるんですね。なるほど、科学といふものはやれば出来るものぢやないか、こんなふうな気分が自分自身の中にできるんです。その時に言ふのです、君、できるぢやないか——と。さういふことを二三回やりますと自信が出ます。一人前の科学者だといふやうに思ふんです。その時に今度は突き放してやるんです。突き放すと溺れさうになつて、もがきます。もがいて涙を出します。けれども、それに耐へると始めてよく泳げてきます。さうやつて一遍もがきぬき、涙を出し、その後から浮び上つた科学者は一人前なんです。

横光 それぢや、先生といふものは先生自身に対しても、自分で自分に課題を与へてやるやうなところがあるんでせうね。

成瀬 ええ、それはさうなんです。教師といつても私ですが、むつかしい問題とやさしい問題と、二つ持つてゐるんです。といふことは、私は問題を二つに分けてをります。時間と労力さへかければどんどん結果が出て来る問題と、できるかできんか判らんけれども、できたら驚くべき結果であるといふ問題、さういふ二つの問題を持つてゐて、できるかできないか判らんといふ問題は、始終頭の中に入れて考へてるんです。

科学と文学

横光 小説の場合も同じですね。

成瀬 さうなんですか。——「旅愁」をズツとお書きになつていらつしやいますね。

横光 ええ、まだ書いてます。

成瀬 あれは結末をかうしようといふふうな心持ちでお書きになつていらつしやいますか。

横光 それが成瀬さんのおつしやつた、むつかしい問題とやさしい問題とが絶えずあるのですよ。これはいつか出て来るだらうと思つて、胸に蔵つておいて小出しにしますがね、どうなるか判らないんです。それが、フツと喰ひちがふと筆がもう進まないんです。さういふ時になると、やはり半年くらゐ休んぢやつて、書けないんですよ。そのうち又

フツと動き出すんです。さうすると書きまますけれども。支那事変の前に書き出して、これだ六年目かになるんですが、まだ支那事変に來ないです。

成瀬 それではどういふ結末になるか、といふふうなことは判らないんですね。

横光 それはまあ、判つてますけど、無理にそつちへ捻ぢ向けてゆかうとするといけません。自然に出て來んといけませんから……。しかし、科学のほうは、疑問を持つてゐてもやつてるものの位置が動かないからいいですね。僕らのほうは、こつちの位置も動くんです。向ふも動くかはりに、こつちも動くんです。

成瀬 支那事変が起るとか、大東亜戦争が起るとかなると、自分の心持ちも刺戟を受けて動いてゆくんですね。

横光 動くですね。自分の座標軸といふんですか、それが動いてるんです。いろいろなことで動いてゆくほうがほんたうか、動かさないほうがほんたうか、その点が非常にむづかしいです。動き出すと苦しいです。しかし、動いていつた以上は動くやうな真実が必ずあるので、忠実に動くままに随つていつてみよう、といふやうな気もある。その方が正しいんだから。——それで僕は襖をやつたんです。成瀬さんが今度おやりになつたと聞いて、私非常に敬服しましたけれども。

成瀬 いや、私は今度が初めてぢやないんです。かれこれ十年もやつてをります。

横光 さうですか。それはどうも失礼しました。

科学者と襖の精神

成瀬 いえ、それは今さういふことが言へるやうな時世になつたんです。私たちも襖をやる時世になつたから言へますけども、昔は黙つてゐるべきだつたんでせう。私も横光さんが襖をなさつたとは存じませんでした。

横光 僕の知つてゐる科学者では、襖をやつた人は一人もゐないし、ほんたうは科学の方の偉い人に襖をやつてもらひたいとかねがね思つてゐたんです。そこで成瀬さんのことを聞いて非常に敬服したんです。それはどうしたつて襖をやるか攻撃されますからね。僕も襖をやつたために実に攻撃を受けたんです。それは分つてゐたけれども、しかし、攻撃する者は絶対間違ひだといふ確信を持つてゐるんです。

成瀬 私が科学者も襖をやつた方がいいと思ひますのは、西洋の科学を御覧になつた横光さんには御賛成をしていただけたと思ひますが、あの科学技術が進めば進むほど、人類は滅亡の方向にゆくと私は思つてをります。今は、何でもかでも科学技術を盛にしなけりやならん、といつてをりますけれども、これの対症療法なくしてウツカリ盛んにしたら、これは滔滔乎として人類は滅亡の方向にゆくと思ひます。科学技術は劇薬なんですからね。これを良薬にするには、私共に心構へが必要だと思ひます。その心構へは襖の精神の中に存在するやうに考へるのです。けふも或る工作機械の会社へいつて、設計課

長の方にいったんです。思ふやうに物が出来なかつたら、自分が服を着換へてハンドルをとつたらいい。職工にばかり、やれやれといつて、自分は図面のみを書いて、これで出来る筈だ、では出来ない。出来る筈だといふことと出来たといふことは、驚くべき違いがあるんだから、といふことを話したんです。日本の今までの技術の欠点、或は機械の欠点といふものは、指導者が自分で造らないことなんです。ところが、襖をしますと、冬のあの寒い水の中にスーツと入つてゆけるんですね。力み心がなくてハンドルもとれます。真珠湾の攻撃にいった方々も、私は決してさう力み立つていったとは思ひません。スーツと——なんとひませうか、ほんたうにあのハイキングにゆくやうな心持ちでいったのだらうと思ひます。

横光 それは非常に名言だと思ひますね。

成瀬 襖をやつてをりますと、力み心はなくなつて、難局に立ちましても、難局だと思はないでスーツと難局に処することができんです。これは非常に大切な心構へですけれど今日はそれが欠けてゐる。それは米英につらなつた思想があるからだと思つてゐるんです。日本精神といふのは、ごくあつさりスーツと難局にゆく、かういふものだと思ひます。

米英科学の欠点

横光 たしかにあれはやつてみなきや判らんものですな。科学のことを僕は知らんですけれども、科学者の心境といふものがいつもよく頭に浮かんでくるですね。——私なりにですよ。例へば、自分が科学をやつてゐる、その科学といふ能力はどこから出てくるかといふことを、どうして科学者は考へないかと思ふんです。つまり能力、資質といふものを探つてゆけば、対象を研究するといふ以上に自分といふものを作つてゐる内面の法則といふか質といふか、さういふものに必ず科学者は頭がゆくべき筈だと私は思ふんです。それなら日本の人間と神といふ問題に必ず遡つてゆくに違ひないと思ふんです。さういふことはいつも頭にあるべきだ、私はかういふやうに考へてゐたんです。さういふ場合に科学者といふものは、僕らが神のこと、つまり日本の神のことを考へたり、言つたりすると、その反対のことばかりを言ふですね。ただ科学科学とばかり言ふですね。僕はそれに非常な疑問をもつて、かういふやうなことをすれば日本の国は衰へるんぢやないかと思つてゐたんです。

成瀬 私もそれと同じ気分を持つてをります。それですから、科学を盛にするには、まづその精神の方面から打ち建ててゆかないと、取返しのかかぬことになると思つてゐます。南方から帰られた方の話なんですが、フィリッピンにゐた沢山の独立志士が今はもうペチャンコになつてゐるといふんです。それはアメリカがその志士たちに、立派な自動車を与へ、壮麗な邸宅を造り、そこにあらゆる科学的な便利な設備をしてやつたんださ

うですね。さうすると独立の志士は大抵は地主だから田舎に住んでるんだけど、その田舎から自動車で坦坦たるアスファルトの大道をドライブして来て、自分の別荘に入つて人生の肉体的な栄華に耽つてをつた。そのため全部骨抜きになつたさうです。

科学を盛んにすると、ともするとさういふ方向に進んでゆくと思ひますね。まさかジヤングルを越えて日本兵が来ようとは思はなかつた。そこに米英の科学の欠点があるんですね。日本は幸ひにして、いはゆる科学が進歩してゐなかつたから、あのマライ半島が攻略できたのぢやないかと思つてをります。それは科学がなけりや戦争だつて勝てないでせうけれども、科学に対しては、いつでもその「科学の毒」を消す薬、中和剤を持つてゐなくちやならんやうに私は考へてゐるのです。その中和剤が禊ぢやないだらうか、といふふうな気がしてをります。

横光 私は先達ての大東亜文学者会議の時に、文学者は科学と闘争してこれを克服しろといふことを云つたんです。この科学といふのは、あなたの今おつしやつた「科学の毒」といふものに対してなんですね。さうでなきや東洋はどうしてもヨーロッパと同じやうになると思ふのです。

成瀬 私もさう思ひます。このままに単に科学を進めたら、私達の見てきたあの暗い面をもつ欧米の二の舞をやるだけのことです。——横光さんが禊をおやりになつた動機は、どういふことからですか。

禊を始めた動機

横光 動機といふのは別になつたですよ。僕は知らなかつたですよ、あれがあるといふことをね。そこへ、ゆくべき人が欠席しなくちやなくなつた。それでどうしても僕にいつてくれと頼まれてね。その時僕は風邪をひいて一月ばかり癒らんでゐたのですよ、これで水の中に飛込んだら死ぬかも知らんと思つたですがね、しかし、かういふことは逃げるべきことぢやないし、やつてみたですがね。最初の日、朝の四時半に起きて飛びこんだところが、箱根の山の中の水ですから冷たかつたですよ。案の定、くしやみが午後まで続けざまに出る、それから鼻汁が出るですな。午後からもう一遍入らなくちやならないけれども、入つたら肺炎になるんぢやないかと思つたですよ。しかし死んだつていい、禊して死んだら、それでもいいと思つてやつたら、やると同時にピシヤツと癒つたんです。くしやみも出ないし、風邪も癒つたんです。きたない話ですけれども、僕は痔も非常に悪くて出血が止らなかつたんですが、その時からピタツと止つちやつたです。しかし二日間はそれは苦しかったですね。

——僕は外国へゆく時に、からだが非常に衰弱してたんですよ。それにいくら断つても断つても全集を頼みに三箇所から詰めかけて来るんです。をかしいナ、こりや、もう死ぬんだなと思つたですよ。僕は死ぬと思つたけれども、黙つてたんです。ところが、

あなた死ぬんぢやありませんか、と家内が僕にいふんですよ。俺の思つてることと同じことを思つてるな、と思つたんですがね。僕はちつともヨーロッパへゆきたくないんです。だから船もまだ契約してない。さうしたら文芸春秋の齋藤が、君はまだ切符を買つてないけれども、郵船会社からも最後の部屋だといつて来た、一体どうするんだ、といふんですよ、それまで考へが決してなかつたんです。それで私は、それぢや船室を取つといてくれ、といつたわけで、部屋を取るまで、ゆく気もちも何にもなかつたんです。それがスルスルツといつてしまつた。僕はその時、死んでもいいや、と思つたですがね。決然と覚悟したわけぢやない。しかし、死んでもいいやといふのは、なにか静かな気もちですね。私は今それを思ひ出しましたが、先程の水の中へスーツと入るといふやうな……。

成瀬 ええ、そんな気もちでせうね。

横光 僕がゆくのでなくて、誰かがゆかすやうな気がしましたね。

成瀬 私が一番最初に襖をやつたのは、日本もアメリカに対抗して機械を整備しなくちやならないといふ問題があつて、人から頼まれて、少しお手伝ひした時のことです。そのお手伝ひする前に、これは大切なことだと思つたんです。フォードなどがあれだけ世界の耳目を聳動させた、それに対抗するやうな仕事をしなけりやなんのですからね。そのとき幼い時分に教へられてゐた、日本人が大切なことをする時には必ず襖をしたものだといふことを思ひ出し、郷里の房州には襖をする人々がズツト前からゐたものですか、そこへ行つたのです。

横光 僕が襖で今だに何だか判らんと思ふのは自分の生理作用なんですがね。五日間やつて、六日目に僕は強羅ホテルへいつたんです。あれは近代建築でせう。襖をやつてあの近代建築の部屋に入つたらどんな気もちがするかと思つて、わざと部屋をとつておいたんですよ。さうしたら襖のあとで強羅ホテルへ泊つたといつて攻撃されたですけども、実はさういふつもりで泊つたんです。さうしたら、ふだん僕は朝寝坊なだけけれども、朝の四時半になつたらパツと眼が覚めるんですな。さうして蒲団の上に端座したら、どういふことか泣けて泣けてしようがないんですよ。声を止めようと思つても、ワイワイ声が出て来て泣いぢまふ。蒲団が涙の上で濡れちやひましたよ。それから、四十四歳の男が夜明けの四時半に泣くとは何だらうと思つて、僕は考へたですよ。なんだか判らんけれども、それは悲しくつて泣くんぢやないんですよ。なんだか爽快で爽快でしようがなく泣けてくるんです。

しかし襖のある国といふのは日本だけです。ギリシヤとローマの健康なときにはあつたが、無くなつてからどちらの国も滅びましたね。

成瀬 私は足を痛めてベルリンで六箇月ばかり寝てゐたことがあります。そのとき何か知らんが私は愉快だったんです。あの科学技術の盛んなドイツへいつて日本はこれを追ひ越す方法があると思つたからなんです。いや追ひ越すどころぢやない、もつと高い科学技術、彼等の持つてない科学技術が存在すると思つたんです。それは精神と遊離してない科学技術なんですね。すべてのものに神性を見出す、神性と技術、精神と科学、さういふ一如の世界が日本にはあるんです。外国の科学はどうしても精神と対立したものです。さういふことを病院で静かに考へましてね。これこそ東洋それから世界を救ふべきものだ、かう思つたんです。

横光 ラフカデオ・ヘルンは日本のそれを見てをりますね。

成瀬 ドクター・ファンクと一緒に日本へ来て「新しき土」を作つた脚本家のテイアーデンツ君もそれをよく知つてゐるんです。テイアーデンツ君がベルリンで或る日私に、お前、日本に帰りたくないか、といふんです。私は別に急いで帰りたくないが、君は日本にゐた時どうだった、といつたら、私はいま日本にホーム・シックだ、日本には精神と物質の融合した世界がある、私はあそこに住みたい、俺はいま小説を書いてゐる、お前を題材にしてるけれども、それはお前が病気をしながら静かに何かに懂れてゐる、その姿が小説のテーマに非常にいい、さういふんです。それを書き上げたらドイツと日本で出版して、その金で日本へ行つて永住するんだといつてゐました。非常に日本に懂れてゐるんです。

横光 ニーチェが日本に懂れますね。なんとかして日本に來たいと思ひながら、果さないで死んぢやつたらいいんです。あれは日本を心の底で懂れてゐたんぢやないか、——禊といふのは完全な生理学ですからね。ニーチェは生理学を一番尊敬してたんです。さういふことから日本を懂れたんですね。

ほんたうの科学といふのは日本にある。美術を見たつてさうでせう。例の刀剣なんか、日本の美術の中でも一番いいですからね。仏教関係から來てる美術はそんなによくないですよ。仏教の影響を受けた美術といふのは、きれいに見える。それは美しい。けれども、爽やかなところがないですね。

成瀬 ブルーノ・タウトが伊勢神宮へいつて、「これが世界のほんたうの建築といふものだ、そしてそれを造つた人が知られてゐない」かういつてるんですね。つまり日本人ならば誰でも造れるといふことなんです。そのあとに、「彼等は白装束を着て造つた、」かういつてるんですが、僕は偉いと思つたですね。つまりあの人は白装束をつけ、禊をしてゐます。禊をするとほんたうの日本人になるんです。ほんたうの日本人になると、ほんたうの日本の建築ができるんです。あの伊勢神宮の御社殿は、あれは西洋のいはゆる建築といふものぢやないと思ひますね。それと同じやうなことが日本にはたくさん存在すると思ひます。「日本の科学技術」といふものが出来上つたとしたら、きつとさういふ存在ですね。

横光 —成瀬さんが仰しやつた、日本科学といふか、日本精神といふか、それが世界を救つてゆく、といふことですね。私はほんたうにそれを信じてをるですね。

成瀬 襖をやりますと「勿体ない」といふ思想が出てきますね。日本のその「勿体ない」といふ思想がマンチェスターの紡績をああいふうにしたんです。イギリスでは悪い棉をどんどん棄ててみましたが「勿体ない」といつて集めて来て混棉して糸にしたのが日本です。「勿体ない」といふ思想があれだけ世界に一時代を画したやうな日本の紡績工業になつたのです。決して日本の単なる科学技術が進歩してゐたのではなく精神と遊離しない技術が西洋を破つたんです。また、これは私の経験ですがかういふことがあります。それは襖をしてる時に、一日五勺の玄米のおかゆで腹が減つてたまらなかつた。その時、襟に乾いた御飯粒が一つ附いてゐたのを食べたんですね。さうしますと、その御飯粒が食道をズーツと通つてゆくに従つて、勇氣凜冽として、天の鳥船といふ運動をやれたんです。その一つの御飯粒、これを通して神を知ります。タツタあれだけのものが私にあれだけのエネルギーを与へる。これは単なる御飯粒だつたらエネルギーの法則が成り立たないですよ。

横光 非常に面白いお話ですね。それがほんたうの科学ですな。

四節 解題

以下に雑誌への初発表、著作集等への初収を記す。

「『女性の幸福』を考へる」

昭和十五年七月一日発行、『婦人公論』第二十五年七月号に掲載。

「人間科学の母胎について（対談科学時評）」

昭和十八年三月一日発行、『科学朝日』第三卷第三号に掲載。

昭和二十年六月十五日、機械製作資料社発行、成瀬政男『日本技術の母胎』に「附録・或る文学者との対話」の標題で初収。

本文はいずれも初出の雑誌を底本とし、以下の方針に基づいて編集を施したうえで収録した。

一、出席者の配列の表記を調整した。

一、表記は旧仮名とし、旧字は新字に適宜改めた。

一、ルビ・傍点は一律省略した。

一、踊り字は底本では改行を挟んだ場合の行頭には使用されていないが（「時々」↓

「時」改行「時」、ここでは一律踊り字の使用に改めた（「時々」）。くの字点を使用する、使用しないなどの踊り字の使用の方針は、各底本に做った。

一、行の末尾で句読点が省略されている箇所については適宜補った。

一、明らかな誤字脱字は改めた。訂正箇所は後述する。

『女性の幸福』を考へる」は、冒頭にも記したように、これまで見落とされてきた資料である。『婦人公論』については『戦前期四大婦人雑誌目次集成 婦人公論』（与那覇恵子・平野晶子監修、ゆまに書房、全一〇巻、二〇〇二年三月）にその目次がまとめられているので調査も容易になっているが、この雑誌に全集未収録作品が残っているとは疑われなかったのが実状であったと思われる。

当該の第二五年七月号は「女性の幸福」号」と題されており、文字通り「女性の幸福」をテーマとした特集が組まれている。編輯後記にて「論じつめると幸福とは何ぞや、と当然このテーマを追求してゆくことなるのですが、座談会の中で横光さんが「一言にしていへば努力することだよ」といはれたその簡単な言葉の中に一切の幸福への真理はあるやうに考へられるのです」と総括しているところからも、横光の出席した座談会はこの特集の目玉として企画されている観がある。座談会の内容は林房雄と窪川稲子の発言が中心になつてはいるが、参加者の一人に横光利一がいること自体がこの座談会の商品的価値となっているのである。どちらかという横光の発言の内容よりは、横光と婦人雑誌との関係もつといえれば戦時下の婦人雑誌のなかで横光利一という作家が流通し消費される事例として興味深い。近年、シュリーディーヴィ・レッディ『雑誌『女人芸術』におけるジェンダー・言説・メディア』（学術出版会、二〇一〇年三月）のように婦人雑誌における座談会の社会的機能に注目する研究も提出されているが、この『女性の幸福』を考へる」も『婦人公論』誌上の座談会の社会的な意義を考へるうえで貴重な資料となるだろう。『婦人公論』では一九四〇年は特に対談・座談が多く企画されており、「片岡鉄兵・石川達三両氏を囲んで若い女性の語る現代の結婚」（二月）、「婚期の娘の生活を考へる座談会」（五月）、「時局と若き女性の生活」（九月）、「女性と文化を語る座談会」（一二月）などと併せて、時局の言説としての座談会の機能を分析する方法も可能である。

林房雄については『文学界』をはじめ横光との交流は多いが、窪川稲子との組み合わせは新鮮であろう。すでに『婦人公論』では、夫の鶴次郎との破局に関する手記「怖ろしき矛盾」（一九三五年一〇月）や、その経緯を綴った長篇小説『くれなる』を発表するなど、稲子はこの雑誌を代表する女流作家のひとりであった。恋愛、結婚、家庭といった婦人雑誌定番のテーマ群のもとで、その稲子を前に横光が「努力」「道徳」といった言辞によって女性を語るところから、戦時下における女性表象の一特徴を見出すこともできるのではないか。

「若き女性に求めるもの」（『新女苑』、一九三七年五月）、「婦人の貞操悲劇を解決する

座談会」(『主婦之友』、一九三七年五月)、「日本女性としての教養の方向」(『婦人画報』、一九三九年三月)など、横光の出席した婦人雑誌での座談会はけっして少なくない。こうした一連の婦人雑誌の系列にこの度の『女性の幸福』を考へる」を加えたうえで、横光の婦人雑誌における小説を照らし合わせて見直したとき、その表象はどのように浮かび上がってくるだろうか——その検証は今後の課題としたい。

底本は総ルビが付されているが、すべて省略した。また、以下の脱字を改めた。

- ・「男にはさういふ本能があるいふのですが」↓「男にはさういふ本能があるといふのですが」
- ・「結局男は自身がなくなつてしまふ。」↓「結局男は自身がなくなつてしまふ。」
- ・「昔は黙つてゐべきだつたんでせう。」↓「昔は黙つてゐるべきだつたんでせう。」

「日本科学の母胎に就て(対談科学時評)」は、大きく二つの点で示唆に富む資料となるだろう。まず科学雑誌に掲載されており、科学と文学というテーマに沿って議論が交わされていることである。横光において科学という命題はこの当時に限られたものではないが、このように係わりのあつた同時代の科学雑誌等の資料からアプローチすることも必要になってくると思われる。第二に、一九四三年という時代性——すなわち、アジア・太平洋戦争下における横光の思想の枠組みを問う手掛かりとなる点である。自分の座標軸が動く、という発言などは、横光の表象が戦時下の局面において屈折していることの証跡であり、『旅愁』をはじめとする小説からそのような(切断)の諸相を捉える必要があるだろう。また、主な話題となっている「禊(の精神)」に関する発言は、それが戦時下の横光の言動にとって中核を占めていただけに注意しておかねばならない。河田和子氏の先行研究『戦時下の文学と(日本的なもの)——横光利一と保田與重郎——』(花書院、二〇〇九年三月)が参考になるが、科学と文学、科学と禊というテーマを改めて考察することを迫る資料である。

また、この対談相手についても刮目するべきだろう。成瀬政男は東北大学工学部にて主に歯車に関する研究をしていた工学者で、『ドイツ工業界の印象』(育生社弘道閣、一九四一年一二月)など工学に関する複数の著書がある。対談にもあるように、一九三六年の渡欧の際に横光および虚子と同船することになった関係から、『科学朝日』誌上での対談が企画されたと推測できる。この「日本科学に就て」の対談は、成瀬の著書『日本技術の母胎』にも「附録・或る文学者との対話」という標題で再録されており、同書の「あとがき」で、成瀬はこの対談について以下のように記している。

渡欧船中の俳句の友として、ともに虚子先生より導かれた文学の巨人横光利一氏と知り合ふことの出来たことも亦わたくしには幸いなことであつた。

この縁につながつて、わたくしは、『科学朝日』誌の主催するままに横光氏と対談

した。これは昭和一八年三月の「科学朝日」に「日本科学の母胎」といふ表題で載せられてある。横光氏の諒解をえて本書の附録とした「或る文学者との対話」が右のものである。

日本技術に対する私の考へ方は横光氏と語り合ふことによつて、一層世の理解を深めることが出来ると考へてゐる。横光氏の諒解をえて附録とした所以である。

なお、同書では『科学朝日』では省略されたと思われる発言についても載せられているなど、若干の本文の異同も確認される。『日本技術の母胎』のみに見られる横光の発言の一例をあげると、

成瀬 「旅愁」はヨーロッパへおいでになつた時のことを……

横光 あれは書いてゐるうちにヨーロッパ戦争が始つたものですからね。事実のはうはどんどん先へ進んでしまつたんです。ところが、まだ支那事変が始る前のことを書いてます。

横光 パスカルなんかは、やつぱり仏教的なものやうに思ふですな、私は、——僕は別に科学を勉強したことはないですがね、僕らの青年期といふものは自然科学です。僕は青年期に文学をやつてないですよ。やつぱり自然科学です。そこへ社会科学が起きた来たんでせう。それで僕は自然科学と仏教をもつて社会科学と喧嘩したんですよ。文学を持ち出したといふのは、ホンの近頃ですな——けれども、自然科学者に成瀬さんのやうな方がられるといふことは、私は知らなかつたですよ。殊にそれが一緒の船だつたとは、実に光栄だと思ふです。

横光 お茶といふのは襖から来てゐるんです。僕の母親はお茶を教へてつたものですからね、僕は特にやつたわけぢやないですが、日本のお茶といふものは、やつぱり襖から来てるんだと思ひます。今のお茶をやる人は襖なんかしませんけど、あれは襖の一種の変型だと思ふです。

など、「旅愁」の表象を考察するうえで手掛かりとなりそうな発言も見られる。同書に収録されている「虚子との四十日」という一篇も、郵船箱根丸の渡航の過程や洋上句会(計5回)の様子が綴られており興味深い資料である。

底本はルビなし。但し、小見出しの「襖」一箇所のみ「みそぎ」のルビがあるが、省略した。

以上二点の紹介を終えて、とくに日中戦争以降の戦時下の書誌については、まだ精査の

余地が多分に残っているように感じる。この度の『婦人公論』のように当然調べられていると思われる紙誌も含めた見直しが必要となるだろう。本稿は、その再検討の一部として報告する次第である。

注

¹ 主に確認を取った先行研究を以下にあげておく。

- ・ 『定本横光利一全集 第十五卷』「編集ノート」、河出書房新社、一九八三年四月
- ・ 『定本横光利一全集 第十六卷』「年譜」、河出書房新社、一九八七年一二月
- ・ 井上謙『横光利一 評伝と研究』「横光利一年譜」、おうふう、一九九四年一二月
- ・ 『定本横光利一全集 補巻』「解題・編集ノート」、河出書房新社、一九九九年一〇月
- ・ 『横光利一事典』「書簡・資料紹介」「年譜」、おうふう、二〇〇二年一〇月
- ・ 掛野剛史「資料紹介 横光利一・全集未収録文章——「選後の感想」」、『横光利一文学会会報』、二〇〇三年一〇月
- ・ 掛野剛史「資料紹介 横光利一・全集未収録文章——「序」(亘千枝『女の生涯』)」、『横光利一文学会会報』、二〇〇四年五月
- ・ 掛野剛史「資料紹介 横光利一・全集未収録文章——「墨絵」」、『横光利一文学会会報』、二〇〇四年一二月
- ・ 掛野剛史「横光利一年譜補訂——付『定本横光利一全集』未収録文章」、『横光利一研究』、二〇〇六年三月
- ・ 鈴木貞美「横光利一『ある夜の拍手』」、『東京新聞』、二〇〇九年八月一九日夕刊
- ・ 拙稿「定本横光利一全集未収録作品「フランスの絵」」、『横光利一文学会会報』、二〇一一年二月

² 『日本技術の母胎』は一九四五年一〇月にも機械製作資料社から改訂普及版が刊行されているが、六月刊行の同書から講演「日本技術の母胎」のみを再録したものであり、「或る文学者との対話」や「虚子との四十日」は収録されていない。この差分については、掛野剛史氏からご教示いただいた。

主要参考文献

【単行本】

- 『朝日新聞七十年小史』、朝日新聞社、一九四九年一月
『朝日新聞販売百年史(大阪)』、朝日新聞大阪本社、一九七九年五月
アンダーソン、B、白石さや・白石隆〔訳〕『増補 想像の共同体 ナショナリズムの起源と流行』、NTT出版、一九九七年五月
イ・ヨンスク『「国語」という思想 近代日本の言語認識』、岩波書店、一九九六年十二月
石田仁志・渋谷香織・中村三春〔編〕『横光利一の文学世界』、翰林書房、二〇〇六年四月
石田仁志・掛野剛史・渋谷香織・田口律男・中沢弥・松村良〔編〕『戦間期東アジアの日本語文学』、勉誠出版、二〇一三年八月
伊藤虎丸・祖父江昭二・丸山昇〔編〕『近代文学における中国と日本 共同研究・日中文学交流史』、汲古書院、一九八六年一〇月
井上明芳『文学表象論・序説 小林秀雄・横光利一 文学言説の境界』、翰林書房、二〇一三年二月
井上謙『横光利一 評伝と研究』、おうふう、一九九四年二月
井上謙〔編〕『近代文学の多様性』、翰林書房、一九九八年十二月
井上謙・神谷忠孝・羽鳥徹哉〔編〕『横光利一事典』、おうふう、二〇〇二年一〇月
井上謙・掛野剛史・井上明芳〔編〕『横光利一 歐洲との出会い』、『歐洲紀行』から『旅愁』へ』、おうふう、二〇〇九年七月
井上聰『横光利一と中国』、『上海』の構成と五・三〇事件』、翰林書房、二〇〇六年一〇月
岩尾正勝『横光利一論』、村松書館、一九七五年一月
岩上順一『横光利一』、三笠書房、一九四二年九月
岩上順一『文学の虚実 横光利一論』、玄理社、一九四七年十一月
位田将司『「感覚」と「存在」 横光利一をめぐる「根拠」への問い』、明治書院、二〇一四年四月
海野弘『モダン都市周遊 日本の20年代を訪ねて』、中央公論社、一九八五年六月
海野弘〔編〕『モダン都市文学』、異国都市物語』、平凡社、一九九一年二月
大岡昇平・埴谷雄高・佐々木基一・平野謙・花田清輝〔編〕『全集現代文学の発見 第二卷 日本的なものをめぐって』、学芸書林、一九六八年二月
大久保喬樹『日本文化論の系譜 『武士道』から『甘え』の構造』まで』、中央公論新社、二〇〇三年五月
大久保喬樹『洋行の時代 岩倉使節団から横光利一まで』、中央公論新社、二〇〇八年一〇月
岡光男『婦人雑誌ジャーナリズム』、現代ジャーナリズム出版会、一九八一年二月
奥武則『大衆新聞と国民国家 人気投票・慈善・スキヤンダル』、平凡社、二〇〇〇年七月

- 小田切進編『昭和文学論考 マチとムラと』八木書店、一九九〇年四月
- 小田桐弘子『横光利一 比較文学的研究』南窓社、一九八〇年五月
- 小田桐弘子『横光利一 比較文化的研究』南窓社、二〇〇〇年四月
- 梶木剛『横光利一の軌跡』国文社、一九七九年八月
- 樫原修『「私」という方法 フィクションとしての私小説』笠間書院、二〇一二年二月
- 神谷忠孝『横光利一論』双文社出版、一九七八年一〇月
- 川上富蔵〔編〕『毎日新聞販売史 戦前・大阪編』毎日新聞大阪開発株式会社、一九七九年六月
- 河田和子『戦時下の文学と（日本的なもの） 横光利一と保田與重郎』花書院、二〇〇九年三月
- 川村湊・守屋貴嗣〔編〕『文壇落葉集』毎日新聞社、二〇〇五年一月
- 菅野昭正『横光利一』福武書店、一九九一年一月
- 木佐木勝『木佐木日記 滝田樗陰とその時代』図書新聞社、一九六五年十二月
- 木佐木勝『木佐木日記 第2〜4巻』現代史出版会、一九七五年八〜一〇月
- 木村徳三『文芸編集者その聲音』ティビーエス・ブリタニカ、一九八二年六月
- 木村徳三『文芸編集者の戦中戦後』大空社、一九九五年七月
- 北田暁大『広告の誕生 近代メディア文化の歴史社会学』岩波書店、二〇〇〇年三月
- 近代女性文化史研究会『戦争と女性雑誌 一九三二年〜一九四五年』ドメス出版、二〇〇一年五月
- キーン、D、伊藤悟・井上謙〔訳〕『モダニスト横光利一』河出書房新社、一九八二年十二月
- 工藤恒治『新感覚派の作家 横光利一とやまがた』東北出版企画、一九七八年七月
- 『出版人の遺文 改造社山本実彦』栗田書店、一九六八年六月
- 栗坪良樹『横光利一論』永田書房、一九九〇年二月
- 黒田大河・重松恵美・島村健司・柚谷英紀・田口律男・山崎義光〔編〕『横光利一と関西文化圏』松籟社、二〇〇八年十二月
- 紅野謙介『書物の近代』筑摩書房、一九九九年十二月
- 紅野謙介『投機としての文学 活字・懸賞・メディア』新曜社、二〇〇三年三月
- 紅野謙介『検閲と文学 1920年代の攻防』河出書房新社、二〇〇九年一〇月
- 紅野敏郎『新感覚派の文学世界 「文芸時代」を中心に』名著刊行会、一九八二年十一月
- 紅野敏郎・日高昭二〔編〕『改造』直筆原稿の研究 山本実彦旧蔵・川内まごころ文学館所蔵』雄松堂出版、二〇〇七年一〇月
- 小林洋介『〈狂気〉と〈無意識〉のモダニズム 戦間期文学の一断面』笠間書院、二〇一三年二月
- 小森陽一『構造としての語り』新曜社、一九八八年四月
- 小森陽一『〈ゆらぎ〉の日本文学』日本放送出版協会、一九九八年九月
- 子安宣邦『方法としての江戸』ペリカン社、二〇〇〇年五月
- 子安宣邦『「アジア」はどう語られてきたか 近代日本のオリエンタリズム』藤原書店、二〇〇三年四月
- 子安宣邦『「近代の超克」とは何か』青土社、二〇〇八年六月

- サイド, E・W、今沢紀子〔訳〕『オリエンタリズム 上・下』、平凡社、一九九三・六
 サイド, E・W、大橋洋一・近藤弘幸・和田唯・三原芳秋〔訳〕『故国喪失についての省察 1・2』、
 みずず書房、二〇〇六年四月・二〇〇九年六月
 佐藤卓己『『キング』の時代 国民大衆雑誌の公共性』、岩波書店、二〇〇二年九月
 『出版年鑑 昭和十五年版』、東京堂、一九四〇年八月
 『主婦の友社の五十年』、主婦の友社、一九六七年二月
 庄司達也・中沢弥・山岸郁子〔編〕『改造社のメディア戦略』、双文社出版、二〇一三年十二月
 シラネ、ハルオ・鈴木登美〔編〕『創造された古典 カノン形成・国民国家・日本文学』、新曜社、一
 九九九年四月
 菅田正昭『複眼の神道家たち』、八幡書店、一九八七年六月
 桂秀実『探偵のクリティック 昭和文学の臨界』、思潮社、一九八八年七月
 鈴木貞美『『文藝春秋』とアジア太平洋戦争』、武田ランダムハウスジャパン、二〇一〇年一〇月
 鈴木貞美・劉建輝〔編〕『東アジアにおける近代諸概念の成立』、国際日本文化研究センター、二〇一
 二年三月
 鈴木貞美・李征〔編〕『上海一〇〇年 日中文化交流の場所』、勉誠出版、二〇一三年一月
 鈴木登美・十重田裕一・堀ひかり・宗像和重〔編〕『検閲・メディア・文学…江戸から戦後まで』、新
 曜社、二〇一二年三月
 清田昌弘『石塚友二伝 俳人・作家・出版人の生涯』、沖積舎、二〇〇一年十二月
 関川夏央『東と西 横光利一の旅愁』、講談社、二〇一二年九月
 関忠果・小林英三郎・松浦総三・大悟法進〔編〕『雑誌『改造』の四十年』、光和堂、一九七七年五月
 関肇『新聞小説の時代 メディア・読者・メロドラマ』、新曜社、二〇〇七年十二月
 高原四郎『学芸記者 高原四郎遺稿集』、一九八八年四月、非売品
 田口律男『都市テクスト論序説』、松籟社、二〇〇六年二月
 田口律男〔編〕『横光利一』、若草書房、一九九九年三月
 竹内清己『村上春樹・横光利一・中野重治と堀辰雄 現代日本文学生成の水脈』、鼎書房、二〇〇九年
 一一月
 玉村周『横光利一』、明治書院、一九九二年一月
 玉村周『横光利一 瞞された者』、明治書院、二〇〇六年六月
 十重田裕一『「名作」はつくられる 川端康成とその作品』、日本放送出版協会、二〇〇九年七月
 十重田裕一『横光利一における大正・昭和期メディアと文学の研究』(博士論文)、二〇一〇年
 十重田裕一『岩波茂雄…低く暮らし、高く想ふ』、ミネルヴァ書房、二〇一三年九月
 中川成美『モダンテイの想像力 文学と視覚性』、新曜社、二〇〇九年三月
 中田雅敏『横光利一 文学と俳句』、勉誠社、一九九七年一〇月
 永嶺重敏『雑誌と読者の近代』、日本エディタースクール出版部、一九九七年六月
 永嶺重敏『モダン都市の読書空間』、日本エディタースクール出版部、二〇〇一年三月

永嶺重敏『〈読書国民〉の誕生 明治30年代の活字メディアと読書文化』、日本エディタースクール出版部、二〇〇四年三月

中村三春『フイクシヨンの機構』、ひつじ書房、一九九四年五月

中村三春『係争中の主体 漱石・太宰・賢治』、翰林書房、二〇〇六年二月

中村三春『修辭的モダニズム テクスト様式論の試み』、ひつじ書房、二〇〇六年五月

中村三春『花のフラクタル 20世紀日本前衛小説研究』、翰林書房、二〇一二年一月

中谷いずみ『その「民衆」とは誰なのか ジェンダー・階級・アイデンティティ』、青弓社、二〇一三年七月

中山義秀『台上の月』、新潮社、一九六三年四月

日本文学研究資料刊行会〔編〕『横光利一と新感覚派』、有精堂出版、一九八〇年五月

野中潤『横光利一と敗戦後文学』、笠間書院、二〇〇五年三月

橋本求『日本出版販売史』、講談社、一九六四年一月

蓮實重彦『表層批評宣言』、筑摩書房、一九七九年一月

蓮實重彦『物語批判序説』、中央公論社、一九八五年三月

蓮實重彦『夏目漱石論』、青土社、一九八七年五月

蓮實重彦『凡庸な芸術家の肖像 マクシム・デュ・カン論』、青土社、一九八八年一月

蓮實重彦『ボヴァリー夫人』論』、筑摩書房、二〇一四年六月

濱川勝彦『論攷横光利一』、和泉書院、二〇〇一年三月

ハルトゥーニアン, H、梅森直之〔訳〕『近代による超克 戦間期日本の歴史・文化・共同体 上・下』、岩波書店、二〇〇七年四月・六月

伴悦『横光利一文学の生成終わりなき揺動の行跡』、おうふう、一九九九年九月

平野謙『文学・昭和十年前後』、文芸春秋、一九七二年四月

平野謙『昭和文学の可能性』、岩波書店、一九七二年四月

福田和也『日本の家郷』、新潮社、一九九三年二月

福田清人・荒井惇見〔編〕『横光利一 人と作品』、清水書院、一九六七年一月

古谷綱武『横光利一』、作品社、一九三六年二月

古谷綱武『横光利一 私の作家研究』、双樹社、一九四七年八月

保昌正夫『横光利一』、明治書院、一九六六年五月

保昌正夫『横光利一全集随伴記』、武蔵野書房、一九八七年十二月

保昌正夫『横光利一抄』、笠間書院、一九八〇年三月

保昌正夫『横光利一見聞録』、勉誠社、一九九四年一月

保昌正夫『横光利一 菊池寛・川端康成の周辺』、笠間書院、一九九九年十二月

保昌正夫『保昌正夫一巻本選集』、河出書房新社、二〇〇四年一月

保昌正夫〔編〕『横光利一全集月報集成』、河出書房新社、一九八八年十二月

『毎日新聞七十年』、毎日新聞社、一九五二年二月

- 前田愛『近代読者の成立』、有精堂出版、一九七三年一月
- 前田愛『都市空間のなかの文学』、筑摩書房、一九八二年十二月
- 松原一枝『改造社と山本実彦』、南方新社、二〇〇〇年四月
- 水島治男『改造社の時代 戦前編』、図書出版社、一九七六年五月
- 水島治男『改造社の時代 戦中編』、図書出版社、一九七六年六月
- 宮沢章夫『時間のかかる読書 横光利一『機械』を巡る素晴らしきぐずぐず』、河出書房新社、二〇〇九年一月
- 村上文昭『横光利一「夜の靴」の世界』、東北出版企画、二〇〇四年九月
- 村松梢風『近代作家伝 上巻』、創元社、一九五一年六月
- 茂木雅夫『横光利一 近代小説の存亡』、桜楓社、一九七六年一〇月
- 茂木雅夫『横光利一の表現世界 日本の小説』、勉誠社、一九九五年一〇月
- 安川定男〔編〕『昭和の長編小説』、至文堂、一九九二年七月
- 山崎国紀『横光利一論 飢餓者の文学』、北洋社、一九七九年十二月
- 山本武利『新聞と民衆 日本の新聞の形成過程』、紀伊国屋書店、一九七三年九月
- 山本武利『近代日本の新聞読者層』、法政大学出版局、一九八一年六月
- 山本武利『新聞記者の誕生 日本のメディアをつくった人びと』、新曜社、一九九〇年十二月
- 山本武利『占領期メディア分析』、法政大学出版局、一九九六年三月
- 山本武利〔編〕『叢書現代のメディアとジャーナリズム 第5巻』、ミネルヴァ書房、二〇〇五年一月
- 山本武利〔編〕『占領期文化をひらく 雑誌の諸相』、早稲田大学出版部、二〇〇六年八月
- 山本武利・川崎賢子・十重田裕一・宗像和重〔編〕『占領期雑誌資料大系 文学編 第1～5巻』、岩波書店、二〇〇九年一月～二〇一〇年八月
- 山本芳明『文学者はつくられる』、ひつじ書房、二〇〇〇年十二月
- 山本芳明『カネと文学 日本の近代文学の経済史』、新潮社、二〇一三年三月
- 山本亮介『横光利一と小説の論理』、笠間書院、二〇〇八年二月
- 由良哲次『横光利一の芸術思想』、日本図書センター、一九八四年九月
- 由良哲次〔編〕『横光利一の文学と生涯 没後三十年記念集』、桜楓社、一九七七年十二月
- レツデイ、S『雑誌『女人芸術』におけるジェンダー・言説・メディア』、学術出版会、二〇一〇年三月
- 鷺尾洋三『回想の作家たち』、青蛙房、一九七〇年三月
- 鷺尾洋三『忘れ得ぬ人々』、青蛙房、一九七二年九月
- 和田博文・大橋毅彦・真銅正宏・竹松良明・和田桂子〔編〕『言語都市・上海 1840-1945』、藤原書店、一九九九年九月

【雑誌特集】

- 「横光利一追悼号」、『改造文芸』、一九四八年三月
「横光利一追悼号」、『文学界』、一九四九年四月
「横光利一 人と作品」、『文学界』、一九五三年一二月
「横光利一読本」、『文芸』（臨時増刊）、一九五五年五月
「特集 川端康成と横光利一」、『國文学』、一九六六年八月
『文芸読本 横光利一』、河出書房新社、一九八一年四月
「横光利一の再検討」、『解釈と鑑賞』、一九八三年一〇月
「横光利一 疾走するモダン」、『國文学』、一九九〇年一月
「特集 横光利一」、『早稲田文学』、一九九九年一月
「特集 横光利一の世界」、『解釈と鑑賞』、二〇〇〇年六月
「特集 教室のなかの横光利一」、『解釈と鑑賞』、二〇〇七年二月
「特輯 横光利一」、『比較文學研究』、二〇〇八年一月
「特集 横光利一と川端康成」、『解釈と鑑賞』、二〇一〇年六月

『横光利一研究』（第1号〜第12号）、二〇〇三年二月〜二〇一四年三月

【雑誌掲載論文】

- 石田仁志 『旅愁』の身体表象 パリの中の「匂ひ」、『解釈と鑑賞』、二〇一〇年六月
石田仁志 「横光利一『上海』のインターテクスチュアリティ 表象の論理」、『文学論藻』、二〇一二年二月
桶谷秀昭 「浪漫的反抗 萩原朔太郎『日本への回帰』」、『解釈と鑑賞』、二〇〇二年八月
掛野剛史 「新聞小説の可能性 横光利一「天使」から「家族会議」へ」、『論樹』、二〇〇六年一二月
木村友彦 「横光利一研究「日本回帰」という問題 『旅愁』をめぐる」、『白門国文』、一九九六年三月
木村友彦 「観念からの脱却 横光利一『旅愁』試論」、『中央大学国文』、二〇〇一年三月
黒田大河 「作品としての『欧洲紀行』」、『日本近代文学』、一九九三年五月
黒田大河 『『夜の靴』 〈敗戦〉という不通線」、『解釈と鑑賞』、二〇〇〇年六月
佐藤昭夫 「横光利一の欧洲体験」、『比較文化』、一九七〇年三月
佐藤一英 「夜の靴」について 横光利一論ノート、『国文学』、一九六六年八月
菅沢知子 「横光利一『旅愁』の周辺 その（日本主義）」、『大学院年報（立正大学）』、一九九七年三月
杉浦明平 「横光利一論 「旅愁」をめぐる」、『文学』、一九四七年一二月
田口律男 「横光利一「紋章」論 「純粹小説論」を光源として」、『山口国文』、一九八三年三月

田口律男「自意識の牢獄 あるいは、〈四人称〉の行方」、『日本の文学 特別集』、有精堂出版、一九八九年一月

田口律男「いかがわしい『旅愁』の〈日本〉」、『早稲田文学』、一九九九年一月

館下徹志「横光利一『上海』の五・三〇事件 歴史叙述の反証可能性」、『昭和文学研究』一九九八年九月

鳥居邦朗「横光利一『紋章』 山下久内の自意識」、『国語と国文学』、一九八六年三月

中島国彦「最後の絵」の意味するもの 横光利一『旅愁』における絵画をめぐる、『比較文学年誌』、一九八六年三月

西田玄『旅愁』における日本的なるもの 横光利一の俳句観、『俳句文学館紀要』、一九八八年八月

野口武彦「押しつけられる自意識 横光利一『紋章』」、『日本語学』、一九八六年四月

日置俊次「横光利一試論 「旅愁」における俳句」、『東京医科歯科大学教養学部研究紀要』、二〇〇一年三月

平浩「企図される「文芸復興」 志賀直哉『萬曆赤絵』に見る「変態現象」」、『国文学研究』、二〇〇

〇五年六月

保昌正夫「家族会議」まで、『日本近代文学』、一九六六年五月

松村良「家族会議」 動態的構造としてのテクスト、『学習院大学人文科学論集』、一九九二年九月

松村良「横光利一『紋章』 「近代日本」と「ポスト近代」の「並立」」、『学習院大学文学部研究年

報』、一九九五年三月

松本道介「日本回帰の内実 横光と三島の場合」、『新潮』、一九七三年十二月

森かをる『旅愁』における『支那』・人民戦線 昭和十三年の横光利一、『名古屋大学国語国文学』、

一九九六年十二月

森かをる「横光利一と神道思想 『旅愁』の古神道について」、『日本文学』、一九九七年九月

渡辺一民「日本への回帰（上・中・下） 横光利一『旅愁』をめぐる」、『文学』、一九九四年四・

七・一〇月

初出一覧

第一部 一九三〇年代における新聞メディアの発展と〈長篇小説〉の成立

第一章

未発表（二〇一四年一月時点）

第二章

横光利一「家族会議」と〈新聞小説〉の時代——「義理人情」の表象と文芸復興における「民衆」意識の接点

『国文学研究』168、二〇一二年一〇月、早稲田大学国文学会

第二部 戦間期の〈長篇小説〉と〈日本〉言説の成立をめぐる

第一章

横光利一『上海』論のために——言語都市〈上海〉とその〈日本〉をめぐる表象の歴史性

（鈴木貞美・李征編『上海一〇〇年 日中文化交流の場所』、二〇一三年一月、勉誠出版）

第二章

未発表（二〇一四年一月時点）

第三章

横光利一『欧洲紀行』論——「長篇」化されるテキストと「日本」のヒューマニズム的現前

『文藝と批評』11・4、二〇一一年一月、文藝と批評の会

第四章

横光利一「旅愁」と「日本的なもの」の虚溝橋事件前夜——一九三七年の「文学的日本主義」とその「先験」への問い

『昭和文学研究』64、二〇一二年三月、昭和文学会

第三部 〈長篇小説〉と〈日本〉言説の戦時下における展開

第一章

横光利一「旅愁」の遭遇した世界史——日本帰帰の転換点——

『續』21、二〇〇九年三月、續の会

第二章

未発表（二〇一四年一月時点）

第三章

横光利一「夜の靴」論——最後の〈長篇小説〉とその〈日本〉言説

〔『早稲田大学大学院文学研究科紀要』59、二〇一四年三月、早稲田大学大学院文学研究科〕

附録 新資料紹介——『定本横光利一全集』未収録作品——

附録一

【資料紹介】定本横光利一全集未収録作品「フランスの絵」

〔『横光利一文学会会報』18、二〇一一年二月、横光利一文学会〕

附録二

【資料紹介】『定本横光利一全集』未収録〈対談・座談〉二篇——『女性の幸

福』を考へる」「日本科学の母胎に就て」——

〔『横光利一研究』10、二〇一二年三月、横光利一文学会〕